九州大学伊都キャンパスの軌跡と展望

フジイギャラリー　オープニング・プレイベント　きみだけのニッチをさがせ！報告書

2022 年11月

九州大学キャンパス計画室

はじめに

福岡市西区と糸島市にまたがる糸島半島において、2001 年より九州大学学術研究都市を構築中です。半島の中央部に移転した九州大学伊都キャンパス周辺をコアゾーンと位置づけ、伊都キャンパスが 2018 年に完成し、それと並行して周辺のまちづくりも進展してきました。

このたび、フジイギャラリーのプレ・オープンイベントとして、九州大学伊都キャンパスにおけるキャンパスライフの過ごし方とキャンパスのこれからのあり方について、学生、教職員、行政等と考え、情報共有する機会を設けました。

2 年以上にわたるコロナ禍を経験して学生の生活様式も変容し、オンラインによるコミュニケーションが活発になる一方で、対面の機会が減少してきました。このイベントは、新型コロナ第 6 波の渦中にあたったことから、参加を学内メンバーとごく近い関係者に限定し、感染防止対策を行ったうえで開催しました。

開催中には、伊都キャンパスに関する関係者のコメントや学生の意見を集めることができました。2021 年度の限られた期間の意見集ではありますが、今後のキャンパス形成に示唆を与える貴重な資料になると思い、学内の共有すべき情報として本書をとりまとめたものです。

指定国立大学の認定を受け、ますますの発展が期待される九州大学における今後のキャンパス計画のためにも、本書の活用を期待したいと考える次第です。

2022 年 11 月

九州大学キャンパス計画室長

理事・副学長　福田　晋

刊行に寄せて

このたび、本書「九州大学伊都キャンパスの軌跡と展望」を、フジイギャラリーにおけるオープニング・プレイベント「きみだけのニッチをさがせ！」の報告書としてまとめることができました。

九州大学は「総合知で社会改革を牽引する大学」の実現に向けて、社会共創（知の拠点として地域社会やグローバル社会と共生・共創し、研究教育活動を通して社会の持続可能な発展と人々のウェルビーイングの向上への貢献）を柱の一つに掲げ、指定国立大学法人として発展を続けています。

現在、伊都キャンパスでは、石橋達朗総長と福田晋理事・副学長の下で、環境改善と施設の維持・管理、自然エネルギー活用、AI 運行バス、バリアフリーに細かく配慮したインクルーシブな社会に向けた実証実験等を支援し推進しています。また、キャンパス計画及び施設管理委員会にカーボンニュートラル・キャンパス実現に向けたプロジェクトチームを設置し、省エネ推進、研究推進、オフセット検討に関する部会を設置して、CO_2排出量の削減によるカーボンニュートラル・キャンパスの実現を目指して取組んでいるところです。さらに、基幹教育総合科目「伊都キャンパスを科学するⅠⅡⅢ」を開講し、施設づくりの姿勢と具体的な取組を学生が学ぶ機会を設けるなど、本学のキャンパスへの愛着を育むためのユニークな取り組みも続けています。

これからも、国内外の大学をはじめ、経済界、国の機関、自治体、地域の皆様等との連携を密にし、持続可能なキャンパスとなるよう、努力を続けてまいります。引き続き皆様の支援をお願い申し上げます。

2022 年 11 月

九州大学施設部

部長　小谷善行

目 次

	はじめに	福田 晋	
	刊行に寄せて	小谷善行	
1	本書のねらいと構成	坂井 猛	1
2.	J’s Café Fukuoka		4
2.1	J’s Café 開催の主旨と概要	坂井 猛	5
2.2	九州大学伊都キャンパスの現況	Prasanna Divigalpitiya	8
3.	つくる側の想い	坂井 猛、萩原 望、張 煜嘉、孟 柱燦	16
3.1	高橋良平 学長		17
3.2	和田光史 総長		22
3.3	杉岡洋一 総長／矢田俊文 副学長		23
3.4	梶山千里 総長／有川節夫 理事・副学長		33
3.5	有川節夫 総長／今泉勝巳 理事・副学長		34
3.6	久保千春 総長／安浦寛人 理事・副学長		39
3.7	渡邉定夫 マスター・アーキテクト委員会委員長		40
3.8	特別対談　渡邉定夫×安浦寛人		43
3.9	出口 敦 コアチーム長		47
3.10	佐藤 優　パブリック・スペース WG 長		55
3.11	外井哲志 交通計画 WG 長		61
3.12	光井 純 MCM設計共同体		66
3.13	常岡 稔　黒川紀章日本設計共同体		70
3.14	能勢修治 石本建築事務所		74
3.15	近藤昭夫 施設部長		77
3.16	廻 正弘　施設部企画課長		82
3.17	松下栄司 施設部施設企画課長		85
3.18	坂井 猛 キャンパス計画室		88
4.	学生のお気に入り空間と課題	萩原 望、張 煜嘉、孟 柱燦	94
4.1	概要		95
4.2	お気に入りの内部空間		101
4.3	お気に入りの外部空間		128
4.4	キャンパス空間の課題と提案		182
	おわりに	坂井 猛	228

1. 本書の狙いと構成

キャンパス計画室　坂井　猛

伊都キャンパスは 2005（平成17）年の誕生以来、学生、教職員をはじめとする多くの皆様の活動の場として使われてきました。今後も持続するキャンパスとするために、多くの知恵と意見を集めて、キャンパスをカスタマイズして使いやすいキャンパスに磨いていくことが必要です。

本書は、キャンパスの主な利用者である学生にとってのお気に入りの場所とその解説、より使いやすくしていくための課題と提案をまとめたものです。基幹教育科目「伊都キャンパスを科学する」の受講生の意見を中心に、会場を訪れた人々の意見を集約しています。今後のキャンパス整備をしていく際のアイデアとして活用されることを企図しています。

本書は 3 部で構成しています。

まず、第2部では、フジイギャラリーから NPO 法人日本都市計画家協会福岡支部との共催企画「J’s Café Fukuoka」を開催した内容をまとめています。学内外から 182 名の参加者があり、総合研究博物館三島美佐子教授、人間環境学府プラサンナ・ディビガルピティヤ准教授、人間環境学府修士課程学生、キャンパス計画室やフジイギャラリーのスタッフとともに、九州大学伊都キャンパスの現況について確認しました。

つぎに、第3部では、伊都キャンパスの計画から完成までに関わられた歴代総長、学内外の専門家などの関係者の皆様に、つくる側の想いとして語っていただいた内容をまとめています。

さらに、第 4 部では、学生のお気に入りの内部空間、外部空間、キャンパス空間の課題と提案のなかから代表的なものをまとめています。学生がキャンパスを使うなかで日頃感じていることを表明したものであり、施設整備やキャンパスの運営にあたり参照すべき内容が多く含まれています。


九州大学フジイギャラリー2021年度 先行企画
Find Your Own Niches.
THE NICHE
きみだけのニッチをさがせ！
第一期 2021年 12/6(月)→12/24(金)
第二期 2022年 1/4(月)→2/18(金)
場 所 伊都キャンパス フジイギャラリー（G2）
時 間 10:00～17:00／土・日・祝休館
※来館者状況・連動イベントの開催・COVID-19感染拡大状況により変更になる場合があります。
学内者限定公開
主催●総合研究博物館、キャンパス計画室／協力●アジア・オセアニア研究教育機構、施設部、人間環境学府、統合新領域学府ユーザー感性学専攻、社会連携推進室、公益財団法人九州大学学術研究都市推進機構（OPACK）
問い合わせ●フジイギャラリー 電話092-802-6973（平日9:00～17:00）

THE NICHE
きみだけのニッチをさがせ！

第一期 2021年 12/6(月)→12/24(金)
第二期 2022年 1/4(月)→2/18(金)

ニッチってなんだろう？実は専門分野によって**いろんな意味や解釈があります。**この企画では、ニッチを足がかりとして、もっと自由に発想を展開していきます。あなたは、日々のキャンパスライフを、どのように過ごしていますか？それはあなたにとって快適ですか？15年かけて2018年に完成した伊都キャンパス。「街としてのキャンパスづくり」はまだまだ現在進行中です。そして九大に在学・在職しているみなさんは、このキャンパスづくりの当事者（ステークホルダー）です。より心地よいキャンパス生活を営むために、もっと希望やアイデアを見える形にしてみよう。あなたにとってよりよいキャンパス生活、より心地よい空間、よい雰囲気とは？ あなたのアイデアを、キャンパス模型に反映してみよう。キャンパスがもっと面白くなる、そしてあなたも生き生き活かされる。**伊都キャンパスの"ニッチ"をさがせ！**

きみだけのニッチをさがせ！



▶伊都キャンパスに竣工していった建物の1/150サイズ簡略化モデルを配置。ギャラリーの壁や模型に付箋で自由にコメントをつけたり、工作物を加えたりできます。キャンパスで、自分がいいなと思う場所やニッチな場所をみつけて共有しよう。







ニッチな(?)展示内容

- 伊都キャンパス1/150スケールのホワイトモデル
- 1991～2021年の伊都キャンパス年表＋時事年表
- 伊都キャンパスを含む元岡エリアの1/1000スケールの航空写真
- 壁面キーワード & 辞書的解説
- 自作・工作ブース
- 新しいキャンパスを下支えする100年の歴史（家具）
- サイエンスカフェ & ギャラリートーク

第一週目は設営現場を見学できる！

12月6日

9:30～ 壁面グラフィック貼り付け作業 見学可
3～4限 「伊都キャン"造成"ワークショップ」
みんなで模型の土台を配置！

12月8日·9日

配灯、マップ吊り下げ、年表設置、
ガラス面グラフィック設置 など見学可

※COVID-19感染拡大防止につとめつつ、感染拡大状況を鑑みながら開催します。ご来場のみなさまも、感染拡大防止にご協力をお願いいたします。

連動企画（第一期）

■大学院生企画 九大 World Café イベント第2弾
「はたらくってなんですか？ ―ふつうのはたらき方、ニッチなはたらき方―」
日時●2021年12月17日(金) 19:00～21:00／場所●オンライン（ZOOM）／参加●無料（学内学生対象）・事前申込み制
申込みフォーム●https://forms.gle/7XoepIDABKbygy5Y9／主催●統合新領域学府ユーザー感性学専攻 PTL（感性コミュニケーションII）

■蔦出し＆インテリア・コーディネート ワークショップ
日時●12月18日(土) 10:00～17:00／集合・解散●伊都キャンパス フジイギャラリー／参加●無料（学内学生対象）・事前申し込み制
申込みフォーム●https://forms.gle/EMKuZkA6yX09Q2Rh8／主催●総合研究博物館・フジイギャラリー

その他の連動企画予定

■伊都キャン"完成"ギャラリートーク
日時●2021年12月22日(水)

■フジイギャラリー"竣工"ギャラリートーク
日時●2021年12月24日(金)



お問い合わせ●フジイギャラリー fujigallery@jimu.kyushu-u.ac.jp
design : umizon

2. J’s Café Fukuoka

2．1 J’s Café Fukuoka
The Niche きみだけのニッチをさがせ：九大伊都編

キャンパス計画室　坂井 猛

日時：2021(令和 3)年 12 月 1 日水曜 14：50～16:20
会場：オンラインにて実施　YouTube 配信
https://www.youtube.com/watch?v=ZXmUfVhnHBA
参加：182 名(国内 182)
主題：J ‘s Café Fukuoka The Niche きみだけのニッチをさがせ：九大伊都編
主催：Jsurp 特定非営利法人日本都市計画家協会福岡支部
共催：九州大学総合研究博物館、九州大学キャンパス計画室
後援：OPACK 公益財団法人九州大学学術研究都市推進機構、UDCQ アーバンデザイン会議九大，JUDI 都市環境デザイン会議九州ブロック，ATDeS アジア景観デザイン学会
主旨：福岡市西区と糸島市にまたがる糸島半島において、2001 年より学術研究都市を構築中です（https://www.opack.jp/kousou/）半島の中央部に移転した九州大学伊都キャンパス周辺をコアゾーンと位置づけ、キャンパスとまちづくりが少しずつ進んできました。コロナ禍を 2 年近く経験して市民の生活も変容しています。今回は、九州大学伊都キャンパスにおけるキャンパスライフの過ごし方とキャンパスのこれからのあり方について、学生、教職員、行政等と情報共有する機会を設けました。

■はじめに：坂井猛，九州大学大学院教授，Jsurp 理事・地域活動部会長・福岡支部長
・日本都市計画家協会とＪ‘s Café の取組み、今日の概要を紹介した。

■講演 1：Prasanna Divigalpitiya (九州大学大学院 准教授)九州大学キャンパスの現況
・九州大学伊都キャンパスへの移転の概要と学生の満足度は満足が不満を超えた過程を紹介した。

■講演2; 萩原望・孟柱燦・張煜嘉 (九州大学大学院 修士課程)キャンパスのこれからを考える
・今年の講義「伊都キャンパスを科学するⅠⅡ」受講生のアンケート結果から良い点と課題を紹介した。

■講演3：三島美佐子 (九州大学総合研究博物館 教授)大学ギャラリーのあらたな位置づけ
・総合研究博物館におけるこれまでの活動をふまえ、新設したフジイギャラリーにおけるワークショップ型の新たな試みについて紹介し、キャンパス改善提案イベントへの参加を呼び掛けた。

■コメント：鷲頭史典 (OPACK 事務局次長)
・各講演者のテーマをふまえキャンパスを事例としたこれからのまちづくりの可能性について指摘した。

■意見交換
・講演者と参加者に、それぞれのニッチ、お気に入りの場所について紹介してもらい、これからの大学キャンパスのありかたとこれから改善すべきポイントを指摘した。また、視聴者に協力を呼び掛け、市街地に見立てたキャンパスの課題を見える形で展示モデルに貼り付け、皆で確認することとした。

■さいごに
・よりよいキャンパスにするためのアイデア集を皆でつくり共有したい。
・今後、Ｊ‘s Café などで、糸島や北部九州のまちづくりを順次紹介していきたい。



Peatix　イベント検索　ログイン | 新規登録

Peatixコミュニティガイドライン：イベント・コミュニティ活動を安心して楽しむための大切な指針

共有用の URL: https://jscafe211201.peatix.com/　ツイート　いいね！0　シェア



イベントは 終了 です

J's Café Fukuoka The Niche きみだけのニッチをさがせ 九大伊都編

詳細

J's Café Fukuoka The Niche きみだけのニッチをさがせ 九大伊都編

【開催主旨】
福岡市西区と糸島市にまたがる糸島半島において、2001年より学術研究都市を構築中です（https://www.opack.jp/kousou/）。半島の中央部に移転した九州大学伊都キャンパス周辺をコアゾーンと位置づけ、キャンパスとまちづくりが少しずつ進んできました。コロナ禍を2年近く経験して市民の生活も変容しています。今回は、九州大学伊都キャンパスにおけるキャンパスライフの過ごし方とキャンパスのこれからのあり方について、学生、教職員、行政等と情報共有する機会を持ちたいと考えています。

【開催概要】
日　時：2021年12月1日（水） 14：50～16:20
場　所：オンライン開催
参加費：無料

【プログラム】
1．九州大学伊都キャンパスの現況
・Prasanna Divigalpitiya （九州大学大学院 准教授）
1993年12月 スリランカ モラッワ大学卒業
2008年3月 豊橋科学技術大学博士課程修了
2010年4月 九州大学大学院人間環境学研究院 准教授 博士(工学) 都市計画、都市地域計画

2．フジイギャラリー：大学ギャラリーのあらたな位置づけ
・三島美佐子 （九州大学総合研究博物館 教授）
1998年4月 基礎生物学研究所 COE研究員
2002年4月 九州大学総合研究博物館 助手
2012年12月 九州大学総合研究博物館 准教授
2021年4月 九州大学総合研究博物館 教授 博士(理学) 植物系統学, 博物館研究

3．キャンパスのこれからを考える
・萩原望・孟柱燦・張煜嘉 （九州大学大学院 修士課程）

2021/12/01 (水)
14:50 - 16:20 JST
カレンダーに追加

会場　オンライン

チケット
会員（オンライン）　満席
一般（オンライン）　満席

主催者



主催者へ連絡　グループをフォロー

参加者
294

Sano
nakashima

2．フジイギャラリー：大学ギャラリーのあらたな位置づけ

・三島美佐子 （九州大学総合研究博物館 教授）

1998年4月 基礎生物学研究所 COE研究員
2002年4月 九州大学総合研究博物館 助手
2012年12月 九州大学総合研究博物館 准教授
2021年4月 九州大学総合研究博物館 教授 博士(理学) 植物系統学, 博物館研究

3． キャンパスのこれからを考える

・萩原望・孟柱燦・張煜嘉 （九州大学大学院 修士課程）

・コメンテータ 鷲頭史典（公益財団法人九州大学学術研究都市推進機構OPACK事務局次長）

2012年10月 総務企画局職場活性化等推進担当課長、経済観光文化局空港整備推進担当 課長、総務企画局企画課長、市民局スポーツ振興課長を歴任、2021年4月 現職

・モデレータ 坂井猛（JSURP地域活動部会長・福岡支部長／九州大学大学院教授）

九州大学キャンパス計画室教授。大学院人間環境学府・工学部建築学科教授。

1993年より伊都キャンパスと学研都市づくりに関わる。福岡市都市計画審議会会長

続きを読む

社会貢献／地域活性 | まちづくり | 地域活性 | コミュニティ | 行政 | 教育

コメント0件　並び替え 古い順

コメントを追加...

Facebookコメントプラグイン

主催者へ連絡　グループをフォロー

参加者
294

Sano
nakashima
鮎鮎
ゆきの
川津拓也

参加者一覧









2. 2　九州大学伊都キャンパスの現況

人間環境学研究院　Prasanna Divigalpitiya

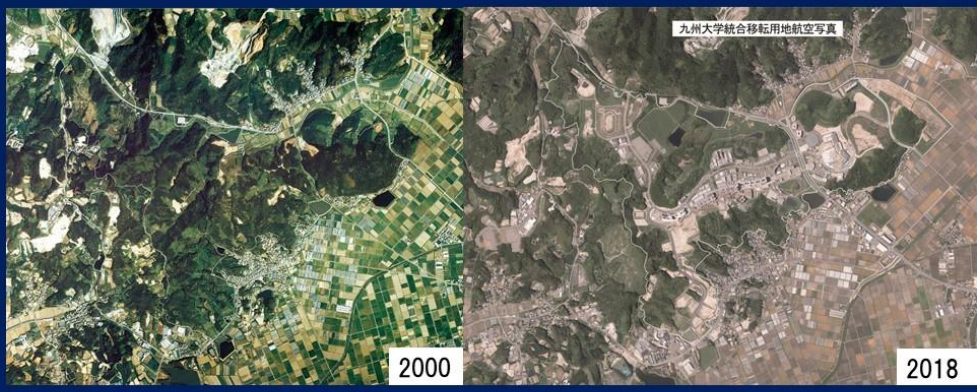




九州大学の統合移転　マスタープラン2001に基づく施設整備

The campus site of Motooka and Kuwabara was a hilly area where mandarin oranges were cultivated. An academic zone is set up along the ridgeline in the east-west direction of the hills, and the buildings are lined up, leaving 40% of the campus area as green space.

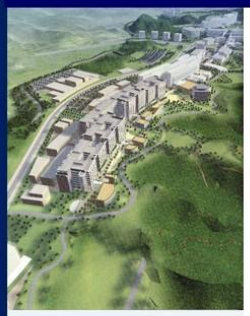
元岡・桑原のキャンパス用地は、みかんを栽培する丘陵地でした。
丘陵の東西方向の尾根線に沿ってアカデミック・ゾーンを設定して建物を並べ、キャンパス面積の40%を緑地として残しています。



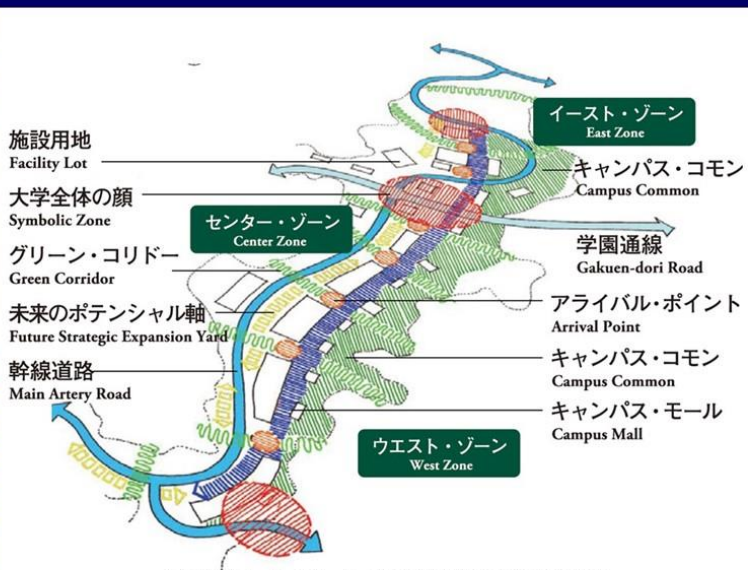
九州大学の統合移転　マスタープラン2001に基づく施設整備

The total area of the old campus that was the target of relocation was 79ha, but the Ito campus increased 3.4 times to 272 ha.
Since the relocated population of about 18,700 is comparable to the size of a small city, we first formulated a campus master plan as a rule for facility development, and proceeded with planning, design and construction according to the master plan.

移転対象となった旧キャンパスの合計面積は**79ha**でした。伊都キャンパスはその**3.4**倍、**272ha**となりました。
移転人口約**18,700**人は、小さな都市の規模に匹敵することから、まず施設づくりのルールとしてのキャンパス・マスタープランを策定し、これに従って計画、設計、建設を進めました。







アカデミック・ゾーンの骨格形成の構成概念
新キャンパス・マスタープラン2001

9

伝統を創り出す象徴的空間と柔軟に変化増殖する空間の共存

In line with Master Plan 2001, many architectural design offices, including graduates, were involved in campus design and contributed to campus development in collaboration with the new campus planning committee and the facility department on campus.

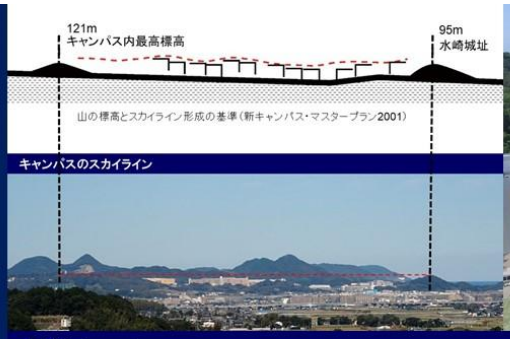
マスタープラン**2001**に沿って、卒業生を含む多くの建築設計事務所がキャンパスの設計に関わり、学内の新キャンパス計画専門委員会、事務局施設部等との協働のもとでキャンパスづくりに貢献しました。



㈱三菱地所設計 Mitsubishi Jisho Sekkei Inc. シーザーペリ＆アソシエーツ・ジャパン Cesar Pelli & Associates, Japan Inc.
㈱三島設計事務所 Mishima Sekkei ササキアソシエイツ Sasaki Associates Inc. ㈱黒川紀章建築都市設計事務所 Kisho Kurokawa architect & associates ㈱日本設計 Nihon Sekkei Inc. ㈱空間創研 Kukan-Soken.Co.,Ltd ㈱NTTファシリティーズ NTT Facilities, Inc. ㈱教育施設研究所 Educational Facilities Institute Co., Ltd. ㈱久米設計 Kume Sekkei Co., Ltd ㈱石本建築事務所 Ishimoto Architectural & Engineering Firm, Inc. ㈱日建設計 Nikken Sekkei Ltd. ㈱大建設計 Diken Sekkei Inc. ㈱梓設計 Azusa Sekkei Co., Ltd. ㈱内藤廣建築設計事務所 Naito Architect & Associates ㈱徳岡設計 Tokuoka Sekkei Ltd. 阪根宏彦計画設計事務所 Sakane Keikaku Sekkei ほか

The height of the entire campus was controlled so that the buildings would not jump out of the mountains in the background.
Focusing on the city center, Hakata Bay, fields and mountains that can be seen in the distance from the campus, places (viewpoints) where you can see these landscapes are located in various places on the campus.

キャンパス全体は、建物が背景の山並みから極端に飛び出すことのないように高さをコントロールしました。
キャンパスから遠景に見える都心部、博多湾、田畑と山を重視し、これらの景観を見る場所(視点場)をキャンパス内の各所に配置しています。

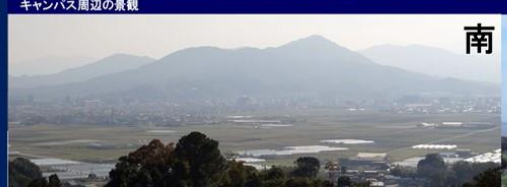




景観 Landscape









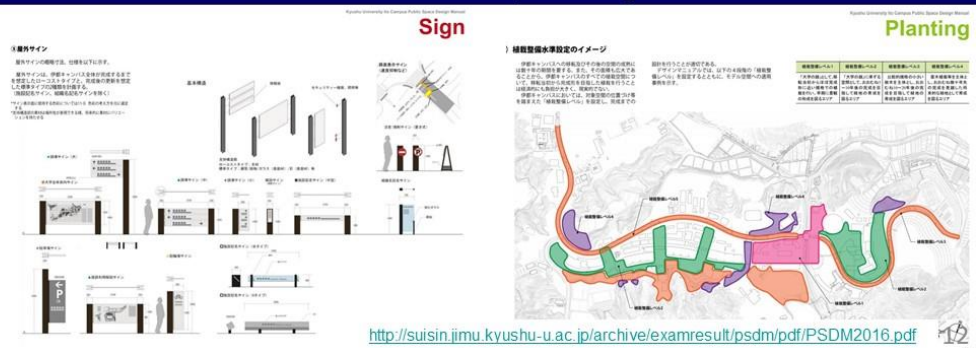
11

In 2004, a design manual for public spaces (spaces other than buildings + semi-indoor spaces) was formulated in order to harmonize the whole while making the best use of the individuality of each block, and supervised by the WG on campus.

2004年、各ブロックの個性を活かしつつ、全体の調和を図るためにパブリックスペース（建物以外の空間＋半屋内空間）のデザインマニュアルを策定し、これに沿って学内のWGで監修しました。



パブリックスペース・デザインマニュアル Public Space Design Mannual



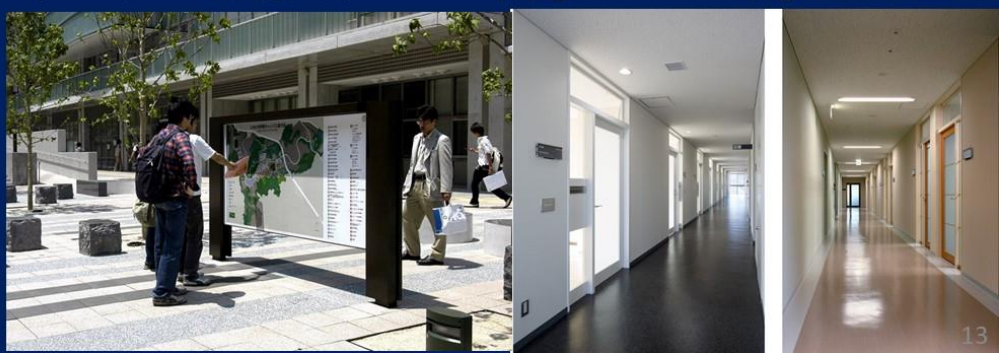
http://suisin.jimu.kyushu-u.ac.jp/archive/examresult/psdm/pdf/PSDM2016.pdf

Pedestrian road (campus mall), It is a space for everyday use and plays an important role in campus life.
Stairs, greenery, places to sit, signs, lighting, etc. were placed in the campus mall that continues on a gentle slope.
The inner corridor is also made to look as bright as possible on the glass surface at the end.

歩行者路、キャンパスモールは日常使う空間であり、キャンパスライフに重要な役割を果たします。
緩勾配で続くキャンパスモールに、階段、緑、座る場所、サイン、照明等を配置しました。
内部の廊下も、突き当りをなるべくガラス面で明るく見通せるようにしています。



ランドスケープ・光環境・サイン Landscape, light environment, sign



Along the campus mall that we use every day, there are places where students and visitors can sit, talk and interact, lecture rooms, restaurants, cafes, etc. There is a place where people can meet, interact, and exchange opinions.

日常使うキャンパスモールに沿って、学生や来訪者が座って会話し交流できる場所、講義室、レストラン、カフェなどを設置しています。人と人との出会い、交流、さまざまな意見交換の生まれる場を設えています。

安全・安心で快適なキャンパス環境の整備







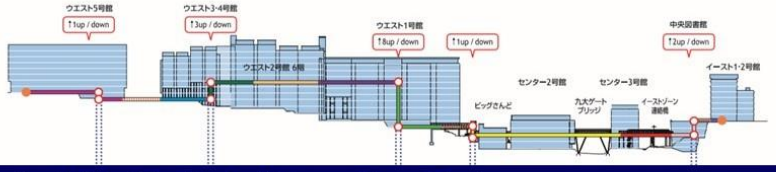
Since the campus site is long from east to west, 10 buildings from East Building 1 to West Building 5 were connected little by little over the years by horizontal movement and vertical flow lines of the elevator. For this, the Ito Campus has been realized so that even wheelchairs can move without getting wet in the rain.

キャンパスの敷地が東西に長いことから、水平移動とエレベータの縦動線によってイースト**1**号館からウエスト**5**号館まで**10**棟を年月をかけて少しずつ繋いできました。これにより、車いすでも雨に濡れることなく移動できるキャンパスが実現しました。

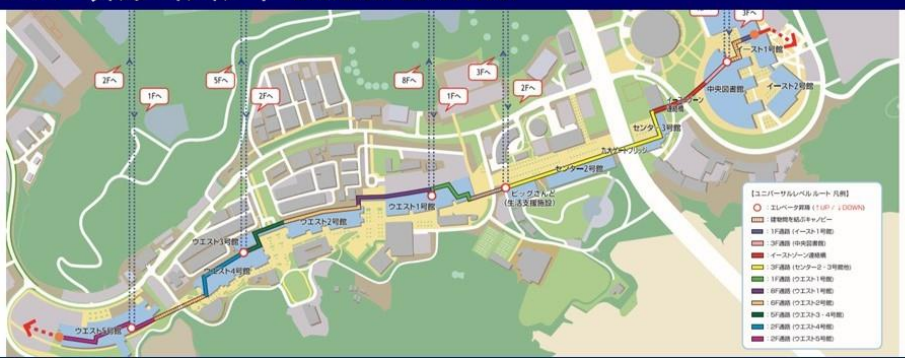
伊都キャンパス ユニバーサルレベルルート

水平移動に配慮したユニバーサルレベル

- ダイナミックな起伏を有する伊都キャンパスにおける空間移動の負担を軽減するため、エレベーターを活用することで、全ゾーンエリアの建物通路・ホール空間を繋ぎ、約2kmにわたって雨に濡れずに水平移動を可能としたユニバーサルレベル動線を確保しました。
- この約2kmのユニバーサルレベルのルートは、イースト1号館1階をスタートし、エレベーターによるUP、DOWNポイントで縦移動することで、ウエスト5号館1階東側エントランスにゴールすることができます。



ユニバーサルレベル・ルート Universal Level Rout



Given the tight construction budget, from the beginning of construction, we have endeavored to install art on campus using all means, such as art as part of the facility or art donated. Humanities and art engineering faculty members of the Art Selection

建設予算の厳しい中で、当初より、施設の一部としてのアートを実現することを考え、寄附などによってキャンパス内のアート設置に努めてきました。



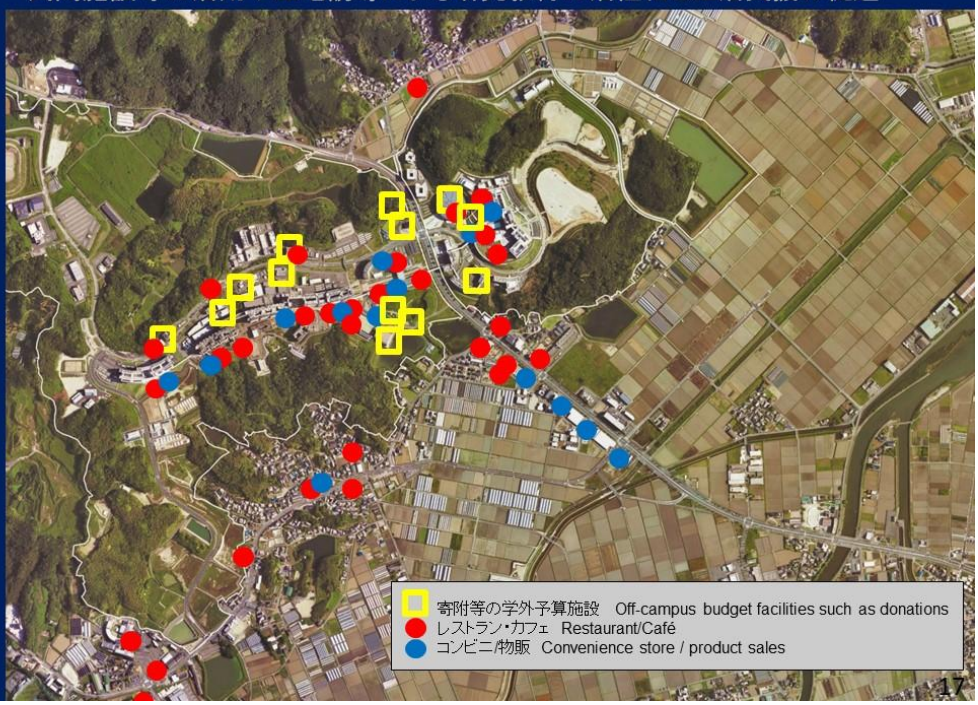
アート Art

16

Thirteen facilities were built on campus with an off-campus budget such as donations.
17 restaurants and cafes and 9 convenience stores have been established.
The number of surrounding facilities is gradually increasing. However, in the entire core zone, the number and variety of stores, including supermarkets, is not sufficient.

キャンパス内に寄附等の学外予算で**13**施設が建設されました。レストラン・カフェ**17**店舗、コンビニ物販**9**店舗を整備しました。加えて周辺の施設も次第に増加しています。しかしながら、コアゾーン全体では、スーパーを含む店舗の数と多様性は十分とはいえません。

民間施設等の活用や立地誘導による研究教育の活性化と生活支援の促進



17

As part of improving the convenience of the campus, a private company conducted a demonstration experiment of autonomous driving, traffic control by AI, and road-to-vehicle communication on-demand operation.
On-campus AI-operated buses are operated based on the knowledge gained from the one-and-a-half-year demonstration experiment.

民間会社が、キャンパスの利便性向上の一環として、自動運転、**AI**による交通管制、路車間通信オンデマンド運行の実証実験を行ないました。
1年半の実証実験で得られた知見をもとに、学内**AI**運行バスを運行しています。

新しいシステムの創造にチャレンジする実験都市の構築

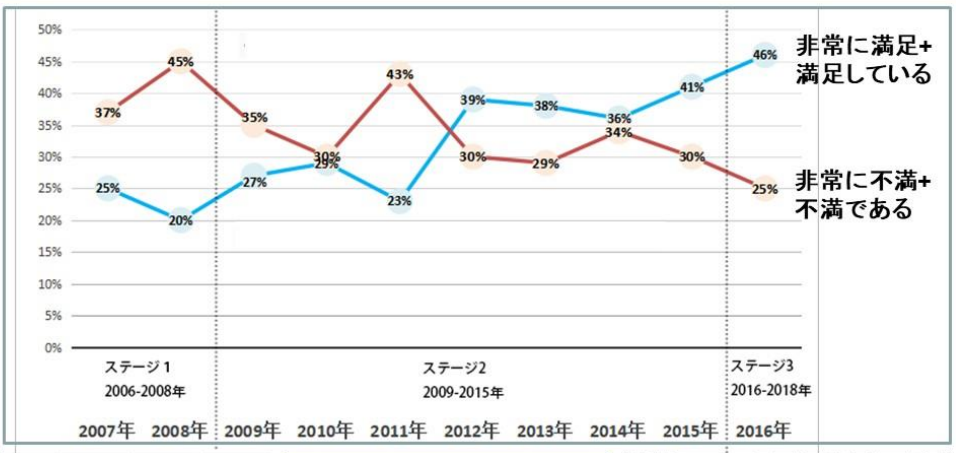


18

Satisfaction with campus life　学生のキャンパス生活の満足度

The planning expert committee is continuing to investigate the actual living conditions of students.
Although it has been pointed out that convenient facilities have been enhanced, students' satisfaction with campus life has gradually increased.

計画専門委員会で学生の生活実態について調査を続けています。利便施設の充実などが指摘されるものの、学生のキャンパス生活の満足度は次第に上昇してきました。



時 期	第Ⅰステージ (H17～19年度) 3年	第Ⅱステージ (H20～23年度) 4年	第Ⅲステージ (H24～30年度) 7年
主な移転施設	工学系 (H17、H18)	全学教育 (H21)	理学系(H27) 文系 (H30) 農学系(H30)
移転人数 (学生・教職員)	約5,200人	約5,600人	約7,900人
	計 約18,700人		

アンケート調査の対象
2008年まで 工学部、工学府、システム情報科学府
2009年以降 全学教育、理学部数学科、工学部、21世紀プログラム課程、比較社会文化学府、数理学府、統合新領域学府

調査期間	アンケートの方法	回収数（人）	回収率
2007/12/10-12/27	配布無記名	回収数 858 人	16.6%
2008/12/08-12/26	配布無記名	回収数 943 人	17.8%
2009/12/09-12/25	配布無記名	回収数 1,312 人	17.0%
2010/12/08-01/05	Web 上無記名	回収数 779 人	10.0%
2011/12/09-01/11	Web 上無記名	回収数 383 人	5.0%
2012/06/18-07/20	Web 上無記名	回収数 567 人	6.0%
2013/11/05-12/27	Web 上記名	回収数 438 人	5.6%
2014/08/20-10/15	Web 上記名	回収数 542	6.9%
2015/12/02-01/31	Web 上記名	回収数 512	5.1%
2016/10/17-11/17	Web 上記名	回収数 1,131	11.9%
2017/10/30-12/11	Web 上記名	回収数 872	9.2%

丁震宇・坂井猛他，大学移転に伴う周辺の学生居住意識の変遷，日本建築学会九州支部研究報告，2018年3月 19

Student Satisfaction with Campus and Surrounding Environment

When asked the satisfaction level of students' life on and around the campus is still low. The development of the town is awaited.

キャンパス周辺を入れて満足度を聞くと、学生のキャンパスと周辺の生活の満足度はまだ低いことから、まちの発展が待たれるところです。

学生のキャンパスと周辺環境の満足度



20

ありがとうございました。



3. つくる側の想い

3.1 高橋良平学長

大学広報, No.750, pp.1-4, 1991.11

高橋学長が学長を退任するにあたっての所見であり、後半に大学移転のことを述べておられる。

大学広報 No.750 平成3年11月6日発行 (編集) 九州大学広報委員会

学長退任にあたって

九州大学長　高橋良平



昭和61年11月7日、田中健蔵前学長の後を受けて、正式に学長室の椅子に座らせていただいた時、大きな部屋の中に落す己の影の小ささと、大物学長の重さにたえた2人用かと思われる椅子の大きさに圧倒されて、“俺でもやれるのかな”と一瞬強い不安がよぎったことを今改めて思い起している。早いものであれから5年、あっという間の任期であった。大方の皆さんからは、“御苦労さんでした。大変なお仕事でしたでしょう”と労いの言葉をいただくのであるが、“あっと言う間”と前記した様に、毎日楽しく、気ぜわしく走り廻った記憶だけしか残っていない。猪突猛進の性(さが)は年を経ても弱まるどころか嵩じる一方で、部局長、評議員の先生方をずいぶんと不安がらせたと思うし、特に、歴代の事務局長を始め本部職員各位を大いに悩ませたに違いない。改めてこれらの方々に心からのお礼とお詫びを申し上げたい思いである。また、多くの学生諸君や全学の教職員各位とは七大戦を始め数々の行事を通して親しく対話する機会をもたせていただき、楽しい思い出を残させていただいた。これらは何れも忘れ難い思い出である。

やれA日程だ！いや分離・分割だ！と罵声をあげ、机を叩いた大学入試は、学長就任以来最も胸の痛む問題であったが、経時のヴェールがかかると淡いスウィートな絵に変わるらしく、学長就任の途端に始まり、まる3年間続いた入試の苦労もやはり懐かしい思い出の一つになってしまった。

国大協がようやく本来の活動を始められるようになったのは、この分離・分割がどうやら軌道にのった年からである。

入試ボケ（？）から醒めて国内外を眺め廻すと、国立大学の施設・設備は話に

ならぬ程老朽化している事を思い知らされ、“国立大学の危機”をにわかに声高に主張するようになった。そこで、“授業料値上げ反対、入学料、入試検定料値上げ反対”などとむなしい陳情の繰り返しを続けてきた国大協第6常置委員会は、科学研究費の配分をうけて文教予算の基盤調査を行いながら国立大学特別会計予算枠拡大のための提案を模索中である。近々最終報告を出す予定であるが、調査結果の中間報告を記者会見で発表したところ、多大の反響を呼んで今なお施設・設備の老朽化をキャンペーンしていただいていることは、第6常置の責任者として深く感謝している。

ところで、施設・設備の老朽化よりも更に根強い本学のキャンパス問題は歴代学長の苦労してこられた懸案であったが、今回、全学各位の御理解をえてようやく“移転”への全学意志統一をはかることができ、21世紀の九州大学の構想の第一歩が踏み出されるようになった。文部省との協議、福岡市、地元との交渉など、なおクリアーしなければならぬ高いハードルは幾つもあって、意志統一ができたからといって、そう簡単に進む移転ダイメイションとは思わない。然し、九州のリード校、アジアの拠点大学としての九大の責任はきわめて重いものであり、21世紀の大学院大学として備えておかなければならぬあらゆるソフト・ハードをもつためには広い新しいキャンパスが必要なのである。そして、このキャンパスを手に入れるチャンスは今をおいてはないと確信している。幸い九大創立80周年記念事業の募金も学内外各位の御支援、御尽力によってようやく軌道にのり出したが、これも新キャンパス構想の中で大きな役割を果すに違いない。

さて、あれや、これやと盛りだくさんに画いた夢も、振返ってみると、何れも未熟で、荒削りの未完成ばかりに終わり、心中忸怩たる思いである。然し、幸いなことに、私よりも何倍も能力があり且つ遠謀、深慮にたけた和田先生が名前も新たに総長として登板された。荒削りの私のデッサンを補正し、見事な九州大学像を完成されるに違いない。

新総長の御活躍と九州大学の一層の発展を願い、また各位への感謝を再度申し上げ、御健勝を願って退官の言葉と致したい。

グリュック・アーフ!!

九州大学新キャンパス移転構想について

10月22日の将来計画小委員会及び評議会において，高橋学長から提案された「九州大学新キャンパス移転構想（学長試案）」を承認し，この学長試案による九州大学新キャンパス移転構想を実現するため，次の諸手続きを推進することを了承した。

① 文部省と，移転構想について協議を進める。

② 地元公共団体等の協力体制等，移転に必要な諸条件の確保について調査・検討を進める。

③ 上記の協議等に対応するため及び移転推進のための基本構想について調査・審議するため，将来計画小委員会に新キャンパス基本構想委員会を設置する。

なお，文部省と協議が整ったとき，評議会で移転構想を決定することとした。

「九州大学新キャンパス移転構想（学長試案要旨）」

九州大学の新キャンパス問題については，「新キャンパス構想委員会」（将来計画小委員会設置）において『21世紀における九州大学の在り方として，九州大学が原則としてその全部局をあげて移転する統合型新キャンパス構想を早急に検討すること』の提言があり，この提言に基づき将来計画小委員会に「新キャンパス策定専門委員会」を設置し具体的な候補地について立地条件等を専門的に検討するとともに，併行して行財政上の諸問題等を検討してきた。

1．その結果，九州大学がキャンパス移転する理由として，次のように集約できる。

⑴ 21世紀に向けて大学の将来計画を展望するとき，現地再開発では不可能であること。

① 当面急がれる教養部の改革についてみても，本学においては教養部と文系4学部及び理学関係学部・研究科と一体として改編を検討しており，分散したキャンパスでは効果的な編成ができないこと。

② 今後，九州大学が大学院大学として発展するためには学際大学院等学部を越えた編成が重点課題となっており，それらの実現については，統合型キャンパスが必要であること。

③ 国際研究交流の推進に伴い，留学生，研究者の増加に対する施策の遂行に支障があること。

④ 大学の教育研究は不断の見直し改革が必要であり，それに伴う施設の充実についても現キャンパスでは支障があること。

⑵ 現在のキャンパスの立地条件が不適切であること。

① 六本松地区については，すでにその狭隘化が問題になっており拡充が不可能であること。

② 箱崎地区については，航空機騒音が教育研究の支障原因となっているとともに事故再発の懸念も一掃されてはいないこと。

2．移転対象地区は，当面六本松地区及び箱崎地区とする。

3．移転候補地については，新キャンパス策定専門委員会において検討した5候補地のうち，M地区（元岡・桑原地区）を第1候補地として検討する。

選定の理由は次のとおりである。

①「新キャンパス策定専門委員会」における種々の専門的観点からの検討の結果，キャンパス用地として十分な条件を備えていること。

② 用地取得・周辺都市計画及び跡地処分等についての対応が円滑に進められると思料されること。

高橋良平(たかはし りょうへい、1923－1997) 日本の地球科学者。石炭地質学。
1946 年九州帝国大学理学部地質学科卒業。麻生鉱業株式会社入社。1952 年九州大学理学部講師、1953 年年同助教授。1960 年理学博士(九州大学)。1972 年、教授。1980-1982 年理学部長、1986-1991 年九州大学第 18 代学長。1992-1996 年大学入試センター所長、1996 年福岡市総合図書館長および九州歴史資料館長。

参考資料：福岡はなぜ元気か，聞き書き桑原敬一前市長の街づくり，毎日新聞福岡総局編，pp196-200，2000年９月

案の定、不況で一部に異論が出ました。「社に持ち帰らせてくれ」と言うので「今さら困る」と強い調子で押し切りました。少し不穏な雰囲気になり、後で「強引だ」という声も聞こえてきました。でも、あそこで引いたら話はご破算だったかもしれません。

Jリーグに昇格し、名前もアビスパ福岡になりました。なかなか勝てず試合を見たら胸が痛みます。サッカーをどう育てていくかJリーグも転換期に来ているのではないかと感じます。

「九大は市外へ出さぬ」

九〇年、ある新聞が自社関連の政策委員会の提言として「宗像市は九州大学の福岡市からの移転候補地の一つ」と報道しました。委員会の会長は九大の高橋良平・学長だったので驚きました。すぐに学長の連絡先を職員に調べさせ、東京出張中の学長を捜し出して電話しました。その日のうちに情報を打ち消さないと、既成事実になると思ったのです。高橋君は旧制高校の同級生で親しかったので大声で怒鳴りました。「君が会長をしている委員会で九大を市外に持っていく提言をしたらしいが、簡単に外に出すわけにはいかない」

高橋君は「提言書を見ていない」と言うので「会長が見てないなら止めろ」と迫りました。

一九〇〇年代初め、全国で四つ目の帝国大学を九州に設置する時、熊本と福岡で誘致合戦がありました。当時、福岡に旧制高校はなく、みんな熊本の五高に通っていた時代です。大学は旧制高校のある所につくるのが普通でしょう。しかし福岡市や市議会の関係者が大変な努力をして誘致合戦に勝ったのです。私は、そういう歴史を自分で図書館に行って勉強していました。

高橋君は「私が見ていないんだから止める」と約束してくれました。

《九大は市内外に施設が分散されており、どれも手狭。中心施設の東区箱崎キャンパスは上空が福岡空港の進入路で、建築物に高さ制限がある。このため現在地にさまざまな施設を集積することは不可能。他の場所への移転が急務となっている。

市幹部によると、移転の構想は前任の田中健蔵・学長の時からあり、市と九大の定期協議の席で「市の発展に九大の協力は不可欠。移転は両者が協力して進めていく」と確認してあったという》

私が福岡市へ助役で来た時、既に九大は東区和白の埋め立て地（人工島になる前の埋め立て計画）に移転する方向で話が進められていました。私も田中さんの所へ何度かうかがい移転の話をした覚えがあります。

その後、埋め立てが人工島の方式に変更されてからも、人工島へ移転する案はありました。しかし埋め立て地の土地代が高いため、九大としても断念せざるをえなかった経緯がありました。

《福岡市幹部によると、東区に香椎パークポートを埋め立てる計画が動き始めると、九大の高橋学長から「パークポート内の約五〇万平方メートルを譲ってくれ」と市に打診があった。校舎を分校のような形で建てる案だった。しかし市幹部が「広い土地へ全キャンパスを移すのが原点では」と言うと、高橋学長は「それなら（土地の手当ては）市に任せておこう」と話したという》

福岡市としては、九大学長が高橋君に代わってからも暗黙のうちに市が九大に代わって適当な

移転地を探しているつもりでいました。そこへ急に宗像移転の話が浮上してきたのです。急いで移転地を決めてしまう必要が出てきました。

議会で九大移転について質問を受けましたが、私は「絶対に市外へは出さない」と答弁しました。後で高橋君に「あんた、いつから九大の学長になったとな」と聞かれ、「あんたがぼやっとしとるけん、おれが学長代理をしたかい」と冗談を言ったことがあります。

《そのころ西区のある市議から西区元岡周辺のミカン山を「市で使ってくれないか」と市幹部に陳情があった。農水省の補助金でミカン栽培を続けてきたが、やめる人が多く荒れ地になって困っているという話だった。

市幹部は高橋学長のことを思い出し「西区に土地がある」と連絡した。高橋学長は二、三日後には現地を視察。一週間後には市幹部の所に来て「あれは良かばい。あそこですばい」と言ったという》

大体、宗像市へ移転するんであれば、用地買収費や校舎の建設費はどうするつもりだったのでしょう。原資がなければ、国も移転の予算は出しません。跡地となる現キャンパスを売るしかないのです。

東区箱崎、中央区六本松と、主なキャンパスは福岡市内にあります。今の時代、これだけ広い土地が更地となることはめったにありません。当然、福岡市の都市計画にかかってきます。跡地処分は福岡市が積極的にかかわらねば実現しないのです。宗像市に買えるような値段でもありません。

九大の中で宗像へ移転する案があったのは確かだと思います。しかし元々、荒唐無稽の話ですので、次第にトーンダウンしていきました。

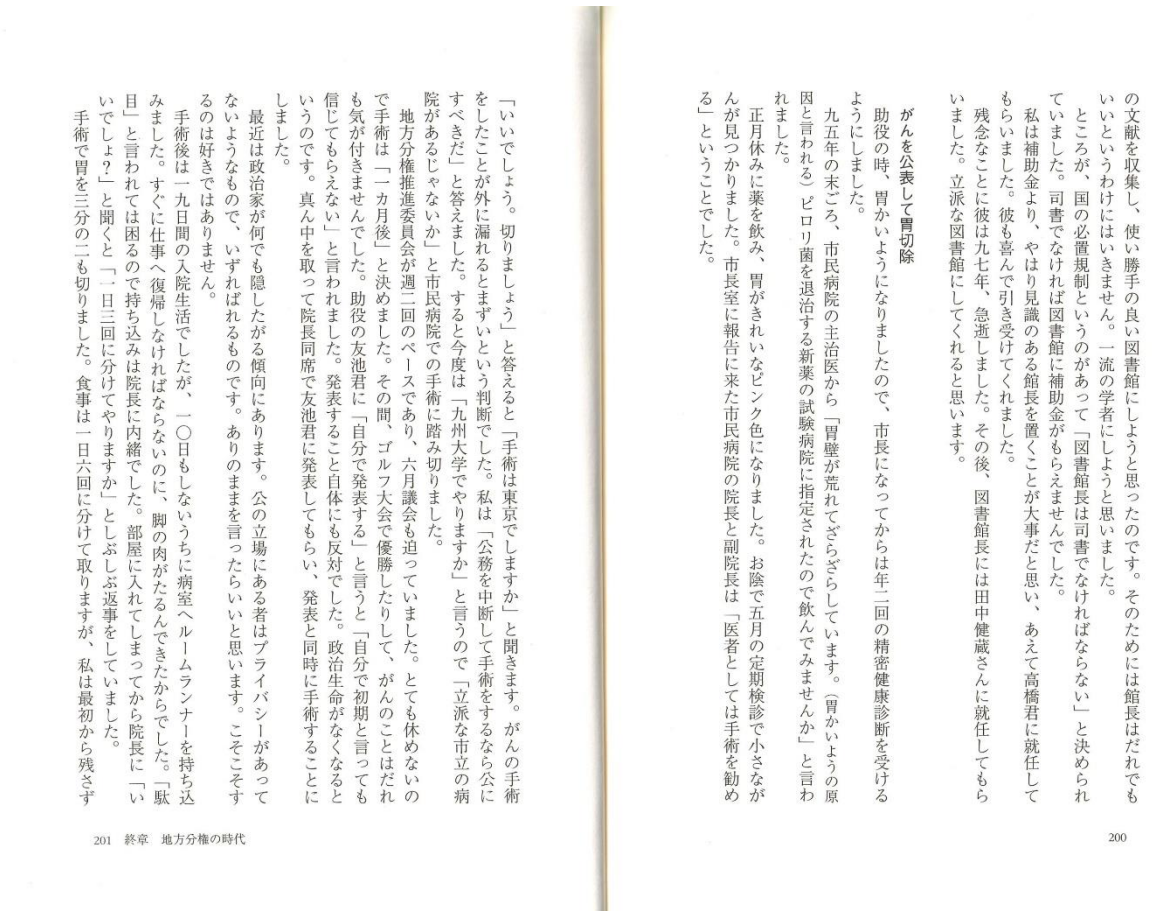
最高学府のある所には人材が集まってきます。街の発展は人なしにはあり得ません。福岡市が先進都市だった熊本市を追い抜いたのも九大の誘致合戦に勝ったからでしょう。九大が福岡市で果たしてきた役割は大きいのです。そういう歴史的な意義をしっかり見つめ街づくりをすることが大切です。九大を市外に出すことは何としても阻止しなければなりません。

行革の時代ですが、予定地や跡地周辺の街づくりと用地買収のため、市役所に大学移転対策局（現在は部）をつくりました。九大の移転がそれほど福岡市の街づくりに与える影響が大きいからです。

《九大の移転用地は西区元岡、桑原地区の二七五万平方メートルに決まった。市土地開発公社が九大の依頼で用地買収を終え、二〇〇〇年六月から土地造成工事が始まった。造成が終わり次第、校舎建設に入る予定》

これから大学のキャンパスが出来れば、市が道路を造ったり水道を引いたり、協力することになります。福岡の街は西の方に発展することになるのです。学長の高橋君とは「夕方になったら赤提灯がともるような街がいいね」と話し合っていました。無機質になりがちな新しい街を人間くさくしようという意味です。将来、そんな街になってくれることを願っています。

九六年に市総合図書館が出来た時、高橋君に館長になってもらいました。私はここを「日本一の図書館にしたいな」と思っていました。二〇〇万冊という収蔵能力もさることながら、アジア



の文献を収集し、使い勝手の良い図書館にしようと思ったのです。そのためには館長はだれでもいいというわけにはいきません。一流の学者にしようと思いました。

ところが、国の必置規制というのがあって「図書館長は司書でなければならない」と決められていました。司書でなければ図書館に補助金がもらえませんでした。

私は補助金より、やはり見識のある館長を置くことが大事だと思い、あえて高橋君に就任してもらいました。彼も喜んで引き受けてくれました。

残念なことに彼は九七年、急逝しました。その後、図書館長には田中健蔵さんに就任してもらいました。立派な図書館にしてくれると思います。

がんを公表して胃切除

助役の時、胃かいようになりましたので、市長になってからは年二回の精密健康診断を受けるようにしました。

九五年の末ごろ、市民病院の主治医から「胃壁が荒れてざらざらしています。（胃かいようの原因と言われる）ピロリ菌を退治する新薬の試験病院に指定されたので飲んでみませんか」と言われました。

正月休みに薬を飲み、胃がきれいなピンク色になりました。お陰で五月の定期検診で小さながんが見つかりました。市長室に報告に来た市民病院の院長と副院長は「医者としては手術を勧める」ということでした。

200

「いいでしょう。切りましょう」と答えると「手術は東京でしますか」と聞きます。がんの手術をしたことが外に漏れるとまずいという判断でした。私は「公務を中断して手術をするなら公にすべきだ」と答えました。すると今度は「九州大学でやりますか」と言うので「立派な市立の病院があるじゃないか」と市民病院での手術に踏み切りました。

地方分権推進委員会が週二回のペースであり、六月議会も迫っていました。とても休めないので手術は「一カ月後」と決めました。その間、ゴルフ大会で優勝したりして、がんのことはだれも気が付きませんでした。助役の友池君に「自分で発表する」と言うと「自分で初期と言っても信じてもらえない」と言われました。発表すること自体にも反対でした。政治生命がなくなるというのです。真ん中を取って院長同席で友池君に発表してもらい、発表と同時に手術することにしました。

最近は政治家が何でも隠したがる傾向にあります。公の立場にある者はプライバシーがあってないようなもので、いずればれるものです。ありのままを言ったらいいと思います。こそこそするのは好きではありません。

手術後は一九日間の入院生活でしたが、一〇日もしないうちに病室へルームランナーを持ち込みました。すぐに仕事へ復帰しなければならないのに、脚の肉がたるんできたからでした。「駄目」と言われては困るので持ち込みは院長に内緒でした。部屋に入れてしまってから院長に「いいでしょ?」と聞くと「一日三回に分けてやりますか」としぶしぶ返事をしていました。

手術で胃を三分の二も切りました。食事は一日六回に分けて取りますが、私は最初から残さず

201　終章　地方分権の時代

桑原 敬一（くわはら けいいち、1922 - 2004） 福岡市長（第 29-31 代）
労働省大臣官房長、労働基準局長、労政局長などを経て、1979 年、労働事務次官に就任。1981 年、労働省を退官し、1983 年、中央職業能力開発協会理事長を経て、1984 年、福岡市の政務担当助役となり、1986 年 12 月、福岡市長選挙に当選。以後連続 3 期 12 年を務める。高橋良平学長とは旧制福岡高等学校の同級生であった。

和田光史（わだ こうじ、1928 - ） 日本の土壌学者。1951 年、九州大学農学部農芸化学科卒業。1953 年九州大学農学部助手、1954 年助教授、ウィスコンシン大学留学、1975 教授。1987 年農学部長、1991-1995 年、第 19 代九州大学総長。2000 年、長崎国際大学初代学長に就任。
1985 年、日本粘土学会会長、1988 年、日本土壌肥料学会会長、1990 年、国際粘土研究連合副会長。日本土壌肥料学会賞、日本農学賞および読売農学賞、アメリカ粘土鉱物学会粘土科学パイオニア賞、日本学士院賞を受賞、日本学士院会員。

3. 2 和田光史 総長

九大広報, vol.112, p.5, 2018.10

伊都新キャンパスの完成と統合移転計画の完了を祝して

第19代九州大学総長
任期／1991年～1995年
和田 光史



2018年9月、九州大学は伊都新キャンパス完成と、1991年10月決定の箱崎、六本松地区から元岡・桑原地区への統合移転計画完了を、合わせて迎えることができました。誠におめでとうございます。大学を取り巻く厳しい社会情勢の下、この27年を要した新キャンパス構築・統合移転は、九州大学百余年の歴史に特記される大事業で、この間、九州大学は、病院地区の再開発を2009年9月に完了、大学改革の機運が高まる中、学府・研究院制度を導入する大学院重点化をはじめとする教育・研究体制の確立、新キャンパス構築で可能となった教育・研究の拡大、充実を図り、時とともに変わる社会の要請に応える教育・研究成果を着実に挙げてまいりました。伊都新キャンパスでの日々の学生の修学・課外活動、教員の教育・研究活動、これらを支援する職員の活動が、九州大学の新しい歩みに大きく貢献することを祈念いたします。

新キャンパス基本構想を策定

1991年11月に就任した和田総長は、担う部署として学内に新キャンパス計画推進室を設置した。同推進室を中心とした用地の調査に基づき、1994年に新キャンパス基本構想0次案を策定、これにより新キャンパス計画が動き出した。1993年に新キャンパス用地275haのエリアを確定、福岡市に用地の先行取得を依頼した。同年には政府予算に移転調査費が計上され、調査・計画などの実行を

新キャンパス移転を決定

第18代九州大学学長
任期／1986年～1991年
髙橋 良平

髙橋学長は、2期目の最大の課題としてキャンパス移転を挙げ、1990年に新キャンパス構想委員会を設置した。同委員会は全部局挙げての統合移転を検討することを提言し、この提言に基づき同年末に新キャンパス構想策定専門委員会が設置された。専門委員会は翌1991年9月に元岡地区を第1候補とする方針を示し、これに基づいて「九州大学新キャンパス移転構想（学長試案）」を作成、10月の評議会で承認されて、元岡地区への移転が決定した。こうして髙橋学長は移転への道筋を付け、同年11月退任した。

※1970年～1991年「総長」の呼称を廃止、「学長」のみを使用

新キャンパス造成で直面した種々の問題に対処

第20代九州大学総長
任期／1995年～2001年
杉岡 洋一

杉岡総長は、先代の和田光史総長のときに策定された基本構想に基づき、新キャンパス計画を推進したが、多くの問題に直面することとなった。その一つは環境問題である。新キャンパス用地は水源地であり、当初は水源と大原川を埋め立てる予定であった。しかし、大学が環境破壊をまねくような造成はできないとして、水源地を生物多様性保存ゾーンとして残存する計画に変更した。もう一つは文化財保存問題である。新キャンパス予定地は、国内最大の製鉄遺構が見つかるなど、貴重な遺跡が多数存在していた。これらの遺跡を全て保存することは困難であったが、できるだけ現状保存する方針を立て、造成計画の変更を行った。なお、病院地区については移転せず、現地再開発を行うことが決定されていたが、1998年にその工事が着工された。こうした種々の問題に対して方針を定め、新キャンパスの造成が2000年6月に開始された。さらに、キャンパス内の土地利用や動線などの方針を定めたマスタープランを策定するなど、新キャンパス像を具体化した。加えて、1998年には九大と地元自治体・経済界により九州大学学術研究都市推進協議会を設立し、九大を中核とした学術研究都市構想をまとめた。

各総長・学長の功績における文責：大学文書館　准教授　藤岡　健太郎

3. 3 杉岡洋一総長/矢田俊文副学長

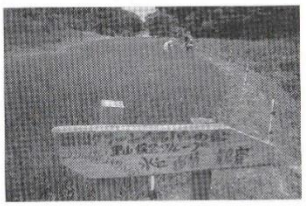
玉川孝道, 元九州大学総長杉岡洋一聞き書き, 西日本新聞社, pp.84-87, 2010 年 1 月

開発か環境か

玄界灘に突き出た糸島半島の福岡市西区元岡地区への九州大移転が評議会で正式決定されたのは１９９１年10月。任期満了直前の高橋良平九大学長と桑原敬一福岡市長の間で合意、推進され、紆余曲折の末、統合移転が最終的に決まったのでした。

私が総長に就任した時期は、元岡移転を具体的に進める段階で、実際に移転を行うとなると思わぬ難問が次々と浮かび上がってきました。

まず問題になったのは、キャンパス造成計画案が生態系の破壊につながるのではないか、環境破壊につながる造成であれば移転に反対というもの。理学部教授らから問題提起されました。計画原案は九大の土木、建築、都市計画の教授を中心に他大学の学者の意見も取り入れながら、学際的に練りあげた苦心の作だったが、大学として「環境を破壊する」造成はできない。



生物多様性保全ゾーンに絶滅危惧種などを移し、日本土木学会環境賞を受賞した

丘陵地を切り開いて平地を造り、切り取った土砂は造成予定地内を谷となって流れる大原川の上流の埋め立てに使い、さらに広い平地を造り、キャンパスを造る。計画原案は切り取った土砂を他の場所に運び出さず、かつ広大な平地が造成できる「合理的かつ自己完結的」な開発を可能にするものだった。

しかし、同案では、高台に大学の建物群が並び、高みに立って地域を見下ろすキャンパスになるし、土砂で埋められた川や里山に生息する生物、植物を根こそぎ削り取る「環境破壊型」開発になってしまわないか。

私には、大学キャンパスは環境と調和したもので、かつ地域に開放されるべきだという信念がありました。「象牙の塔」に閉じこもり、社会から超然とした大学ではあってはならない。ですから、大学を取り巻く壁や柵はない方がよい。欧米の大学は地域に溶け込んでいます。

決断を迫られました。断腸の思いで原案計画作成に苦労していただいた教授らに退任してもらい、新体制による環境調和・市民開放型の新計画作成をお願いしました。

新案は大原川を埋め立てず、しかも９ヘクタールを生物多様性保全ゾーンにし、カスミサンショウウオやイシガメなどの絶滅危惧種やカシやシイの大木を移しました。新計画の評価は高く、日本土木学会環境賞に輝きました。

開発と遺跡保存

もう一つの難問は、移転予定地が遺跡の宝庫であったことです。遺跡を破壊して大学を造成するわけにはいかない。移転にあたっての大きな問題でした。

糸島地区は「魏志倭人伝」に登場する「伊都国」。６～７世紀、朝鮮半島の百済、新羅、高句麗の三国が鼎立する時代には、朝鮮半島との交流が盛んに行われた地域です。移転地決定にあたって、福岡市に埋蔵文化財の発掘調査の中間報告が出され、学内の考古学者からは「造成に問題なし」と「お墨付き」をもらっていました。

ところが、移転予定地の詳細調査に入ると、丘陵地には６基の前方後円墳が存在し、福岡城築城で石は抜かれ保存状態は良くないが、住民が大切にしていた古墳がある、というではありませんか。

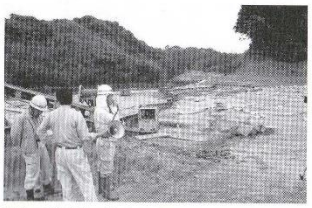
６基の前方後円墳は４～６世紀、この地域を支配した首長たちの墳墓で、このほかにも、石ケ元古墳群からは貴重な埋蔵品が発掘され、出城である水崎城、馬場城の存在も確認されました。学内外の考古学者たちも今になって「もともと、ここは遺跡の宝庫であり、専門家の間では周知のこと」と言う。

あらためて学内の考古学者を中心に、今後の保存方針について意見を聞き「埋蔵文化財の取り扱い方針」を決め、学内大方の了承を得ました。

方針は、前方後円墳６基のうち５基を現状保存、１基を記録保存。石ケ元古墳群30基のうち17基を現状保存し、13基は記録保存。その他の円墳38基のうち18基を現状保存する―。

これだけでも、丘陵地を平たん化し、地盤の良い場所に重量研究機器を擁する研究棟を考えていたキャンパス計画に、大きな影響を与えるものでした。だが、発掘調査が進むにつれ、埋蔵文化財が次々と姿を現してきました。全国最大規模の製鉄遺構、「大寶元年」（７０１年）と書かれた木簡の出土など、九大移転そのものを再検討せざるを得ないのではないかと思われるほどでした。

文系の教官や考古学者の中には「全面保存」を主張する人も出てきました。保存と造成。九大の元岡移転は、苦しい状況に追い込まれました。しかし、私は「後戻りはできない」と心を決めていました。



遺跡の発掘調査が進む九大新キャンパス予定地（2001年5月14日、福岡市西区元岡地区）

矢田俊文, 公立大学論 下巻 平成の大学改革の現場実践録, 矢田俊文著作集第４巻, pp.74-79, 原書房,2020 年３月

1　移転決定の背景と移転対象地区

ところで、新キャンパスの選定過程を含めて、筆者（矢田）は、より広義に「黎明期」としたい。

「移転対象となる箱崎地区（東区、約四六ha、事務局および文系四、理工農系三学部、中央図書館等、学生約八、二〇〇人、教職員約二、〇〇〇人）、六本松地区（中央区、旧教養部、約九ha、学生約五、〇〇〇人、教職員約一〇〇人）、原町（はるまち）地区（箱屋町、約二四ha、附属農場等、教職員二〇人）の三地区である。移転対象となるのは、主として三地区内の各部局であり、移転対象となる計画人員（定員）の内訳は、学生が約一二、四〇〇人、教職員が約三、二〇〇人の合計約一五、六〇〇人である」[3]。5―7図にみるように、そのほか九州大学には、移転対象外となる地区として、病院地区（東区、医学系三学部、附属病院、生体防御医学研究所等）、筑紫地区（春日市、総合理工学研究科、応用力学研究所、先導物質化学研究所、健康科学センター等）、大橋地区（南区、芸術工学部等）がある。（教育研究組織については、学府・研究院制度導入前に使用されていた名称を使った）。

ここで、病院地区を移転対象に入れるかどうかは、学内外、さらに当時の文部科学省で意見の対立があったが、その経過と結論については、本編第一章でふれた。

2　移転先選定過程

ところで、新キャンパスの選定過程について、『これからのキャンパス・デザイン』では、一九九一年に評議会で承認された「新キャンパス移転構想（学長試案）」で、「一九九〇（平成二）年六月に設置された新キャンパス構想委員会（委員長：徳本鎮教授、肩書きは当時のもの、以下同様）および同年一二月に設置された新キャンパス策定専門委員会（委員長：國武豊喜教授）による新キャンパスの規模や場所に関する答申をうけたものだった。新キャンパス策定専門委員会では、宗像、粕屋、香椎（現アイランドシティ）など、複数の候補地について検討し元岡・桑原地区を選定した」[4]と記載されている。候補地として、元岡・桑原地区（以下元岡地区）とともに、宗像、粕屋、香椎（現アイランドシティ）の四地区があげられていたことが公式に書かれている。新キャンパス構想委員会、策定専門員会の二つの委員として関与し、一九九七年以降二〇〇一年まで大学改革・統合移転担当副学長であったものとして、ここで多少コメントしておきたい。

5―6図は、副学長就任後、選定経過について関係者から得た情報をもとに、「頭の整理」的にメモしたものである。（当時）のキャンパスの課題として「箱崎・六本松の分離体制（教養と専門の一貫教育の障害）」、「航空機離着陸航路の直下（危険・騒音）」、「老朽建物の更新（研究・教育を阻害）」、以上の三つをあげ、その対応策として、「再開発」と「統合移転」を対比し、前者については、「高度制限のための必要面積不足」、「航空路直下解決せず」として選択肢から除外している。次に、統合移転先を選択するとして、その候補地としてどこか適当か、を課題とする。そのなかで、元岡地区とA、B、C、Dの合わせて五地区が候補としてあがっていた。Aは附属農場に近接した粕屋町、Bは宗像市、Cは博多湾埋立地（現アイランドシティ）、Dは西区橋本周辺（たしか現在の地下鉄七隈線車両基地周辺）である。これらはキャンパス予定地として、それぞれ、一長一短があり、どの条件を優先するかが問題となる。こうした視点でみると、A、Bは福岡市外であり、当時広島大学が東広島市に移転し、学生が大幅に減少して市の中心の活気が失われたことが関係者に強い関心となっており、市議会の議論もあって、当時の桑原敬一市長が強い拒否反応を示したこと、また、市内の候補地の選択及び開発については市当局が積極的であったことから粕屋と宗像については、対象からはずれた。残る市内の用地のうち、橋本周辺は、平地であったが、所有者が多く土地購入交渉が容易ではないことから、一定の価格で大規模に土地を確保できないとの判断で早々と候補地から外れた。

残るは、人工島か元岡地区である。人工島の場合、三つのケースが考えられていた。箱崎・六本松・原町を人工島に統合移転するケース、六本松の機能のみを人工島に移転し、これに合わせて箱崎を再開発するケース、六本松の土地の一・五倍の土地を人工島で確保し、箱崎の再開発と一体的に利用するケースである。人工島と現地再開発の組み合わせの案は、航空路直下という難点は残るものとして排除され、最後に人工島か元岡地区かの選択となる。他方、元岡地区は、行政的には福岡市内であるものの、都心からのアクセス上で大きな難点があること、一塊の『里山』であり、筑波や広島、宮崎などの国や自治体の学園都市構想と異なり、大学単独の責任で土地造成する必要があること、などの課題が残るものの、用地を同一価格で一括した購入が可能であるとの利点が市幹部から示された。人工島については、提示された売却価格が単価で比較すると元岡地区の約四倍で、広大なキャンパス用地確保に国が財政的に不可能であるとの態度を示したことに加え、埋立地では精密性と正確性を要する測定機器や実験装置の設置には不適当であるとの理工系学部の意見もあって、最終的に元岡地区を選択した、という。

＊　＊　＊

ところで、私の書棚に滝口凡夫元宗像市長から贈られた『記者市長の闘い―これが地方自治の実態だ』（西日本新聞社、二〇〇二年）という本がある。この本の第五章「白紙に新しい都市像を描く」の「一　九大はなぜ西部に移るのか」というタイトルの「節」で、九大キャンパスの統合移転と宗像市とのかかわりが約一頁にわたって率直に書かれていて興味深い。要点を引用しつつ紹介しよう。

まず、滝口氏は、九大の宗像移転とのかかわりを次のように話す。

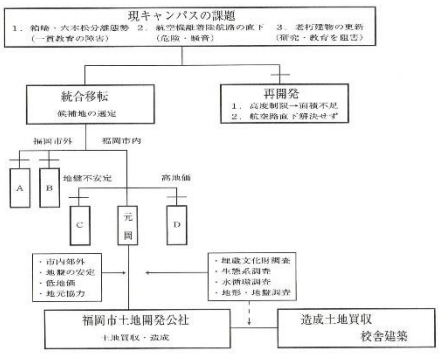
「現実問題として、いまさらどうなるものでもなかろうとは思うが、宗像移転は私が市長在任中に手がけたビッグ・プロジェクトであり、宗像が学術文化都市づくりを目指すうえで、これ以上はないと考えられる誘致対象であった。私が関与した限りでの記録は、このさい残しておく必要があろう。

市長就任二年目の八九年（平成元）年二月、福岡市の西日本新聞会館で九州二一世紀委員会総会が開かれた。議事の合間に、会長を務めていた九大の高橋良平学長が『滝口さん、ちょっとちょっと』と私を手招きした。私は新聞社のころ（元編集局長）から引き続いて委員をしていたし、高橋良平学長とは旧知の間柄であった。『移転問題を検討しているが、あんたのところで二五〇ヘクタールほどゾーニングしてくれんだろうか』と、高橋さんは言った」[5]。

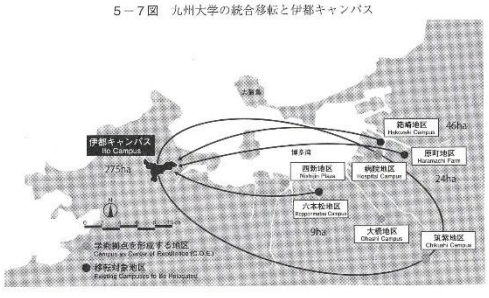
筆者（矢田）は、一九八二年に九州大学経済学部教授に就任しまだ七年ほどしか経過していない。ただ、高橋学長は、筆者の東大の学生・大学院生時代の指導教官である西川治教授とドイツの（ボン）大学留学時代に御一緒だったとかで、私のことをいろいろ気にかけてくれていた。その紹介もあって、西日本新聞社の九州二一世紀委員会委員としても参画し、九州の発展戦略などについて執筆活動も行っていた。しかし、大学移転をめぐって、こうした会話があったことは全く知らなかった。しかも、この一五年後、九大の統合移転担当副学長として、苦悩の毎日を送る「運命」は予想だにしていなかった。

滝口氏は続ける。「私にとっては母校でもある。九大が来るかも知れない、と思うだけで胸が高鳴った。市役所に

5―6図　黎明期　移転地の選択と開発体制の構築
1　キャンパス統合移転先の選定経過（矢田メモ）



5―7図　九州大学の統合移転と伊都キャンパス



戻るとすぐ、助役やごく少数の幹部を呼んで指示し、最初に一ヵ所、続いてもう一ヵ所、候補地を選んで九大に届けた。

それから再々、大学本部の学長室を訪れることになる。三月末に行ったとき、学長は『いろいろ動きが出た。移転候補地は四、五ヵ所あがっている。宗像もガス、水道の資料など準備を急いでくれ』といい、『現在地での再開発は考えられない。福岡市に気兼ねする必要もなくなった』とつけ加えた。福岡市とのことは、香椎沖の人工島の土地取得にかかわる問題のようであった。（中略）

大学のほうでは、学内での意見集約と計画の具体化を本格化している。九〇（平成二）年から翌年にかけて、『新キャンパス構想委員会』が『二一世紀における九州大学の在り方』として『原則としてその全部をあげて移転する統合型新キャンパス構想を早急に検討する』ことを提言、これを受けて『新キャンパス策定専門委員会』が設けられ、候補地の立地条件などの検討に入っている。

私の手持ち資料によると、検討対象となった候補地は五ヵ所、内訳は宗像市内のA、B二ヵ所、柏屋地区、福岡市の香椎地区、元岡地区である。専門委員会の調査は詳細を極めていた。宗像市が提出した立地条件に関する資料は、地質調査や航空写真を含め十項目を超え、追加要請もたびたびだった。宗像に約二〇人の現地調査チームが入ったのは九一年四月、と記憶している。事務担当の職員たちが対応し、目立つのを避けて私は立ち会わなかった[6]。

余談ではあるが、筆者（矢山）は、九州大学の現地調査に行ったことを憶えている。確か、東郷駅の北側の里山であった。

滝口氏の文章は続く。「宗像市では九一年五月、誘致のために各方面に配る説明資料として『九州大学の移転についての意見』と題する文書を作った。一枚目につけた要約メモは五項目で、宗像が、（一）北部九州大都市圏軸の中心に位置すること、（二）大学にふさわしい自然環境に恵まれていること、（三）交通に利便性があること、（四）用地が比較的に安価で取得が容易なこと、五　大学都市が形成できることを強調している。（中略）県庁に行けば知事室をのぞき、奥田八二知事が在室であれば会うことにしていた。九大のことも何度か話したが、奥田さんはあまり乗ってこなかった。宗像誘致に反対ではなく、むしろ賛成のように私は受け止めていたが、だからといって積極的に動こうとはしなかった。田中健蔵先生（高橋学長の前の学長）と（同じ九州大学名誉教授同士で）知事選を争ったことがあるので、後任の高橋学長とも話がしにくいように見えた[7]。

「福岡市は反撃に転じた。新聞報道だが、同じころ開かれていた市議会での一般質問で、二日間にわたりかなり激しいやりとりがあった。質問は、九大開学のころからの福岡市との関係の深さ、先人たちの努力を振り返りながら『絶対に市外に出すな』という趣旨であった。

桑原敏一市長と友池一寛助役が答弁に立っているが、こもごも『福岡市域外への移転は認められない』（市内移転が決まれば、直ちに庁内にプロジェクトチームを作り、跡地構想を策定する）などと、強い調子で市内移転を求めている。地元N紙は十八日付け朝刊の解説記事で『福岡市、宗像市、綱引き本格化、議会も誘致にしのぎ』と書いた。

決着がついたのは、それから三ヵ月後の九月二十七日である。高橋学長はこの日に開かれた将来計画小委員会に、学長試案として新キャンパス移転構想を提示した。小委員会は全学の学部長など二二人で構成されていた。

試案は移転する理由、移転候補地区にふれたのち、移転候補地として『五候補地のうち、M地区を第一候補として検討をお願いしたい』と述べ、その理由として、(1)専門委員会で検討した結果、用地として十分な条件を備えている、(2)用地取得、周辺都市計画及び跡地処分等についての対応が円滑に進められると思料される。の二点をあげている。この案は十月二十二日の評議会で承認され、正式な学内合意となった。

私の手元には学長試案の元となった専門委員会答申のコピーがある。候補となった五地区についてそれぞれコメントしているが、宗像の二地区に共通する問題点として福岡都心部からの距離、周辺の都市機能の未整備、水資源の確保があげられている。候補地選定は、最終的には福岡市の元岡と宗像市の一ヵ所の争いになった、と聞く。決め手は、両市の財政力の差だった、と私は思っている。桑原さんが市長を辞めたあと、M紙に連載した聞き書き『福岡はなぜ元気か』が本（筆者所）になっている。この中で桑原さんは『大体、宗像市へ移転するんであれば、用地買収費や校舎の建設費はどうするつもりだったのでしょう。原資がなければ、国も移転の予算は出しません。跡地となる現キャンパスを売るしかないのです』と語っている。宗像市が福岡市内にある九大の土地を売り、原資をひねり出すことなどできるはずはない[8]。

滝口氏は、新聞記者出身で編集局長を務められただけに、さすがに情報収集力は高い。一教授としての私が関係委員会で知りえる情報をはるかに上回るものであり、九大や福岡市の幹部の意向をほぼ正確に分析している。今から四半世紀前のこと、分析内容は大きく外れていない。滝口氏の証言は、巨大な国立大学の立地選択の歴史資料として残す価値は十分にある。

矢田俊文, 公立大学論 下巻 平成の大学改革の現場実践録, 矢田俊文著作集第４巻, pp.128-139, 原書房,2020 年３月

五　二一世紀の新しい知の拠点・九州大学学術研究都市づくり

1　いま、なぜ「知の拠点」か

一八世紀後半の産業革命以後、約二〇〇年にわたって続いた「工業社会」は、二〇世紀末になって本格化したＩＴ（情報技術）革命によって、「知識社会」という新しい時代に突入した。工業社会とは、一言で表現すれば、原料が「もの」（Material Goods）で、これに物理的・化学的変化を人工的に与えて、社会的に有用な「もの」をつくる「工業」が産業の中心となる社会である。卸・小売や運輸などのいわゆる「流通サービス」産業も、工業で生産された「もの」の消費者をみつけ、運ぶ産業であって、工業社会において不可欠であっても付随的な地位にあることは否定できない。

他方、工業社会にあっても、調査、企画、設計、マーケティング、経営管理など、「もの」の製造や原材料・製品の輸送に直接かかわらない分野、製品革新・工程革新・経営革新にかかわる研究開発、それを支える基礎科学などは、既存の知識（Knowledge）を原料とし、新しい知識を創造する過程であり、それなりに重要な役割をはたしていた。一九九〇年代から本格化したＩＣＴ革命によって、情報の収集・記憶・加工・輸送（通信）能力の高速化・大量化が可能となり、知識の生産性が一挙に高まり、工業においても企画・設計・マーケティング・経営・研究開発が企業のcore competenceとなっている。また、デザイン・設計、企画・調整、software、情報処理、研究開発などを専門とする企業が次々と誕生し、厚い「知識産業」群を形成しつつある。このように「知識生産」が経済の中枢部門になるのが「知識社会」であり、二一世紀はまさにこうした時代を迎えているのである。

「工業社会」のなかで育った知識生産が、情報革命によって主役におどりでたのは、ちょうど、動植物の成長過程を人工的に支援する農林牧畜業が中心の「農業社会」にあっても、食品加工、繊維・衣服、農機具などの工業が重要な役割を果たし、これが産業革命によって中心におどりでたことと相似している。こうした「知識社会」にあっては、企画・設計・マーケティングなど「もの」の生産における知識投入分野、デザイン・ソフト・Ｒ＆Ｄ（研究開発）などの知識産業とともに、基礎科学・応用科学研究の中心にあり、かつ将来の知識生産の担い手となる若手の人材を育成する「大学」の役割が決定的となってくる。

本格的なＩＣＴ革命の到来の約二〇年前の一九七三年に書かれたダニエル・ベルの著作「脱工業化社会の到来」[34]において、「工業社会」後の社会を「脱工業社会」と表現し、「社会」の変化を大略次のように整理している。「前工業社会の『構図』は『自然に対するゲーム』である。その資源は採取的生産業から引き出され、収穫逓減、低生産性の法則に制約される。工業社会の『構図』は『つくられた自然に対するゲーム』であり、それは人間と機械との関係を中心とし、自然環境を技術的環境に変えるためエネルギーを使用する。脱工業社会の構図は、『人間相互間のゲーム』であり、そこでは情報にもとづいた『知的技術』が機械技術と相並んで登場する。」そのうえで、「（基軸的）制度または原理」は、「脱工業社会にあっては、理論的知識の中心性である。」と、その「主要施設」として「工業社会」の「工場」に代わって、「大学、研究所、研究コーポレーション」をあげている。[35]

二〇世紀末の日本の国力の急低下をみれば、著しく遅れた観は否定できないが、政府もこうした時代認識に到達し、科学技術政策の抜本的強化に乗り出した。具体的には、二〇〇一年に第二期の科学技術基本計画を策定した。ここでは国力低下の重要な要因の一つとして科学技術競争力の脆弱性に求め、二一世紀においては「科学技術力は社会の持続的発展の牽引車、人類の未来を切り拓く力」であるととらえ、「新しい知の創造」、「知による活力の創出」、「知による豊かな社会の創生」を「目指すべき国の姿」とし、「科学技術創造立国」のスローガンのもとに、その総合戦略を明確にした。

その戦略とは、第一に、国家的・社会的課題に対応して、ライフサイエンス、情報通信、環境、ナノテクノロジー、材料の五分野などの「科学技術の戦略的重点化」、第二に、競争的資金の倍増、若手研究者の自立の促進、産官学連携の仕組みの改革、地域における科学技術振興のための知的クラスターの形成、研究者・技術者養成と大学改革、大学施設などの基盤整備などを内容とする「優れた成果の創出・活用のための科学技術システム改革」、第三に、国際的な研究環境の強化、国際協力活動の推進、国際的情報発信力の強化などの「科学技術活動の国際化の推進」の三つに集約されている。また「省庁間の縦割りを排し」、「総理のリーダーシップのもと、科学技術政策推進の司令塔」としての総合科学技術会議を位置づけ、予算など資源の重点的配分、国家的重要プロジェクトの推進などを一元化することを明確にするとともに、五年間で二四兆円にのぼる政府研究開発投資を決定した。

こうした流れをうけて、というよりも内閣府の科学技術政策に主役を奪われないようにという強い対抗意識から文部科学省も、本格的な「大学改革」に乗り出した。もともと、一九九〇年代の文部省の「大学改革」は、一九九一年の「大学設置基準の大綱化」と二九九八年の大学審議会答申「二一世紀の大学像と今後の改革方策について―競争的環境の中で個性が輝く大学―」の二つを核とし、教養部の廃止、多様な学際的学部・研究科の新設、少数の大学の「大学院重点化」、自己点検・評価の改善、学長のリーダーシップの強化などを推進してきた。加えて二〇〇〇年以降国立大学の「法人化」の本格的検討がなされ、二〇〇四年四月実施の線で最終的つめにはいっている。さらに、二〇〇一年六月に小泉内閣の聖域なき構造改革に沿って、「大学の構造改革の方針」がだされた。これは、審議会答申など通常行ってきた手続きをへないもので、内閣府の強力な政策に対抗した緊急的性格をもっていた。ここでは、「法人化」によって「国立大学に民間の発想の経営手法を導入する」こと、「国立大学の再編・統合を大胆に進める」こと、「大学に第三者評価による競争原理を導入する」ことにより「国公私『トップ三〇』を世界最高水準に育成」すること、以上の三つの戦略を提起している。こうした、政府の科学技術政策および「大学改革」政策は、二一世紀「知識社会」の時代に日本の国際競争力を確立するために不可欠なものであり、改革の主対象となる国立大学はいずれも必死の改革に取り組んでいる。

九州大学は、こうした政府の政策より先んじて、大胆な大学改革を実施し、かつ統合移転を進めることで改革を新しいキャンパスにおいて具現化し、あわせて福岡市から唐津市にいたるエリアを、新キャンパスを核にした「二一世紀型の学術研究都市」とすべく、大胆な取り組みが進んでいる。以下その経過をまとめて紹介しよう。

2　九州大学の改革

（統合移転と改革の大綱案の評議会決定）

九州大学は、一九九一年一〇月に本部事務局と工学部など七つの学部のある箱崎地区、医学部など三学部・一研究所・二病院のある病院地区、教養部のある六本松地区、一大学院・二研究所のある筑紫地区、および農場のある原町地区の五キャンパスのうち病院と筑紫地区を除く三つのキャンパスを福岡市域西の元岡・桑原地区に統合移転することを評議会決定した。これにより移転キャンパスは、約八〇haから二七五haへと約三五倍になる。一九九八年に土地買収は終わり、二〇〇〇年に環境影響評価書が公表され、二〇〇一年に新キャンパスのマスタープランが評議会決定された。二〇〇〇年に造成工事が着手され、二〇〇五年から工学系の移転がはじまり、理学系、文系と続き、二〇一五年には農学系と農場の移転をもって完了する予定で、日本の国立大学では現在進行している最も大きなプロジェクトである（移転完了は二〇一八年）。

九州大学では、新キャンパスをつくるにあたって、大胆な大学改革を実施し、その理念を空間的に具体化する戦略をとった。そのため、一九九二年から改革委員会をスタートし、三年間の学内議論をへて、一九九五年三月に「九州大学の改革の大綱案」を評議会決定し、以後六年にわたって、これを骨格とした独自の改革を実施してきた。文部省による大学改革の路線が明確に提示されていない時点での九州大学の改革路線の模索は、同時に一九四九年の新制大学の開始以来の、日本の国立大学の課題摘出とその解決への政策の提示を意味した。

新制大学のもとで、戦前の抑圧された状況から一新した自由な研究環境のもとでの研究が行われ、多くの優れた研究成果が生まれた。加えて、国立大学の地方分散、大都市圏での私立大学の急増によって、多くの若者の教育機会が保証され、Ｈ本の高度成長に重要な寄与を果たした。他方で、センター・テストに象徴される「〇×式」の全国一律入試、品質管理を欠いた大学教育、総合性を欠いた専門教育などによって、専門知識を身につけない卒業生、専門知識があっても画一的で独創性を欠いた卒業生が多数輩出され、企業の国際競争力や公務員の行政能力、ひいては日本の国力の強化に切らかな障害となった。また、戦後の民主化の影響を受けた「大学の自治」の考え方が、一九六〇年代から一九七〇年代にかけての長い大学紛争のなかで「象牙の塔」論として一面化され、産学共同研究や政府の政策形成への参加を機械的に否定し、講座制の小さな社会に研究者を閉じ込める傾向を生み出した。このことが、大学の研究と企業の技術開発、国や自治体の政策形成との円滑な連携を阻害した。こうした、大学教育の脆弱性と研究の閉鎖性を打破することにより、日本の大学の教育・研究水準を世界の先端に引き上げることが、大学改革の基本的使命となっていた。そのために求められるのは、大学内の講座や学部・学科の組織の壁、大学間・学問分野間および国境の壁、そして大学と社会の壁を突き崩し、組織間の風通しをよくして、交流を深めるとともに、競争を促し、かつ透

明性を確立することである。こうしたシステムの変換によって、教員と学生の意識改革を促し、持っている潜在力を十分に発揮できるようにし、研究と教育の水準の上昇を図ることが可能となる。また、時代環境に応じて社会的に求められる新しい分野の研究・教育を拡充し、かつ戦後軽視されてきた大学院教育を抜本的に強化することである。

（学府・研究院制度と二一世紀プログラム）

改革専門委員長として大綱案の執筆に中心的にかかわった筆者の基本的問題意識は、以上のようなものであり、改革のコンセプトを「国際的・先端的研究教育拠点（COE）の形成」と「自律的に変革し活力を維持し続ける社会に開かれた大学の構築」の二つに集約した。このなかで、特に九州大学の改革を特徴づけるのは、後者である。それは、戦後半世紀を経過して、細分化し、硬直化した研究科・学部、専攻・学科、講座など教育研究組織を、時代の変化に伴って柔軟に再編できる「自律変革システム」の構築にある。つまり、「組織」という壁を突き崩すこと。「内部組織の柔構造化」である。

なかでも最大の目玉は、ほとんどの大学で学部や研究科として一体化していた教育研究組織を、教育組織としての学部＝Undergraduate School、学府＝Graduate School と教官組織としての研究院＝Faculty に分離し、それぞれを自由に組み合わせて新しい組織を柔軟に編成できるシステムにしたことである。文部省との四年にわたる話し合いをへて一九九九年に学校教育法を改正し、翌二〇〇〇年に全学の大学院重点化とともに学府・研究院制度を全面的に導入した。これによって、法学、経済学、人文科学、言語文化という大学院の教育組織（研究院）に講座を置いたまま、学際系の比較社会文化学府という大学院の教育組織にも講座を置き、院生定員を確保し、指導することが可能になった。また、二〇〇一年に設置された医学系学府の医療経営・管理学専攻では、医学研究院の教官だけでなく、人間環境学、法学、経済学、薬学研究院に所属する教官が、医学系学府の専門大学院の新専攻に教育講座を持ち、学際教育にあたっている。

さらに、現在、理学、農学、医学の研究院に籍を置く生命科学系の教官が、それぞれの研究院に籍を置いたまま、理学府、生物資源環境科学府、医学系学府という大学院の教育組織を再編し、新たにシステム生命科学府（仮称）を設置する計画が進んでいる。また、全学的支援体制のなかで構想されているロー・スクール、ビジネス・スクールも

こうした学府・研究院制度の活用が有効であり、九州大学だけでなく、全国の大学でも注目され、導入の動きが始まっている。そのほか、こうした制度を導入することにより、教官が研究院組織を変更せず、新しい研究センターにも所属することもでき、二〇〇一年にはシステムLSI研究センター、二〇〇二年には韓国研究センターおよび宙空環境研究センターはこうしたシステムを活用して新たに設置された。

組織の柔軟化のもうひとつの目玉は、学部という教育組織の厚い壁を突き破り、大胆に学際教育を実施するため、どこの学部にも属さず、すべての学部のカリキュラムを自由にとれる学士課程の「二一世紀プログラム」をつくり、二〇〇〇年に二〇名の学生を採用したことである。学生は全国から応募し、モデル講義聴講による論文の作成、デイベートなど独特の選抜方式で採用し、全学部の講義の選択的受講や全員の海外留学など大胆な試みが始まっている。すでに本年度の採用も決まり、学生たちは新しい伝統をつくる意欲に燃えて特段の努力をしている。そのほか、一九九七年から全学的に毎年約二億円の予算を確保し、学際的研究教育を積極的に推進する教育研究・プログラム、研究・拠点形成・プロジェクト制度を実施している。全学教育での「九州大学史」の講義や「空間」概念の全学的な学際研究、ソウル大学図書館の日本語蔵書の調査など、五年間に多くの成果をあげている。さらに、一九九八年から教官個人の研究教育・社会活動について本人が自由に記述し、ホーム・ページで公開する独自の評価方式は、学外へのわかりやすい情報公開として好評である。公開開始から二〇〇二年三月までの約四年間のアクセス数は約二五万件に達している。（3―1表「九州大学の改革と統合移転の経緯」本書一九頁参照）

（大学院重点化と芸工大との統合）

大綱案のもうひとつのコンセプトである「国際的・先端的研究教育拠点（COE）の形成」の中心は、学部教育に重点を置き、施設においても、予算においても大学院教育が軽視されてきた戦後の大学システムを改変し、二一世紀の世界の科学技術を担う若手人材の育成の中核的教育組織として大学院の施設、予算、教育プログラムの飛躍的な充実を図ることにある。これは、「大学院重点化」とよばれ、東京大学や京都大学などの基幹大学と足並みをそろえて実行してきた。九州大学では、一九九七年の医学系ならびに工学研究科から始まり、二〇〇〇年には全学の大学院重点大学がわずか三年で完了した。さらに、一九九四年に教養部を廃止するとともに、同年に比較社会文化と数理学、

一九九六年にはシステム情報科学、一九九八年には人間環境学の計四つの新しい学際的大学院を設置し、一九九八年には日本初の学際大学院であった総合理工学を大幅に見直すなど、研究大学に相応しい再編を行った。こうした、組織再編によって研究教育水準の向上する基盤が形成されたものの、それが自動的に達成されるものではない。教育現場での教育プログラムや教育方法などの見直しと改善、科学研究費など競争的資金の確保を核とする研究プロジェクト充実が不可欠であるとともに、みずから自己点検を強化し、あわせて外部からの評価を受けることである。各部局では、学生による授業評価をふくめ一斉に教育改革を実施するとともに、全学的にも一九九七年に自己点検・評価システムを一新し、二〇〇〇年には全国の国立大学ではじめて外部評価した。また、九州大学の教育研究に最も不足していたアート［芸術＝ART］分野を強化する必要から、思い切って大学間の壁を崩し、九州芸術工科大学と二〇〇三年一〇月に統合することで合意した。

（アジア地域戦略）

「大綱案」では必ずしも明示されなかったものの、改革の先頭に立っていた杉岡洋一前総長のリーダーシップのもとで、九州大学の研究教育におけるアジア地域との連携強化戦略が大胆に推進された。二〇〇〇年と二〇〇一年の二回にわたって、九州大学でアジア学長会議を開催し、大学間の連携を模索し、参加した約二〇大学間で相互の情報を交換し、本格的かつ長期的な研究教育連携を強化する、ネットワーク・ポイントを設立した。さらに、アジア研究を推進するアジア総合研究機構を学内に設置し、学内外アジア研究のネットワークの中核とした。この機構は、人文・社会科学だけでなく環境・食料・気象・海洋・感染症など理工・生命科学も含め、アジア地域の大学との共同研究拠点となっている。さらに、一九九八年秋の当時の金鍾泌首相の学内講演を契機に韓国研究者との連携が強化され、二〇〇〇年には Korean Foundation からの一万ドルの支援に応えて学内に韓国研究センターを設置し、日本の韓国研究拠点になっており、二〇〇二年四月には正式の文部科学省の省令施設となる。さらに、留学生教育の本格的かつ多面的な改革を進めている。こうした、アジア地域戦略は、産学連携、地域連携とともに「開かれた大学」づくりの中核となりつつある。

3　新キャンパスと学術研究都市

こうした国立大学で先陣を切った大学改革の理念を、空間的に具現化する新キャンパスの建設、これを核として周辺に研究所などの知的生産拠点が集積する九州大学学術研究都市づくりが、福岡県・福岡市・前原市・志摩町・二丈町などの地元自治体、九州・山口経済連合会をはじめとする経済界、地域住民と一体となって着実に進んでいる（5―8図）（二〇一〇年二月、一市三町が合併し糸島市となる）。

（統合移転決定から造成工事着工まで）

一九九一年一〇月の九州大学評議会決定から二〇〇〇年六月の造成工事着工まで、実に九年近い歳月を要した。その間は、大きく二つのフェーズに分かれる。

第一フェーズ（黎明期）は、新キャンパス用地のエリアの決定、用地の買収に関する九州大学と福岡市の折衝である。文部省によって「統合移転調査費」が措置され、そのもとでエリアの気象・地形・地質・動植物・水文などの基礎調査がなされた。折衝は、当時の和田光史総長と桑原敬一市長のもとで順調に進み、元岡・桑原地区の里山約二七五haのエリアの画定と、福岡市土地開発公社による買収が開始された。また、このエリア画定を受けて、福岡市教育委員会による埋蔵文化財の試掘調査が開始された。この期間は、和田総長の在任期間のほぼ四年間を要し、学内の議論の焦点は、新キャンパス問題よりも、移転の前提となる大学改革戦略の策定にあり、三年間の議論の後に一九九五年三月に「九州大学の改革の大綱案」と病院地区の再開発が同時に決定した。

第二フェーズ（胎動期）は、一九九五年一一月の杉岡洋一総長就任にはじまる。新キャンパスエリアの自然条件の調査が集約され、また埋蔵文化財の試掘調査にもとづく中間報告が市から大学になされ、これらの資料をもとに「造成計画案」づくりが本格化した。そのなかで、埋蔵文化財の取扱が学内外から注目され、学内専門家との話し合いをへて、六つの前方後円墳のうち五つ、二つの中世山城、石ケ元古墳群のうち残りのよいものなどの現状保存を内容とする「埋蔵文化財取扱方針」を一九九七年七月に学内合意し、一一月に「造成基本計画」を提案した。真剣な学内議

論をへて、エントランス部分と大原川の水源部分の開発計画を大幅に変更する修正案が一九九八年五月に評議会決定した。同年の一二月に土地開発公社による用地買収が完了した。さらに、学内では「造成基本計画」で決定されたゾーンのなかで、教育研究、事務組織が立地するアカデミック・ゾーン内のゾーニングおよびそれと連動した移転順序について学内議論し、一九九九年七月に学内決定した。「造成基本計画」が画定することにともなって、造成対象地の埋蔵文化財の発掘調査がなされ、製鉄所跡など新たな遺跡が発見され、それらの保存のあり方をきめ、造成計画の部分的変更を行った。また「造成計画」をベースにした「環境影響評価書」の作成を時間をかけて行い、二〇〇〇年二月に公表し、福岡県の承認をえた。

こうした、基礎的作業をへて、二〇〇〇年三月に理・工・農系および全学教育・本部事務系のエリアとなる「第一工区の造成基本設計」が評議会で承認され、ようやく六月に造成に着手した。大学には、埋蔵文化財、動植物生態、地質や土壌・水循環、さらに土木・建築、都市計画・地域政策などの多様な専門家がおり、厳しい目と積極的な意見の提示のなかで、造成計画を進めることがもとめられる。また、部局自治が確立されており、学内できちんとした議論をしたうえで合意をえなければ計画を進めることができない。他方で、文部省の予算を獲得しており、一定のスケジュールのもとで進めていくことが求められる。民主主義と行政責任の狭間にあって、科学的調査と情報公開、繰り返されるディベート、そしてトップの決断、こうしたものが微妙にバランスしなければ、こうした大事業を進めることはできない。一部のマスコミによる移転反対運動を糾弾する記事で、教官の間に一時的な動揺がみられたことはあったものの、部局長会議や評議会レベルに激震が走ることはなく、ほぼ予定通り造成着工にこぎつけることができた。

（新キャンパス・マスタープランの作成と特徴）

新キャンパスづくりには、「将来像を九州大学全体で共有するための空間イメージを提示する」マスタープランを不可欠とする。一九九九年四月にWTO政府調達協定にもとづく公募型プロポーザル方式による選定委員会（委員長　渡辺定夫東大名誉教授）の設置、一九九九年八月官報公示による世界に向けた公募と三ヶ月の慎重審査をへて、一一月末に三菱地所、シーザペリ・アンド・アソシエーツ・ジャパンおよび三島設計事務所の設計共同体と契約し、九州大学と共同で策定作業に入った。一年強の作業をへて「新キャンパス・マスタープラン二〇〇一」が提案され、学内議論をへて二〇〇一年三月に評議会決定した。これによって、新キャンパスづくりは、第三フェーズ（教育研究施設の段階的整備等）に入る。このプランは、「今後新キャンパス内の個々の施設などの計画、設計、建設を進めていく際に一つの方向を示す目標像」でもあり、今後の新キャンパスづくりの「憲法」と位置づけられる。ここでの基本的考え方は、(1)COEに相応しい研究教育施設の整備、(2)環境と共生する未来型キャンパス、(3)地域に開かれた魅力的なキャンパス、(4)新しい、学術研究都市の核となるキャンパスづくりと地域連携の推進、(5)キャンパス間の連携に配慮した新キャンパスの創造の五点となっている。

「改革の大綱案」で示された理念の空間的投影は、主として(1)のCOEに相応しい研究教育施設の整備の思想の中に具体化されている。それは、①東西に長い広大な敷地の両端に大規模な拡張用地、東西を結ぶ自動車道路沿いに「未来のポテンシャル軸」という中規模の拡張用地を確保し、時代の変化に柔軟に対応できるようにたこと、②各部局（学部や研究科）が一塊となった施設を持ち、他の部局の建物と隔離されるという、二〇世紀の世界の大学のキャンパスを反省して、東西に連続した建物配置とし、これをつなぐ広い通路＝「キャンパス・モール」や開放的なオープンスペース＝「キャンパス・コモン」によって、全学の学生・教職員が日常的に頻繁に顔をあわせる施設とし、精神的な壁を除去すること、③学府・研究院・学部の施設をそれぞれ独自に再編可能なように、自立性をもたせて配置するとともに、大学院重点化に相応しい学府施設の充実を図ること、④教官の研究室・実験室については、特定の大型プロジェクトを実施するチームに一定期間利用可能な空間を確保し、競争的施設利用システムを導入すること、以上の四点に集約される。(2)の環境と共生する未来型キャンパスについては、「現状保存とした前方後円墳や中世山城などの遺跡群を自然緑地として残すこと」、「大原川上流の谷部一帯を『生物多様性保全ゾーン』として開発の対象からはずし、ここにカスミサンショウオなど貴重な生物を移すとともに、開発エリアの樹木などの移植を行うなど自然生態系の維持に努めること」、「再利用水循環システムの導入による大規模な節水、生ごみなどの廃棄物のリサイクル、風力発電など自然エネルギーの活用、パッシブ・システムの導入による省エネルギーにつとめること」など、二一世紀の地球環境問題の深刻化にチャレンジする実験都市を構築する。

(3)、(4)については、後述する「タウン・オン・キャンパス」によって、地域に開かれたキャンパスをつくり、かつ周辺の学術研究都市の核とする。また、(5)については、病院・筑紫・西新、さらに大橋地区と高速道路、地下鉄、JR・西鉄など軌道系を活用してキャンパス間の移動の利便性の向上を図る。また、研究・教育・管理にICTを全面的に導入するとともに、キャンパス間を太い情報通信ネットで結合し、ネットを通じた研究会、講義や運営会議を多用するシステムを整備する。

（学術研究都市構想）

筑波大学、広島大学、宮崎大学など戦後大規模移転した国立大学は、いずれも（旧）住宅都市整備公団や地域振興整備公団が周辺整備を行い、研究学園都市の目玉として大学を誘致する形をとった。そのため、周辺の基盤整備はもちろん周辺の研究所や住宅の誘導も国・自治体・公団が一体となってあたった。

しかし、九州大学の新キャンパスは、いわば大学が単独で糸島に立地することになっており、道路・河川など周辺の基盤整備は福岡市が協力するスキームとなっていた。教職員約二、五〇〇人、学生約一三、〇〇〇人が働き、学ぶ巨大な大学が移転する機会をとらえ、これを核として周辺に大規模な研究機関や産業の集積する学術研究都市を作り、それに相応しいインフラの整備をすることが、「知識社会」の北部九州の地域戦略のキーとなるだけでなく、ひいては国の科学技術の飛躍的発展戦略の最高のプロジェクトの一つになる。こうした考えのもとに、杉岡総長の必死の働きかけによって九州・山口経済連合会の全面的支援をえ、福岡県、福岡市、九州大学の四者のトップを代表委員、副会長、副知事、助役、副学長を幹事とし、さらに前原市、志摩町、二丈町（現糸島市）、唐津市、浜玉町など自治体、商工会議所や経済同友会などの経済団体、地方整備局や経済産業局、農政局など国の各省の支分局が加わった「九州大学学術研究都市推進協議会」を二九九八年五月に設立することになった。そのもとで「構想検討委員会」（委員長・伊藤滋東京大学名誉教授）をつくり、三年間の調査検討をへて、二〇〇一年六月に「九州大学学術研究都市構想」うみ、やま・さとに広がる知の創造空間―」が協議会で承認された。いわば、我が国第三ともいうべきの学術研究都市づくりが、大学と地域の連携主導型で産声をあげたのである。

この構想は、大きく二つのテーマによって構成されている。一つは、福岡市から唐津市に至る地域を学術研究都市のエリアとし、ここに「知の時代」を見据えた「地域の科学技術システム」を構築することである。一言で表現すれば、研究開発機能の集積によって、国土における知的発信の一大拠点とすることである。そのため、新キャンパスのエントランス部分であるセンターゾーンに大学の総合研究博物館、中央図書館、国際交流機能、産学連携機能、居住・宿泊機能、生活支援機能など社会に開放される中心となる機能集積を図る「タウン・オン・キャンパス」とし、隣接する周辺地区にこれらの機能と連携する国内外の大学・研究機関や企業の研究所、大学からスピンアウトしたベンチャーなど知識開発型企業が集積する「科学技術・研究特区」をつくる。さらに、その中心に研究や起業、人材育成をサポートする機能、学術研究都市を企画・推進する機関を置き、これらを一体とした「知の中央ステーション、Human, Science and Technology Station 略称HST」を構築する。

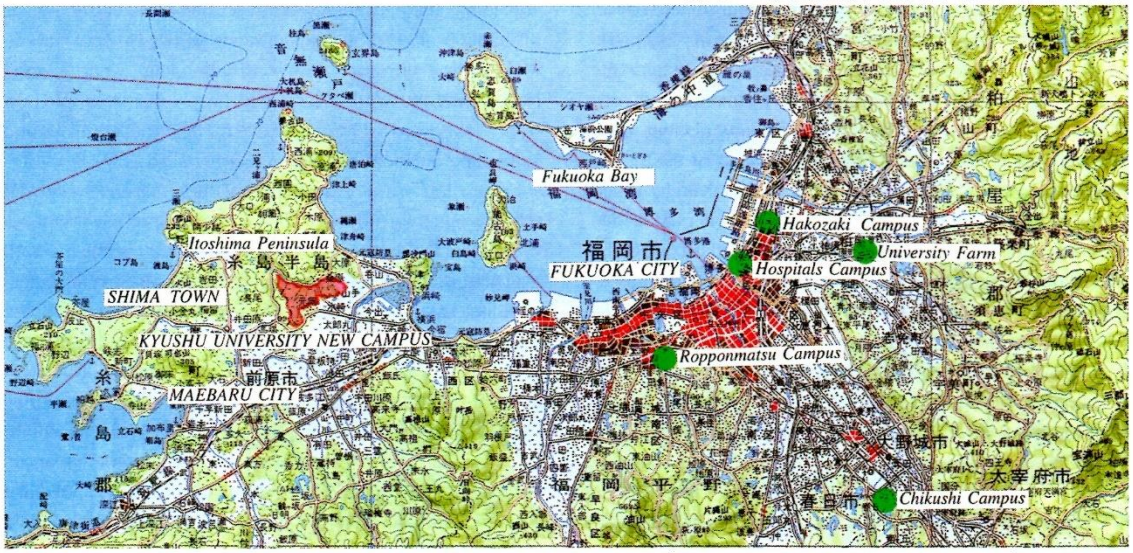
ここを拠点として、糸島半島の豊かな自然と歴史的特性を生かした小規模な研究・生産・居住・レクリエーション拠点を整備し、これを分散型地域核「ほたる」とよび、糸島半島全域に分散配置する。さらに、天神・博多駅を核と箱崎、大橋、西新・百道地区によって囲まれる地区に、都心型の研究開発・産業創出拠点、国際交流プラザ、ビジネス・スクールや放送大学、生涯学習機能など都心型の人材育成機能、大学間連携機能の集積を図り、これを「スマートダウンタウン福岡、Downtorm Alliance Fukuoka 略称DAF」とよび、HSTとの有機的連携を図る。こうした、地域の科学技術システムの構築を責任をもって推進するものとして、協議会内に「推進機構」を設置する。

「学術都市構想」の第二は、糸島地域の土地利用のあり方についての「空間構成」に関する構想である。ここでは、「自然や景観の特性、既成市街地や集落の状況、農業や個性的な芸術や産業などをふまえ、これらと共生する新たな機能の導入や、次世代に求められる情報や交通基盤の充実を図る」ため、「自然農業保全・共生ゾーン」、「田園ゾーン」、「市街地形成ゾーン」、「地域拠点ゾーン」、「学術研究都市ゾーン」、「分散型地域核（ほたる）」などゾーニングを行うとともに、これらを結びつける「地域骨格軸」、「地域ネットワーク道路」を整備するものである。これを推進するものとして、福岡県、福岡市、前原市、志摩町、二丈町（糸島市）や国の出先機関など行政連合体としての「いとしま計画連合」をつくり、行政間の速捗のもとに地域の土地利用調整、基盤整備を進めていこうというものである。

特集 新キャンパス造成基本計画

九州大学の新キャンパス移転構想は,平成10年5月26日の「新キャンパス造成基本計画」決定を受けて,いよいよ本格的に動き始めました。創立100周年を迎えようとする九州大学にとって,これは画期的な大事業となるでしょう。「九大広報」創刊号では,この「新キャンパス造成基本計画」を特集として取り上げました。

新キャンパス用地は,福岡市中心部から西へ約15kmの糸島半島中央部



九州大学新キャンパスの造成基本計画について

副学長・新キャンパス計画専門委員会委員長
矢田 俊文



矢田 副学長

平成10年5月26日は，あわただしく，かつ歴史的な一日であった。午前中には新キャンパス計画専門委員会，午後には将来計画小委員会で，九州大学の「新キャンパス造成基本計画案」が審議決定され，引き続く評議会において最終的に了承されたからである。

調査と話し合いをベースにした計画づくり

平成3年10月22日の評議会において，福岡市西区元岡・桑原地区を移転候補地とした「九州大学新キャンパス移転構想」を承認してから，実に6年半近くを要した。その間，九州大学総長から福岡市長への新キャンパス用地275haの確保の依頼(平成5年1月)，市長から総長へのエリア確定の報告(平成5年11月)，総長から市長への新キャンパス用地先行取得の依頼(平成6年2月)と市長から総長への土地開発公社により用地取得する旨の回答(平成6年3月)など，用地確保をめぐる大学と福岡市との話し合いが，地元の積極的な協力のおかげで順調に進んだ。

エリアの確定や用地買収が開始されるとともに，九州大学新キャンパス基本構想(0次案，平成6年3月)に続いて，新キャンパス基本計画づくりに着手した。計画作成に不可欠な地形，地質，地下水，気象，動植物生態，埋蔵文化財など関係事項の基礎的調査を実施し，キャンパス計画専門委員会において随時その結果が報告されるとともに，次第に「造成基本計画(案)」の輪郭がつくられていった。

平成8年12月には，福岡市教育委員会から「埋蔵文化財調査報告」がなされ，これをめぐって学内外での専門家の間で評価が分かれる事態も生じた。これを踏まえて，平成9年7月30日の将来計画小委員会において，総長提案の「九州大学新キャンパス基本構想における埋蔵文化財の取扱方針」が決定された。

こうした経過の後，新キャンパス計画専門委員会は，平成9年11月4日の将来計画小委員会において「造成基本計画案」を正式に提案した。その後，全学的議論のなかで各部局からの意見の集約が図ら

決定

れるとともに，学内外の関連する分野の研究者や機関からのヒアリングを実施し，その過程で，農業用水の確保難，地下水塩水化対策，自然環境への配慮，キャンパスのオープン性の確保，産業廃棄物の取り扱いなど，幾つかの重要な課題について，一層の検討の必要性が指摘された。新キャンパス計画専門委員会は，これらの課題について一つ一つ真正面から取り組み，課題解決に向けて関係機関の協力を要請するとともに，大幅な修正を行い，平成10年5月18日に改めて「造成基本計画案」を提出し，26日に正式決定の運びとなった。

未来型キャンパスへ

「新キャンパス基本計画」は，

(1)センター・オブ・エクセレンスにふさわしい研究・教育施設の整備

(2)環境と共生する未来型キャンパスの創造

(3)地域に開かれた魅力的なキャンパス生活の創造

(4)新しい学術研究都市の核となるキャンパスづくりと地域連携の推進

(5)キャンパス間の連携に配慮した新キャンパスの創造

以上の5つを「基本的考え方」とするものである。

世界的レベルでの研究・教育拠点をつくるため，移転予定キャンパス(80.2ha)の約1.8倍にあたる141.6haの有効敷地を確保するとともに，広大な土地のうち，大原川上流の沢や南面の緑地など自然地形を残してこれを景観資源として活用し，さらに，前方後円墳や山城などの歴史的遺産を包摂するなど，環境との共生に最大限配慮した。他方，桜井太郎丸線と接するエントランス部分を平面タッチにして，開放的キャンパスにするなど大胆な修正を行った。また，再生水の有効活用をはじめ，情報・交通・エネルギー・水などのインフラストラクチャーについて，学内外の専門家の協力を得て，21世紀にふさわしい新技術を大胆に導入した未来型のキャンパスづくりに努めたい。

平成10年5月7日に九州・山口経済連合会，福岡県，福岡市など関係機関の協力で「九州大学学術研究都市推進協議会」が結成された。今後、協議会のもとで進められる，糸島半島を中心として福岡から唐津にいたる地域における学術研究都市づくりにおいて，新キャンパスをその核として位置づけ，多様な研究機関の立地や周辺のまちづくりを積極的に進めていきたい。こうしたまちづくりによって，初めて住みよく，学びやすく，かつ質の高い研究ができる環境が整備されるからである。

今後，この「造成基本計画」をもとに福岡市土地開発公社において，造成基本設計，実施設計が行われ，造成工事の着手に向けて進んでいく。他方，これと平行して，学内において，ゾーンの配置や移転順序の決定，移転シミュレーションの実施，建物や施設計画案の作成，農場設計や農業用水の確保，環境影響評価の実施などを進めていかなければならない。学内の教職員の皆様の一層の御協力をお願いしたい。

なお，造成基本計画全体は，新キャンパス計画推進室ホームページで提供している。

http://www.ofc.kyushu-u.ac.jp

造成基本計画の決定は，新聞，テレビなどマスコミでも大きく取り上げられた



新キャンパス・マスタープラン2001

新キャンパス・マスタープラン2001について

新キャンパス計画専門委員会委員長・副学長　矢田 俊文

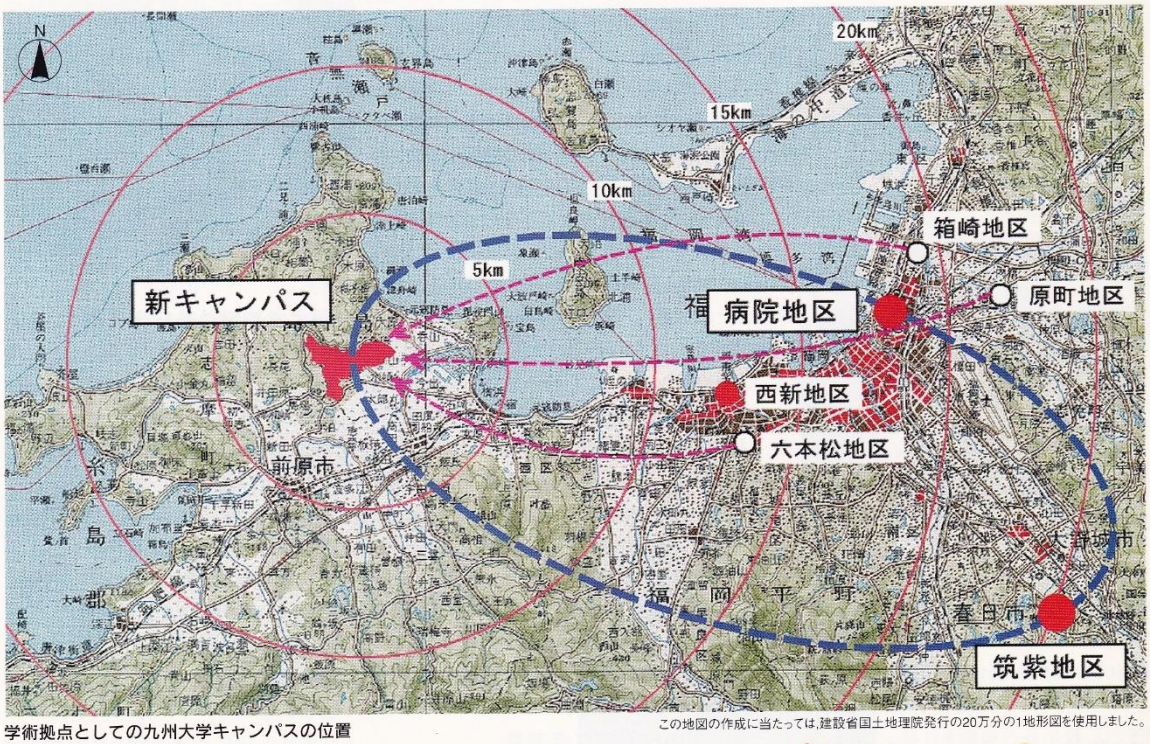
「大綱案」の理念を具体的に展開する

2001年3月1日の評議会で「新キャンパスのマスタープラン」が了承された。1999年4月にWTO政府調達協定に基づく公募型プロポーザル方式によって，選定委員会(委員長：渡辺定夫東京大学名誉教授)が設置され，活動を開始してからちょうど2年経過し，予定どおりの進捗である。99年8月の官報公示によって世界に向けて公募され，約3ケ月にわたる慎重な選考を経て11月30日に，三菱地所，シーザーペリ・アンド・アソシエーツ・ジャパン及び三島設計事務所の設計共同体(MCM)と正式に契約した。これによって，マスタープランの策定作業が本格化した。

すでに99年12月に発足していた「新キャンパスマスタープラン策定プロジェクトチーム」(委員長：矢田俊文副学長)とMCM設計共同体との共同作業が，「プロジェクトチーム」の中に置かれた「コアチーム」(責任者：出口敦大学院人間環境学研究院助教授)を核にして，かなりハードな日程で進められた。21世紀の九州大学の基本方向を定めた「九州大学の改革の大綱案」の理念を空間的に投影すること，特に大学院重点化による国際レベルの先端的学術・教育拠点の構築，学府・研究院制度の導入に伴う柔軟な組織編成に対応した空間構成の創造，及び多数の学内の専門研究者が参加した多様なワーキンググループやサブグループの検討結果を包括的にまとめた「新キャンパスの基本的考え方」(99年11月将来計画小委員会承認)をベースにすること，この2つの課題を前提に，都市計画，ランドスケープなどの専門的知見を十分に取り入れたプランづくりとなった。その成果は，2001年1月に全学に提案され，約1ケ月の学内審議のなかで出された多くの意見を取り入れて，冒頭に指摘したような最終決定となった。

マスタープラン 4つの重点

マスタープランは，「新キャンパスの将来像を九州大学全体で共有するための空間イメージを提示する」もので，「今後新キャンパス内の個々の施設等の計画，設計，建設を進めていく際に一つの方向性を示す目標像でもある」。その意味で，いわば今後の新キャンパスづくり



学術拠点としての九州大学キャンパスの位置

この地図の作成に当たっては，建設省国土地理院発行の20万分の1地形図を使用しました。

●：学術拠点を形成する地区　○：移転対象地区

特集 新キャンパス・マスタープラン2001【その1】

**新キャンパスづくりの「憲法」とも言うべき「マスタープラン」が策定されました。
九州大学の改革の理念を具体的に展開し,学際的教育・研究の時代にふさわしいキャンパスを形成することを
最大の課題とする「マスタープラン」の概要を,作成に携わった矢田副学長,出口助教授,坂井助教授に解説していただきます。**

の「憲法」とも位置づけられ,九州大学の統合移転事業は,新しい段階に入った。マスタープランの「全体計画目標」及び「全体計画方針と戦略」は,9点に集約されて第5章と第6章に述べられているが,次のような四つに大きく括ることができる。

1. 50年―100年を見通した広大で快適なキャンパスとなることに配慮し,有効敷地約141haを確保するとともに,これをアカデミック,運動,農場ゾーンに3分割した。さらに,アカデミックゾーンをイースト,センター,ウェストの3つに分け,これを東西の骨格軸である歩行者専用の「キャンパス・モール」と自動車用道路などの「動脈」で結合し,一体性の確保を行った。さらに,東と西の両端に広い拡張用地を確保するとともに,「動脈」沿いに東西に中規模の拡張用地として「未来のポテンシャル軸」を用意し,将来の発展に備えた。

2. 学府・研究院制度のもとでの自律的な変革に柔軟に対応できる空間構成とするため,土地・施設等の全学管理・運営を行うとともに,研究・教育活動の交流と競争を促す交流・連携空間や戦略的空間を確保した。また,南に連続する開放的オープンスペース群である「キャンパス・コモン」をつくり,「キャンパス・モール」とともに学生,教員,職員,訪問者の交流の場として活用する。

さらに,研究,教育・管理にIT(情報通信技術)を全面的に活用するとともに,象徴空間の創出,新交通システムやサインシステムの導入,バリアフリーな環境の形成,静寂な散策空間の整備や優れた眺望の確保,セキュリティシステムの導入や災害等の危機管理対応など,快適・安全・安心なキャンパスライフが送れる空間を整備する。



キャンパス・コモンのイメージ

3. キャンパスの入り口となる学園通りに面した空間に,産学連携と国際交流の拠点となる「タウン・オン・キャンパス」を戦略的に育成し,「大学の顔」とする。ここに総合研究博物館を核とするインフォメイション・センターやビジネス・センター,産学連携施設,国際交流施設群,生活支援サービス施設,居住・宿泊施設などを整備し,国内外からの研究者や学生,市民が集う地域と世界に開かれた機能を集積する。また,規制緩和の流れを活用して,寄附や民間資金を導入して施設の整備を図る。

4. エリア内に発見された貴重な遺跡群については,5つの前方後円墳,2つの中世山城,残りの良い石ケ元古墳群,製鉄遺構などについては現状保存とする。イーストゾーンの真ん中にある石ケ原前方後円墳については,未来を見据えた広い敷地の確保,アカデミックゾーンの一体性,開放性の確保の視点からやむをえず削平し,何らかの保存をする。

現状保存した遺跡群は,キャンパスの縁辺部にあり,自然緑地として残す。大原川上流の谷部も湧水があることから,一帯を「生物多様性保全ゾーン」として開発の対象からはずし,ここに,エリア内の貴重な生物を移すとともに,最新の方法を用いて開発エリアの樹木等の移植を行うなど自然生態系の維持に努める。

また,再利用水循環システムの導入による大規模な節水,廃棄物のリサイクル,風力発電など自然エネルギーの活用,パッシブ・システムの導入による省エネルギー,エコ・マテリアルの積極的開発と利用など,21世紀の地球環境問題の深刻化にチャレンジする斬新な科学技術の成果を取り入れた実験都市を構築する。

これによって,糸島地域の悠久の歴史と自然との共生を図る。

移転開始に向けて

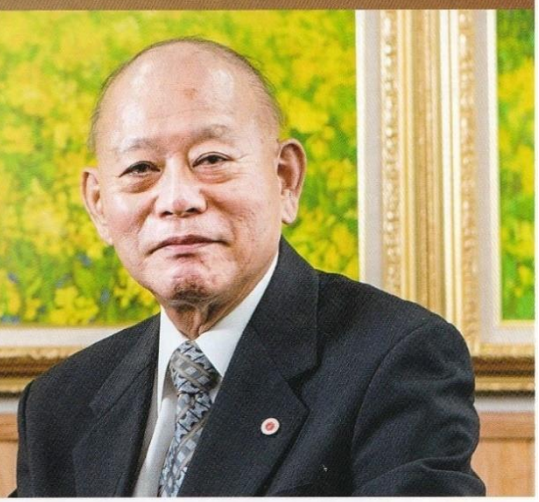
今後,各地区ごとに基本設計,施設設計,施設工事を進め,2005年の第1期移転開始を目指し,埋蔵文化財や生態系への配慮,水循環への慎重な対応,通学・通勤条件の改善,学生向け住宅の確保など諸課題に正面から取り組みつつ,移転に伴う研究・教育への障害を最小限にするため,計画通りの10年間で移転を完了するよう,全学の理解と協力のもとに一歩一歩統合移転事業を進めていくことになる。(やだ　としふみ)

3.4 梶山千里総長/有川節夫理事・副学長

九大広報, vol.112, p.3, 2018.10

歴代総長インタビュー ～伊都キャンパスにかけた想い～ 完成記念特集 1

激動の大学改革の中で、新しい九大づくり 大学内に居酒屋も誕生！



第21代九州大学総長
梶山 千里 任期／2001年～2008年
現 福岡女子大学理事長・学長

――梶山先生が第21代総長に就任されていた間は激動の時期ですね。

2003年の九州芸術工科大学との統合、2004年の法人化、2005年からの移転、2011年の創立百周年記念事業のスタート。大きな事が4つも重なったのですが、私は困難な事があればあるほどファイトが沸いてくる性格です(笑)。困難な時期こそ九州大学の変革のチャンスだと思いました。伊都キャンパスへの移転の主な理由は、研究環境の窮屈さと飛行機の騒音が挙げられます。将来はナノサイエンスやバイオサイエンスの重要性が高まると考えていましたが、研究装置はとても精密で、キャンパスの真上を飛行機が通過すると実験結果に影響が表われます。研究の質を高める意味でも、伊都キャンパスへの移転が必要でした。

――伊都キャンパスだからこそ出来る新しい研究があったのですね。

水素利用社会実現を見据え、伊都キャンパスはエネルギー科学技術の実証実験キャンパスとして整備しました。今では水素エネルギー研究に関する世界有数の拠点になっています。

――第一陣が伊都キャンパスに移った時は仮設食堂以外に飲食施設がなかったと聞きました。

そうなんです。だから居酒屋「九大あかでみっくらんたん」をつくりました。設置には、いろんな理由があります。「学生と教員の心の距離を近くすること」、「近隣の方々との交流の場にすること」また、周囲に娯楽が何もない状況だと、精神的に追い込まれてしまう人がおり、その予防のためでもありました。リラックスして親交を深められる場所にしたかったのです。人間関係も健康も、心と心の問題ですから。交流があれば支え合う関係が成り立ちます。

――地元の方々との交流を大切にしてこられたそうですね。

地元の方々が温かく迎え入れてくださり、年に数回の交流会を開催して糸島地区の郷土料理を味わっていました。移転対策協議会、元岡・桑原地区の方々や地元市会議員が集まり、いつも店に入りきれないほど盛況でした。交流の場をきっかけに大学側からきちんと研究や教育に関する情報を開示すること、地元の方々と大学の在り方を互いに理解し合うことが地域に根ざす教育の場の在り方だと考えるようになりました。



2006年1月「九大あかでみっくらんたん」で地元の方々と

――伊都キャンパスには新しい九大づくりの想いが随所に込められています。

そう。学府・研究院制度といって、学生と教員の組織を別にして新分野を編成しやすくしたのは九大が全国で最初です。建物自体も教育や研究の変革をしやすいよう設計されています。特にセンター地区を設計した建築家の黒川紀章さんとのやり取りは印象的でしたね。黒川さんは遊び心のある人ですからいろんな提案をされますが、何度も話し合いを重ね、大学の立場を伝え、センターゾーンの構想が完成しました。

建築の実例を挙げて、黒川さんに「複雑で分かりにくいものを造らないでほしい」と注文したのは私が初めてだと言われました(笑)。

――伊都キャンパスの完成で伝えたいこととは?

教育の質を高めるには最低5年から10年かかると言われています。移転は今後の百年を変える大きな契機となるでしょう。ただ、忘れてほしくないのは、箱崎キャンパスを支えてくださった箱崎の地元の方々への感謝です。創設当時は圃場地を提供し、キャンパス建設に協力してくれました。伊都キャンパスでも施設や設備を快く受け入れてくださった方も多数いらっしゃいます。「教育環境が整うのは、今も昔も地元の方々のおかげだ」という感謝だけは忘れてはいけません。

3.5 有川節夫総長/今泉勝巳理事・副学長

九大広報, vol.112, p.4, 2018.10



さあ、舞台は整った！ 支えてくださった方々の想いを次世代へ繋ぐ

第22代九州大学総長

有川 節夫

任期／2008年～2014年

現 放送大学学園理事長

――有川先生はキャンパス担当理事・副学長時代から総長時代も含めると13年間、心血を注いでこられました。

文部科学省をはじめ政財界や住民の方々など、キャンパス移転への理解を広く学内外からいただくことが最大の課題でした。理事・副学長として移転問題に深く関わっていたので、総長に推薦された時、この移転という難題を1日も早く解決しなければ、という切迫感をもって引き受けた次第です。

――伊都キャンパスを「未来社会の実証実験キャンパス」にしたいと言い続けていらっしゃいましたね。

伊都キャンパスは環境保全や遺跡の保存を徹底し、賞をいただくほど「自然との共生」や「歴史との共生」で特色あるキャンパスです。ですが、もう一つ重要と考えたのは、このキャンパスで「未来社会」を感じてもらうこと。まず、水素エネルギーとICカードの実証実験に取り組み、水素に関しては世界最先端の研究拠点となりました。ICカードについては、当時は交通カードがやっと使えるようになった時代でしたが、本学教授の発想によるレベルの違う認証、鍵、電子マネーなどを1枚に統一でき、進化するカードを伊都キャンパスで実現できました。学生・教職員に未来を感じてもらえたのではないかと思います。

――椎木講堂寄贈をはじめ、学外から多大なご支援をいただきました。

九大の卒業生ではない方たちから多大なご支援をいただけたのは本当にありがたいことです。椎木正和様からのご寄贈で椎木講堂ができました。あの規模の講堂は日本初です。また、麻生知事（当時）には西警察署を近くに移して治安を確保していただき、水素プロジェクトをさまざまな形で強力にサポートしていただきました。歴代福岡市長は、用地の先行取得をはじめ、主要幹線道路の整備、消防署の出張所や産学連携交流センターの設置など、種々の支援をしてくださいました。コミュニティミュージアム構想を一緒に描いていただいたこともありました。糸島市にも合併前からいろいろな支援をいただきました。JR九州の石原社長（当時）には、伊都キャンパスの周辺にまだ何もない時期に、「九大学研都市駅」という新駅をつくり、学研都市としての発展を先導していただきました。その他、多くの皆さんからのさまざまなご支援をいただきました。それらがなければ、伊都キャンパスは完成し得なかったでしょう。

――移転に関して、印象に残っていることは？

伊都キャンパスへの移転には、開始直前まで反対の人たちもいたのですが、六本松キャンパスを閉鎖するときに、卒業生、現役の学生、先生たちが参加して「ありがとう六本松」「ありがとう田島寮」というイベントを開いてくれたこと。皆さんの感謝の気持ちと未来への熱い想いが伝わりました。



2009年3月「青春群像さようなら六本松」男声合唱団コールアカデミーによる合唱

――多くの方々に支えられた新しい伊都キャンパスを、どのような場所だと捉えていますか。

「種をまく人」「水をやる人」「収穫する人」は別の方がいい。先代がまいた種に水をあげて育て、収穫した人々は、感謝して、次代のために新たな種をまいておく。大きな事業ほど、このような心構えが必要だと思います。伊都キャンパスは、歴代の関係者の想いを繋いでようやく完成した新しい舞台です。さあ、舞台は整いました。大いに羽ばたいて、学習や教育・研究、社会貢献に努め、次世代に繋いでいってください。

追記

有川節夫元総長（放送大学理事長, 当時）へのインタビューは、放送大学学園東京オフィスにおいて 2018 年 8 月 1 日（水）10:30-12:00 に。山縣由美子広報担当理事と坂井猛教授が担当した。インタビューの直後に、有川元総長から坂井宛にメモの送付を受けたので、原文のまま追記する。

****

九大広報１１２号「総長・歴代総長インタビュー」

放送大学学園東京オフィス

2018 年 8 月 1 日（水）10:30-12:00

⓪伊都キャンパスとの関わり

- 梶山総長時代の副学長、法人化後は理事・副学長として、キャンパス担当（13 年間、直接的に関わったことになる。）
- キャンパス問題の解決のために総長候補としての推薦を受諾したようなもの。（キャンパス問題がなければ、推薦を受諾することはなかった。梶山総長時代にキャンパス副学長（理事・副学長）として 7 年間担当し、この移転問題が尋常な問題ではないことを実感し、問題を熟知していたしていたから、渋々応じたわけである。）
- 基本は梶山総長時代の構想・計画に、自分の任期中に道筋をつけ、可能な限り短い期間で実現することであった。
- 最大の課題は、広範な関係者の理解を丁寧に得ること：
  学内教員、箱崎住民、移転先の住民、地元の政経済界、
  地元出身の中央の政財界、卒業生、
  文部科学省、財務・経営センター（経費・予算の確保）
- 地元の経済界に関しては、梶山総長の時までには、理解が得られておらず、九電の薬院にあった寮のようなところで、２、３回梶山総長に同行して、説明に行った。反対の主な理由は、大学が遠くなり、学生はバイトができなくなるということであった。私の方から、アメリカのイサカにあるコーネル大学のおかれている状況や、いまの学生は、昔の学生と違い勉強中心に学生生活を送る。天神など福岡の中心から通学しようとすると遠いと思うだろうが、キャンパス近くに住めばそうは感じない。福岡だって東京から見たら遠いし、不便だと東京の人は思うだろう。九大が創設された頃の箱崎の松原の中のキャンパスは、町外れで、文字通り「松原」しかなく、便利なところにあったわけではない。というようなことを話した。この演説は、説得力があり、その後は、移転事業に批判的な意見は出なくなった。
- 移転の学内としての決定は、高橋学長の最後の評議会（平成 3 年 10 月）であり、経費については、現在使っているキャンパスを売却すれは、新キャンパスの用地取得、造成、教育・研究棟の建設も可能ということで、本省の了解を得たものであったが、直後に、いわゆるバブルが弾け、算段が全く狂ってしまった。
- 評議会決定されたとはいえ、学内関係者の理解には温度差があった。予め使える予算が確保されているわけでもなく、その見通しもなかった。
- 梶山総長と私は、学内、政財界、地元関係者の理解を得ながら、一方で、予算の獲得、経費の算段に格闘してきた。
- 難しい課題から優先して解決に向けて努力する。
  問題が難しいと楽しい。梶山先生も私もそういう性格であった。難しければやり甲斐も生まれる。

- 100周年記念行事、大学改革、これら3つの大事業を一体化して解決する、という梶山総長の構想を実現する。
- 大事業を動かすためには、具体的で共有しやすい基本理念を掲げ、そこへ求心力を誘導し、そこから全ての課題の解決を図る。これにより方針がぶれず、一貫性、普遍性、説得力が生まれる。
- 国の特に文科省の委員や座長、委員長などは、なるべく引き受けた。直接的な効果・影響は、当然ないが、関係者には、こちらからの話をよく聞いてもられ、理解も得られた。

① 「自然との共生」や「歴史との共生」は、新ビャンパスの構想時代の杉岡総長（矢田副学長）時代の考えを踏襲したものである。

これらは、非常に大事だが、大学は同時に、常に未来志向でなければならない。そのためには、遺跡を中心にした歴史という時間、生態系・生物多様性保存を中心にした自然環境という空間を基軸にしながら、この新キャンパスでなければできない未来社会を実感できる具体的な事業を継続的に推進する必要がある。

それが、「未来社会の実証実験キャンパス」という考えだ。重要な点は、単に理念や理論、技術ではなく、「社会」という考えだ。エネルギーと情報という最重要なテーマを「社会」という面から考え、まず、水素エネルギーと多目的 IC カードを取り上げた。水素に関しては最先端のエネルギー科学として世界的な拠点が形成されたし、IC カードの方は、ID や認証、鍵、電子マネーとして機能するもので、使っているうちに進化するもので、近未来ではあるが、情報社会に具体的な方向を示した。

- 水素に関しては、村上敬宣教授の金属疲労の極みとしての水素の研究（科研費特別推進研究）から始まる次世代エネルギーとしての水素。ネガティブな面を極めている研究者が提唱する水素のポジティブな面。信頼感が高まる。学内の研究施設を作り、それで持って MEDO のセンターの伊都キャンパス内に設置を即断即決し、文科省の WPI に繋げていった。その間、福岡県は、前原市（当時）のインターチェンジのところへの水素関連の施設の整備へと続き、さらに発展することになり、水素研究の世界最先端の本格的な拠点が瞬く間に実現した。
- 九大 IC カードは、現在理事・副学長をしている安浦教授による発明である。先生は、20 年ほど前から、ことあるごとに「情報社会」という見方をされていたが、それが象徴的に感じられるのが IC カードである。利用資格が得られれば、自動的に供される施設に入室できる鍵になり、資格がなくなれば自動的に機能しなくなる。マネー機能も持つ。セキュリティーレベルの違う、マルティ機能を持つ、素晴らしいものである。

② 研究成果の社会還元を！新しいまちづくり「九州大学学術研究都市」コンセプトとしての「学研都市」は、筑波や「けいはんな」等の例が移転構想時からあり、それをうまく機能させるために、産官学で「九州大学学術研究都市推進協議会」という会議をつくり、組織としては、「九州大学学術研究都市推進機構」というのを作った。

- これらの構想は、杉岡総長（矢田副学長）の頃にできたもので、梶山総長時代に具体的な活動を始めた。実は、東京にも九大だけでなく、広く九州の発展に関心と理解のある政財界の有力者からなる「九州大学学術研究都市構想促進東京会議」というのもあり、キャンパス移転に関する東京の応援団とでもいうべきものが構成されていた。
- これらは、移転事業が土地の造成や合計 80 基ほどあった古墳を中心にした埋蔵文化財の調査、保存をはじめとする、基盤に関係した事業に多くの時間を割かざるを得ない状況下で、新キャンパスで展開され得る新しい先端科学技術に関するシンポジウムやフォーラムを開催するなどして、移転に関係した地元の産官学の関係者、政財界、住民の関心を引きつけ、保持するために貢献した。
- 九州大学と麻生知事が率いる福岡県が深く関係して展開した文科省の知的クラスター創生事業などの成果もあり、福岡に多くの企業が集積するようになってきた。新しい形の産学連携が始まった。一方、情報関連で

は、経団連の提案と協力のもで、ソフトウエア教育に関して、大学院レベル（システム情報科学府が対応）の産学連携の教育が展開され、高評価を得た。教育に関する産学連携の先駆けとも言える。

③　温かい支援をいただいた 100 周年記念事業、椎木講堂、亭々舎の実現

九大は、法人化と大学移転、100 周年を同時時期に迎える。「どの一つも文字通り 100 年に一度の大きな事業だが、これら三つ同時に考えると、むしろ千載一遇のチャンス」、というのが梶山総長の開き直ったとも言える考え方であった。そういうか基本的なスタンスがあるから、100 周年事業に関しては、他の大学では夢想だにできない新発想で取組まれた。これを引き継ぎ実現することが私の務めと心得て、フォローした。

- 椎木講堂　稼働率の高い、機能的な、新発想の講堂。寄付者の気持ちを重視、その中から斬新なアイディアが浮かんだ。寄付の規模、講堂の大きさ、構造、利用方法、管理方法すべて異例ずくめ。
- 亭々舎は、OB のボランティア活動に生協が乗って切れたもの。名前が引き継がれたことが、OB にとってはよかった。
- その前に、稲盛財団記念会館がある。100 周年記念事業のさきがけ、移転初期の唯一の研究集会所。梶山総長の功績。

④　伊都キャンパスへの思い、忘れられない思い出、感謝を伝えたい人々、これからの九州大学へのメッセージ

- 「ありがとう六本松！」「ありがとう田島寮！」「ありがとう箱崎！」既存キャンパスの閉鎖や学生寮の閉鎖に際しての、学生、教職員、OB の対応。「ありがとう」という表現に、安堵感と感慨をおぼえた。そのような表現のできる関係者への感謝の気持ちを強くした。
- 福岡県の麻生知事にはあらゆる点でお世話とご理解をいただいた。迅速な決定・判断、強いリーダシップに敬服してきた。水素、産官学連携、キャンパス周辺の開発に関連した関係機関への対応・指示。西警察署の移転、インフラ整備へ指導性。
- 福岡市の歴代市長はじめ皆さんにも、キャンパス用地の先行取得、幹線道路の整備、消防署出張所、産学連携総合センターの開設など。
- 現在の糸島市、合併前の前原市、志摩町、二丈町の市長、町長。
- JR 九州の社長・会長には、まだ、背高泡立草しか生えていない所に「九大学研都市」の名を冠した新駅の開設していただいた。マンションの開発も。
- 経済界からは、大型ショッピングモールの開店。その他実に多くの方々に伊都新キャンパス開発の事業に弾みをつけるご理解ご支援ご協力をいただいた。
- 第一陣の移転に関しては、工学部・工学府、工学研究院のみなさんには、先発隊としてご苦労かけ、不自由な思いをしていただいた。食堂もまだピィロティーの中に作った屋台のようなものしかないキャンパスであった。
- 学内の施設・財務系の部長以下職員の皆さん。長期にわたる大型プロジェクトにも関わらず、当然といえば当然のことであるが、いかなる不正・不祥事も起こさなかった。企画の統合移転推進室の皆さん（関係者との粘り強い交渉、説明、一貫した真摯な姿勢で、関係者の理解が得られた。）
- ネガティブと思えるものも、例えば、仕訳作業でさえも、ポジティブに考えさせていただいた。
- 図書館の複雑な移転

  目録カードの電子化（遡及入力）大作戦

  杉岡総長・矢田・柴田副学長の理解、図書館職員の献身

  （牽引移転の期間中、学生に不自由な思いをさせないように、職員と一緒になって考えてきた。）

- 図書館長として、目録データの遡及入力作戦、6,000 万円 x5 年の事業を大学として認めてもらった。これにより、移転に伴う図書の所在情報に関する混乱が起こらず、図書館のスムースな移転が可能になった。大規模大学の図書館では初めてのこと。この経費は、その後、減額はされたが、図書資料の電子化の経費として存続している。
- なお、事業の重要性を大学本部はじめ各方面に理解してもらうために、図書カードのイメージ化と検索システムをゼミの学生の卒業テーマとして、研究開発したが、意外なことに、特に、文系の人に評価してもらった。
- 学生第一：「学生がいるから大学」、「学習・教育・研究」という考え。図書館、寮、グラウンド、部活、教室他、学生には不自由な思いはさせない。
- 移転順序の変更(梶山総長時代)、六本松の一部を一旦箱崎に移転させ、その後、伊都へ、という順序を変更して、六本松を一気に伊都へ移転させたが、これには、反対が多かった。しかし、評議会でしっかり理解してもらえた。移転の期間中の混乱を避けるためには、ベストなやり方であった。
- 用地の再取得：福岡市の土地開発公社から銀行からお金を借りて移転予定地を全て先行取得してもらった。銀行利子も土地代金に跳ね返ってくるので、国などから資金を得て、できるだけ早く再取得（九大のものに）する必要があった。様々な工夫して、涙ぐましいほどの努力をした。ジグソウパズルのピースを 1 枚ずつ丹念に埋めるような作業であった。用地の再取得が完了した時は、（利子を払わずに済むという）安堵感に浸った。
- いろんな制約条件のもとで、建築設計の側からではなく、100 年経っても飽きない、使い勝手の良さ（機能美）を一貫して主張し、追求してきた。
- 数理と情報の密な連携。
- サイバーセキュリティなどの全学リテラシー教育の効果的な効率的な実践。
- 図書館の上に研究室を作りたい、という人文系の先生方の希望は、キャンパスの地形、高低差をうまく使って実現できた。デジタルコンテンツと紙媒体の効果的なり活用。
- 考古学研究者によるごく自然な文理融合的研究開発。

- 農学部は、圃場の多くがオンサイトにある、理想的な教育研究施設ができた。昆虫はじめ農学部関者が約 1 世紀に渡って培ってきた、知見や思いが、全く新しいイノベーションを起こそうとしている。

✓ 種子を蒔く人、水をやる人、収穫する人は別な人である方がいい。全てを自分でやろうとすると発想がこじんまりとしたものになる。

✓ 収穫した人は新たな種子を蒔く。種子が蒔いてあったら、しっかり水かけを行う。こうして、次の世代に繋いで行くことという考えが大事

✧ さあ、これですべての舞台は整った。それぞれの舞台、持ち場で、努力して輝かしい成果を出して欲しい。

****

3. 6 久保千春総長/安浦寛人理事・副学長

九大広報, vol.112, p.6, 2018.10



九州大学 伊都キャンパスの完成とこれから

第23代九州大学総長 任期／2014年～
久保 千春

はじめに

九州大学伊都キャンパスが完成いたしました。これまで移転をご支援いただいた多くの皆さまのご理解とご協力によるものであり、心より感謝申し上げます。

1991年10月に移転を決定して以来、27年が経過しました。6代の総長に渡り、伊都キャンパスへの移転事業は成されました。伊都キャンパスへの移転は第1ステージとして2005年の工学系から始まりました。2009年には第2ステージとして旧六本松キャンパスから全学教育、比較社会文化研究院および言語文化研究院が、2015年には第3ステージとして理学系が移転し、2018年になって人文社会科学系、農学系が移転して、移転対象となった全ての部局の移転が完了しました。

九州大学は、次の百年に向けて「躍進百大」、すなわち、全ての分野において世界のトップ百大学に躍進する、というスローガンを掲げ、「自律的に改革を続け、教育の質を国際的に保証するとともに、常に未来の課題に挑戦する活力に満ちた最高水準の研究教育拠点となる」ことを目指しています。予定していた部局の学生と教職員が全て伊都キャンパスに集まり、次の百年に向けた舞台づくりが整いました。

施設建設と地域交流

伊都キャンパスは、豊かな自然環境に恵まれた広大な丘陵であり、里山の風景や美しい海岸線が広がります。施設は延べ床面積約51万㎡になります。キャンパス周辺の街づくりは日に日に進んでおり、勉学・研究にいそしむには素晴らしい環境です。

また、2011年の創立百周年には稲盛財団から稲盛財団記念館、椎木正和様から椎木講堂などをご寄贈をいただき、立派な施設が利用できるようになりました。

さらに、地域の皆さまには九州大学を温かく迎えていただきました。今後も、地元を中心として産業界や自治体と協力し、大学の資源と地域の資源を相互に利活用しながら、より強固な関係を築いてまいります。

箱崎、六本松の皆さまには、大学の設置以来、これまで長年に渡ってご支援をいただいたことに、御礼申し上げます。六本松では、福岡高等裁判所、福岡地方裁判所等が移転して業務を開始し、本学の法科大学院、福岡市科学館などとともに新しい六本松の歴史をスタートさせています。箱崎キャンパスでは、跡地利用協議会で議論を重ね、福岡市などと綿密に連携してグランドデザインを策定しており、これを踏まえて着実に跡地再開発を推進してまいります。

九州大学のこれから

九州大学の重点的な取り組みとして、エネルギー研究教育機構によるイノベーションの創出、新学部である共創学部の設置によるグローバルに活躍する人材の育成、人文社会科学分野などの再編成・機能強化による九州大学のさらなる活性化を目指しています。さらに、超スマート社会をにらんだ自動運転バスや水素をはじめとする次世代エネルギーなどの実証実験の場として、さまざまな取り組みを行っています。

伊都に完成したこの新しい未来型キャンパスを核として、研究、教育、産学官連携を発展させ、常に未来の課題に挑戦する大学であり続けたいと思います。皆さまのご支援をよろしくお願い申し上げます。

3.7 渡邉定夫 マスター・アーキテクト委員会委員長

東京大学名誉教授



日時：2022 年 2 月 22 日（火）

場所：オンライン（Zoom）

聞き手：坂井猛 （九州大学キャンパス計画室教授・副室長）

――ご無沙汰しています。渡邉先生は、その後お変わりなくお元気に見えます。
コロナでお会いできなくなりましたね。今日は佐賀大学のイベントでこちら佐賀大学に来ています。映像でこうやってお会いできてよかったですね。君たちと一度、キャンパスと周辺のこれからについて、議論したいと思っていました。

■生活環境の整備

――はい、ありがとうございます。移転が完了して 3 年が過ぎました。学生用の住まいについては、移転前には全くなかった学生用のマンションが、キャンパスとその周辺でようやく 1 万戸を超えました。まずは、学生の生活環境についてご意見をお聞かせください。

大学内と周辺の住まいの整備は、留学生や外国人研究者が増えていくので気をつけておく必要があります。キャンパスを使うことも考えておかなければならないでしょう。このことについて、今度、現地を見ながら意見を言いたいと思っています。

――了解しました。さらに今年度はキャンパスに隣接する九大新町で約 500 戸が新規に整備されますので、ようやく学生が住戸を選択して住めるようになってきました。供給側の事業者には少しご迷惑をかけますが、サービスの充実を期待しているところです。

昔からお話ししているように、大学はデベロッパーの素養を持つ必要があります。キャンパスだけでなく周辺まで巻き込んでやれると思う。

――キャンパス周辺では、コアゾーンと呼ぶエリアで開発が始まっています。学園通り線では、ダイハツ九州の土地をダイワハウスが再取得し、学生用の住戸と蔦屋などの店舗を準備中です。九州大学でデベロッパーの働きはできていませんが、学生教職員のアンケートを基にしたニーズを自治体や民間事業者の団体に伝え要望することを継続しており、今回の開発も大学から福岡市に言い続けたことの成果です。「研究所用地が帰り道の左手にあるが、真っ暗でさびしい。研究所は道路沿いにある必要はなく奥でも構わないと思う。むしろ、学生のアンケートで要望されているようなスーパーなどの商業系に立地してほしい。」と私たちが言っていたことを、九州大学学術研究都市推進機 OPACK が福岡市経済振興文化局に中継していただき実現しました。元岡の旧集落では、中心部にある浜地酒造が酒蔵再生を進めておられるのを大学が支援していますし、さらに、糸島市では西側の雑木林を開発して民間の研究所や戸建て、中層の集合住宅団地を収容する区画整理を準備中です。大学周辺の力の入れ方を教えていただいた方向に向けて、少しずつまちづくりも進んできました。

■伊都キャンパス周辺の交通

交通は、今はバスが走っているようですが、それに軌道系開発が加わることによって、まちのつくり方自体が変わってき

ます。地下鉄やJR延伸などの動きがあれば進むことになりますね。JR九州の石井幸孝（いしいよしたか, 1932-）初代社長は、大学の同級生だったこともあり彼にも相談したが、当時は、軌道系の路線をキャンパスまで検討したいと言っていた。その後はどんな感じですか。

――現在は、最寄りの九大学研都市駅からキャンパスまで 4 ㎞の輸送を昭和バスが引き受けてくれています。大学からの補助がなくなったために、移転当初は片道 100 円だったのが片道 300 円になり、沿線市街地に住む多くの学生は、バスに乗らなくなり自転車を使っています。学生は入れ替わっていくので、新しい学生が再び公共交通に乗るような手立てを考えておく必要があると思われます。軌道系もその一つとして、継続して働きかけてきましたが、JR 九州をはじめとする事業者は、現時点では採算性がうまくとれないことから軌道系の導入を考えていただくことができません。学内では AI 運行バスを始めており、これが市内にでまわって渋滞を解消するようなことになれば解決策の一部になると思われますが、軌道系公共交通の輸送力にはかないません。

■次の時代のキャンパス整備と景観

――遠い将来に、伊都キャンパスの施設群も老朽化し、建て替え更新が課題になる時期が来ます。その時に考えておかなければならないことをお伺いしたいのですがよろしいでしょうか。

基本的には現役の人たちが考えることですが、東京大学本郷のキャンパス整備に携わったときは、樹木との関係を考えていました。本郷に植えているイチョウは 20m 前後なので、建物はそれと同じかやや超えて見えてくる位に高さを設定しています。樹木との関係などを取り入れて考えると、バランスの良いところが見つかる。伊都の場合も同じようなことを考えると良いと言っていましたね。また、今後もこのことを考えるべきだと思いますね。

――伊都キャンパスに植えている樹木は現在 10m 前後です。成長すれば 20m 前後になるアメリカフウなどですが、生育状況を見ていると、土壌が良くないためにまだそこまで育っていません。現在 10 階程度の建物をウエストゾーンに並べていますが、樹木よりずいぶん高く収まっています。

むしろ、キャンパス内に残された保全緑地の山との関係、周辺の山の緑と良いバランスをとっていたのではないかと思います。そうした緑との関係をしっかりコントロールすることは重要ではないでしょうかね。

――マスタープラン 2001 で設定した東の山と西の山を繋ぐラインから極端に建物が飛び出ないルールは、渡辺先生のご指導のおかげでなんとか完成まで維持して実現できました。今後、世代が更新して人が変わると、高い建物を建設することを望む人が出てくるかもしれません。予防線をどう貼っておくかは必要なことなのかもしれません。

あまり高層建物は建てずに、縦の上下方向の移動をなるべく抑え、横に動く動線を充実したほうが、コミュニケーションや学際の誘発や効率の面でも良いのだと思います。キャンパスは都市の縮図とも見ることができるけれども、市街地でも同じことが言えると思います。

■馬出地区の大学病院について

故杉岡洋一先生が総長の時、「病院は現地再開発するので新キャンパスには行きません」とおっしゃっていましたが、その後、病院の一部が伊都に来たのですか。

――久保前総長のときにセンター地区に診療所をつくっていただきました。学内の教職員はもちろん、地域住民も診療しています。

そうですか。全体の医療のことを考えると、さらに必要なのかもしれませんね。キャンパスは、そうした、都市で必要な機能や学生の住まいなどをよく考えてつくっていく必要がありますね。

――伊都キャンパスには学部規模の拡張用地を東と西に設けていますので、将来もし必要になれば活用できると思います。

■大橋キャンパス

――九州大学も新しい体制になって、新執行部の下で様々な新しいことをはじめています。キャンパス計画では、大橋キャンパスのマスタープランを始めたところです。大橋キャンパスはまとまっていて、西鉄大橋駅からキャンパスへ向かう軸がキャンパスを突っ切り、広場を囲むかたちのいわゆる「香山プラン」を踏襲しています。低年次教育を伊都でまとめてやるようになったので、運動場を戦略的に活用するゾーニングでまとめているところです。さらに、芸術工学の先生が中心になってキャンパスの近くを流れる那珂川周辺の企業をいれたまちづくりを進めようとしており、新しい動きが始まっています。

芸術工学の先生方は都心部から離れたくないでしょうが、是非よいキャンパスのつくり方を検討してください。

■都市計画学会賞

――渡邉先生から都市計画学会賞計画設計賞にご推薦いただき、受賞することができました。感謝申し上げます。コロナのために、まだ渡邉先生とのお祝いができておりません。イベントなどの体制を整えますので、コロナが明けたらぜひもう一度こちらにいらしていただきますよう。

そうですか。楽しみにしていますので、その時には声をかけてください。

注記

渡邉先生より返信を受けましたので、原文のまま追記します。

****

2022/02/24 (木) 14:36

坂井先生：オンラインでしたが、久しぶりにお目に掛かれ有難うございました。海外の大学都市を見ると、大学は教育研究の拠点であるばかりでないことが解ります。それは、大学が研究開発を通じて多くの関連産業と連携しその中核として機能していることです。又、教職員、特に多くの学生を擁し、彼らの居住地域を創り経営して居ます。謂わば、大学はそうした都市空間を開発整備する事業主体でもあります。大学にはそうしたデベロッパー事業担当の副学長もいる位です。これからの我が国大学には多くの海外留学生を受け入れる役割があります。

学生が学び居住する施設整備が喫緊の課題です。所謂学生街は単に学寮群だけではなく生活に必要な都市施設が含まれます。簡単に言えば、キャンパスは都市の中枢部の機能と居住機能を併せ持った都市整備が必要です。こうした大学都市づくりを現キャンパス内外で進める整備構想を是非進めて下さい。内外の研究者、留学生を含め大学都市は国際都市の性格を発揮する事でしょう。お会い出来る機会を楽しみにして居ます。渡邉定夫

****

謝辞

本稿は、佐賀大学主催のイベントのために佐賀大を訪問中の渡邉先生との ZOOM 対話をヒアリング形式に編集したものである。対話の実現にあたっては、佐賀大学三島伸雄教授によるところが大きい。三島教授は、東京大学工学部都市工学科渡邉定夫研究室の卒業生。九州大学新キャンパス・マスタープラン 2001 のコンサルタントの構成メンバーであった故三島庄一氏・三島設計事務所長の御子息でもある。謝意を申し上げる次第です。(坂井)

渡邉定夫(わたなべさだお，1932 年-)：日本の都市計画家。東京大学名誉教授。都市工学科で、アーバンデザインの指導及び実践、人材育成を担った。工学博士。東京生まれ。地方都市と大学立地に関する一連の研究で日本都市計画学会論文賞、日本建築学会賞論文賞を受賞。九州大学では、新キャンパス・マスタープランの建設コンサルタント選定委員会委員長、総長諮問機関のマスター・アーキテクト委員会委員長を 2018 年まで務める。

3.8 特別対談（渡邉定夫×安浦寛人）九大広報, vol.112, pp.7-10, 2018.10



副委員長

安浦 × 寛人

【九州大学 キャンパス移転・整備担当 理事・副学長】

1978年京都大学大学院工学研究科修了。1991年九州大学大学院総合理工学研究科情報システム学専攻教授に就任。2008年10月より九州大学理事・副学長。現在は、キャンパス移転・整備、情報、情報公開担当。専門は、情報工学。福岡アジア都市研究所理事長を兼務。

した。一緒にプロジェクトを進めていたこともあり、一カ所に集まって研究するのに、移転はちょうどいいタイミングだと思いました。

――伊都キャンパスの移転のメリットとは一体何でしょうか。

安浦　自然、歴史と共生できることです。糸島は古くから栄えている場所で、古墳や遺跡もあります。そんな中で、21世紀の新しい街づくりの事例として2万人が通うキャンパスを環境に配慮しながら、開発ができたのはすばらしいことだと思います。21世紀初の大規模な国立大学の移転にふさわしいキャンパスが出来たのではないかと感じています。渡邉先生は、新しい伊都キャンパスの建設時にどのようなことに注目しておられたのでしょうか。

渡邉　伊都キャンパスは、従来の校門があり、周りに塀があるような構内型のキャンパスではありませんね。自然と調和し、開かれたキャンパスとして、私はキャンパス内を歩く人と建物との関係をどのように位置づけるのかを考えました。人の視野に入るのは地表から十数メートルです。この壁面に関しては、歩行者のことを考えて造ってほしいと建築家の皆さんに強くお願いした覚えがあります。

もう一つ、建物の中に人工的な「外」つまり、吹き抜け空間を連続して造りました。この東西に長い施設の低層部に連続する「吹き抜け」のデザインは、伊都キャンパスの建物群の一つの特徴です。学生たちが複数の施設を行き来し、身体的に自由に移動することで、他の分野を自然なかたちで見ることができ、オープンで枠にとらわれない考え方が身につくことを狙ったものです。

安浦　「枠にとらわれない」ということで言うと、伊都キャンパスはどの学問分野も繋がりやすい環境を実現したと感じます。これまでの大学では、ひとつ屋根の下で異なる分野の研究を進めるのは、特別なケースでした。伊都キャンパスでは建物を学部や学科で分けることはせず、工学系、生物系、化学系、情報系などさまざまな分野を研究する学生や職員が同じ建物で共存しています。つまり、伊都キャンパス全体が相互に乗り入れする新しいスタイルの学問に対応しやすくなっているのです。例えば、第4の科学的手法と言われるデータサイエンスは、工学、生物学だけでなく人文社会科学でも使われます。このような時代に応じた分野横断的な研究がまさに伊都キャンパスで始まろうとしています。

渡邉　安浦理事がおっしゃるように、オープンな空間であるからこそお互いに協力し、刺激し合いながら研究室の関係も生まれていますよね。新しい研究者同士の関係をキャンパスがつくったと言ってもいいでしょう。良い作用が生まれることを大いに期待しています。

完成記念特集 2

伊都キャンパス完成記念 特別対談

自然と共生し、創造する伊都キャンパスへ馳せる想い

1991年10月に新キャンパス移転構想案が承認され、27年が経過しました。今年9月末にようやく伊都キャンパスの移転が完了します。新キャンパス・マスター・アーキテクト委員会委員長として17年間、新キャンパスの建設を監修してこられた渡邉定夫東京名誉教授をお招きし、安浦寛人キャンパス移転・整備担当理事・副学長とともに、今までを振り返り、キャンパスへの展望を語っていただきました。（聞き手：坂井 猛 キャンパス計画室教授）



委員長
新キャンパス・マスター・アーキテクト委員会
渡邉 定夫
【東京大学 名誉教授】

1956年東京大学工学部建築学科卒業。1984年東京大学都市工学科教授に就任。専門は都市計画、都市設計。1993年東京大学を退官。同大学名誉教授。日立駅前計画、幕張ベイタウンのデザインなどを指導。1985年日本都市計画学会論文賞、1988年日本都市計画学会設計賞、日本建築学会論文賞。著書に「アーバンデザインの現代的展望」、「新しい都市居住の空間」ほか。

自然、歴史と共生するキャンパスへ

――九州大学の新キャンパス計画をお聞きなって、まず何を感じましたか。

渡邉 キャンパス計画をどのように組み立てるのか、当時から関心がありました。戦後の大学は師範学校や高等専門学校、単科大学などをまとめて各地方に総合的な大学を作ろうという国の政策があり、私も関わっていたからです。九州大学の移転で、新しい世代に合わせた大学へ変わっていく過程を見られるのだと興味を持った覚えがあります。

安浦 当時は総合理工学研究科の情報システム学専攻で筑紫キャンパスに勤務していました。自分は移転の対象外だと思っていたら、大学院重点化が進み、教育研究組織を再構成することになり、工学系の電気情報系と情報理学の研究者たちと合併してシステム情報科学研究科が発足しま

交通機関や居住環境を見直し、充実した「大学街（まち）」へ

――伊都キャンパスの移転を終えて、今後の展望をお聞かせください。

渡邉　大学は都市の成長拠点の一つです。九州大学は福岡市・糸島市の大事な成長拠点でもあるので、都市との一体化を図るべきなのです。まずはマス　トランジットの問題が出てきます。ずっと大学キャンパスとJR・地下鉄との関係を懸念していました。都市の成長拠点であるなら、交通機関で結ばれていないと福岡市にとってもマイナスです。大学が「新しい知識創造の場」として、また、グローバル対応のポテンシャルの高さから「国際交流の拠点」として重要な場所であることを、行政や経済界の方に再認識してもらい、改めて大学との一体化を考えていただけるよう訴えてほしいですね。

安浦　大学周辺の生活環境も重要だと思います。生鮮食料品を購入できるスーパーマーケットや、お酒が飲めるお店も必要です。勉強ばかりではなく、例えば「居酒屋で隣に座っていたおじさんと話してみると、ある分野の大家だった」といった思いがけない出会いや経験も大切です。そういう環境を大学の街は持つべきですよね。それができるようなキャンパスの内側、外側の整備を考えていきたいと思います。また、渡邉先生がおっしゃるように都心とのコネクションの問題は重要で、引き続き取り組んでいきたいと思っています。



渡邉　学生が住む、居住環境としてはどうでしょうか。地形に沿う連なった教育施設群、研究施設群、そして周辺の自然環境。そこに、留学生を含めた学生の居住空間を並行して設置できないか。次のマスタープランとして、ぜひ検討をお願いしたい。

安浦　はい、学生の住居の整備は引き続き行っていく予定です。今は、主に大学の周辺に住むのは学生ですが、教員たちにも近くに住んでほしいですね。学研都市駅に続く道沿いには学生用のアパートが多く建てられています。奥の桑原地区はまだほとんど開発されていません。私は、今の里山の風景を残しながら高級住宅街にしてほしいと思っています。学生が、「今は元岡に住んでいるが、将来自分も教授になったら桑原の高級住宅街に住みたい」と思うような憧れの場所になればおもしろいと思いませんか。これは個人的な希望ですが、本当の意味での「大学街（まち）」にしていきたいのです。

渡邉　キャンパスはもともと、新しい知識を学び、ものの考え方を勉強する学生が集まるための場です。学生の要望に応えるために「研究開発の拠点」が必要になります。そこは創造していく場でもあります。同時に「学生の居住の空間」でもある。この2つの意味が大きい。九州大学の移転はこの2つが同時にかなう場所になるのだと捉えています。



椎木講堂ロビーにて　右から渡邉委員長、安浦副委員長、坂井教授

繋がっているからこそ 学生や教員同士で刺激し合える



――全ての施設が直線的に繋がっていることで、多分野が融合しやすくなっていますね。

安浦　さらに大切な事は、すべての教員室のドアをガラス張りにしたこと。基本的には隣の研究室や、別の階でも、違う分野の学生や教員が室内で何をしているのか分かるようにしています。ウエスト2号館の10階は足元から天井まで全てガラス張りです。どんな実験やディスカッションをしているのかが分かるよう、オープンな環境を作っています。大学改革が進み、小講座制からさまざまな専門の教員が所属する大講座制に移行して准教授や助教も同じ立場でひとりの研究者と見なされる時代になっています。プロジェクト別にいろんな教員が集まる際にも、オープンな空間だと進めやすいですよね。

渡邉　以前は囲い込むことで専門性を見出そうとしていましたからね。

安浦　九州大学は杉岡総長時代に全国で初めて「学府・研究院制度」を導入し、大学院の研究・教育組織である「研究科」を、大学院の教育組織としての「学府」と、教員の所属する研究組織である「研究院」とに分離することで相互に柔軟な連携を図りながら、それぞれの必要に応じて独自に再編できるようにしたんです。

渡邉　今のようなお話を初めて聞いたときは「そんなことがあり得るのか」と思っていました。どうやって型にはまらず自由に動ける仕組みを取り入れ、他分野の人たちと関わっていくのか、対応に悩んだ記憶があります。その答えの一つが吹き抜け空間だったように思いますね。

安浦　伊都キャンパスの複数の施設は、ユニバーサル・レベルによって一つに繋がっています。研究チームやプロジェクトの規模が大きくなり、部屋が足りなくなったら新しいスペースを割り当てればいい。小さくなったら部屋は余るので回収すればいい。キャンパス全体でスペースを最適に活用するという一つのチャレンジを、伊都キャンパスでは実施できているのです。しかし、課題もあります。十数年間で一気に建てたことで、将来のメンテナンスの負担が大きいと思っています。20年後には中小規模の改修、40年後には大規模改修の需要が一斉に起こります。また、大きな吹き抜け空間の空調を維持するために、研究している太陽光、水素、風力、地熱などの自然エネルギーをうまく取り込めないかと考えています。キャンパス自体が新しい街、都市づくりのための「新しい実験場」であり、解決するための研究テーマを与えてくれます。新しい研究分野を生み、若い人材が課題を持って、自分たちで解決していく。外との壁も内での壁もない。このキャンパスの在り方は、今までの日本の大学キャンパスの考え方を大きく変えていくでしょう。



連続する吹き抜け空間が特徴的なキャンパス

3.9 出口 敦 コアチーム長

東京大学 大学院新領域創成科学研究科長・教授



日時：２０２２年9月２３日（金）
場所：オンライン
聞き手：坂井猛　（九州大学キャンパス計画室教授）
萩原望、孟柱燦、張煜嘉（大学院人間環境学府修士課程）

出口敦先生は都市計画が専門であり、九州大学新キャンパス計画専門委員会マスタープラン策定コアチーム長、イーストセンターゾーン WG 長、キャンパス計画室員を務められました。また、東京大学に異動されてからも、マスター・アーキテクト委員として、完成まで大所高所から九州大学のキャンパス計画をみていただきました。（坂井）

■キャンパス計画へのかかわり

――――まず、当時のことをお聞かせください。伊都キャンパスの建設にどのような立場で関わられましたか。

九州大学には 1993 年に工学部建築学科の助教授として着任しました。同時に坂井猛先生が助手に着任され、坂井先生はしばらくして新キャンパス計画推進室設置とともに同室に移られました。当時、「新キャンパス」と呼んでいましたが、福岡市、前原市、志摩町の 3 市町にまたがる用地へのキャンパス移転が決まったばかりでした。私の周囲では、工学部長の國武豊喜先生、土木計画の樗木武先生、都市計画の萩島哲先生、建築計画学の竹下輝和先生などが構想の検討をはじめておられました。

■関わるようになったきっかけ

私がお手伝いするようになった最初は、キャンパス用地の周辺をリサーチパークにするための構想をつくることでした。工学部長の太田俊昭先生が主導され、工学部内にワーキンググループを設置し、組織されたときに座長を務めました。関西学研都市に視察に行くなどして、リサーチパーク構想検討の取りまとめ役をしました。当時、工学部助教授だった麻生茂先生、安澤幸隆先生らをして、未来型キャンパスの構想づくりに関わったのが最初でした。

そのあと、竹下輝和先生に連れられて、杉岡洋一総長から相談を受けることになりました。杉岡総長はご自身が総長に着任された直後で、既に移転対象候補だった馬出の病院地区は、再開発することに変更されておりましたが、箱崎の移転に関する選択肢を検討され、移転以外の選択肢はないと結論づけられていました。杉岡総長は、それ以上の変更はないと判断をしたうえで、世界一の新キャンパスをつくろうということをお考えになったのです。

■土地造成の課題

では、用地が決まっている中で、どのように世界一のキャンパスを形づくるのかという課題になりますが、当時、既に先行して進められていた丘陵地の土地造成への対応が最大の課題でした。地域住民の所有する山林を福岡市土地開発公社が購入して造成した後の土地を九州大学が購入するという事業スキームが決まっておりましたが、当時、埋蔵文化財、自然保護、近隣対策などの課題が噴出しており、これらの問題の全てが土地造成の条件に絡んでいました。最初は樗木武先生、次に萩島哲先生、そして竹下輝和先生が、それぞれ造成計画案をつくられてきました。造成時に土を切り盛りしますが、土を極力キャンパスの用地外に出さないように敷地内の埋め立てに使用し、敷地内で切土量と盛土量のバランスをとることが求められ、大きな制約条件となっていました。その一方で、大学キャンパスとして土地を使い易くするために、造成後の敷地内の傾斜を緩くし、平坦な土地を創出することも求められました。結果的には、敷地内の道路勾配を 5%以

内とする条件が加えられ、そうした条件の下、私が担当するまでの間に、教授の先生方それぞれによる造成案が数次にわたってつくられてきており、矢田俊文副学長（新キャンパス計画専門委員会委員長・新キャンパス計画推進室長）の下、新キャンパス計画推進室に配属された坂井猛助教授、鶴崎直樹助手がそれを手伝っていました。

切土の造成から出た土量を谷地を埋めるために使用するのが造成の土量をバランスさせるためには必要ですが、生態系や湧水地の保全などの理由から谷地を保全する動きが出てきました。谷地を埋める替わりの一つの代替案として、イーストゾーンとウエストゾーンの間を切土で埋めて、学園通り線をトンネルにする案もありました。私がコアチーム長に着任した頃も、しばらく造成の課題への対応が続いていましたが、結果的に現在の生物多様性保全ゾーンの谷を保存することになりました。また、埋蔵文化財の調査の進展により、前方後円墳に加え、円墳が多数発見され、発掘調査が進められている中で、埋蔵文化財の保全の観点からの造成への対応についての検討も進められました。

■マスタープランの作成へ

1998 年より前の当時、執行部の頭には造成計画が先にあり、その上で配置計画を含むマスタープランを検討するという考え方の順番が念頭にありました。そのため、何よりも先行して造成の話がなされてきていたと思います。そこへ施設部に新たに着任した担当課長が、「マスタープランがまず先にあるべきではないか」と問題提起し、土量バランスを重視した造成計画が先にありきだった考え方が、まずは諸条件を勘案したあるべき最良の姿のマスタープランをつくり、それと並行、もしくはそのプランの下で造成計画を考えるべきという方向に修正されていきました。

■アメリカ、カナダの大学の調査

私自身は 1997～1998 年に米国 MIT に客員として 1 年間滞在しておりましたが、米国滞在中に矢田俊文副学長、坂井猛助教授と本部事務の一行が大学キャンパスの視察調査にお越しになり、ハーバード大学、コーネル大学、サイモンフレーザー大学、ササキアソシエイツなどの視察調査に同行させて頂きました。この視察調査は、私たちにとってかなり衝撃的でした。まず、マスタープランをつくることが重視されており、私達の考え方を確認する機会になりました。また、「大学キャンパスで重要なことは、“フード”と“スポーツ”である」と言っていたことが印象的でした。カフェ、バー、レストランで飲食し議論することで、大学のコミュニティが成り立っていました。日本では、生協食堂と床屋くらいしかない時代でした。さらに、「フットボール場などのスポーツを通じて学生が一つになることができる」という説明は印象的でした。説明の後で、「日本の大学の中心は何ですか」と聞かれて、「教育と研究です」という答えをしていましたが、そういう考え方では世界一のキャンパスはできないと思いました。旧箱崎キャンパスのように都心部近くにあれば簡単に都心と行き来できますが、伊都キャンパスですと、滞在型になり生活の場になる必要がありました。アメリカ、カナダの調査では、かなり触発されました。あの視察の経験は大きかったと思います。

■建設コンサルタント＝設計事務所の選定

米国からの帰国後、杉岡洋一総長と矢田俊文副学長に呼ばれ、新キャンパス・マスタープランの策定業務に参画することになりました。将来像としてのマスタープランが策定され、マスタープランに基づき造成計画があるという形にもっていくためには、既に先行していた造成計画をマスタープランがどこかで追い越さなければならなりません。そのために、矢田俊文副学長をトップにして学外の専門家を含めた検討体制を整えることになり、コンサルタントチームを選定する国際プロポーザルの準備に入りました。その後の 2 年間、私自身も大変な思いをすることになりました（笑）。まず、プロポーザルで事業者を公募する手段として「官報」があり、事務局は官報を出すことしか考えていませんでした。それでは、有名な設計事務所は気がつきません。新建築などの雑誌広告にはまにあわなかったのですが、日経アーキテクチャーに当時の副編集長が広告を入れてくれました。今ほどネットは普及していなかったので、何とかメディアに載せて広報でき、結果的に世界中から 23 グループが応募してきました。



審査委員長は、都市と大学に関するテーマで日本建築学会賞（論文賞）を受賞され、東京大学をはじめとするキャンパス計画に精通されていた渡邊定夫東京大学名誉教授に依頼することになりました。委員については、委員長に陣容を考えていただくのが杉岡洋一総長の方針でした。「三顧の礼で迎え入れたい」とおっしゃる杉岡総長を渡邊定夫先生に引き合わせて、総長が渡邊定夫先生に直接、委員長をお願いされました。後から分かったことですが、お二人は1932（昭和7）年生まれの同年代でしたので、それ以降のお酒の席でも意気投合されていました。渡邊定夫先生に委員会を組織していただき、都市計画、土木計画、工学系の技術、アートなどの関連分野の著名な学外の専門家が委員に迎え入れられ、学内委員としては、萩島哲先生、竹下輝和先生が委員として参加されました。選考の結果、シーザー・ペリ、三菱地所、三島設計事務所のＪＶが採択され、1999（平成11）年の秋から、選定されたJVと学内のコアチームとでマスタープラン策定の作業が開始されました。学内のコアチームとしては、30 歳代後半だった私がチーム長を務め、坂井助教授、鶴崎助手などの若い30歳代の学内チームが編成され、マスタープランの検討作業が進められてきました。

検討内容はその都度、学内の関連委員会や新キャンパス計画専門委員会などの会議体で報告し、審議されました。最初の半年は、配置計画の大枠の検討と造成計画の修正に注力しており、結果的には1年半の歳月をかけてマスタープランをつくり上げました。現在まで、伊都キャンパスではこの時に策定したマスタープランがキャンパス計画の最上位の拠所となっています。検討作業が佳境に差し掛かった時は、昼の2時から翌朝8時まで施設部の会議室で飲み水とお茶だけで16時間連続して会議をしたこともありました。私の人生での会議の連続時間記録をつくりました（笑）。大変な苦難の時でしたが、九州大学の移転がこのままでは立ちいかなくなってしまうのではないかという危機感、緊張感がありました。

■国立大学法人化と制度改革

埋蔵文化財への対応、治水問題など移転用地に係る多くの課題が山積し、そうした課題への対応に加え、さらにもうひとつ、国立大学法人化への対応の課題がありました。それまで、日本の国立大学には寄附建物を受け入れるような文化は根付いていませんでしたが、独法化後の将来を見越して、寄附を受け入れる余地をキャンパスの中に創り出す必要がありました。また、学校教育法の改正に伴う組織・制度改革への対応もありました。教員は研究院、学部学生は学部、大学院生は学府にそれぞれ所属が分かれ、形式上、教員は学府と学部に教えに行く学府・研究員制度を九大は全国に先駆けていち早く導入を決定しました。この制度改革により、教員人事の組織の変更を伴わなくとも、社会の需要に応じて教育組織を柔軟に追加変更できるようになりました。学府・研究院制度と言いますが、これは九州大学発の新しい方法でした。マスタープランの方針の項目に車輪のダイアグラムが入っていますが、学府・研究員制度の考えを表したものです。

■キャンパス・マスタープランへの反映

19 世紀に確立し、20 世紀に普及した大学キャンパスの施設計画の一つの典型的なパタンでは、東京大学本郷キャンパスの戦前の施設のように中庭型の施設が多くみられます。この場合、個々の学科・学部は中庭型の独立した建物を有することになり、同一建物内では活発な交流が行われますが、建物が独立しており、建物間では交流が生まれ難い構造となっています。学府・研究院制度によって、新たな教育研究組織がつくり易くなり、たとえば工学と理学などが繋がりあう仕組みができました。東西に長いリニアなキャンパスにリニアな建物をつくり、建物の下部は教育に使い、上部は大学院の研究院と学府を配置して、横に繋がり易くする構造を導入しました。グランドレベルの南側にはキャンパス・コモンのオープンスペースを確保し、歩車分離を行い、眺望に配慮しつつ、リニアな形状の中の節目となる空間をアライバルポイントとして記念写真を撮る場所も用意しました。時代が経っても変わることのない不易の空間と変化増殖する空間を共存さ

せるために、グリーンコリドーと幹線道路の明確な骨格に沿った空間構成としました。その考えが「新キャンパス・マスタープラン 2001」のエッセンスとなっています。このマスタープランの考えに基づき、造成計画を修正していきました。

九州大学の「新キャンパス・マスタープラン 2001」は、様々な意味で時代の変わり目に入念に検討され、21 世紀の新時代の大学のあり方を先取りしたキャンパス計画となっています。

■課題や苦労話

――――計画を進めるうえでの課題や苦労話をお聞かせください。

当時の最大の課題の一つは、マスタープランにおいて石ケ原遺跡をどのように扱い、造成するかということでした。前方後円墳 6 基のうちの 1 基でしたが。これだけは削平し記録保存した上で造成することになりました。現在の中央図書館の位置にあった山をマスタープラン以前の造成計画案では残すことになっていましたが、それでは、ウエストとイーストのゾーン間の山がキャンパスを分断することになり、将来に禍根を残すことになると主張して、平地として繋ぐ案をつくり、杉岡洋一総長と矢田俊文副学長にご説明し、また百年の大計として考古学者の先生方にもご説明し、理解を得られたことがとても大きかったと思います。

■進めていてよかったこと

――――キャンパス計画を進めていてよかったと思うことがあればお教えください。

当時は毎日、必死でしたが、緊張がありました。全学の評議会においても助教授のみで説明し、厳しいご指摘やご意見も頂きました。大袈裟と思われるかもしれませんが、九大が転覆するかもしれないという危機感があり、その一方で杉岡総長の下で世界一のキャンパスをつくるのだという緊張感がありました。総合大学のチーム力で九州大学の歴史上の大きな難局を乗り切ることができたという思いを持っています。

実際に、出来上がった空間、計画内容、プロセスの点からも伊都キャンパスは世界一のキャンパスだと胸を張って言えると思います。実際に東京などの民間企業や研究者の方々に伊都キャンパスを案内しますが、皆さんは感銘を受けます。

■こだわった点

――――ご担当された立場から、ここに一番こだわった、という点があればお教えください。

私自身は都市計画が専門です。大学キャンパスは都市のようなものなので、杉岡洋一総長、矢田俊文副学長から指名され、チームづくりをしなさいと言われ、外井哲志准教授、坂井猛教授などとコアチームを編成しました。都市づくりとキャンパスづくりで共通すること、心がけていることは、骨格、即ち空間の構造を明確にすることです。利用者や来訪者が分かりにくいキャンパスは、骨格が明確でないものが多いのです。明確な骨格を持つことが長生きするキャンパスにつながると思います。しっかりした骨格に基づき、将来の変化に柔軟に対応していけるキャンパスであることが重要で、そうした考え方を広大かつ複雑な伊都キャンパスの計画にも適用し、かたちにしています。

■学生に伝えたいこと

――――伊都キャンパスを使う九州大学の学生にお伝えしたいことがあればお教えください。

新キャンパス・マスタープランの策定では私の人生の中でも非常に困難な経験をしました。ただ、一人の力は小さくとも、一人一人が力を合わせるチームの力で大きな困難を乗り切れることを学びました。ワンチームの力で山積した課題を解き、世界に冠たる大学キャンパスのマスタープランをつくり上げることができました。総合大学のチーム力の結実した成果の一つが伊都キャンパス自身だと思います。



マスタープランの考えの下に、計画から施設整備までの段階構成を経て、現在の伊都キャンパスができあがっています。郊外の丘陵地の上に、国際的に見ても素晴らしい大学キャンパスの環境が創り出されました。ただ、このキャンパスに魂を込めるのは、キャンパスで学び、研究する学生の皆さんです。この大学キャンパスからどれだけ素晴らしい研究が生み出され、社会で活躍する卒業生が輩出されたかといった大学キャンパスとしての真の評価は皆さんにかかっています。世界一のキャンパスで学び、研究していることを誇りに思い、気概と自信を持って新しいことにチャレンジして頂きたいと思います。

注記）

出口敦（でぐちあつし, 1961 年-）：1990 年 東京大学大学院博士課程修了（工学博士）。東京大学助手、九州大学助教授、同大学教授を経て、2011 年より東京大学教授。 2020 年 6 月公益社団法人日本都市計画学会 会長。 専門分野は都市計画学、都市デザイン学。著書に「Society（ソサエティ）5.0 人間中心の超スマート社会」（編著、日本経済新聞出版）、「ストリートデザイン・マネジメント　公共空間を活用する制度・組織・プロセス」（編著、学芸出版社）、「都市計画の構造転換」（編著、鹿島出版会）など。

出口敦･坂井猛, マスタープラン 2001 の特徴, 九大広報第 17 号, pp.11-13、2001 年 3 月

マスタープラン2001の特徴

大学院人間環境学研究院 助教授　出口 敦
新キャンパス計画推進室 助教授　坂井 猛

平成11年12月にマスタープラン策定作業を開始して以来,大勢の関係者の方々と意見交換,情報交換を行いながら検討を進めてきた。プランの検討には,MCM設計共同体の専門家と世界的に活躍している建築家シーザー・ペリ氏に加え,米国のキャンパス計画の専門家集団として名高く,世界各地でキャンパス計画を手がけているササキ・アソシエイツが協力事務所として参画し,画期的で実現可能性の高いプランを策定することができた。また,九州大学の教官,新キャンパス計画推進室,施設部等の専門家集団による共同作業もこのプランの作成過程で大きな役割を果たした。

様々な政策転換や構造改革が進行し,極めて流動的な現在の我が国の社会的背景と,国立大学のあり方が問われ,大学の組織体制や運営の改革が推進されている最中でのプランづくりは,九州大学のみならず国立大学の新世紀に向けた明確なビジョンの必要性を痛感しつつ作業を進めた。

新キャンパスにおける骨格形成と土地利用等の物的環境(ハードウエア)づくりの指針となるマスタープランの検討においても,その拠り所となるのは建学の精神や研究・教育の理念である。今回の場合,「九州大学の改革の大綱案」や学府・研究院制度を拠り所として,その理念を実現するための環境づくりを重点目標とした。

こうして検討されたマスタープランの大きな特徴は,計画目標や計画方針・戦略の独自性とその計画方針・戦略に基づき形成されるアカデミック・ゾーンの空間構成の新規性にある。

キャンパス像,計画目標,計画方針・戦略の共有

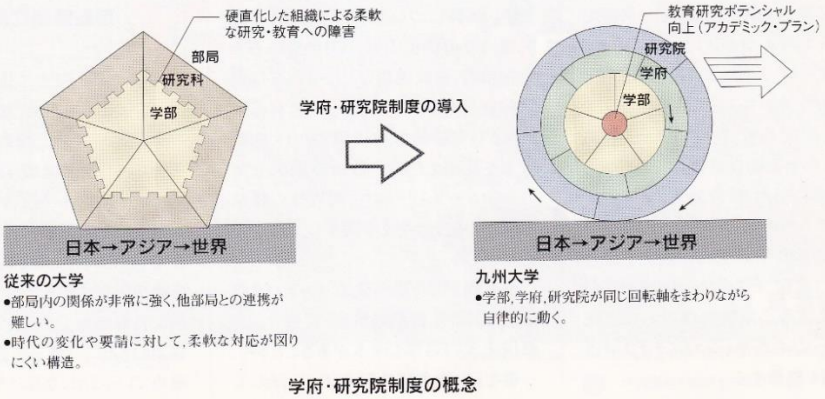
マスタープランの内容は,計画条件(2,3章),「新しいキャンパス像」として整理したビジョン(4章),計画概念をビジュアルに整理した計画目標・方針・戦略(5,6章),新キャンパスの環境を支える骨格形成とインフラストラクチャーの計画(7~9章),計画方針・戦略を検証し,具体的なイメージを提示した空間モデル(10章),整備,管理・運営方針(11,12章)といった章立てで構成している。

一般に,キャンパス・マスタープランは,専門家の間で計画課題や空間イメージを共有することに主眼が置かれ,専門的な記述内容となっているが,今回は,将来像,目標像,計画方針等を全学レベルで共有することに主眼を置き,内容構成や記述においても,一般に理解しやすい形式とすることに努めた。それでも,カタカナが多くなったのは,専門用語の日本語ボキャブラリーの少なさによるところが大きい。

また,これまで九州大学では,研究者参加型の新キャンパス計画を進めてきており,その路線を継承しながら今後も整備を推進していくことを念頭に置いた計画目標や方針・戦略を提示している点が特徴となっている。

"インターディシプリナリー"時代のキャンパス

このマスタープランの大きな特徴の一つは,インターディシプリナリー(Interdisciplinary:学際的)時代に対応したキャンパスの形成を目指している点にあり,アカデミック・ゾーンの空間構成と東西に連結した施設配置にその特徴が現れている。従来の一般的な大学キャンパスのイメージとやや異なるが,この配置形態は,東西に長い敷地特性や九州大学がこれまで長年審議し策定してきたゾーニングや土地利用の方針等に



従来の大学
- 部局内の関係が非常に強く,他部局との連携が難しい。
- 時代の変化や要請に対して,柔軟な対応が図りにくい構造。

九州大学
- 学部,学府,研究院が同じ回転軸をまわりながら自律的に動く。

学府・研究院制度の概念

基づいた検討から生まれたものである。

欧米にその原型を持つ従来の大学キャンパスは,各ディシプリン(Discipline:専門領域)が,学部,研究科あるいは,それを更に細分化した学科,専攻という組織単位を成し,一つの独立した建物として存在してきた。多くの場合,それらの建物は,クワドラングル(Quadrangle)やヤード(Yard)と呼ばれる中庭を取り囲む形態で,内部にはぐるりと小講座の研究室が並び,ディシプリン内は極めて連携が取りやすい空間構成となっていた。あるいは,大きな庭を各ディシプリンの独立した建物が取り囲むように配置されてきた例も少なくない。(下左図)

大学キャンパスは真理探求の場であるが,この確固たるディシプリンをより深化させることが真理探求の典型的な活動スタイルと考えられ,その活動が最も行いやすい空間構成として,ディシプリン独立形式の空間構成が20世紀の世界中の大学キャンパスに普及した。九州大学の箱崎キャンパスや東京大学の本郷キャンパスなど同種の形式は,世界中に数え切れない程ある。しかしながら,この空間構成は,異なるディシプリン相互の交流・連携について十分配慮されておらず,ディシプリン横断型の積極的な交流・連携を促進,発生しにくい。

近年,世界的に新しいアカデミズムの方向性として「インターディシプリナリー」が強調されている。今回のプランは,こうした新しい方向性と総合大学の一体性を十分意識し,新学術拠点の形成を図った点において,「未来型キャンパス」のマスタープランと言える。プランの中では,この方向性の概念に関連して「学際的」,「交流・連携」,「研究・教育の流動化」という言葉を多用している。

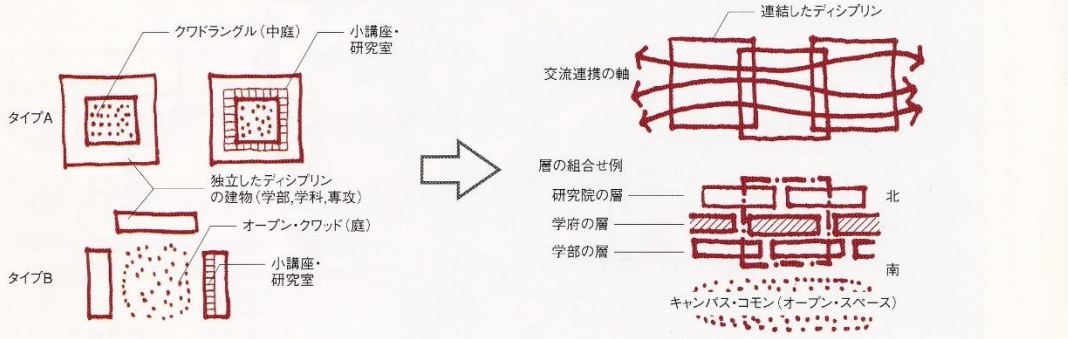
具体的に,マスタープランでは,従来のディシプリンの自律性を確保しながら,それらを連結し,交流・連携と知的活動を支える動脈や骨格の軸をいくつも通し,全体が一つの生命体の如く,社会的要請や時代の変化に応じてしなやかに変化,増殖していける空間構成を提唱している。相互交流・連携や研究・教育活動の流動化に対応できる空間構成に加え,大学組織の成長に合わせて,東西方向に増殖・延伸していける大規模拡張用地を確保している。

また,各ディシプリンのセクションを将来拡張したい場合には,民間資金等を導入しながら,北側に確保した「未来のポテンシャル軸」と呼ぶ用地を戦略的に活用していくこととしている。(次頁下左図)

学府・研究院制度の理念を実現する空間構成

東西につながる研究・教育施設群の形態は,真上から見ると機能の異なる層が重なっている構成となっている。例えば,南側から学部教育活動の層,中間に学府の教育活動の層,北側に研究院の研究活動の層といったように,複数の層が組み合わさった構成となっている。また,南側から施設群の正面を見た場合にも,例えば,低層階が学部教育の層,上層階が研究院と学府が一体的となった層など重層構成となっている。(下右図)

水平方向,垂直方向に複数の異なる機能の層が重なり,連結し,それぞれの層が独立性と相互の連携性を保てるような構造で支えられている。こうした重層・連結型の構成は,学府・研究院制度の下で自律的変革に柔軟に対応できる空間構成として立案された。この考え方に基づく施設内部の具体的な機能配置は,アカデミック・プランに基づいて今後進められることとなる。



従来の大学キャンパス　　新キャンパス

キャンパスの空間構成の概念



快適な学習・生活環境の形成

一方,東西に単調な空間が長く連続することのないよう,地形上の特性を活かした変化に富んだ環境形成を行うことに配慮している。例えば,箱崎キャンパスの記念講堂前の道路のように,何百メートルにもわたって先が見える一直線上の空間は,やや退屈な環境を創り出すが,新キャンパスでは,敷地の高低差を利用して変化を演出し,周囲の自然地形に調和するようにカーブさせ,長い空間を分節する工夫が凝らされている。

マスタープランでは,歩いて楽しいキャンパス環境の形成を目指し,歩行者の東西移動の主動線となる空間軸「キャンパス・モール」を骨格の一つとしている。その沿道に研究・教育施設が配置され,歩行者の移動はこのモールに集中することとなる。このモールの沿道に研究成果の展示スペース,カフェ,ITプラザ等の人的交流や情報発信・収集の場を計画的に配置することで,学問的対話を誘発し,知的欲求を喚起させ,研究・教育を活性化する環境づくりを目指している。

また,新キャンパスは,都心から比較的距離があることから,学生や来学者を長時間滞在させる魅力づくりが不可欠となる。

長時間滞在できる生活・学習環境を整えるため,多様な欲求を充足できる施設を機能的に配置すること,そのために,民間施設の誘致等を含めたタウン・オン・キャンパスの育成を掲げている。

また,恵まれた自然環境を取り込むよう,研究・教育施設の南側には,開放的で日当たりの良いオープンスペースを連続させ,これを「キャンパス・コモン」として快適な生活環境を形成すると共に,大学の象徴的空間となることも想定している。

このように,マスタープランでは,インターディシプリナリー時代にふさわしい空間構成や,長時間滞在のための快適で魅力的な学習・生活環境を実現させるための,具体的な計画方針と戦略を明示している。

経営と環境の視点

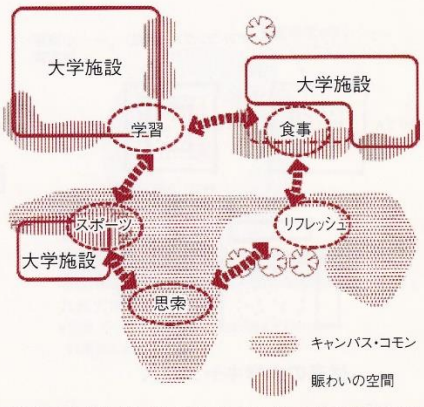
今後,国立大学はキャンパス環境の管理・運営において「経営」の視点がより強く求められる。この点を踏まえ,マスタープランでは,施設の管理・運営面のみならず,将来的な施設整備においても「経営」を意識し,民間資金等の導入による将来的な施設の立地にも配慮している。

その一方で,悠久の歴史と自然に恵まれた地域固有の環境との共生に配慮し,開発による影響の低減や環境保全を図るためのシステムづくりを重点計画目標としていることも大きな特徴となっている。

マスタープランは,九州大学が長年培ってきた学問の府としての伝統を継承するとともに,従来の大学キャンパスにはない新たな空間構成と管理・運営を導入することで,「21世紀を活き続けるキャンパスの創造」を目指している。その真の評価は,50年,100年後の未来において受けることとなる。



将来的なディシプリンの拡張の概念



学生の多様な欲求にこたえるための施設配置の概念

3.10　佐藤 優 パブリック・スペース WG 長

神戸芸術工科大学学長・九州大学名誉教授



日時：２０２２年 10 月７日（金）
場所：オンライン
聞き手：坂井猛　（九州大学キャンパス計画室教授）
　　孟柱燦、張煜嘉（大学院人間環境学府修士課程）

佐藤優先生は、視覚記号計画、都市景観計画が専門であり、九州大学のキャンパス計画では、パブリック・スペースWG長、キャンパス計画室副室長、副学長等を務められ、伊都キャンパスのパブリック・スペースにおけるサイン、アート、建物の色彩、テクスチャーまで全般を見ていただきました（坂井）。

■キャンパス計画へのかかわり

――――まず、当時のことをお聞かせください。伊都キャンパスの建設にどのようなスタンスをもって関わられましたか。

大学の新キャンパス計画専門委員会にパブリック・スペース WG をたちあげてもらい、バラバラに発注していたデザインをまとめる役割をしました。私立大学は、まとめて発注できるのですが、国立大学は制度上それができないのです。全体のデザインをまとめ、代々の総長にご理解いただきました。特に有川総長、久保総長に信頼していただいてやることができました。箱崎から伊都に移りましたが、私が関わったのはマスタープランができてすぐのことでした。久保総長とは、病院のデザインに関わっていたので、全体のデザインをしたいという考え方はご理解いただけていました。建築家は、どちらかというと自分の作品を作りたいと思う傾向にあります。昔から、福岡市の景観デザインにかかわってきたので、建築設計者と話し合いができる立場にもあったことから、総合的なデザインに繋がるやりとりができていったと思います。かっこいいデザインにしていこうと思ったのです。

■具体的なデザイン

まず、バリアフリー、ユニバーサルなキャンパスにしていくことを考えました。たとえば、車いすで容易に移動できること、雨に濡れないで歩くことができることなどです。市営地下鉄七隈線でも、ユニバーサルデザインの考え方が特化しており、様々な業種をまとめてコントロールすることができました。色彩では、全体を考えてやって、自然な流れ、気持ちを新たにできるような仕様、しっかりしたものにしていこう、場所場所にあったデザインにしていこうということになりました。キャンパスを回っていると、それぞれが意識的につくられていることがわかると思います。また、臨機応変な対応も求められました。たとえば、椎木講堂では、ちょっと深めの色を採用していますが、これは箱崎の工学部本館の色を引き継いでいます。また、視線の誘導を図っており、意識的につくられていることもわかると思います。特徴的なところでは、実験棟のデザインまで心を配りました。プレファブであっても安っぽく見せず統一感をだせるようにしています。

■サイン

オリジナルなサインを重視しました。センター地区の「九州大学」銘板のところでは、写真を撮れる場所にしようと計画していることから、若手書家の柿沼氏に文字を書いてもらいました。さらに、キャンパス全体のサインは統一的に作られています。大事なことは、キャンパスが長年かけて作られていくので、表示面だけを取り換えられるようにしました。目線が通るように、サインは低めに設定しています。

■女性への配慮



女性が増えることがわかっていましたので、まず、安全は課題になっていました。エマージェンシーポールなど、様々な工夫をしています。また、女性用のトイレを充実させている。女性が並ばない数、パウダールームをつくっています。さらに、ガラス張りの通路を下から覗かれないようにシート貼りで工夫し、高所恐怖症対応にもなっています。

■照明、緑地、アート

照明は、照明デザイナーの松下美紀さんにお願いして設計し実現できています。壁面に照明をあてるような部分照明、明るさだけ確保するのではなく、全体として計画しています。センター地区のゲートブリッジは、柱の角をカットして薄く見せる繊細に見えるようにして、さらに照明で工夫しています。緑では、軸線、散策、保全を考慮した整備方針をつくって、管理のレベルを確保しています。アートでは、空間を特色づけるアート、、環境のアートなど、種類を設けてそれぞれの作品を配置し、様々なアート・スタイルを実現しています。

■素材、窓

素材、ディテール、有機的な素材、無機的な素材、馴染む、異化するよう意図的に作り分け、エッジの処理やライトアップにも配慮しています。窓は平たんに見えないよう深めの処理をしており、注意深く見ていただくと違いが分かると思います。パブリック・スペース・デザインマニュアルをつくって全体が繋がるように配慮しているわけです。歴史の継承にも配慮しています。椎木講堂の表面は、箱崎キャンパスのディテールを使っており、箱崎のデザインの継承を試みています。さらにこれらのことを、学生への伝達に重点を置いた講義「伊都キャンパスを科学する」で教えています。

■床面

階段の段数を変えていく試みをしています。先をみながら動いていき、目が留まるところに注意を払い、歩いていても普通のところを歩いているよりは楽になるようにしています。段鼻の明度、明るさを変えて良く見えるようにしており、目の弱い人も歩けるようにしています。また、床面に各キャンパスの方向を示しており、隠れコマンドになっています。現在の位置がわかるように、位置を示す表示を床面にわかるようにもしています。さらに、自転車の事故があったので、自転車レーンは、長いこと研究したうえで、ちゃんとしたレーンを整備しています。

■課題や苦労話、進めていてよかったこと

――――計画を進めるうえでの課題や苦労話、進めていてよかったと思うことがあればお教えください。

最初に気にしていたことは、郊外に移転するので、大学がレベルダウンしないようにすることでした。そうならないために、ちゃんとしたデザインをしようと思ったのです。新しい研究分野の施設が、教育でも新しいものが生まれてきているのがいいことかなと思っています。地域とのコミュニケーションも、キャンパスができる前からしっかりとやっていると思います。課題は、交通、通学の問題です。入試の時にバスをたくさん集めなくてはならず、学生の通学も大変だろうと思います。ふらっと飲んで帰ることが難しいですね。いずれにしても、かなりの部分ができていると思います。九大病院でも患者が 2 倍になっています。デザインに配慮するかどうかでかわってくると思うのです。

■こだわった点

――――ご担当された立場から、ここに一番こだわった、という点があればお教えください。



こだわった点は、総合的にまとめていくことでした。コンセプト、カラーリングなどをマニュアルに示して、大事なポイントとして示しました。全体、全部に目を通していて配慮し、ばらばらにしないで、ちゃんとつないでいこうとしたことです。統一的にコントロールしていくこと、建築の分野でコンセプトから始まって、それをきちんと実現していることが伊都キャンパスの特徴だろうと思います。世界のキャンパスと比べても、かなり良い方だと思います。自分たちで案内をできるキャンパスになったこと、がこだわった点ですね。

――――総括的にデザインできたことについて、文系などの他の分野の人たちは、誰かに解説してもらわないとわからないと思いますが、使う立場の学生にはどうすれば知ってもらえるでしょうか。

このキャンパスができはじめたころから、低年次の約 150 人の学生に「伊都キャンパスを科学する」の講義で意味を伝えてきましたし、その反応は良かったと思います。学生の皆さんの世代で、伊都キャンパスの初期の建物を増改築、大規模改修するときが来るので、この話を聞いたみなさんの誰かが関わって頂ければと思います。将来計画をつくりながら今の施設を作っています。先を見越しながらつくることが大事だと思います。勉強していて、気持ち良いと感じてもらい、その理由を知り、感じることの両方が大事だろうと思います。

――――「伊都キャンパスを科学する」の講義で、好きな空間に関する学生のアンケートを集計しましたが、おっしゃったとおり、ユニバーサルいデザイン、センター地区の「九州大学」の銘板、ガラスを見えないようにしていることなどを評価している学生が多かったと思います。授業を受けていない学生からよく聞かれることは、センター地区の古墳のアートです。意味をよく聞かれるので、どんな意味があるのかをお教えいただけないでしょうか。

伊都キャンパスには古墳が多いのも理由ですが、駐輪場の手前に山のようなものがあって、その向こうに自転車が見えてくることで、景観に馴染ませる、あそこが駐輪場だとわからせることを狙っていました。アートをしたいひとはたくさんいるので、仕組みそのものをデザインしていくことが大事だと思います。

■学生に伝えたいこと

――――伊都キャンパスを使う九州大学の学生にお伝えしたいことがあればお教えください。

自分の想い、理想、信念をもって仕事をしてもらいたいと思っています。社会に出るとバリアがあるので、自分はこうしたいということを貫いてほしいと思います。なかなかできないことなので、強調しておきたいと思います。また、最大限の力を発揮して、他の人の力も最大限に破棄して、新しいことに取り組むことを大事にしてほしいと思います。さらに、伊都キャンパスを成長するキャンパス、日々成長するキャンパスにしてほしいと思います。今後のことも考えた計画を、皆さんがつくりあげていってほしいのです。あと 20-30 年したら、関わっていく人が出てくると思います。

――――今日はお忙しいなか、ありがとうございました。

――――インタビュー終了後に、佐藤先生よりメモを頂戴しました。坂井

伊都キャンパス計画へのかかわり（スタンス）

＊全面的にデザインに力を入れることができる立場

（歴代総長 有川総長（リーダシップ）／久保総長（九大病院）

＊九州大学と九州芸術工科大学の統合（2003）（総長特別補佐・産学連携センター副センター長）

＊2004～九州大学病院のデザイン

＊基本計画からの引き継ぎ＝これから現実化）

＊永年関わった福岡市景観形成における幅広い分野の方々からの信頼と前向きの姿勢（大学・建設関係者・業者との幅広い面識）

＊かっこいいデザインにする、という信念

＊デザインをする仕組みのデザイン（全体を調和させるデザイン）

＊建築関係の自分の作品を作りたい、という自己主張との戦い

＊長続きするデザイン

特に重点を置いた点（課題や苦労話）

＊郊外に移転してもレベルダウンにつながらない

＊誇らしく思えるキャンパス

＊トータルデザイン（日本の国立大学キャンパス・デザインの課題）

＊関連項目を体系的にコントロールするデザイン（空間構成・ランドスケープ、植栽、サイン、光、アート、ファニチャー、色彩、素材・細部の仕様＝通常はバラバラに発注）これらは今までは別々の分野・別々に発注

＊意図を持ったデザイン

＊写真を撮れるキャンパス

＊ヒューマンスケール

＊経験を活かしたデザイン（福岡市の景観誘導 1986～30 年・ユニバーシアード・地下鉄等）

＊考えを表現し伝えるシステム

＊地域との連携（坂井先生が重要な役割）

進めていてよかった点

＊レベルダウンしなかった＝むしろ伸びている（研究も教育も）箱崎から移転し、飛行機の航路の下から外れた＝振動がない

＊新しい研究ができている

＊九大病院も患者さんが倍程度に増えている

＊女子学生が増えた（下着姿などのバンカラ調ではなくなった）

＊地域とのコミュニケーションができた

＊課題は交通（かなり頑張って対応しているが、今後の課題）

個別事項（こだわった点＝全般的事項）

1）バリアフリー環境の徹底

全キャンパス（七隈線と同様、シンボル的な施設）

ユニバーサルデザイン・ヒューマンスケール・アクティビティデザイン・伊都の風土環境・持続性（季節感）

2)色彩コントロール

地域色を意識したマンセルによる色彩コントロール

（難しい＝長期間・専門性）

カラーパレット

全体の自然な流れ（大きなキャンパスなので全体の統一は困難）

象徴的な色調の継承

柔軟で臨機応変の対応（例：椎木講堂の幕の色・座席の色）

色彩見本によるチェック

3)視線誘導

アイストップのデザイン

4)実験棟等の誘導

基本デザインの統一、安っぽく見せない

5)サイン

全学サイン（学生が座って記念写真）

書家 柿沼康二（NHK 大河ドラマ 風林火山）

逐次変わる環境への対応（部材統一、表示面変更容易、縦横使用、安価）

低めのサイン

セキュリティポール（エマージェンシー）

掲示面への対応（ペタペタ貼らない）

6)女性の視点

女性用トイレ（数量・パウダーコーナー)。

ガラス張り通路のグラデーション視線防止（オープンな感じとの両立）

7)照明(松下美紀)

壁面・柱面・床面照明。植物照明。センターブリッジ

8)グリーン

ゾーニング・整備方針（軸線・ゲート、アライバルポイント、散策、保全)。管理レベルの 5 段階の想定

9)アート

象徴的アート、空間を特色づけるアート、環境的アート（例：築山)、1 ㎡アート

10)素材とディテール

有機的素材（自然的素材＝同化）～無機的素材（人工的素材＝異化）

センターブリッジのエッジ処理・ライトアップ（気を使った繊細な処理）

11)持続性

施設整備マニュアル（継承)。歴史の継承（例：椎木講堂）

12)学生へのデザイン意図の伝達

授業（坂井先生他）「新キャンパスを科学する」

個別事項(こだわった点＝個別的事項の例)

1)階段

先が見える段数。広さが多様。ステップの明度差

2)空間の変化

凹凸感のある空間構成。視線の変化。窓の外の意匠（立体感のあるデザイン＝日本が弱いところ）

3)床面にキャンパスの方向

各キャンパスの方向。KYUSHU UNIVERSITY

4)自転車レーン

実験の結果の反映

5)現在位置

現在位置がわかる表示

6)つなげる

施設を単独で考えない。施設と施設の間を連続させる。天候への対応。バリアフリー

学生に伝えたいこと(1)

＊自分の思いや理想・信念を持って仕事をすること（考えと想定する結果を伝えること）

＊キャンパスは総合的につくるもの。様々な分野の方々が相互に最大の力を発揮するように配慮すること。(連携と満足)

＊担当者に、新しいことをしたい、この仕事を誇りに思う、という気持ちを持っていただくこと。(分野や仕事の拘束を取り払う)

学生に伝えたいこと(2)

＊伊都キャンパスは成長するキャンパス（後退させない）

＊すでに改築も計画（改築も入れ込んだ計画＝病院も）

＊将来の改築にあたって、これを聞いていただいた誰かに関わっていただけたら幸い。

佐藤優(さとうまさる, 1950 年-):神戸芸術工科大学学長。九州大学名誉教授。1975 年より九州芸術工科大学助手, 在外研究(西ドイツ・アーヘン工科大学で建築学、エッセン大学で記号学), 九州大学助教授を経て, 2003 年より九州大学大学院芸術工学研究院教授。九州大学副理事、副学長, 産学連携センター・知的財産本部副本部長, 新キャンパス計画推進室副室長, パブリック・スペースワーキング長、図書館副館長他を務める。2003 年より、2016 年の定年まで伊都キャンパス建設事業に関わる。2016 年より、神戸芸術工科大学副学長を経て現職。1995 年ユニバーシアード福岡大会デザイン監修, SDA 賞大賞／福岡市地下鉄七隈線トータルデザイン,SDA 賞大賞, 経済産業大臣賞／九州大学病院デザイン監修, グッドデザイン賞特別賞, 経済産業大臣賞／九州大学 UI ／神戸芸術工科大学 UI・サイン (高台泳共作)

3.11 外井哲志 交通計画 WG 長



日時：２０２２年６月１日（水）
場所：オンライン
聞き手：坂井猛 （九州大学キャンパス計画室教授）
孟柱燦、張煜嘉（大学院人間環境学府修士課程）

外井哲志先生は交通計画が専門であり、九州大学の移転当初より、過渡期におけるキャンパスの交通関係の課題だしから解決方法までを提言するための交通計画WG長を引き受けていただき、総合交通計画の策定と、それに基づくキャンパス完成時の朝の渋滞解消等の筋道を立てていただきました。（坂井）

■キャンパス計画へのかかわり

――――まず、当時のお仕事の内容をお聞かせください。伊都キャンパスにどのような立場で関わられましたでしょうか。

かかわりは移転計画ができる前の 1998（平成 10）年頃からでした。杉岡洋一総長に変わり、新キャンパス計画の主担当が樗木武教授から竹下輝和教授に交代したため、そのときに新キャンパスの交通計画を頼まれるようになりました。移転計画の作業チームに交通計画担当として参加し、まずは現地の状況を、古代の製鉄所跡や古墳などの遺跡といっしょに見てまわりました。

仕事の内容は、（１）新キャンパスへの移転過渡期における、通勤通学を中心とした交通計画（公共交通計画、自動車交通）を立てること、（２）移転の各段階において交通状況を管理し、必要な対策を立てることにありました。まず、移転の先行事例である広島大学などの実態を参考にして、学生の居住地選択の予測を行いました。キャンパスと周辺の全体の調査をすることから始め、公共交通輸送、自動車渋滞の問題、駐車場問題などが中心テーマになりました。

■交通需要の予測

こだわったこととしては、交通計画の視点から需要予測をして、数字を使った交通計画を立てることであり、それができたのはよかったと思います。交通が発生する背景に基づいて数字を出す必要があったことから、きちんとした方法論を用いることにこだわりました。具体的には、公共交通機関や道路状況(計画)に基づいて、交通手段別・時間帯ごとの交通需要を予測し、学研都市駅のバス乗降スペースの算定、キャンパス内の道路計画、バス停等の配置、駐車場の規模の決定、バス停の配置などの具体的な計画を立案しました。最初は、バス会社はあまり協力的ではなかったのですが、利用者数の予測値などのデータを出すことによって、こちらの本気度を示すことはでき、バス事業者との関係が次第に良くなったと感じました。また、駐車場の必要面積を算定するために利用台数を 3,000-4,000 台と割り出し、そのスペースを確保しました。このとき、キャンパス計画担当の矢田俊文副学長から、駐車場の利用料金をかけることで、需要と供給のバランスをとるとよいというアドバイスをいただき、そのような計算をしました。これがもとになって、教職員学生から駐車料月 1,000 円程度、外来者からは入構料 300 円を徴収することになりました。

■マスタープラン策定メンバーとして

このような内容をベースにして、新キャンパス計画専門委員会マスタープラン策定委員会コアチームのメンバーとして、出口敦助教授、坂井猛助教授（当時）等と新キャンパス・マスタープランの策定に当たりました。キャンパスが東西に長い形状をしていることから、道路の基本的な形は決まっていきました。交通の視点から、その道路の運用計画を立てるよ

うに求められました。交通事故防止のため、中央ゲートの手前で自転車・バイクを構内に入れるという事故の未然防止のための対策をしましたし、渋滞対策として、自動車の入構ゲートを分散して、中央以外のゲートから出入りできるようにしたことはよかったと思います。



新キャンパス・マスタープラン 2001 が評議会で認められた後、矢田俊文副学長の指名により、2018 年の移転完了まで、交通計画 WG 長を務めました。移転過渡期の 2005（平成 17）年から 2018（平成 30）年まで、移転の各段階で通勤通学の交通需要がどのように発生するかを必要に応じて考えていきました。こうした課題に対応できる交通計画の研究者は学内にはいなかったので、WGの責任者でもある自分が中心になってやらなければいけないという使命感をもって臨みました。最初は、移転後の学園都市の全体像をとらえるため、広島大学の例を参考にして、専門のコンサルタントと相談しながら、どこに学生が住み、どの交通手段を使って通学するだろうかといった大枠の把握を行いました。そして、自動車で来る人、市内からバスで来る人、駅で乗り換えてくる人の数を予測することから始めました。当時、自動車でやってくる人が多く、それが中央ゲートの交差点に集中することが予想されました。個人が自動車で通勤・通学したために渋滞に巻き込まれるのは、その人の手段選択の結果でありやむを得ない一面もありますが、新キャンパスの基幹的交通手段であるバスが渋滞に巻き込まれ、学生が授業に遅れることが最も心配でした。自動車通勤者の数と交通渋滞の関係については交通シミュレーションを行って視覚的に学内委員会で説明しました。

――交通は重要な部分と思っています。センターゾーンの西側から右折する時の渋滞が問題だったと思います。では、業務を進めるうえでの課題や苦労話、よかったことなどをお聞かせください。

■移転先の決定プロセス

その前に、まず、キャンパスの移転先の決定についてです。移転先が決定したころのいきさつを書いた資料等によると、元岡地区は 5 つほどの候補地の中から、立地条件のほか、移転事業の実現性（土地の取得、九大跡地の処分の容易さなどの事業遂行能力）を総合的に評価して選ばれたようです。交通計画の担当の立場からは、移転先の決定が交通の視点から十分な議論に基づいて合理的になされたか、疑問を持っています。特に交通条件については、軌道系の交通手段のサービスが十分に行えるかをどの程度議論したのかを伺いたいところです。資料を読む限りでは、最後は移転事業の実現可能性が決めてになったという印象が強く残ります。大学移転先の適地を選択する際に、事業としての移転の実現可能性ばかりでなく、移転後に研究・教育学生生活などの面で大学全体がどのような環境におかれるのかについて、十分に予測する必要はなかったでしょうか。

結果的には、伊都キャンパスは軌道系の導入が難しく、決して便利な場所とは言えません。移転後、将来にわたって発生するであろう通勤通学の費用と学生教職員の労力が大きいことを考えると、元岡地区が移転先として本当に最適だったかについては、検証が必要でしょう。

■軌道系のこと

次に、軌道系交通についてです。交通問題に対して誰でも意見が言えるので、学内の新キャンパス計画専門委員会や交通計画 WG では、様々な無責任で身勝手な意見がでました。特に、教員からは、「自分が留学した外国の○○大学では、・・・だった。」など、日本と外国との大学を取り巻く背景の違い、大学の経営条件などの違いを無視した指摘が多く、そのたびに九州大学の置かれた状況、キャンパスの地理的位置、財源等について説明せざるを得ず、苦労しました。その一つが、軌道系交通手段の整備に関する希望でした。軌道系交通手段を整備するのにどのくらいの財源が必要であるのか、



初期投資、施設維持・管理、更新、人件費と運賃収入などのバランスを考えると、継続的に資金を提供してくれるスポンサーが存在するか、あるいは九州大学自身が経営する能力を持たなければ不可能でした。「地下鉄を引け」という人までいました。建設に1km あたり何百億円も要する地下鉄は、極めて現実性が乏しいと言えます。文科省には地下鉄建設の予算はありません。ずいぶん無責任な主張をされる方が多いのです。東京の山手線のようにピーク時間以外にも途切れることなく乗車需要があるとよいのですが、朝夕のピーク時以外は通勤通学需要が極端に減少する伊都キャンパスのような場所では、運営上も赤字は累積する一方です。執行部の方々、専門委員会やWGのメンバーが変わるたびに、軌道系の公共交通機関の導入は難しいということを説明しないといけないのは大変でした。周辺の開発と一緒にやらないと軌道系の成立は難しいのです。かといって、無理してニュータウンをつくる時代でもなくなりました。

■駐車場のこと

さらに、駐車場についての問題です。新キャンパス・マスタープラン 2001 の策定後だったと思いますが、ウエスト 2－4 号館北側の土地は、マスタープランでは当面の駐車場予定地と考えていました。もともと不足が予想される駐車場スペースの中心的な場所と考えていました。そこに突然、水素関連の研究施設、水素ステーションの建設が決まったと伝えられました。大変重要な決定なのに、担当者に何の相談もなかったので、腹立たしく思うと同時に、移転後駐車場不足がより深刻化するであろうことを大変心配しました。当時、学内のほとんどは、こうした交通問題に対しては暢気でしたが、このことは後に懸念が現実のものになり、大騒ぎに発展しました。

■通勤通学のこと

さいごに、通勤通学の問題です。問題の本質は、大学に学生教職員がどこからどうやって来るかという点にあり、これが新キャンパスの交通で解決すべき最重要課題だろうと思います。キャンパスの東、北、南のゲートからも出入りできるので、集中を避けるように使ってもらえばいい。朝は、渋滞のために 1,2 年生が授業に遅れることが一番避けなければいけないことです。一方、多くの学生が通勤通学をバスから自転車や自動車にかえてしまうと、利用者数が大きく減少し公共交通の撤退につながってしまう、これも大学にとっては困るのです。

――当時の計画室で、水素関連の施設立地検討が進められているときに施設部の担当から聞きました。当時の造成の進捗状況とライフライン供給を踏まえるとこの位置しか解はないと言っていました。駐車場関係の将来のことが見えていたので、そのとき「駐車場問題が起きるので、ピロティや屋上に駐車場の併設確保できませんか」と申しましたが、将来のことまでの配慮はなく「駐車場の予算まで用意されていません。駐車場は周りにあります。」とのお答えでした。（坂井）

10 年ほどが経過し、農学系ウエスト 5 号館をつくり始めたときに、生物多様性保全ゾーンをまわって北側の大型駐車場を使うことを工学系の皆がいやだと言い出し、それがきっかけになって、工学研究院長、副院長と工学部事務部長が、駐車場不足について苦情を言いに計画室に来られました。私は、その原因を作ったのが水素関連施設建設を推進した工学系の先輩方であることを主張し、かなり激しい議論になりました。

駐車場の必要性は、新キャンパス計画専門委員会でも十分に伝えていましたが、その時は無関心であり、問題が顕在化した頃になって、自らが駐車場不足の原因を作ったという意識のないまま文句を言いにこられたことに憤りを感じ、反論申し上げました。この議論をしたことが、その後の総合交通計画の策定につながりましたので、一度、本音で意見を戦わせてよかったと思います。



――交通計画をご担当された立場から、ここに一番こだわった、という点があればお教えください。また、キャンパスを使う九州大学の学生にお伝えしたいことがあればお教えください。

■公共交通の利用推進と渋滞回避

伊都キャンパスでの通勤・通学手段については、できるだけ自動車は避け、公共交通を利用してもらうようお願いしました。自動車通勤をしたいのはわかりますが、朝のピーク時の自動車交通の増加は、道路交通の混雑を引き起こします。ピーク時の自動車交通の総量がわかれば交通容量との関係で、渋滞が起きるかどうかの判定ができます。容器があふれて入らないで水が流れ出るのと同じ原理です。1 台平均で 10m（車間距離と車長の平均：大型車なども含めるとこれくらいになる）の距離が必要になります。交差点の容量を超える自動車が 1 車線当たり 100 台あったとすれば 1 ㎞の渋滞になる、というような交通工学サイドの常識は一般の皆さんには感覚的に伝わっていません。

すでに述べましたように、ピーク時の渋滞によって、バス通学をしている学生、特に低学年学生が授業に間に合わないなどということがあってはならないことを再三主張してきました。

交通計画の方法については、パーソントリップ調査に基づいた都市交通計画という、確立した分野があり、国や地方の自治体、交通関係の協議会でも交通計画の立案に利用されています。大学でも土木系では授業で教えています。したがって、大学移転においてもこの方法を応用すべきと考え、交通需要予測による実数把握や、交通シミュレーションによる道路混雑の推定と混雑状況の可視化なども導入し、計算結果を視覚に訴えたうえで、考えられる最悪のシナリオとそれを避ける方策の提案を行い、理解を得る努力を行いました。今考えると、危機管理的な発想があったようにと思います。防災を例にとると、いかに立派な事前の対策を行っていても、災害（被害）が顕在化しなければ、その対策の努力が顧みられることはありません。なぜかというと、何も問題が起こらないことが「あたりまえ」と受け取られているからです。交通対策も同じで、文句を言われることはあっても褒められることはありません。危機管理として絶対に渋滞をおこさないために、口を酸っぱくして問題を指摘し、意識を高めることをやってきました。

■交通需要予測の効用

マスタープラン策定コアチームに参加して間もないころ、交通事業者（西鉄、昭和バス、JR バス）の担当者に来てもらって、新キャンパスまでの運行について意見聴取したことがありました。その時の交通事業者側のひとりから、「九大で自ら運行されてはどうですか。」という冷たい発言があり、大変衝撃を受けたことを覚えています。それで、正確な交通需要予測を行って、具体的にどのくらいのバス利用が発生するかを数量で示すことが必要だと考え、予測を行うようになりました。その結果を交通事業者に示すことによって、彼らも次第に協力的になってきたような感触があります。

交通サービスの水準は、交通事業者の収入と支出によって決まります。交通サービス水準を維持するためには、相応の料金水準と利用者数が必要です。利用者にとっては公共交通の料金は安いほどよいですが、そうすると交通事業者の運賃収入が減少し、交通サービスも低下してしまいます。料金を上げれば利用者が減り、やはり運賃収入は減少し交通サービスが良くなることは稀です。これが、地方の公共交通維持における最大の問題点です。みんなでバスを利用する努力をすることで、サービスのレベルが維持されるのです。

――キャンパス計画室、事務部施設部等との関係はどうでしたでしょうか。

キャンパス計画室、施設部とは、目的意識を同じくする仲間という感覚、一緒にやっている感じを持っていました。キャンパスの交通問題に危機意識を持ってもらうために、最初から危機感をあおって、厳しめに発言していたつもりですし、それを皆さんが理解していてくれたように思います。

――交通安全、事故対策について気をつけたことはありますか。

自転車の左折の巻き込み事故に対する対策として、学園通り線からキャンパスのセンターゾーン交差点に向かう手前の調整池のところで左折してキャンパスに入ってもらうようにしました。また、自転車が下り坂でスピードを出しすぎて事故を起こす場合もありました。下り坂でスピードを出さないように気を付けるのは、本人の責任だと思います。

――その他、良かった点やお伝えしたいことがあればお教えください。

■需要予測に対する実測値

2006(平成 18)年、第 1 期第 1 陣の移転 1 年後に学生の通学交通手段の実態調査データを用いて、移転前の予測値と比較してみました。その結果は、自動車とバイクはほぼ的中していましたが、バスは予測よりやや少なく、自転車が多いという結果が出ました。交通需要の予測精度を確認出来てよかったと思います。

■移転第Ⅲステージ・文系農学系の移転

文系と農学系の移転時、朝の交通渋滞が心配でした。もともと、学生が朝 1 限目の授業に間に合わないのは避けたいと思っていました。2018（平成 30）年 10 月初日の朝早く、 1 時限目開始のまえから中央ゲート方面に向かって少しずつ自動車が増えてくる様子を観察しました。ヘリコプターのエンジン音も聞こえていました。報道機関のものではなかったかと思います。心配していた渋滞は起こりませんでした。これは、後期授業の開始前に、自動車の入構ゲート 3 箇所に分散して入講してもらうよう、教職員に伝達していたことが、効を奏したものと思われます。あくまで推測ですが、渋滞が発生していたら報道されていたかもしれません。長年取り組んできた対策が役に立ったと思うのと同時に、やや拍子抜けの感があったのを覚えています。その年度末、2019(平成 31)年 3 月に定年退職しました。移転完了時の交通状況を退職前に確認できてよかったと思っています。

■地域交通の維持を

地域交通は、交通事業者だけでは成り立ちません。自治体の補助金もないので、学生と教職員にバスをなるべく利用してもらうように誘導し、バス事業者との共存共栄を図る大学の姿勢が必要だと思っています。いろんな面から公共交通を支えることが望まれます。

外井哲志(といさとし、1953―):元九州大大学院工学研究院准教授。九州大大学院修士課程修了。建設省土木研究所勤務、1987 年より九州大学に奉職。博士(工学)。専門は交通工学、都市計画学。日本都市計画学会九州支部顧問・元九州支部長、元日本都市計画学会副会長。日本都市学会理事、九州都市学会会長。日本都市計画学会計画設計賞、日本都市学会学術共同研究賞受賞。

3.12 光井純 MCM設計共同体



光井純アンドアソシエーツ建築設計事務所㈱代表取締役
ペリクラークアンドパートナーズジャパン㈱代表取締役

日時：２０２２年５月 30 日（月）

場所：オンライン

聞き手：坂井猛　（九州大学キャンパス計画室教授）
孟柱燦、張煜嘉、萩原望（大学院人間環境学府修士課程）

光井純氏は、シーザーペリアンドアソシエーツジャパン（当時）の代表として、三菱地所、三島設計事務所と組んでMCM設計共同体として九州大学新キャンパス・マスタープラン 2001、工学系地区基本設計をまとめ、ウエスト 3，4 号館の実施設計、さらに、理学系地区基本設計に携わり、ウエスト 1 号館実施設計をまとめました。地域と大学が大きな期待を集める中で、新キャンパス計画専門委員会のコアチームメンバーとともに、尾根線に沿って建物を繋いでいく線形や周辺環境との関係を重視するマスタープランを定め、それから 17 年間にわたって実施することになりました。また、工学系と理学系の地区基本設計と実施設計で、キャンパスのプロトタイプをかたちにして示すという、重要な役割を果たしていただきました。（坂井）

■マスタープラン 2001 づくりから関わる

――まず、当時のお仕事の内容をお聞かせください。伊都キャンパスにどのような立場で関わられましたでしょうか。

マスタープランの公募型プロポーザル(コンペ) があり、シーザー・ペリと参加することになりました。アメリカのライス大学などの経験から、ペリ自身も参加に興味を持っていました。九州大学は法人化の問題を抱え、これまでの閉鎖的な雰囲気を変えていきたいという強い思いがあったと思います。渡辺定夫先生を中心に、文部省のキャンパスの専門の部署、建築学科の竹下輝和先生、出口敦先生など、色んな方々が参加されてマスタープランに新たな考えを反映しました。例えば箱崎では工学部は学科ごとに建物を持っていましたが、専門分野で孤立するのは良くないと考えていました。また学際的な学問分野が必要とされる時代であり、大学キャンパスを歴史環境、風景づくり、そしてまちづくりとして捉えることを重視していました。さらに、九州大学の先生方は研究者の間に競争原理の導入も必要であると考えていました。大学院生が増えてくると、活発な研究分野はもっとフレキシブルに、ある研究分野がしぼんできたら規模を小さくすればいい、という様に、柔軟にスペースの拡大・縮小を考えたいという議論がなされました。我々が提案したのは、一つ一つの建物をばらばらではなくひと繋ぎにし、工学部全体で塊を造るというものです。研究院、学部、学府を川の字スタイルで並べて三枚おろしにするということになり、それをデザインに落とし込んでいきました。

私の卒業した東京大学本郷キャンパスの場合でも建築学科は建物で完結しており、都市工学と積極的に交流することはなかったので、学際的に分野をつないでいく九州大学の考え方は先進的だと考えました。建物をどう活用するかは運営上の問題もありますが、少なくとも領域の殻を破っていくことは大変面白いと思いました。

キャンパス用地には豪族の古墳の跡が沢山あり、こうした歴史遺産をできるだけ守ると同時に、オオタカなどの生息する自然環境も守り、あわせて造成土の掘削量を減らすことなども求められていました。こうしたものに全く抵触せずに開発は出来ませんが、最大限の注意を払いながら、結果的には元の山の尾根に沿ってくねくねと有機的な形でまとめ、建物の設置面積をできるだけ減らして建てる計画となりました。九州大学の先生方には、自然の生物、地下水、植物等を調査する研究者もいらっしゃいました。実際に工事が始まると、土地造成をする時に古墳に触れてしまいます。工事関係者の中には、病気になる、気分が悪くなるという人もいらっしゃったので、この地区の神主にお祓いをして頂きました。驚くことにそのあとはあまり問題がなくなったと聞いています。霊験あらたか、由緒ある場所、よい場所だと思います

■ 工学系地区基本設計とウエスト 3，4 号館のこと



――私たちも、古墳は将来に引き継ぐとても重要な文化遺産だろうと思いました。マスタープランに続いて、工学部の設計ではいかがでしたでしょうか。

渡辺定夫先生と九州大学からマスタープランに引き続き工学系の地区基本設計を依頼され、プロトタイプをつくることになりました。このとき、基本的な構成原理を考えていました。三層構成をつくり、吹き抜けの縦方向に動線空間を配置し、学生の交流の場に光がはいってくるといったことを基本に設計を進めました。工学系の基本設計の後には、他の地区でも様々な設計事務所が参加されて、プロトタイプを基にキャンパス・デザインが進化していくことを期待していました。すべての建物が繋がることによって、否が応でも他の分野で学び研究している人々を見ることができます。例えば建築デザイン一つとっても、建築、環境、心理、色彩、健康、農業、空気、水など、あらゆることを考えなければならない時代になっています。学問領域を越えブリッジでつながり行き来できるようになり、学の殻を越えることはとても大事なことだと思います。

伝統的なヨーロッパの大学では、クアドラングルという形式で建物が中庭を取り囲み、空気が流れ、採光が取れる構成となっています。それぞれのカレッジで中庭を囲んで寝泊りし議論をした仲間が、卒業後も仲間として社会をつくっていくことになります。学生の活動が中庭を囲む構成は中世以来の伝統となり、アカデミックコミュニティを形成してきました。それが現代になると空調冷暖房が完備され、割と建築の自由度が上がり、色々な学科をまとめて含有することが可能になりました。学問を考え、学際を考えると全学が繋がっていくのが現代的なのだろうと思います。クアドラングルで形成されていたコミュニティが新しいキャンパスの中でどのようにアカデミックコミュニティをつくっているのか、見て議論し、啓発し合ってというのを目にしてみたいところです。

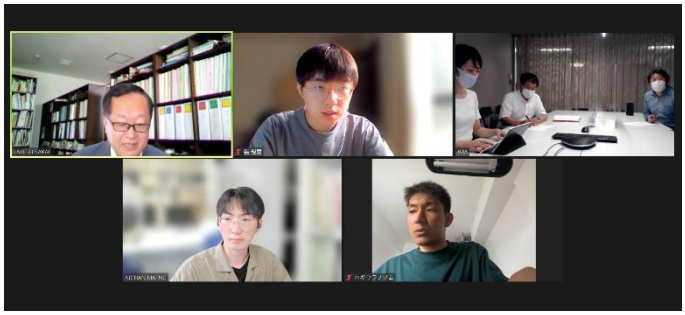
――工学系ウエスト2-4号館北側の配管（テクニカルシャフト）のことについてもお伺いしたいと思います。九州大学を目指す目指す高校生のモチベーションとして、工学系の北側にコルゲート管が並ぶ勇壮な姿を見てここで学びたいと思ったのですが、配管について、こだわったポイントをお伺いしたいのです。

工学系について先生方とは、研究院（オフィス）、学府（セミオフィス）、ラボスペースの三層構成、三枚おろしを軸に議論していました。常に改変が可能なラボスペースを時代の要請に合わせて変革させていくのが工学系の考え方で、必要性に応じて取り換えていく必要があります。空調機器や実験設備もどんどん新しく自動化され、コンパクトになっていきます。テクニカルシャフトの姿に魅力を感じていただいたということは大変嬉しいです。まさにそこは進化のプロセスが見える場所、変化する時代の技術が視覚化されて形態化している場所の代表のようなところです。研究室は先生方や学生、つまり人間が滞在するのであまり変えられませんが、ラボスペースは進化のプロセス、表情を取り換えられる場所、積極的に変わる場所として出来ています。工学系のアライバルポイント、バス停からのアプローチからもとてもかっこよく見えていると思います。

■理学系地区基本設計とウエスト 1 号館のこと

――学生のコミュニティという点でいえば、現在は、農学系のキャンパス・コモンに百周年の記念施設を設計することになり、学生や先生方と交流する機会が増えて居ます。続いて、理学系地区基本設計ではどうだったでしょうか。

理学系地区の基本設計は、山下設計と共同で進めました。センターゾーンから見上げる施設全体の顔であり、時代の価値に左右されない大学としての威厳を有し、大学の顔という言い方ができるウエストエンドの妻側のデザインはとても重



要でした。また教養部（基幹教育）の新入生が最初に滞在する場所でもあるので、学園生活を見守るタイムレスな表情が大事だと思っていました。イギリスのケンブリッジ大学、東京大学のキャンパスもそうですが、寄付施設も含めてこれからもキャンパスには多様なデザインが加わっていくものだと考えていました。タイムレスにいろんな学生を取り込んでいく場所として、学生も変わっていきますが、センターゾーンの黒川紀章さんのデザインは少しモダンに振れています。今後様々なデザインが加わっていくことを考えると、変わらない価値、表情、風格が大事だと考えています。大学は社会を進化させていく重要な使命を担っていますが、この変わらない価値を建物の外観で表現したいと考えました。

――理学系の上階妻側正面にガラスをはめ込んでいますが、この考え方について、お伺いしたいのです。ラウンジは使われる場所になっていて、好きな場所にあげている学生も多く、誇りに思っている人も多いようです。

キャンパス・モール側から見たときに、学生たちや先生方の活動が見えたほうが良いと考えました。大きなガラスの開口部を採用して、オープンで見晴らしの良いラウンジを造り上げ、学生や先生方の賑わいの見る、見られる関係を造り上げることはとても大事です。

■知恵を取り入れ進化を見込む

――仕事を進めていくうえで苦労した点、また、ここに一番こだわったという点、場所があればお教えください。さらに、施設を使う九州大学の学生にお伝えしたいことがあればお教えください。

大変多くの関係者がいらっしゃったので、色んな対立する意見も前向きに取り入れながら皆さんから一定の合意を得られるデザイン提案をすることはとても骨の折れることでした。しかし全ての意見の長所をなんとか生かしたいと考えていました。マスタープランは仕組みを作る状態、すなわち寸止めの状態で終わってしまうので、出来れば少しでも多く建物を設計したいと思っていました。一方で、大学キャンパスは巨大な施設、すなわち生き物であり、それを一人の建築家が造っていくと単調になるため、色々な方の知恵が入ったほうがいいとも思っていました。渡辺先生、竹下先生、出口先生、坂井先生など多くの先生方が関わられましたが、個々のデザインをどこまでマスタープランの枠から外していいのか、どの程度の多様性を許容して良いのか、縛りすぎてはいけない、かといって個性が強すぎてはいけない、マスタープランのデザインコントロールのさじ加減についてはとても苦労しました。多様なデザイン、多様な場所があって、素晴らしいキャンパスが実現できていれば良いですね。空間にフレキシビリティを持たせて様々な活動が啓発されていくと、キャンパスはまだまだ進化すると思います。

■思い出の場所になってほしい

――設計した立場から一番だという場所、施設を使う学生にお伝えしたいことをお教えください。

我々が大事にしたのは学生の相互交流でした。研究者に関する話では、競争力を上げてグローバルアトラスに乗せる、ということもありましたが、九州大学で学んで社会に飛び立つ学生を世界中で活躍する人材に育てるためにも、キャンパスがまず思い出の場所になってほしいと思いました。そして、なるべく他の学部や学科にいる学生と交流することができるような場所作りにこだわりました。授業の合間には、キャンパス・モールや木陰で立ち止り、友達と会話を楽しんだり、クラブで一緒に活動することによって、学生はどんどん仲良くなっていきます。キャンパスは、将来長く続く友達とのつながりを作る場所です。吹き抜け、ラウンジなどのインフォーマルな空間があちこちに埋め込められ、人が育つキャンパ



ス、気楽な気持ちで出会うことのできるスペースを出来るだけ沢山つくり、ヒューマススケールで座れる場所があることはとても大事です。有機的な形でくねっとまがる芝地などに百周年の四阿などが交流の場所になる。私自身も大学時代に一緒に勉強した友人とは今でも付き合いがあり、生涯に渡ってつながっていく人脈をつくったのが大学のキャンパスでした。よく訪れた場所、仲間と交流した場所で、自分の居場所を見つけることができたのだと思います。伊都キャンパスでは、そうした出会いを誘発する場所を沢山つくることにもこだわりました。会社に入ってからの付き合いはどうしても利害関係が働くこともあるので、卒業生同士が社会で連携し合うことや人との繋がりをつくることはとても大事だと思いました。みんなが集中できる場所、記憶に残る場所なども大事にしました。

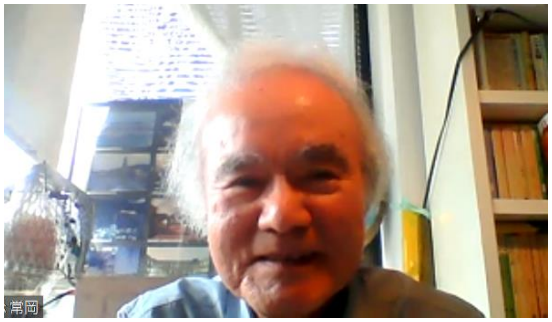
学生の一人一人がそれぞれ居場所を見つけて、自分なりに楽しんでもらいたいと思います。こちらで意図したことと、実際にどう使われているか、どこで出会いが発生しているかなどを学術的に分析していただくと今後のより良い場所のデザインにつながると思います。場所と人の行動はどのように関連しているのか、心理にどう影響を与えているかなどが見えてくると物理的に作られたものとのアタッチメント、記憶と物との関係を示すことができると思います。建物はある日突然なくなるとその場所に何があったのか思い出せないことがあります。物の上に記憶を存在させることからも、物に対する影響力は大切だと思っています。

――本日は、お忙しいところありがとうございました。

光井 純(みついじゅん):AIA 米国登録建築家、JIA 日本建築家協会登録建築家。1978 年に東京大学工学部建築学科を卒業後(辰野賞受賞)、岡田新一設計事務所で4年間勤務し、イェール大学建築学科大学院に進学。84 年に AIA 学生賞および最優秀作品賞(HI フェルドマン賞)を受賞。修士号取得。シーザー・ペリ&アソシエーツ(現ペリ クラーク&パートナーズ)米国建築事務所勤務。1992 年、シーザー・ペリ&アソシエーツ ジャパン(現ペリ クラーク&パートナーズ ジャパン)創立。現在、光井純&アソシエーツ建築設計事務所株式会社と両社の代表取締役。日米両国の登録建築家として国内外の様々なプロジェクトに取り組む。2007 年 AIA ジャパン会長。グッドデザイン賞、BCS 賞などを受賞。 https://www.jma.co.jp/

3.13 常岡 稔　黒川紀章日本設計共同体

㈱日本設計元九州支社長



日時：２０２２年５月２５日（水）

場所：オンライン

聞き手：坂井猛　（九州大学キャンパス計画室教授）

孟柱燦、張煜嘉、萩原望（大学院人間環境学府修士課程）

常岡稔氏は、黒川紀章氏と組んで黒川紀章・日本設計共同体としてセンター地区の公募型プロポーザルで選定され、新キャンパス計画専門委員会コアチームとセンター地区基本設計をまとめられました。センターゾーンは、文字通りキャンパスの中心部であり、九州大学の顔にあたる場所に位置します。新キャンパス・マスタープラン 2001 では、全学教育、今の基幹教育を学ぶ１年生の活動の場、生活の場として、また、隣接するまちとのかかわりが最も期待される場所として位置づけられていました。センター地区の設計に、著名な建築家であった黒川紀章先生とともに関わられた時のお話を伺います。なお、常岡氏は、前九州大学建築学科同窓会長であり、九州大学箱崎跡地利用将来ビジョン検討委員会 近代建築物調査ワーキンググループ長としてもお世話になりました。（坂井）

■センター地区基本設計

――――まず、当時のお仕事の内容をお聞かせください。伊都キャンパスにどのような立場で関わられましたでしょうか。

始めに私の略歴を簡単に紹介しますと、1943 年に長崎で生まれ、1963 年に九州大学工学部建築学科に入学し、1969 年に大学院修士課程を卒業し、日本設計に入社しました。日本設計では東京本社に勤務し、建築設計に携わっていました。1990 年に九州支社長として福岡に赴任した関係で伊都キャンパス移転計画に巡り会うことができました。

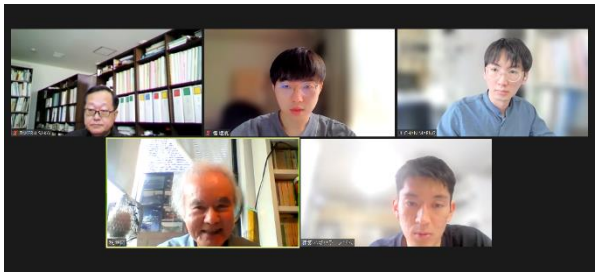
私たちが最初に移転計画に関わったのは 2002 年のセンター地区基本設計のプロポーザルで、黒川紀章・日本設計共同体として参加しました。幸い建設コンサルタント選定委員会で採用となり、その後センター地区基本設計を約 1 年かけて行いました。それは基本設計と名はつけられていますが、いわゆる基本設計の前段階の全体設計、概略設計です。その後、少し間をおいてセンター1，2 号館と事務局庁舎(現在のセンター6 号館)の 3 棟の実施設計が発注されました。私の立場は九州支社長として全体をマネジメントする役割であり、黒川紀章さんが全体のデザインを統括する役割でした。実質の業務は日本設計九州支社の岡村和典、笠継浩が主に行いました。

■キャンパス・モールとコミュニティプラザ

――――そのとき考えていたことと出来上がりで違ったところはありますか。

巨大なプロジェクトでしたので、大学の大掛かりな組織体制、複雑なプログラム、不確実な財政事情あるいは文科省の時別な考え方があり、実施設計の発注が細分化され、ばらついていたように思います。センター地区基本設計では、全体で約 20 棟、延床面積で 13 万 m2 を超える計画をしましたが、それから実施設計に繋がったのはこのうち 3 棟、延床面積で約 3 割に過ぎません。施設群でキャンパス・モールを囲んで広場をつくることを計画の骨子としていましたが、キャンパス・モールをイーストゾーンで受ける役目のコミュニティプラザおよびその周囲の建物の設計にまったく関与できなかったのが残念です。また、配置計画上重要な施設である大学博物館などはいつできるかがわからない状況でした。2022 年の今もまだ建設されていません。

■給水センター事件



――――業務を進めていくうえの課題や苦労話、よかったことなどをお聞かせください。

実施設計の発注が細分化されたため、基本設計の考え方を十分に完結できなかった面もありますが、このような巨大プロジェクトを一人で設計するのは、単調、均質、勘違いなどの原因となる恐れがあることから、目標が達成できる範囲であれば設計者を分割することに基本的には賛成です。しかし基本設計の主旨をどのように実施設計に継続させるか困難な問題が発生します。

マスター・アーキテクト委員会をはじめとして、学内にたくさんの委員会があり、最初は戸惑いましたが、様々な委員会はよくできていて、引き戻そうとする力が働く時の車止めになっていて、九大の場合は成功したシステムだと思いました。

発注がばらついたことで苦労したのは給水センターです。給水センターはセンター地区基本設計に入っていたのですが、最初に供用するため、先行発注がされていたらしく、ある時に施設部が給水センターの実施図面ができたと見せてくれました。見ると縦長の窓に三角形のペディメントがのる、まさにイタリアルネッサンス様式の重厚なデザインでした。なんの脈絡もないデザインであり、これは大変なことだと思ったので、黒川紀章さんにも報告し、了解を得て、越権行為だったかもしれませんが、施設部長のところに行って、抗議をしました。対案を求められたので、黒川さんと相談のうえ、窓をスリット状の横長にし、ペディメントを外し、シンプルなデザインにして、建物は盛り土でかくし、屋上を緑化した案を提出しました。その後、給水センターはその提案に基づいて変更されました。

――――　イタリアルネッサンス様式の給水センター案は、計画室スタッフの誰も知らないところで進められており、大事件になりましたね。私も話を聞いてすぐに当時の有川理事副学長のところに駆け込み対策を相談しました。センター地区基本設計の考え方を反映し、全体のデザインをリードするテイストで実現できることになり、結果的には良かったですね。（坂井）

■黒川紀章建築都市設計事務所との関係

――――　著名な建築家であった黒川紀章さんの事務所との関係はどうだったのでしょうか。

黒川さんは日本設計と国立新美術館の仕事を一緒にしていた関係で、センター地区基本設計でも組むことになりました。黒川さん自身はメディア型の建築家として有名でしたが、同時に反アカデミーの建築家でもあり、大学のキャンパス計画に実績が多い訳ではありませんでした。しかし私の大学時代のあこがれのスター建築家であり、ぜひ一緒にやりたいと思いチームを組みました。設計というものは、チームで意見を交わしながら進めていくものと思っていましたが、最初に黒川事務所で打ち合わせたとき、同席された黒川事務所所員は一言もしゃべらず、黒川さんがスケッチをされるまでなにもしない。まったくアプローチが違うことに驚きました。次第に黒川事務所のやり方にも慣れ、頻繁に打合せるなか、黒川さんとうまくコミュニケーションがとれたと思っています。黒川さんは福岡銀行本店(中央区天神)の設計をして以来、福岡へ来るのが好きでした。当時はすでに体調が悪かったらしい黒川さんを私は空港まで迎えに行き、以前銀行の頭取が連れて行ってくれたというバーを探したりしました。奥様の若尾文子さんとの馴れ初めやいろんなことをお聞きすることができました。黒川紀章さんは実施設計が終わった後、2007 年 10 月に死去され、楽しみにしていた伊都キャンパスを見ることはありませんでした。

■ユニバーサルレベル

――――　設計の立場から、ここはお薦め、というこだわりの場所があればお教えください。また、施設を使う九州大学の学

生にお伝えしたいことがあればお教えください。

地形の高低差、複雑さを読み取ることが重要であると考えていました。地上 3 階、標高 30m の水平ラインをユニバーサルレベルとして設定しています。コンケイブ（凹）型の地形に沿って移動するのではなく、東西を水平に上下のロスなく移動できるレベルです。センター地区の広場周りや建物を立体的に認知しやすいように、基準となるレベルの歩行者ルートを設定したわけです。なかなかうまくいった提案だったと思っています。理学系からセンター地区のキャンパス・モールを通り、あるいはキャンパス・コモンを見ながら、空中歩廊で学園通り線を渡り、イーストゾーンの図書館まで連続する。

■中心と周縁

――――― ユニバーサルレベルから見る景色は学生の人気になっていますね。その他にお伝えしたいことがあればお願いします。

九大の伊都キャンパスは郊外にあります。かつて 40 年ほど前、日本中の多くの大学が郊外に移転して立派なキャンパスをつくっていた時期がありました。20 年ほど前からは、それが逆に都心に帰って来ています。そうした状況の中で九州大学の移転計画は進められていました。「今さら郊外ですか、狂気の沙汰じゃないの」と言われました。

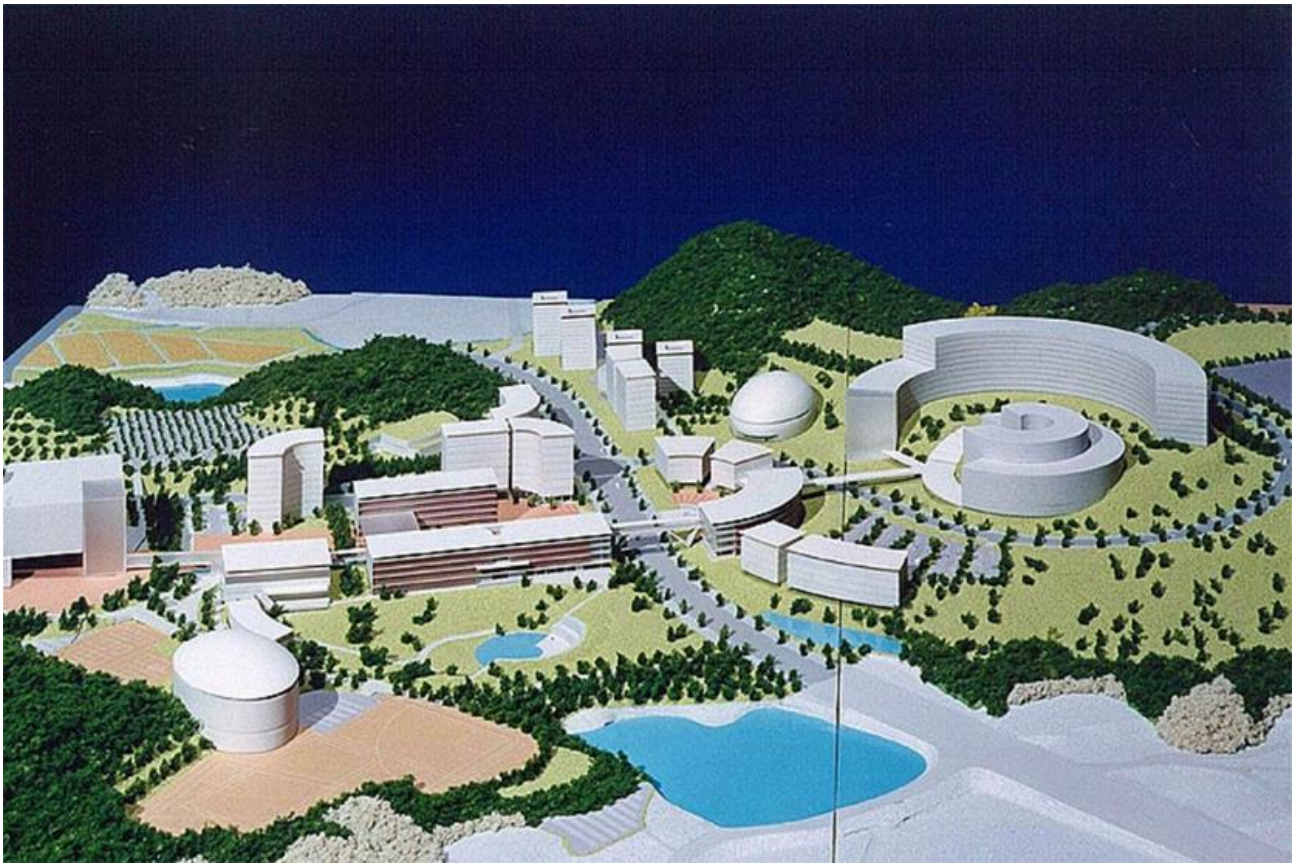
これまでは人が移動し集まって、建築や都市をつくることが社会の発展や人類の進化の成果だったわけですが、新型コロナウイルスパンデミックを経て、建築や都市およびそれがつくるコミュニティが否定されているようにも見えます。文化人類学でよく使う概念に中心と周縁という言葉があります。東京が中心であれば福岡は周縁です。福岡が中心であれば伊都は周縁です。コロナ後のいま、中心と周縁の境界、関係は曖昧になっています。周縁に移転してしまった九州大学が新しい、創造的あるいは野性的な周縁のあり方をつくりあげることができるのではないか、そうした期待を若い人たちに持っています。

つぎに、キャンパスの大部分ができてから思ったことですが、キャンパス・モールの西側を受けているウエスト 1 号館のファサードの対称性が強すぎて、キャンパス・モールが堅くなっているように感じました。

さらに、センター地区のキャンパス・モールを横切るグリーンコリドーはもっと木陰をつくり、モールを分節するくらいの多くの樹木を植えるべきだったと反省しています。

さいごに、設計者選定に当たって、九州大学の若い卒業生や教員にもっと設計のチャンスを与えていただきたかったと思っています。

――――― センター地区南側の2つの池の公園化に続けて、保全緑地から緑の回廊、グリーンコリドーをしっかり作りこんでいくことが必要ですね。土壌の問題でうまく成長しきっておらず、土壌改良も必要であり、課題とさせていただきます。多くのことをご示唆頂きありがとうございました。（坂井）



建築家　黒川紀章氏が新キャンパス専門委で説明

六月十三日（金）の新キャンパス計画専門委員会で、イースト・センターゾーンWG長の竹下輝和教授、建築家の黒川紀章氏、コアチーム長の坂井猛助教授が、センター地区基本設計の検討結果について、梶山総長をはじめ、出席した委員、関係者に説明しました。

黒川氏は、センター地区の設計を担当した黒川紀章・日本設計共同体を代表して出席したもの。「頂戴した様々なご意見を、定められた条件下で、ベストな状態で反映するのが建築家の役割」「開かれた九州大学を表現したかった」と前置きして、新キャンパスの顔となるセンター地区の基本設計を詳細に説明しました。

（詳細は、本誌十六ページのクローズアップ「タウン・オン・キャンパスの形成にむけて」をお読みください。）



委員会で基本設計を詳細に説明する黒川紀章氏

大広報第 30 号, p.27, 2003.7

3.14 能勢修治 石本建築事務所統括

石本建築事務所執行役員、プリンシパルアーキテクト



日時：２０２２年5月２４日（火）

場所：オンライン

聞き手：坂井猛　（九州大学キャンパス計画室教授）

張煜嘉、萩原望（大学院人間環境学府修士課程）

能勢修治氏の率いる石本建築事務所のチームは、農学系地区基本設計と文系地区基本設計という2つの地区基本設計に関わりました。農学系ではマスタープランの考え方を極めた提案を建築に仕上げ、文系地区は伊都キャンパスで5つめの地区基本設計として、5つのディシプリンが並ぶ施設群をまとめる作業を、柴田篤コアチーム長のもとで作業してまとめていただきました。能勢氏のチームが、プロポ時の提案を貫く意思を維持しつつ、分野の異なる多くの教員の強い意見を根気よく柔軟に吸収できたことが、イースト１，２号館と中央図書館における大胆な空間の実現に繋がりました。能勢氏の強い意志と柔軟なキャラクターがなければ、この困難な仕事はまとまらなかっただろうと思います。（坂井）

■農学系地区基本設計と文系地区基本設計

――当時のお仕事の内容をお聞かせください。伊都キャンパスにどのような立場で関わられましたでしょうか。

最初は、農学系地区基本設計、ウエスト 5 号館の設計に、統括というかたちで関わりました。そのあと、文系地区基本設計、中央図書館、イースト 1，2 号館の設計、これは複合体としての建物であり、両方とも統括という立場で参加してプロポーザルから参加しました。農学系は基本設計、実施設計とも携わることができました。文系は 5 学部のうちの法学と経済系のイースト 2 号館の実施設計に関わりました。イースト 1 号館はぎりぎりの点数差でプロポーザルに敗れたため実施設計はできませんでした。機会均等のために実施設計を分離してプロポを行うという文部科学省の方針でそうなりました。公募型プロポーザルによって設計者を選定した場合、基本設計から実施設計まで進むのが一般的ですが、文部科学省では基本設計と実施設計を分離して発注するのが基本となっています。注１）

■全体を繋ぐ

――業務を進めるうえでの課題や苦労話、よかったことなどをお聞かせください。

設計の最初に考えるコンセプトに関わる部分に、九州大学はマスタープランとして、教育の方針から空間の構成までを 2001 年につくられていました。その大元に、学府・研究院制度があり、大学院で教員と学生を分離することで専門にとらわれずに学際的な関係が生まれるようにすることが特色でした。大学院の専門で教員組織と学生の組織が１：１で対応するのではなく、ずれて対応できること、これを実際の校舎としてかたちにしていくときに、尾根に沿って校舎群を建てるというマスタープランの考えに沿って設計が始まりました。先行して建てられた工学系ウエスト２，３，４号館の構成も南北に重なるレイヤーでできていました。

農学系では学際的な交流を発生させることに焦点を当て、教員室と大学院生室を南からレイヤーとして配置し実験室を北側に配置しました。農学系実験室には化学系や生物系の実験室も多いため実験配管ダクト類を配置するメカニカルバルコニーを北側外壁に設けルーバーでカバーしています。ドラフトチャンバーにつながるダクトは屋上のスクラバーに繋がっています。農学系では、工学系よりもさらに３つのレイヤーを強調する形でまとめることができたと思います。妻側を見るとマスタープランに忠実な校舎ができています。低層部は講義室群で学部が使用します。



また、理学系はこの並べ方とは違っていたので驚いたのを覚えています。使い手である先生方の力、学部の力、と計画側のどちらを優先すべきなのかを疑問に感じていました。注 2)

進め方の話では、すでに大学でつくられていたマスタープンのもとで、地区基本設計のために組織された委員会（新キャンパス計画専門委員会のコアチーム）で進めていきました。農学系地区基本設計では、先生方はどちらかというと素直に案を受け入れていただいて進めることができました。

イーストの文系のほうは尾根の形がリニアになっていなかったこともあり、最初から考えなければならないところがありました。プロポーザルではマスタープランにあわせて実現すべきと思って取組み、リニア一な研究棟を提案しましたが 5 つのブロックに分節された校舎が繋がる形で文系は実現しました。文系地区基本設計では、文学部の柴田篤先生がコアチーム長となり、すべての学部から委員が出てこられ、各学部の要求を背負ってやってきておられる感じでした。地区基本設計に当たっては、文系地区の基本方針をまとめておられ、中には「各学部の独自性を反映する」という文言が入れられていました。リニアな案よりも 5 つのブロックを完全に独立して建てたいとのご要望が強かったのを覚えています。ある学部の規模が変化するときに変化できるようにしておくのがマスタープランの考え方になっていました。しかしながら、法学と経済からは静粛性を求められ、議論の末に、イースト 1 号と 2 号の間にブリッジを渡し、その分だけ連続性が薄くなっていますが、それで全体を繋ぐことができました。全体にわたって 1，2 階をインナーモールで結ぶことができ、5 つのブロックをつなぐことで、分野間のコミュニケーションを活発にできるようになりました。

各学部の面積は、学生と教職員の定員で面積が決まり、専用部分と共用部分が配分され割り当てられます。各学部をつないで造ると境界がわからなくなりますが、共用部を仲良く使えばいいじゃないか、と思って進めていたのですが、建築系の代表の先生の反対意見が大きかったのを覚えています。言語文化などは、学生がいないので面積的には不利になります。共用部を完全によそからとってきたものでつくるしかありませんでした。ブロックがつながっている中で各学部の境界を引いて面積調整が大変でした。

■学府研究院制度の空間化

――基本設計でやりやすかった点などはありますでしょうか。

九州大学が導入している学府・研究院制度により、教員の「研究院」と学生の「学府」が 1：1 の対応ではなくなったことはよかったと思います。学部ごとに棟にするという強い意見がありましたが、これに対抗する力になりました。中央図書館の検討委員会は、各学部を代表する委員会になっていました。蔵書が多い法学、経済学、人文学が、図書館との距離、アクセス性を重視しておられました。それで、法学、経済学系の特別なアクセスが用意されました。人文も B1F エレベーターホールから中央図書館にショートカットできるように何千万円かかけてトンネルをつくりました。

■インナーモールと中央図書館の吹き抜け

――設計された立場から、ここはお薦め、というこだわりの場所があればお教えください。また、施設を使う九州大学の学生にお伝えしたいことがあればお教えください。

文系は 5 つのブロックが重なっていて、外観を決める過程も大変であり、多くの意見を吸収する過程で特色が薄れたかもしれず、そうでなければインパクトのあるデザインができたのかもしれません。インナーモールは、交流を大切にするマスタープランへの回答にもなっていると思います。図書館は 20m の吹き抜けが大地の斜面に埋め込まれていて、吹き抜

けから 250 万冊が一望できるのは迫力があり図書館の一番の特色でしょう。設計監理にかかわれなかったため、ディテールが簡略化されたところがあり、細かいところまで詰めができなかったのは残念ですが、吹き抜け空間の書架や全体の構成は日本一の図書館にできたと思います。農学系で、研究院、学府、ラボ空間の 3 層のヒエラルキーができているのも大きな特色と思います。

■植栽の管理を

――その他、お伝えしたいことがあればお教えください。

今年 5 月の連休に、親を連れて九州を見て回りましたが、伊都キャンパスにも訪れました。そのときに気になったのは植栽であり、芝生の部分が草むらになっていました。持続的な環境をつくるために、学生グループで手入れするようなことができないでしょうか。ボランティア活動などで施設周りのランドスケープを守ることができれば良いと感じました。

――そうしたグループが糸島空き家プロジェクトなどのように、建築学科から生まれるといいですね。

また、イーストゾーンのインナーモールが殺風景なので、ストリートファニチャーを並べるなど、空間づくりに建築がかかわってもいいのではないかと思っています。建築学科で家具を作る授業があるそうですが全部でなくていいが、インナーモールに永久保存を決めたりしてできるといいですね。

――今日はお忙しいところありがとうございました。

注）

1） 設計者は他者がまとめた基本設計を、実施設計だけ受けてもモチベーションが上がらない。発注の方式は課題の一つとなっている。

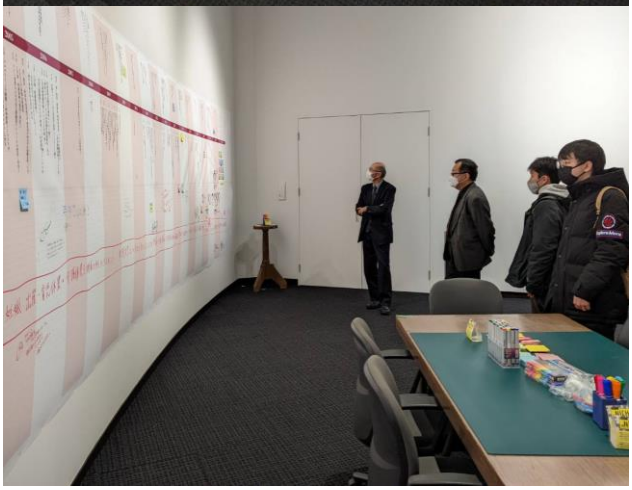
2） ウエスト 1 号館は教員、大学院生、実験施設のグループをひとまとまりにしている。理学系では危険な実験の多いことを理由に、理学系分野の研究教育スタイルを尊重していることから他の研究教育棟の配置計画とは異なっている。

能勢修治（のせしゅうじ）：㈱石本建築事務所執行役員、設計部門プリンシパルアーキテクト。1983 年早稲田大学理工学部建築学科卒業、1985 年早稲田大学院修士課程終了、1985 年 4 月㈱石本建築事務所入社。専門領域は、劇場・会議場／図書館／美術館／博物館・資料館／屋内体育施設／大学・各種学校／事務所／庁舎／中高層住宅。受賞履歴として、2015 グッドデザイン賞 （東邦大学習志野キャンパス スポーツアリーナ）、2014 グッドデザイン賞（早稲田大学中野国際コミュニティプラザ）、2013 平成 25 年度木材利用優良施設 林野庁長官賞（飯能市立図書館）、2012 グッドデザイン賞（大正大学 3 号館）、2010 GREEN GOOD DESIGN 2010 THE WORLD`S LEADING SUSTINABLE GREEN DESIGN（カマン・カレホユック考古学博物館）、2009 第 50 回 BCS 賞（沖縄県立博物館・美術館）、2009 日本建築学会作品選奨（沖縄県立博物館・美術館）、2009 日本建築家協会賞（沖縄県立博物館・美術館）、2008 グッドデザイン賞（沖縄県立博物館・美術館）など。

3.15 近藤昭夫 施設部長

元九州大学施設企画課長、施設部長、株式会社竹中工務店





日時：２０２２年２月１５日（火）
場所：フジイギャラリー
聞き手：坂井猛　（九州大学キャンパス計画室教授）
　　張煜嘉、萩原望、孟柱燦（大学院人間環境学府修士課程）

近藤昭夫さんにフジイギャラリー展示模型に寄せられた多くの意見をみていただき、伊都キャンパス移転計画作成当時を振り返ってお話を伺いました。近藤さんは、施設部の企画課長として4年、施設部長として3年、合計7年間にわたって、伊都キャンパスをはじめとする九州大学のキャンパスづくりに携わってこられました。

■土地造成から始まった移転

――まずは、最初に関わられるようになったころのお話しからお聞かせください。

初期のキャンパス用地をまわるときは、長靴が欠かせませんでした。長靴を履いて敷地を歩いてまわり、如何にして自然を守るか、共存させるかを皆で考えていました。また、土地造成や建物建設を予算内にどうやって収めるかについても大きな課題でした。

■寄附による建設

――当初は、箱崎と六本松の売却益で得た文部科学省の予算を使って新キャンパスを建設するというスキームで始めましたが、1990 年代にバブルがはじけて理想通りには行かなくなり、2004 年には国立大学が法人化し、経営を自分たちで考えるようになって、柔軟に予算獲得を進めなければならなくなりました。学内外からの寄附集めも欧米の大学のようにするようになりましたね。

卒業生や著名人が九大に寄付をしていただきました。寄附されたみなさんは、学生のためならば、と快く寄付をしてくださり、九大内で稲盛財団記念館、椎木講堂、亭亭舎などの建物を、寄附で建設することができました。稲盛和夫氏から贈られた稲盛財団記念館は、始まりから関わったこともあって、特に思い出深いものがあります。

■地域と大学との隔たり

――周辺にお住いの方々との関係はどうだったでしょうか。

周辺地域の皆さんと大学人は、多くのコミュニケーション、飲み会を重ねてはいましたが、どうしても地域の住民からすると、昼間の大学は敷居が高く、入りにくいものです。ゲートや柵などのセキュリティー上必要な装置があり、オープン

キャンパスという言葉から若干遠いものがありました。「あかでみっくらんたん」ができると、学生、教職員だけでなく、地域の住民の方々も集まってこられ、いろんな意見が交わされてよかったと思います。



――まちづくり会議の後には、会場のビッグオレンジからわざわざ歩いて行って、議長だった有川副学長もあとで合流された工学部長も、地域の皆さんや学生とみんなで飲んで語っておられましたね。

■飲食を通じたコミュニケーションの場

――九州大学における施設整備の全体をみる立場として、このキャンパスでどの点を重視して取り組まれましたか。

旧キャンパスにあった木造の交流施設、六本松の「亭亭舎（ていていしゃ）」、箱崎の「三畏閣（さんいかく）」は、学生にとっての集会としての場は貴重な空間でした。日頃から、飲み会を通してコミュニケーションを取るのがお互いの気心を知ることができて一番良いと思っているのですが、これは、伊都で建設した「あかでみっくらんたん」における大学と地元の交流においても同様でした。箱崎の交流施設「三畏閣」も移設が出来れば良いと思いましたが、予算がかかるので断念しました。六本松の思い出を引き継ぐかたちで、卒業生有志と生協の寄附で亭亭舎を建設できた意味は大いにあったと思います。

■六本松からの移転

――工学部の移転に続いて、六本松から１年生がやってくると、ずいぶん状況が変わってきましたね。

六本松キャンパスは、元は「教養部」と呼ばれ、１年生が通う活気に満ちた場所でした。今は基幹教育と呼び、学生生活の基盤となる大事な時期にあたります。当初は、六本松を箱崎に一度移転させ、糸島に十分な受け入れ態勢をとってから、伊都に再度移転させるという計画でした。１年生には、いち早く伊都キャンパスに来てもらって、伊都という地を知り、慣れ親しんでもらう必要性を学内で感じるようになりました。そのため、当初の予定を変更し、六本松から直接伊都に移転させることになり、その作業に関わりました。元気な１年生が早い時期に伊都に来ることで、糸島半島全体に活気が出てきて知名度も増していきました。

■ウエスト１号館・理学系

――理学系の入居するウエスト１号館は最も目立つ建築ですが、これにまつわるエピソードをお聞かせください。

理学系の建築の概要を決めた理学系地区基本設計の会議はとても思い出深いものがあります。渡辺定夫先生、東京大学名誉教授に計画の節目節目に監修を依頼して進めましたが、ペリ事務所のつくった模型を見せたら一部をその場で壊され、こうしたほうがいいという意見とともに直し方を指示されました。そうやって場面で見ていただき、必要に応じて修正していったのは、当時は大変でしたが、今となってはいい思い出になりました。センターゾーンからの見え方を重視して、シンメトリーにデザインをつくりかえ、東側正面中央部には学生の学習室を設け、活動が見えるようガラス張りのデザインを設えました。ウエスト３，４号館（工学系研究教育棟）では、学府の空間と研究院の空間、つまり、学生と教授の部屋は離れていますが、理学系は安全面から教員が学生と実験室の近くにいるような配置にして、シンメトリーに構成したファサードとともに、理学系の研究教育スタイルを表すことになりました。

――渡邉先生のところには何度も足を運び、東京大学本郷をはじめとする全国で手がけられた都市計画とキャンパス、建築のことを酒の席でもご教示いただき、実に多くのことを教わることができてよかったですね。



■大学内飲食店の誘致

――当初の計画に比べて、キャンパス内で飲食できる場所がずいぶんと増えましたね。

飲食店の誘致には特に力を入れました。パン工房、イタリアン、ハンバーガー、コーヒーショップなど、バリエーションをもたせることは、学生の食事の選択肢を増やし、多様性を持たせることになりました。しかしながら、大学の店舗営業は売り上げが見込めないため、なかなか誘致に応じていただく店側が見つからず一苦労しました。「あかでみっくらんたん」の運営主体が民間から生協に代わるなど、その後の動きも出てきました。せっかくこれだけのバリエーションを持たせましたので、飲食の場がみんなのニッチの場所になってほしい、という気持ちがあります。

■東西をつなぐゲートブリッジ

――キャンパスに来ると最初に見えるゲートブリッジが印象的ですね。

建築家の黒川紀章先生が関わったセンター地区基本設計に原型があります。敷地が東西に長いことから、計画されていた学園通り線で敷地が分断され、いかにして道路を渡るかが課題となりました。この課題に対して、伊都キャンパスでは橋を架けることになりましたが、少ない予算で雨に濡れない空間を実現するのは、かなり苦労しました。

■椎木講堂

――椎木正和様にご寄附いただいた講堂が早期にできることになりよかったですね。

椎木講堂は、3,000 人収容の大規模ホールと大学本部の機能を有する建築です。円形形状からくる構造の課題、教室としても使える分割教室をつくりだすための費用が課題になりました。構造の課題に関しては、川口衛先生が構造設計を担当されました。意匠設計をした建築家の内藤廣先生の構造設計支援だったのですが、このプロジェクトに携わっていただけたことに驚いた記憶が残っています。

■産学連携施設

――工学系には、水素、有機 EL の分野で有力な先生方が研究所の建設予算も獲得され、これもごく早い時期に、センター地区の産学連携用地に研究所が建つことになりましたね。

研究所予算を外部から持ってこられた先生方の構想では、第一研究棟が離れ小島のように連絡橋だけで繋がれた独立した建物になる予定でした。しかし、それは新キャンパス・マスタープラン 2001 で考えられていた連続したキャンパス構築によって移動しやすくして学際の発想を誘発する機会を作り出すという考えに会わなかったため猛反対をしました。結果として、センター３号館に連なる形で建設されてよかったと思います。

■イーストゾーンの工夫



――イーストゾーンについてはいかがでしょうか。

近藤　全体構成を決めた文系地区基本設計では、各学部の独立した建物を主張される部局がありました。文系は１つ１つの部局が小さく、これらをばらばらに建設することは、キャンパス・マスタープラン 2001 以来の構想で打ち出した異分野間の連続性と学際誘発の思想が実現できないことから、建築を連続させながらも、まるでそれぞれの学部がそれぞれの建物を有しているかのようなデザインに誘導することができました。

――地区基本設計のコアチーム長をされた柴田篤先生（元人文科学研究院長）のリーダーシップは大きかったですね。

■キャンパス全体の魅力

――伊都キャンパス全体をどのように思っておられますか。

キャンパスの施設群が元の尾根線に沿ってキャンパスを形成している姿をみた受験生や来訪者からは、こんな魅力的なキャンパスはないとよく言われます。ぜひここで勉強に励みたいと思っていただけるキャンパスになったと思います。部分的には、円弧が内部の室構成に影響して使いづらいと言われる建築もありますが、他のどこを探してもこんなに快適性を追求したキャンパスはないと思います。

■マスタープランがしっかりしていた

――施設建設には、発注手続きなどでかたちに残らない多くのご苦労があったと思います。

広大なキャンパスには多くの建物が建ち、しかもその建物毎に計画者や施工者が違い、これをまとめていくのは大変です。しかしながら、事前に時間をかけマスタープランというかたちで基本計画をしっかりと練っていたからこそ、皆さんが好き勝手なことはされず、全体として統一感のあるキャンパスになったと思います。私がそれまでに携わった大学では成しえなかったことでした。

――国内では、マスタープランに沿ってキャンパスづくりを進めていた筑波大学と北海道大学の先例はありましたが、これだけ多くの学内外の専門家と教職員、学生が、敷地調査とマスタープランづくりに関わり、土地造成から建築デザインまで、様々な場面で研究者の知見を取り込む機会と仕組みをもって大々的に進められたのは、九州大学が初めてだったようですね。

■移転期間が長かった

また、伊都キャンパスの建設の特徴として、移転期間が長くかかったということもあげられます。実際、筑波大学の２倍近くの期間をかけていました。各ブロックの建物の完成時期をある程度ずらしたことにより、更新時期をある程度分散することができるようになりました。

――文部科学省は九大の移転の他にも多くの他大学のために建設予算を使わなければならず、一気にキャンパス全部をつくりあげる予算は配当できない事情もあったようですが、結果的にはそれが幸いしたというわけですね。

■未来を予測

移転計画期間が長いと、時代の変化に対応しないといけなくなり、当初のプランからの変更を余儀なくされるのではな

いかと思われがちですが、九州大学の伊都キャンパスの計画では、未来を予測した計画ができていたと考えます。特に、戦略的に使える余地を残して全体を決めていたことは、結果的に水素系や有機 EL 系その他の建物を建てることに繋がりました。戦略的用地のスペースがなかったら日本は水素研究の分野で世界に後れを取っていたかもしれません。



――当初から大きくぶれることなく計画を遂行して完成できたのは、歴代の総長、副学長と施設部がマスタープランを拠り所として、その時その時のつくり方を上手に準備し、うまくコントロールできたことに尽きると思います。

■課外活動施設の課題

キャンパスでは、部室棟でバンドが演奏していたり、その下のピロティで楽器を弾く姿などがみられたりします。バンドマンのための演奏スタジオや、書道の和室など、魅力的な場所をもう少しつくってあげたかったですね。

――学生の課外活動のためのスペースが十分でないことは、課外活動が活発になればなるほど重視しなければならない課題の一つになっていますね。

■調整池を公園に

センター地区の調整池周辺には、桜の木を植え、着座できる石材をおいて、憩いの場所になるようにしました。しかし、現在は柵で気軽に行けるようにはなっていないため、活用はあまりされていません。

キャンパスの入り口でもあるので、調整池のエリアが、関係者にとっての共有の公園になればいいですね。社会に開かれたキャンパスをさらに地域に繋ぐことになると思います。公園で演奏したり休んだり遊んだりできるようにつくりこむと、さらによい空間になるだろうと思います。これは今後の楽しみです。

――隣接地で地元が管理している大坂池と一緒に整備すると、伊都キャンパスのお迎え空間として、さらに良い設えができますね。

■他の大学への良い影響

伊都キャンパスが建設されると、マスコミでも大きく取り上げられました。どれだけ影響したのかはわかりませんが、周辺の大学でもキャンパスを良くしようという動きがみられるようになりました。九州産業大学でも、広場等のオープンスペースを整備し、体育施設をアリーナとして再生しています。九州大学施設部に在籍したことのある職員が九州産業大学の担当者として関わっており、九州大学で培ったノウハウが活かされています。今後も、九州大学のキャンパスづくりが起点となって、多くの大学キャンパスが良くなっていくことを期待しています。

3.16 廻正弘　施設部企画課長

元九州大学施設部企画課長, 沖縄科学技術大学院大学 OIST 施設管理部



日時：2022 年 3 月 12 日（土）
場所：オンライン（Zoom）
聞き手：坂井猛　（九州大学キャンパス計画室教授）
　　孟柱燦、張煜嘉（大学院人間環境学府修士課程）

――坂井です。ご無沙汰しています。OIST ではお世話になりました。伊都キャンパスに経済学部卒業生からの寄付を受け、椎木講堂横にギャラリーを開設しました。キャンパス関係の展示を開催しましたが、その一環として、学生と関係者へのヒアリングをしています。九大施設部 OB で長く伊都キャンパスに携わった方として、お忙しいところ恐縮ですが、ご協力をお願いいたします。

■九州大学の移転に関する仕事と現在の仕事

――まず、伊都キャンパスの施設整備では、どんなことに携わりましたか。

係長から課長までの長期にわたって九州大学の移転に関わりました。まず、マスタープラン建設コンサルタントの選定作業があり、その後、地区基本設計の選定に携わりました。マスタープランの設計費の根拠作成は、文科省にとっても初めての経験でした。設計者の選定方法をプロポーザル方式で行い、選定委員長には、渡辺定夫先生に委員長をお願いして進むことになりました。幅広い意見を求める必要から、全国的に有名な先生方に委員となっていただきました。土地造成では、福岡市土地開発公社、三菱地所設計の土木チーム、学内委員会、埋蔵文化財、環境保全に関わる WG との関係などとの共同作業を通じて、多くの皆様と連携する経験をしました。文科省の予算要求の担当も主担当となって行いました。文科省八の日会という予算の方針を決める文科省文教施設系の重要な会議に毎年かけて、九州大学に対する厳しい指摘も受けつつ、最初に決めた目標に向かって最大限努力してきました。

――特に記憶に残ったことはありますか。

記憶に残るのは、財務省に出す要求締め切りであり毎年 8 月のお盆に休むことができませんでした。日曜午後、上司の課長、補佐は文科省に入り、検討は深夜から月曜朝まで続き、結局日曜の短パンＴシャツ姿で平日を迎えタクシーで着換えに帰ったこともありました。学内の専門委員会メンバーとの協議で要求資料を作成したことは、九大ならではの作業だったと思います。地区基本設計の策定プロセスも大きな経験になりました。建物の実施設計の前段階として、基本的な条件をまとめることに神経を使いました。部局代表の先生方と条件を決める作業をして、ときには喧嘩に近い状態になることもありました。実験室ひとつに数時間をかけ、最終電車に間に合うかどうかを気にしつつ、切羽詰まった協議を毎日繰り返していました。また、伊都キャンパスでは、工学系半分の建物ウエスト 2 号館を文科省で最初の PFI 事業の 1 つとして実施しました。工学系独立施設群の PFI も事業化されました。学生宿舎も一部独立採算のある PFI を実施することができました。ウエスト 1 号館理学系では、文科省の予算から外したスペースを収益によってまかなうことを目指しました。

――現在の仕事は、どんなことに携わっておられますか。

現在は、沖縄科学技術大学院大学にいます。私立大学ですが国の補助金で運営する大学で、内閣府が所掌し、予算要求などでは財務省に説明するなど、国立大学で経験しない内容を経験しています。恩納村や沖縄県との折衝も行います。当

初、シーザー・ペリや日建設計によってまとめられたマスタープランを 2 年前に更新し、ノースキャンパスのマスタープランを策定しています。現在は、ヒアリングを行って民間各社の感触を分析しているところで、国立大学にいたときと同じような経験をしています。新たなキャンパスハウジングの整備について、PFI 事業として企画段階から運営まで携わっています。海外出身の学生と教職員が多くいますが、コロナ禍のため、他大学と同様にまだ学生・職員の入国が進んでおらず、ようやく 50 人が来ることになりました。

―― 伊都キャンパスでは、マスタープラン通りにつくることができたと思いますが、キャンパス周辺で進める必要があるのは、どんな点でしょうか。

OIST でも周辺で門前町構想を地元自治体と進めようとしていますが、なかなかうまくいかないところはあります。九州大学の周辺施設も充実していたとは思いますが、福岡市と協力し、まわりに協力してもらい応援してもらうことが大事だろうと思います。そのためには、大学側からアピールしていくことが大事だろうとおもいます。

■お気に入りの場所

――施設を整備する立場から、伊都キャンパスづくりの思い出深い場所や場面、ご自身のいまのお気に入りの空間があればお教えください。

特にマスタープランの策定は思い出深いですね。専門教員の先生方と委員会、WGを通じて、九州大学の総意としてまとめることができました。いろいろな大学のマスタープランを見る機会がありましたし、建築の学生と模型作りの経験もしました。先行事例の視察に行き苦労話を聞くことも良い経験でした。里山計画をしている金沢大学、学術研究都市をつくりだした筑波大学、オーストラリアの大学などを訪問し、先進的な取り組みを目の当たりにしたことが、伊都キャンパスづくりに繋がりました。埋蔵文化財の開発では、文系地区イースト 1，2 号館の造成地に前方後円墳を残すことは障害となったことから、記録保存して開発造成することになり、考古学関係者に約束したうえで、展望展示室の実現のきっかけを作るなど、全国にない経験をすることができたと思います。

――伊都キャンパスで具体的に気に入った場所があればお教えください。

最初から手掛けているので全部と言いたいですね。工学系も、センター地区も、地区ごとに特性があり、どこにも思い入れがあります。

――海外の事例からは、どのようなことが実現できたか。

セキュリティポールは実現できたことの一つです。セキュリティポールまで行けばキャンパスポリスが駆けつける、伊都では守衛が駆けつける仕組みが導入できました。また、駐車場運用の仕方も便利なところは駐車料を高くするシステムや、3 人で乗ってくれば入構を無料するなど、ストレートに運用に結びつきませんでしたが、交通計画WGで真剣に議論していました。

■これからのキャンパス整備

――キャンパス整備では、これからどんなことに力を入れていったらよいと思われますか。個人のご意見をお願いします。

OIST の施設は 10 年が経過しました。建築は未だ新しいのですが、LED が出たての初期の製品だったためにすでに更新時期を迎えていることなど、設備関係に不具合を起こしています。照明機器の 8 割が LED 装置であり、照明球替えではなく装置自体を代えなければなりません。当初の製品が特注だったので高価なため、更新費用をなるべく安くする必要があります。過剰なグレードをそぎ落とし、機能性とのバランスをとる必要があります。今後 20 年間、年間に数十億円をかけて、改修していく必要があるので、現在、内閣府と打合せをしているところです。また、マスタープラン時代に続く後進の方針が問われているところです。九州大学伊都キャンパスも、設備機械系の修繕費を考えて将来のことを考え、方

針として性能からサービスまでを検討し、今後の伊都キャンパスで整備する方針をたてていく必要があるものと思われます。スペースチャージなど、床面積を有効活用する視点で、更新していく必要があります。青森県の施設マネジメントが参考になっています。こうしたことが、これからかなり重要になってくることは、九州大学も OIST と同じ状況だと思います。沖縄県全体の予算も削減されており、簡単に拡大する速度を維持できないでしょう。

――整備する立場から、予算面が大変なことが分かりました。コロナ禍から変わったことはありますか。対面でなくオンラインが多くなり施設の使用率はどうでしょうか。

ハード整備では、あまり大きくは変わらないだろうと思っています。民間のオフィスが変化しつつあるように、大学施設も以前から導入していたリモート機能との組み合わせが必要になってくるかもしれません。

――施設を整備する立場と、学生の立場で異なる点はどんなところにあるでしょうか。また、設計施工において、ユーザーにコンセプトや情報が伝わっていないことに対する改善することは何かあるでしょうか。

施設計画をすすめるときに両者の間を埋めていく必要があります。施設部としてはコストを重視し、説得する立場としてすすめていく必要があります。また、コンセプトから細かい点まで、代表の先生方と議論したので、それが伝わるだろうと思っていましたが、完成・引き渡し時の使い方の説明が十分ではなかったようです。使う立場の皆さんに伝わるように、キャンパス計画室のホームページに公開されているような過去の検討内容をオープンにして周知すること、全学科目「伊都キャンパスを科学する」のように主要な点を講義することなどを続けることが必要だと思います。丁寧な説明、情報開示が必要だろうと思います。

――省エネルギー、スマートシステムの具体的な方法についてコメントをお願いできますか。

OIST でこの方面のことは、かなりとりいれた最新鋭のものになっています。しかし、今、本当に環境に貢献できるものになっているかを点検しています。使う側が意識しないといけないものもあり、途中から設計変更してお金をかけない省エネルギーへの変換をしかけています。お金をかければすごいものができますが、意識を変える必要があります。独立採算できる他の取組み、プロバイダサービスなど、効率化されたことを積極的にやったほうがよいと思います。

3.17 松下栄司 施設部施設企画課長

長崎大学施設部長



日時：2022 年 3 月 4 日（金）

場所：パブリック 2 号館

聞き手：坂井猛 （九州大学キャンパス計画室教授）

張煜嘉、萩原望、孟柱燦（大学院人間環境学府修士課程）

■これまでの経歴

――まずは、松下課長がこれまでに施設部でどういったことに携わってきたかお聞かせください。

私の伊都キャンパスとのかかわりは、平成 8 年からです。当時は、造成基本計画が大きく見直された時期でした。というのも最初は思い切った造成が計画されていましたが、湧水源のある沢地を残すなどの見直しをしていました。途中 2 回ほどの転勤で他の大学にいましたが、九州大学では、マスタープランをはじめ多くの計画と整備に関わり、トータルで 18 年間、九州大学に関わっています。深く携わった建物は、理学部棟、農学部棟、文系棟の計画です。また、ウエスト 1 号館、 2 号館、ビッグとら、ドミトリーは、PFI 事業でした。ウエスト 2 号館は、大学で初めて PFI 事業を行った建物であり、私はその担当でした。さらに、実施設計関係では、椎木講堂、稲盛財団記念館、総合学習プラザ、フジイギャラリーといった建物に携わりました。

――結構いろいろと関わることになり、大変でしたね。

そうですね。振り返ってみると本当にたくさんのことに携わったなと思います。

■大学として初めて行った PFI 事業

――今まで多くのことに携わってきたということですが、その中でも思い入れのあることは何でしょうか。

キャンパス移転プロジェクトはとても規模の大きなものですから、多くの先生方が携わり、一緒にやってきました。その中でも私達施設部の職員は、実務的な役割が多く、予算編成が大きな役目の一つでした。これだけ大きなプロジェクトなので、文科省との交渉は特に大変です。というのも、伊都キャンパスをつくるための費用は箱崎・六本松キャンパスを売り払ったお金で建てるのですが、先に売るわけにもいかないので文科省に準備していただく必要があります。そのため、キャンパスが新しくなることで、実現することのできる新たな研究の必要性を文科省に伝え、協議するのが私たちの重要な役目です。やはり、PFI 事業を最初に行ったウエスト 2 号館は、思い出深い建物の一つです。

――ウエスト2号館で大学として PFI 事業を初めて行ったとのことですが、具体的にはどういうところで苦労されましたか。

PFI 事業の手順は、ある程度は文科省や国交省の方で既に確立されていました。しかし、それを大学で行うということに関しては、新たな基準作りをしないといけませんでした。そのため、一つ一つ自分たちで考えなければならず、かかった時間と作業量は膨大でした。

――そもそも大学で PFI 事業をやるきっかけは何だったのでしょうか。

社会情勢として、国の政策でPFI事業を積極的に進めていこうというのがあり、それが大きな理由にはなります。ちょうど文科省が大学でも進めていくということで募集がかかっており、九大は移転事業を進める必要があり、立候補しました。



――大学の今後の在り方として「社会に開く」ということがあげられますが、新しい試みでもあるPFI事業は、それに通ずるものがあるのでしょうか。

そうですね。従来は、設計事務所、施工会社とだけの付き合いだったのが、店舗事業者、維持管理業者、銀行など多くの方と関わる機会が増えたので、そういった意味では民間事業者と大学との関係の幅は広がっていますね。

■環境とキャンパスの共生

――その他にも苦労されたことってありますでしょうか。

自然が多く、埋蔵文化財が多く眠るこの環境は元岡ならではのものですので、環境とキャンパスとの共生は大きな目標でありました。共生を実現させる施設をつくるために、他のキャンパスにはない考え方をここでは求められましたね。

――実際にキャンパスが完成して、それら当初の考えは達成できましたでしょうか。

そうですね、途中転勤のため陰から出来上がっていく過程を見守っていたのですが、3年前久しぶりに九大に戻ってきて実際に働いてみると、本当にここまでよく出来たなと実感しますね。

■他大学と伊都キャンパスの違い

――他大学の施設部も経験して感じた伊都キャンパスの良い点とは何でしょうか。

伊都キャンパスは、計画のベースとなるマスタープランをしっかりと作成したうえで造っていったのですが、これは当時の日本では、事例の少ないことでした。こうした基礎をしっかり計画している点は、伊都キャンパスならではと感じます。

――近藤元部長も、伊都キャンパス移転が成功したカギはマスタープランだと仰っていました。

そうですね。当初のプランでは、先生方をはじめ、多くの方々から知恵を頂き、未来のキャンパスの在り方として学部を超えた交流が必要だということで、土地の形状との整合を図りつつ施設の連続したキャンパスを形成するコンセプトが出来上がりました。このコンセプトは当時としては珍しかったと思います。

■現在の取り組み

伊都キャンパスは完成しましたが、これからも微修正をしていかないといけませんし、地域社会に開かれたキャンパスはこれからもさらに実現していきたいことの一つです。ただ、九大には伊都キャンパスの他にもキャンパスがあり、老朽化がかなり進行しているので、今後はそちらにより注力していくことになります。また箱崎キャンパスの一部は取り壊さず残すので、今後の活用方法も取り組む課題の一つです。

――九大は、伊都キャンパスに多くの学部を統合したといっても、他に3キャンパスがあり、気を配らないといけなくて大変ですね。

そ　うですね。やはり他のキャンパスの先生方は、伊都キャンパス整備中は我慢をしてくださいましたので、そうした先生方への配慮という意味でも、気を配ってコミュニケーションしています。

――キャンパス計画と施設づくりに理解のある先生方が増えてきた気がしますね。

そうですね。最近では、私達施設部よりも施設に思いやりを持って取り組んでいただく先生が増えたように感じます。

■伊都キャンパスに残された課題

――伊都キャンパスに残されている課題を具体的に教えてください。

今後は、維持管理が大きな課題です。実際に、キャンパス・モールでは維持管理を怠っていたため、一時期は、草が生えて、新キャンパスにふさわしくない姿になってしまいました。

――前に比べるとだいぶ綺麗になりましたね。

そうですね。維持管理の点で、箱崎キャンパスとは大きく考え方を変えています。というのは、箱崎では学部ごとに建物及びその周辺の管理をしていたのですが、伊都キャンパスでは、同様にやるとキャンパス全体の統一感を損なう恐れがありました。建物内部はまだしも、建物周辺は学部の持ち物というよりは、キャンパスを利用する皆さんのものと認識した方が本来正しいのでは、という議論をしました。そのため、伊都キャンパスでは建物周辺に関して、学部ごとで線引きをしない考えを採っています。ただそうなると、誰が行うのかというのがどうしても課題になってきます。「誰がやるんだ」ではなく、「私がやる」という自主性を持って、皆さんに今後のキャンパスづくりに取り組んでほしいというのが私の願いです。

――農学部の芝生は綺麗に手入れされていますが、ある学部では、石畳の隙間から雑草が生えたりしていて、学部間の差があると私も感じます。

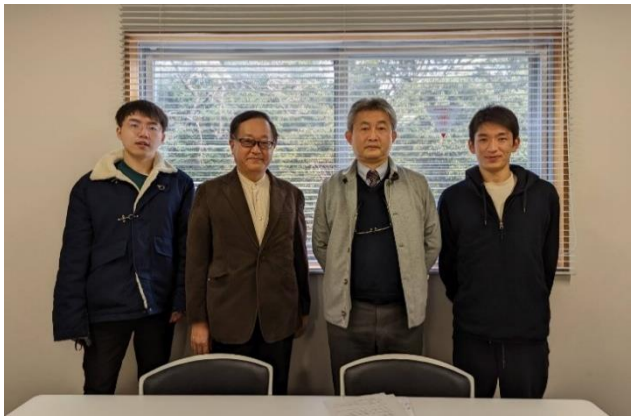
その通りですね。農学部の方たちは自分たちの庭のように芝生を手入れしており、強い認識を持っていらっしゃいますね。

――伊都キャンパスと周辺の発展に対する松下課長の希望はありますでしょうか。

キャンパス周辺に関しては、まだ民間企業の施設が少なく、学生にとっても生活しにくいため、もう少し賑やかな街になってほしいですね。伊都キャンパス内においては、サイン計画などの当初は思い至らなかった点が指摘されているので、それらを改善していけたらと思います。

――今後の課題について、学部1年生にアンケートを行ったところ、伊都キャンパスの良い点でもある自然がうまく活用されていないことが課題としてあげられています。それについて何かご意見はありますでしょうか。

そうですね、自然を壊さずにかつ安全に皆さんが利用しやすいよう緑地を整備することは、今後の課題です。もちろん、専門的知識がなければ利用できないエリアもありますので、そうしたエリアとのすみわけを行うためにも、サイン計画等を充実して今後もっとうまく自然を活用したいと思います。



3.18 坂井 猛　キャンパス計画室 教授･副室長

キャンパス整備計画ＷＧ長、福利厚生施設ＷＧ長、ＣＮ実現ＰＴ省エネ推進部会長

日時：２０２２年 10 月 14 日（金）

聞き手：萩原望、孟柱燦、張煜嘉（大学院人間環境学府修士課程）

聞き手として皆さんのお話を伺っているうちに、様々な記憶が鮮やかに蘇りました。

■キャンパス計画へのかかわり

――――まず、当時のことをお聞かせください。伊都キャンパスの建設にどのように関わられるようになったのですか。

卒論から 7 年間師事した故光吉健次先生のもとで、博覧会場とその跡地利用計画などの経験はありましたが、270 ha を超える広大なキャンパスの計画は初めてでした。1993 年 4 月に工学部建築学科の助手として赴任してまもなく、萩島哲教授から「新キャンパス計画推進室をたちあげるが行くか」とのお誘いがあり、同年 8 月の推進室設置と同時に異動したのが事の始まりでした。初代室長は國武豊喜工学部長でした。推進室員であった樗木武教授、萩島哲教授、竹下輝和教授のもとで、大学事務局、福岡市移転対策局の意見を聞き、キャンパス用地の地盤、水文、動植物、埋蔵文化財などの現地調査と基本構想に明け暮れました。昼間は新キャンパス計画推進室で現地調査と基本構想の検討、夜は研究室で学生指導と論文執筆の生活を続ける日々を送りました。伊都に移転して生活スタイルは変わりましたが、この二重生活は今も続いています。先輩の先生方からは、まずは文部省が実施したキャンパスを見てくるように薦められ、先行して移転した大学、再開発を進めている大学キャンパスを見て回り、計画を担当した教職員、設計者に聞いて回りました。特に、筑波大学を担当された土肥博至先生、広島大学を担当された丸茂弘幸先生、東京大学本郷の整備を担当された渡邊定夫先生にお話を伺い励まされたことは大きなモチベーションになりました。また、1994 年に、國武豊喜室長と事務局の数名で、カリフォルニア大学バークレー校、スタンフォード等を視察し、キャンパス計画担当者に話を聞き、キャンパス空間体験を共有したことは、後の学内検討において共通の目標を立てやすくなって有益でした。その後も調査団を組んで国内外のキャンパス視察を行うようになり、得られた知見を基に、用地の中央を東西方向に一体的なキャンパスをつくる基本構想、基本計画案を形成していきました。1993 年 8 月に赴任した田中弘廣幸係長に加え、1994 年になって、鶴崎直樹助手（工学）、森田紘一助手（農学）、金子賢次助手（福岡市から出向、工学）と、次第に全学の陣容を加えていきました。さらに、出口敦助教授の紹介で 1998 年夏に、ハーバード大学デザイン大学院でキャンパス計画他の講習を受講し、世界中でキャンパス計画と設計の実績を持つペリー・チャップマン氏等の考えを学び、計画立案作業に大きな影響を受けました。

■学会活動による広がりと深まり

日本建築学会で他大学の教員やスタッフとも継続的にキャンパスと都市の調査をするようになり、世界中の著名な大学キャンパスを訪れました。初期に国内の大学を回っていて気が付いたのは、施設をどこに建設するか、という施設のマーキングに対応した長期計画はあったのですが、地域の計画を踏まえ、学術プランをもとにして空間のつくり込みを織り込んだ、本格的な総合計画としての「キャンパス・マスタープラン」の考えは国内に定着していませんでした。また、日本建築学会大会や日本都市計画学会の研究報告会などで、北海道大学の小林英嗣教授、東北大の大村虔一教授、東京大学の岸田省吾教授、名古屋大の谷口元教授、京都大の宗本順三教授などの下で、都市計画、建築計画の教員がキャンパス計画を担当していることを知りました。1998 年の日本建築学会九州大会の時に関係者の集まりを開催したいと提案し、萩島

哲先生から呼びかけていただき、文部省文教施設部長の応援をもらって、箱崎キャンパスの製図室に各大学の計画を持ち寄って懇談会を開催することになりました。やがてこの集まりは、日本建築学会都市計画委員会のキャンパス計画小委員会となり、時間とともに会の目的と名称を修正しながら現在まで続いています。国内外のキャンパス調査やディスカッションをもとに、学会からの出版、国の文教施設政策や学術会議への提言、国際ネットワークの構築等を行いました。現在では、ほとんどの大学がキャンパス・マスタープランをもつようになり、時代の流れとともに、キャンパスをまちのようにつくり、まちのようにキャンパスをつかう大学と都市が増えてきたのは、このグループの貢献によるところが大きかったといえます。九州大学では、行政や民間の関係者と検討初期の段階からキャンパスと周辺の都市の計画を一体的に進めるための議論を交えるようになっていきました。

■歴代の総長、副学長

調査を始めた頃は、「本当に引っ越すのですか」と、斜に構えた教員が多かったのですが、構想、計画とステップを踏むに連れ、九州大学の移転は、「移転問題」として地元マスコミに取り上げられ、大学の浮沈を左右するかもしれない重要事項、関心事となっていきました。総長、副学長は、通常の業務で大変忙しいのですが、キャンパスについて検討する時間をとっていただき、歴代の先生方とご一緒できる機会を得ました。

移転を決めた高橋良平元学長からは、退任後に一度だけお電話をいただいたことがありました。クロツラヘラサギという貴重な渡り鳥の飛来地である瑞梅寺川の河口を避けるためのキャンパスへのアプローチ変更を検討しているときでした。「私はこうした案が良いと思うけどね。」電話の向こうの声はお元気でした。対応について関係者と相談していた矢先の 1997 年 6 月に急逝されてしまい、お会いできずにとても残念でしたので葬儀に参列したところ、弔辞を読んだのは、高橋先生と旧制福岡高等学校の同級生だった桑原敬一元福岡市長でした。九大のことで高橋学長にいろいろと意見を言う桑原市長に、高橋先生が「いつ九大の学長になったとな。」と言ったことや、桑原市長が高橋学長に電話して、「九大を福岡市外に出すわけにはいかない。」と談判して宗像への移転をやめさせる約束をしたことなどを弔辞の中で亡き友に述べておられました。福岡斎場の葬儀に居合わせた私は、二人の仲の良かったことと、桑原市長が市外への移転を止めたという話は本当だったことを実感したのでした。結局、瑞梅寺河口を渡るキャンパスへのアプローチは難しいと判断し、飛来地である河口から離して橋を架け、キャンパスの中央部に向かうルートに変更しました。後日、福岡市によって整備され、「学園通り線」と命名されました。

■杉岡洋一総長の時期：1995-2001

稲津孝彦特別補佐に 1 年間、矢田俊文副学長に 5 年間、指導いただきました。移転反対の教員が少なくないなかで、稲津特別補佐に相談して、地域連携 WG などの必要な検討WGを増やし体制を充実させていきました。矢田副学長は、大学改革構想に加えてキャンパス計画も担当されるようになり、手始めとして、埋蔵文化財、地下水、地盤などに関係する専門家を招いて杉岡総長との勉強会を重ねました。米国のキャンパス調査（1998 年 2 月）を企画するよう依頼されたことから、検討中に話題になっていた視察先をとりあげました。ブリティッシュコロンビア州のサイモンフレーザー大学、マサッチューセッツ州のハーバード大学とリサーチトライアングル、ササキアソシエイツ、ニューヨーク州のコーネル大学でした。ササキアソシエイツは日系アメリカ人の故ヒデオ・ササキが創設し、ハーバード大学の卒業生が多数を占める著名なランドスケープの設計事務所であり、当時全米の 200 を超える大学キャンパスを手がけていました。ササキアソシエイツの事務所を訪問し、進行中のプロジェクトを見せていただきました。このときの視察は、キャンパス・マスタープランづくりについて戦略を練る良い機会になり、湧水源の沢地全体を生物多様性保全ゾーンとして残存する計画など、いくつかの方針を固めることに繋がっていきました。提案したマスタープラン・プロポーザルの選定委員会もこのときに固めることができ、「キャンパスと学術研究都市の両方に、総長と自分たちの持っている知人のネットワークを駆使したい」

との矢田先生が言われたことが印象的でした。杉岡総長と矢田副学長がおやめになる 2001 年に、「九州大学キャンパス・マスタープラン 2001」と「九州大学学術研究都市構想」として結実しました。

それまで出てきた課題に対してひとつずつ解決策ができあがり、土地の文脈、自然環境と、歴史環境に十分配慮し、21 世紀の大学像を先取りして、キャンパスづくりのコンセプトと土地利用の方針、現在の伊都キャパスと学術研究都市づくりの骨格を、全学の決め事として固めることができました。

■梶山千里総長、有川節夫総長の時期：2001-2014

梶山千里先生は工学部長の時にウエストWG長をお引き受けいただき、私は地区基本設計コアチーム長として工学系地区基本設計を担当しました。梶山総長になられてからは、法人化とキャンパスの建設に邁進し、「新キャンパスで楽しみを感じながら学ぶ」方針をお示しいただき、センター地区基本設計コアチーム長としても前向きに検討を進めることができました。現場では、有川節夫理事・副学長に指導いただき、その後の有川総長時代には、今泉勝巳理事・副学長に指導ただきました。まず、印象深かったのは、キャンパスの中央に位置していた石ケ原前方後円墳の削平に着手するにあたって、この時代を専門とする福岡大学の小田富士雄教授ほか数名の考古学者と石ケ原古墳に登り、有川理事と意見を交換する場を設けたことでした。西新プラザで私から必要な資料を説明した後、有川理事が削平をすることの意義を説かれて、やり取りの末に「だめとは言わないが」と了解いただくことができました。その後、保存の仕方や展望室を作ることなどを盛り込んだ文書を有川理事が起草して学内了承をとりつけたのですが、後にこの文書に従って、イースト１号館に展望展示室が実現しました。

工学系とセンター地区の地区基本設計、パブリック・スペース検討のためのWG設置とマニュアルの作成などを提案し、この時期にやるべきことを次々と実行に移していきました。九州大学は法人化しても国の機関ですので、私学のように特定の民間企業に偏った発注ができません。研究教育施設の建つアカデミックゾーンを５つの地区に分割して、公募型プロポーザルをその都度実施して発注し、設計コンサルタントとして別々の建築家が担当することになります。マスタープラン策定のころから、ランドスケープ、植栽、サイン、光環境、アート、ファニチャー、色彩、素材などの、マスタープランではカバーできない範囲に関して、ブロック間の調整が必要になると感じていました。2002 年８月になって、公募でセンター地区基本設計を黒川紀章・日本設計共同体が担当することになったことを契機に、有川理事や竹下輝和教授に相談し、センターゾーンWG時代からお世話になっていた池田紘一教授にWG長をお引き受けいただいたうえで、統合したばかりの芸術工学研究院の杉本正美教授、佐藤優教授、森田昌嗣教授、照明デザイナーの松下美紀氏などを訪問してお願いにまわり、協力していただくことになりました。佐藤優先生は、パブリック・スペースWG長を引き継がれて、結果的に、パブリックスペース・デザインマニュアルの整備からキャンパスの完成までを監修していただきました。デザインマニュアルは、鶴崎直樹准教授、施設部、㈱空間創建（改定時は日建設計）が精力的に検討を重ね、WGで議論した内容を学内決定し、マスタープランや地区基本設計と一緒に施設整備の指針として共有し、様々な場面で活用しました。

有川理事は、竹の伐採作業やまちづくり会議などで現場に足を運ばれ、西方沖地震では、いちはやく建設中の現場に駆けつけられました。また、交渉の現場に赴くスタッフには「自分が責任を取るから迫力をもって望め」と鼓舞されるなど、有川先生の図書館長時代から培われた決断力は、キャンパス整備が先に大きく進む布石となりました。さらに、武田鉄矢氏の実姉が経営する箱崎の居酒屋「かわせみ」で、いつも静かで穏やかな有川先生が時にテーブルを叩いて檄を飛ばされる姿を目の前で拝み、そこで語られた多くの施策が後に現実となって展開していきました。有川理事が総長になられた翌年の 2009 年に、エジプト日本科学大学のキャンパスの設計競技選考委員として派遣を命ぜられ、アレキサンドリアに年 3 回赴き、有名建築家のなかから磯崎新案を採択するという貴重な経験もさせていただきました。

今泉勝巳理事・副学長には、未来型キャンパスづくり WG 長をされていた時からお世話になっていました。タウン・オン・キャンパス構想を進めるために始めたまちづくり推進会議を、アーバンデザイン会議九大 UDCQ として拡大し、ミッ

ションを再定義していただき、全国のアーバンデザインセンターと連携することになりました。糸島市とのトゥクトゥクを活用した共同研究、糸島空き家プロジェクト、学生の野菜販売などに関しても、様々な場面でアイデアを頂戴しました。久留米工業大学学長になられてからも時折お話をさせていただきました。この頃、工学系、全学教育が移転し、マスコミに大々的に取り上げられたこともあって、移転先の糸島半島がクローズアップされるようになりました。

■久保千春総長の時期：2014-2020

理学系地区基本設計を久保千春総長と安浦寛人理事に説明することから始まりました。この時期、農学系、文系の地区基本設計、他地区のフレームワークプランとマスタープランまでまとめることができました。安浦理事には、新キャンパス計画推進室のミッションを再定義して、他のキャンパスまで守備範囲を広げていただき、名称を「キャンパス計画室」に変更していただき、2018 年には伊都キャンパスの完成記念式典を挙行しました。福岡アジア都市研究所理事長を兼任されたことから、同研究所の企画委員会、アイランドシティまちづくり協議会、福岡県総合計画審議会など、学外の会議でご一緒する機会も多くなりました。安浦理事が起案された九大オリジナルの IC カード、システム情報学の立場から提唱された都市 OS(オペレーションシステム)、研究を含まない産学連携コンソーシアムなど、ユニークなプロジェクトが次々と生まれました。また、マスタープランに書いていない部分、足りない部分には、その都度捕捉して必要な修正を加え、学内委員会の審査を経たうえで建設に入るというプロセスを繰り返して学内外の知恵を集め、施設部職員等の実務に携わる多くの関係者の力で、50 万㎡を超えるキャンパスの施設群を完成していくことができました。さらに、新キャンパス・マスタープラン 2001 の考えを 50 年計画のフレームワークプランに移し替えて次のマスタープランの策定準備に入るなど、キャンパスと都市の持続可能性を見据えたキャンパス計画の施策として整備しています。

■現在

石橋達朗総長の下で、九州大学は「総合知で社会改革を牽引する大学」の実現に向けて、社会共創（知の拠点として地域社会やグローバル社会との共生・共創し、研究教育活動を通して社会の持続可能な発展と人々のウェルビーイングの向上への貢献）を柱の一つに掲げ、指定国立大学法人となりました。現在、福田晋理事・副学長の下で、伊都キャンパスの改善とバリアフリーに向けた提案、カーボンニュートラルに向けた検討作業、九州大学学術研究都市構想を進めるための行政と民間のプロジェクト等を支援し推進しています。福田理事は、研究、産学連携、知的財産、キャンパス整備・管理と多くの業務を担当され、超多忙のなか、キャンパス計画室長の業務をこなしておられます。

土地区画整理事業で民間企業が購入し 10 年以上そのままになっていた土地の活用について、九州大学学術研究都市推進機構を通じて福岡市役所に働きかけ、公募型プロポーザルによって大和ハウスが事業を展開できるようになり、蔦屋書店などの店舗、研究所、学生向け住宅が建設中です。このほか、北原田尻、元岡、桑原、泊、志摩東部他のプロジェクトを支援しています。

■こだわった点と残された課題

――――ここにこだわったという点があれば、お聞かせください。また、残された課題はどんなことでしょうか。

「利用者、特に学生に支持され続ける大学キャンパス」をつくりあげることにこだわっています。研究教育施設としての大学の機能を優先することはもちろん、食事の繋がり、課外活動、住まい、通学など、キャンパスが利用者に指示されるためには、どの要素も欠かせません。明日のキャンパス環境が今日よりも良くなるよう、自然環境、歴史環境に十分気を遣いながら、学内も学外も同様に、発注者サイドから「ねじ」を巻くように、様々なプロジェクトを仕掛けていく必要がありました。その最初の鍵は、ワーキンググループ、プロジェクトチーム、サブグループといった検討体制を構築し、どなたにワークを委ねるのかにあり、その必要性をリーダーである理事・副学長と共有することから始まります。提案と

同時に、実働支援をする事務局の方々が理解してから始めないと進みません。どこの社会でも大きな組織は同様だと思いますが、意思決定にはいくつもの会議をクリアしなければならない地道な作業がついてまわります。

■施設の計画

マスタープラン策定後に、５つのブロック計画に参画し、マスタープランの考えを発注側の施設部に代々引き継がれていくように心がけました。低層部を低学年次のためのスペースとし、新しい試みとしての学府・研究院制度に繋がる大学院の空間を上層部に配置することを工学系地区基本設計の初期段階で計画し、イーストゾーンに至る５つのブロック全体にわたって実現できました。全体の施設を繋ぐことで専門領域間を往来することで、学際系の誘発を狙い、これは雨に濡れずに車いすで約２㎞にわたって移動できるルートの確保にもつながりました。また、マスタープランに十分書けていなかった風況シミュレーションに基づく施設配置、環境エネルギー面への配慮、周辺駐車場の確保などを追加修正していきました。

■景観

配置計画では、キャンパスから周辺がどのように見えるのか、外からどのようにみえるのかに気を配りました。マスタープランで、キャンパスの背景にくる糸島半島の山々がつくりだす稜線、スカイラインをなるべく崩さないようにすることを設定しました。これを実現するためには、数年に１回現れるモニュメント、タワー好きな先輩教員と議論しなければなりませんでしたが、なんとかクリアし、異物のようにぴょこんと突出する建物のない、半島の山々に馴染むようにスカイラインをおさめています。また、キャンパス・モールの外部空間を歩くときの視線の先に、空間を特徴づけるアイストップ、目印を設けることを提案し、少しでも快適に歩けるように配慮しました。さらに、施設内の歩行動線の先は可能な限り、突きあたりをガラス面にして外に開き、天候や居場所がある程度わかるようにしています。

■パブリック・スペース

多くの学生が思い出を刻むハレの場として、合格発表、九大祭、卒業式を、センターゾーン、キャンパスの真ん中で行なえるようにすることを、基本構想の頃から考えていました。これは、マスタープラン、センター地区基本設計を経て、実現できました。六本松でテント数を数えて広さをチェックし、渡邊定夫先生から教えられた今帰仁城内の通路の段構成を参考にして5%勾配の造成面を平面と数段の階段で構成し、一部大屋根付きの幅広のキャンパス・モールを実現しました。さらに、理系図書館前や工学系南に背の高い樹木、ベイブ、座面、芝などで構成する「キャンパス・コモン」を整備しました。コモンという名のとおり、大学全体で大事にする開かれた共通の空間として、地区基本設計の度に議論して揃えていきました。また、１年生の学ぶセンターゾーンでは白を基調に配し、専門の分野に行くにしたがって色が付くことなどを、佐藤優・パブリック・スペースＷＧ長と議論して実現していきました。

■福利厚生施設

法人化前は整備面積の制約から、食堂の計画箇所数が限られ、箱崎と同様の４か所程度とされていましたが、法人化とともにこの制限はなくなり、当初は想像できなかった多様な飲食スペースが確保できました。今後はキャンパス周辺に、飲食施設ほかの利便施設がさらに充実していくことが待たれます。また、課外活動用のスポーツ施設は、課外活動の顧問の先生方が必要とされた施設は、ほぼ確保できました。なかには、野球場４面といった無謀な要望もありましたが、多目的運動場を入れてなんとか３面確保しています。さらに、中央体育館階下にプールを増設するなど、その時々の予算で、施設部でスポーツ環境を次第に少しずつ充実していただいています。

■学生の生活環境

初期の課題の一つは、学生の住まいでした。学生用のアパート、マンションは、糸島半島に、皆無だったからです。まず、キャンパスの賑いに寄与することを考え、マスタープランでは、センターとイーストに学生住居を 2,000 人分設定して臨み、地区基本設計を経て、結果的にはキャンパスに 1,250 人分を確保してキャンパスの完成を迎え、残りの住居は学

外の民間事業者が整備していただきました。当初、学生コミュニティの形成と低価格に配慮して、リビング、バス、トイレ、キッチンをシェアする 3-4 人の同居タイプを押川元重・福利厚生 WG 長と提案しましたが、当時の発注者である事務局の担当者には受け入れられず、ワンルームタイプで始まりました。やがて、他大学でシェアタイプの導入が進んだことで、ドミトリーⅢでシェアタイプもようやく実現し、有効に使っていただいています。また、学生が糸島半島のどこに住むのか、がわかっていませんでしたので、エリア別に建設戸数を予測するためのアンケート調査を行い、大学、民間、行政で調査結果の情報を共有する会議を年度末に九州大学学術研究都市推進機構で毎年開催しました。民間企業がビジネスとして建設する戸数のコントロールは不可能ですが、学生の住まいの整備状況に関する数字や評価が事業者によって異なるという事態を避け、これを指標の一つにして各社の建設が進み、なんとか数も確保でき、移転した学生を収容できました。今では、1.3 万人、伊都キャンパスに通う学生の約 8 割が糸島半島に住んでいます。

■公共交通

もう一つの課題は公共交通でした。移転を決めた当初から、母都市である福岡市都心部との距離 15 ㎞は遠いので交通対策が必要と指摘されていました。朝 8 時台には 2 分に 1 本のバスが必要という交通計画ＷＧの算定結果をもとにして、公共交通事業各社に運行をお願いし、2005 年伊都キャンパス誕生時から、かなり積極的に輸送力を高めていただきました。また、工学系の駐車場不足が指摘された時期には「伊都地区総合交通計画」を策定して、総合的に対策を進めました。2018 年の農学系と文系の同時移転で心配された朝の大渋滞が回避できたのは、予測値をもとに対策を指導、実施した交通計画ＷＧの成果でした。当初は大学の補助金を出して九大学研都市駅から大学までの料金を片道 100 円に抑えてスタートしたのですが、キャンパス完成とともに補助金がなくなって片道 300 円となり、バス代を払えない学生は自転車へとシフトしていきました。現在では、学内に AI 運行バスが走るようになり、軌道系以外にも解決の選択肢が広がっていることを実感しています。

■学生のみなさんへ

――――九州大学の学生に伝えたいことがあれば、お聞かせください。

2020 年に日本政府は、国内の温暖化ガスの排出を 2050 年までに実質ゼロとする方針を表明しました。この 2050 年カーボンニュートラル宣言を実現するための手立てを、九州大学も学問の府として実行することが求められています。国連の定めた目標 SDGs に向かう様々な取組みが必要です。また、コロナ禍を経て、感染症予防やＤＸ化などによって国民のライフスタイルが変化し、皆さんのキャンパス生活もこれまでとは変わって来ています。大学では、風力などの自然エネルギー活用、AI 運行バス、バリアフリーに細かく配慮したインクルーシブな社会に向けた実証実験なども行っています。

社会が大きく変化する時期に九州大学で学ぶ皆さんは、自分のすすむべき道をしっかりと見定めていただきたいと思います。大学は、それぞれの時代に必要な研究教育を行い、活動の場としてのキャンパスづくりも、その時代時代の新しい技術や新しい考えを取り入れてきました。これからも、変わるものと変わらないものをうまくブレンドし、数百年にわたって長続きできるキャンパスと都市にできるよう、努力を続けていくことになります。このキャンパスで学んだ皆さんが、社会で数々の成果を生みだしていただくことを願っています。

坂井猛（さかいたける、1962-）：九州大学キャンパス計画室教授・副室長、同大学院人間環境学府・工学部建築学科教授。博士（工学）。綜合建築設計研究所、福岡県、九州大学助手、九州大学助教授、准教授を経て現職。九州大学新キャンパスの調査及び施設計画、九州大学新キャンパス・マスタープラン 2011、九州大学学術研究都市構想、地区基本設計等を担当。福岡市都市計画審議会会長、糸島市都市計画審議会会長、福岡地域戦略協議会都市創造部会長等を兼務。

4. 学生のお気に入りの空間と課題

4.1 概要

人間環境学府　萩原望、張煜嘉、孟柱燦

1.　はじめに

2018 年 9 月に九州大学伊都キャンパスへの移転が完了した。21 世紀を活き続けるキャンパスの創造を目指してキャンパスづくりが行われ、世界的レベルの研究・教育拠点形成に相応しい施設の整備はもとより、自然環境との共生に配慮し、地域に開かれた魅力的なキャンパスとなるよう様々な工夫が施されている。

低年次向けの基幹教育の授業「伊都キャンパスを科学するⅠ」、「伊都キャンパスを科学するⅡ」において、学生対象のアンケートを実施し、課題把握を行った。

2.　アンケートの概要

2.1　アンケートの対象者について

2021 年、オムニバス講義「伊都キャンパスを科学するⅠ」と「伊都キャンパスを科学するⅡ」の各 237、226 人の学部 1 年生を対象とする。２つの講義を続けて受けた学生は、約半数である。

2.2　アンケートの質問について

春学期に行ったアンケートでは伊都キャンパスの「良い点」、「問題点」をそれぞれ二つずつ取り上げてもらった。また、夏学期におこなったアンケートでは「伊都キャンパスにおいて、とんがっている点」と「伊都キャンパスの満足度を上げるために行ったらいいと思うこと」をそれぞれ二つずつ取り上げてもらった。

今回私たちはそれぞれのアンケートの質問を「良い点」と「問題点」と捉え、集計を行い、学生たちがキャンパスに対してどのように考えているのかを調査した。

3.　アンケートの回答の分類について

アンケートの集計を行うにあたって、学生の自由回答を良い点については 21 項目に、問題点については 19 項目にそれぞれ分類した。(図 3.1～3.3)



写真 3.1　九州大学伊都キャンパス

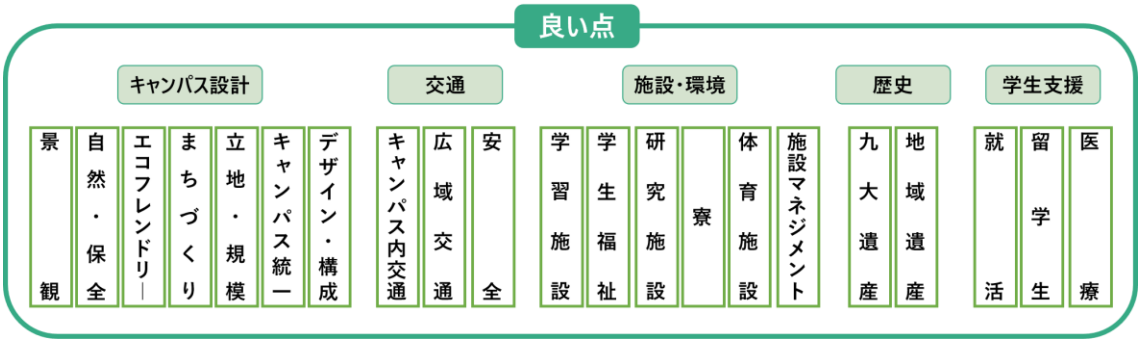


図 3.1　良い点の項目

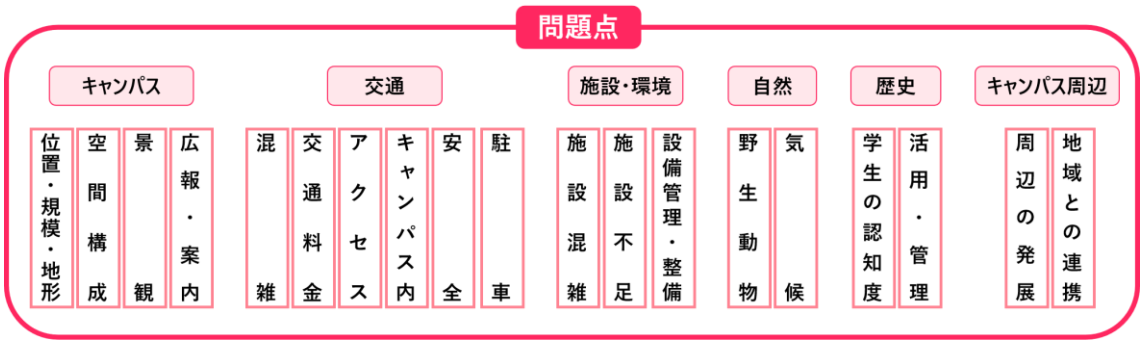


図 3.2　問題点の項目

項目		内容
キャンパス設計	景観	景観、景色
	自然・保全	豊かな自然、保全緑地
	エコフレンドリー	キャンパスの水循環、水を溜める設計
	まちづくり	周辺の地域との交流
	立地・規模	糸島に立地、広くていい
	キャンパス統一	色々な学部が集まっている場所
	デザイン・構成	建物のデザイン、雨に塗らない設計、動線
交通	キャンパス内交通	Aimoなど
	広域交通	学園都市駅までの交通
	安全	道の安全、自転車路と人路と分けた設計
施設・環境	学習施設	図書館、教室など
	学生福祉	コンビニ、生協などの生活支援施設など
	研究施設	産学連携、キャンパス内で実施してる事業など
	寮	学生寮
	体育施設	運動場、プールなど
	施設マネジメント	施設管理、維持
歴史	九大の遺産	九州大学の古い歴史の遺産
	地域遺産	昔から伊都キャンパスにあった文化財、古墳など
学生支援	就活	学生の就活支援
	留学生	留学生向けの支援
	医療	医療支援

項目		内容
キャンパス	位置・規模・地形	キャンパスの立地について、広すぎる、坂の勾配など
	空間構成	各学部間の距離、動線など
	景観	美観、色、スカイラインなど
	広報・案内	情報が足りない、SNS広報不足など
交通	混雑	交通手段の混雑、バスの数が足りないなど
	交通料金	学研都市まで往復600円
	アクセス	距離、時間、便利性、車がなく不便
	キャンパス内	キャンパス内の交通が不便
	安全	交通安全について
	駐車	駐車場、駐輪場が不足、駐車違反
施設・環境	施設混雑	センターゾーン、食堂の混雑など
	施設不足	席が足りない、オープンスペースが必要
	設備管理・整備	ネット環境が悪い、施設をよく活用できていない
自然	野生動物	イノシシなどの動物
	気候	風、熱さ、寒さ、など
歴史	学生の認知度	学生が知らない
	活用・管理	管理・活用ができてない
キャンパス周辺	周辺の発展	スーパーがない、周辺に食事するところがない
	地域との連携	地域と連携して発展する

図 3.3　各の項目の内容

4.　良い点についての集計結果

4.1 春学期の集計結果

春学期アンケートで得られた良い点で多かったのは、自然・保全（21.3%）、地域遺産（17.7%）、学習施設（9.2%）であった。(図 4.1)

4.2　夏学期の集計結果

夏学期アンケートで得られた良い点で多かったのは、自然・保全（33.9%）、デザイン・構成（23.5%）、研究施設（11.8&）であった。(図 4.2)

4.3　キャンパスの良い点

伊都キャンパス 272ha の約 4 割、100ha は自然・保全緑地であり、キャンパスに自然があふれている点を良い点としてとりあげていた。(写真 4.3.1)

また、図書館等に自習空間を多く配置しており、テスト期間には利用時間の延長が行われることから、多くの学生が利用していることを評価する学生も多い。(写真 4.3.2)

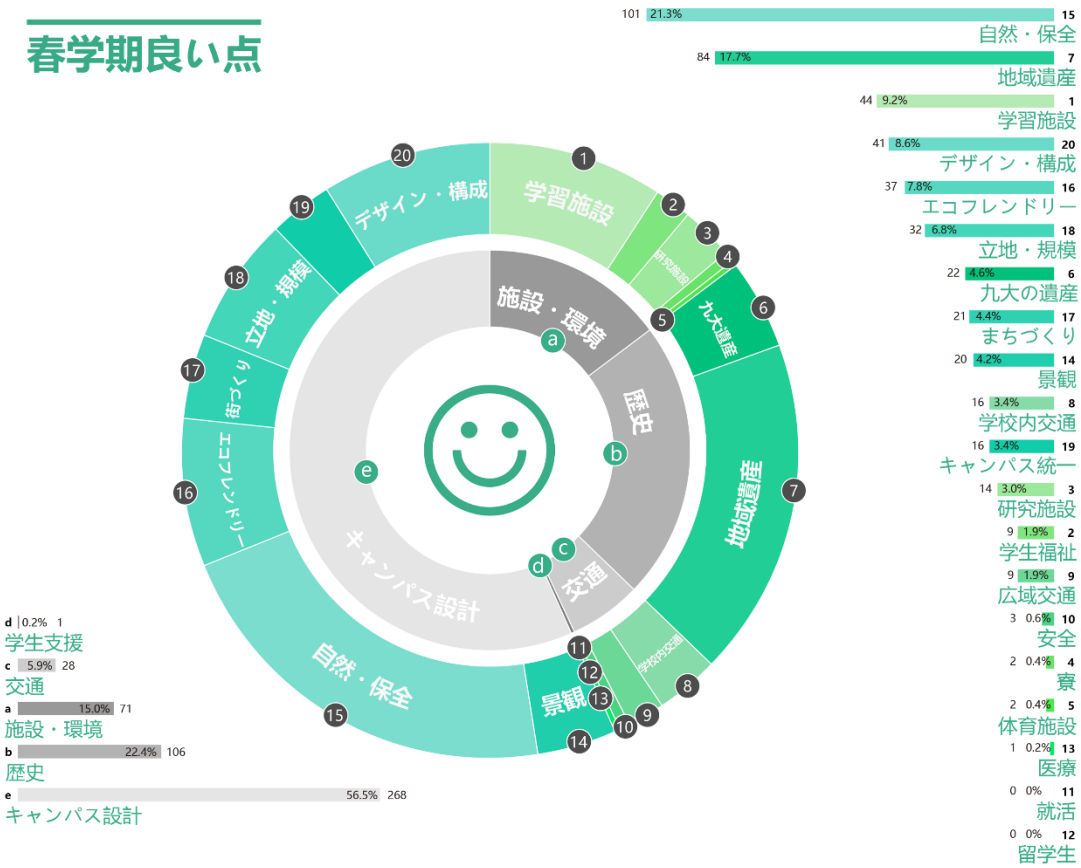


図 4.1　春学期、良い点の集計結果

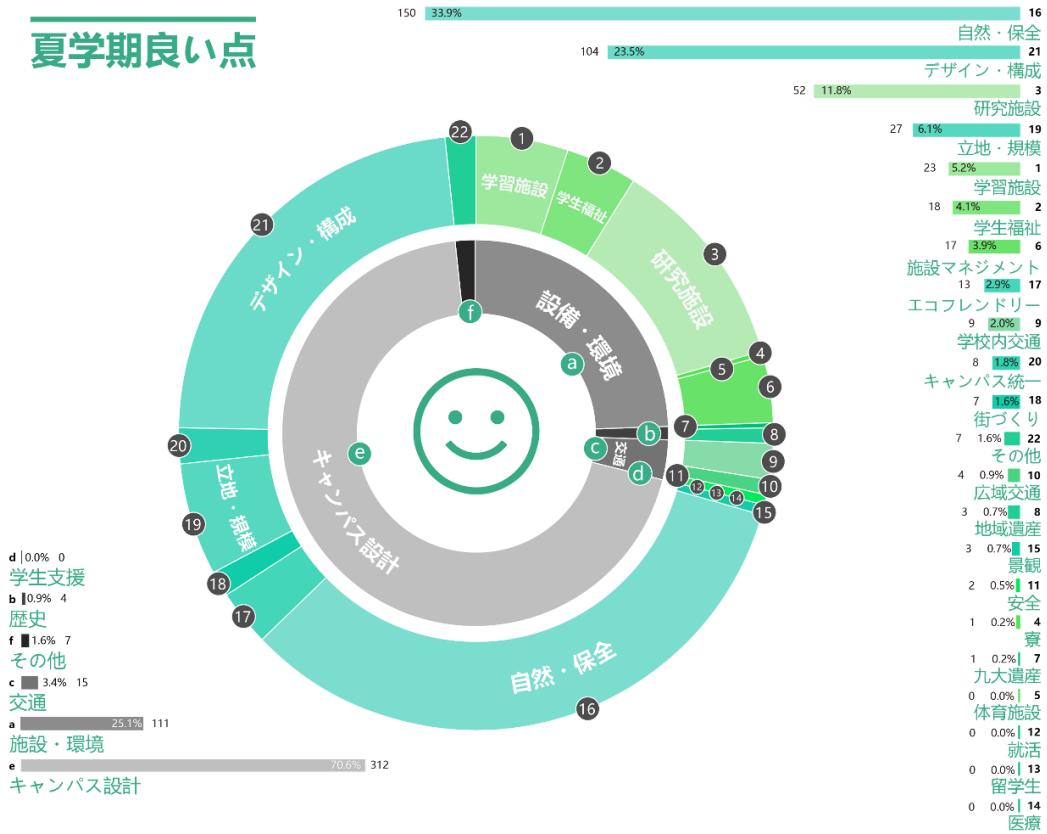


図 4.2　夏学期、良い点の集計結果




写真 4.3.1 自然保全エリア




写真 4.3.2 九州大学中央図書館




写真 4.3.3 イーストゾーン




写真 4.3.4 オープンスペース

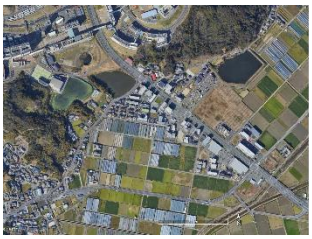


写真 5.3.1
辺の航空写真



写真 5.3.2
キャンパスに一番近いスーパー




写真 5.3.3 センターゾーンの学習施設




写真 5.3.4 イーストゾーンの学習施設



写真 5.3.5
混雑している駐輪場



写真 5.3.6
認知されていない駐輪場

さらに、多くの学生はキャンパスのデザインを気に入っており、雨に塗れずに移動できる機能を取り上げる学生が多い。(写真 4.3.3～4.3.4)

5. 問題点についての集計結果

5.1 春学期の集計結果

春学期アンケートで得られた問題点で多かったのは、アクセス（24.2%)、周辺の発展（11.6%)、位置・規模・地形（11.6%）であった。(図 5.1)

5.2 夏学期の集計結果

夏学期アンケートで得られた問題点で多かったのは、アクセス（14.0%)、施設不足（14.0%)、施設管理・整備（13.3%）であった。(図 5.2)

5.3 キャンパスの課題

「九州大学周辺の発展」に関する回答では、多くの学生が買い物する場所がないことを上げていた。現状九大周辺に住む学生たちが大きなスーパーに行くためには、バスや自転車などを使って 4km 離れた市街地まで行かなくてはならない。(写真 5.3.1～5.3.2)

続いて「施設不足」に関しては、学生同士で会話したり、勉強したりする場所が足りないことを指摘している。しかしながら、良い点でも述べたように、キャンパス内には学習施設が多く存在する。(写真 5.3.3～5.3.4)

「駐輪場の不足」を問題点として取り上げている学生は多い。実際には、十分な数の駐輪場がキャンパス内には存在するが、立地が悪く、利用されていない駐輪場が多い。(写真 5.3.5～5.3.6)

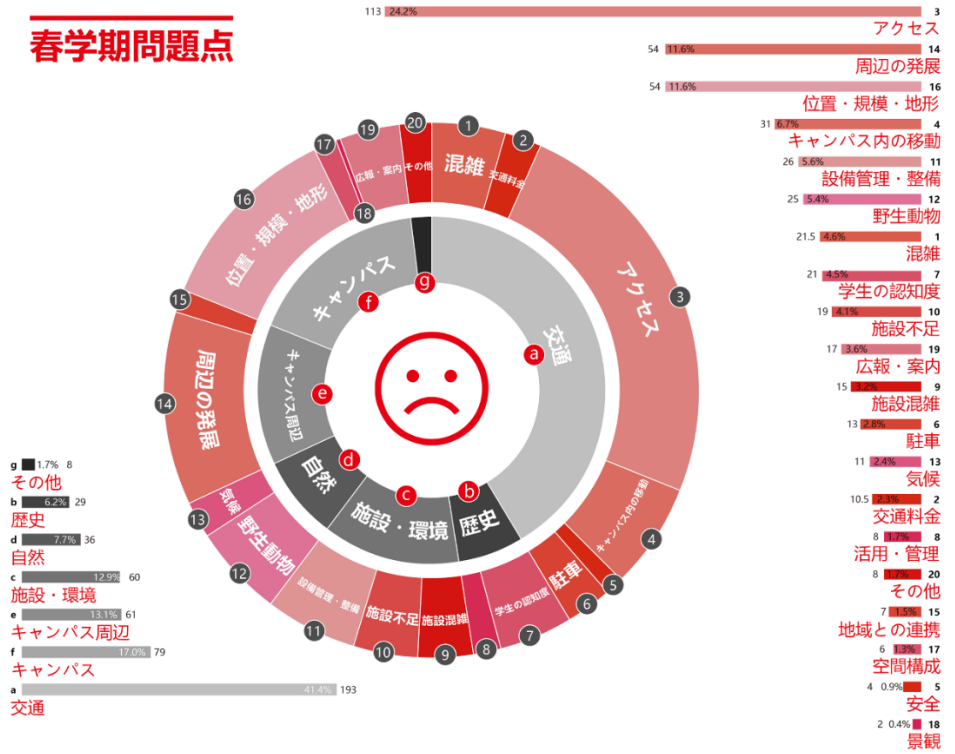


図 5.1　春学期、問題点の集計結果

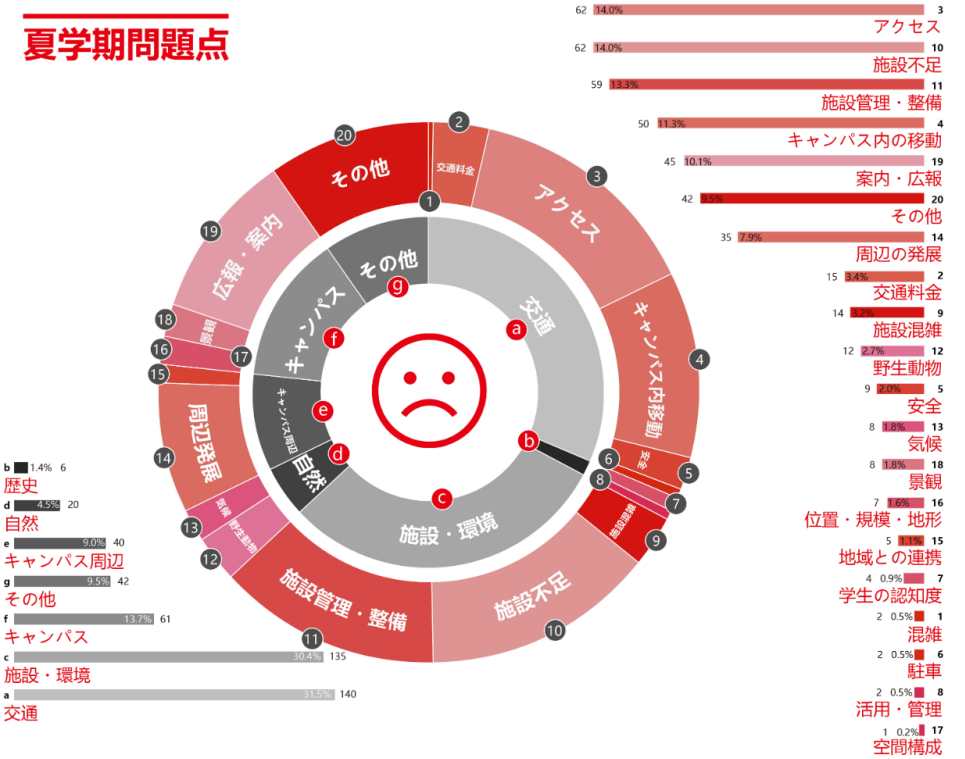


図 5.2　夏学期、問題点の集計結果



写真 5.3.7
皎皎舎



写真 5.3.8
皎皎舎に続く通路

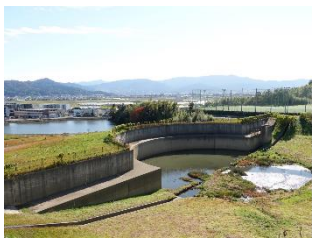


写真 5.3.9
センターゾーンの貯水池



写真 5.3.10
センター 2 号館の展示ケース

センターゾーンには皎皎舎という購買施設と、亭亭舎という 1 年生向けの学習施設が存在する。これらは寄付施設であり、造成時に計画がなかったことから、段差があり、アクセス上の課題が残る。(写真 5.3.7～5.3.8)

キャンパス内には、良い点でも挙げられたように保全緑地や芝生が多い。しかしながらそれらをうまく活用できていないことを、問題点として挙げる学生が多い。緑地以外にオープンスペースや展示コーナーなどをもっと活用すべきという意見も見られた。(写真 5.3.9～5.3.10)

6. まとめ

学生を対象として、九州大学伊都キャンパスの課題に関するアンケート調査を春学期と夏学期の 2 回行い、以下を明らかにした。

1）キャンパスの良い点で多く取り上げられたのは、「自然・保全」に関してであり、キャンパスに自然があふれている点を評価する学生も多い。

2）キャンパスの問題点で多く取り上げられたのは、「アクセス」に関してであり、都心部・最寄り駅からの利便性という点を課題としている。

3）「キャンパスの立地・規模」、「安全」は良い点と問題点両方で指摘されており、学生によってとらえ方の違いがある。

「課題」については、伊都キャンパスの立地に関することが多く取り上げられている。しかしながら JR と公共バス路線との接続など、いくつかの点においてはすでに解決済みである。これは、今回のアンケートの対象である学部 1 年生がコロナ禍のために、実際にキャンパスを利用したことがあまり多くないことが理由と考えられる。しかしながら、そういった周知が学生に対して不足している点や、またキャンパス内にまだ活用できるものがたくさんある点など、今後もまだ伊都キャンパスを良くしていくうえで改善できる点は多い。

参考文献

1) 坂井猛, 安浦寛人, 山王孝尚, 郝訳然, スマートシティ構築の実験場としての大学キャンパス活用に関する考察, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 都市計画 (選抜梗概), 235-238, 2020.09.

2) 坂井猛他, 都市と大学のデザイン-伊都キャンパスを科学する-, 花書院, 2019.08.

3) 川上直人, 坂井猛, デイビガルピティヤプラサンナ, 大学が関わるまちづくり拠点施設の立地特性に関する研究, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 都市計画 (選抜梗概), pp.61-64, 2017.08.

4) Takayuki Shimaoka, Takeru Sakai et al., Basic Studies in Environmental Knowledge, Technology, Evaluation and Strategy, Spronger, 2016.03.

5) 川上直人, 坂井 猛, Divigalpitiya Prasanna, キャンパス・フレームワークプランの特徴と課題―九州大学のキャンパス計画を事例として, 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1(選抜梗概), pp.273-276, 2016.08.

6) 森直子, 坂井猛, Divigalpitiya Prasanna, 大学キャンパスにおける運動施設の配置構成に関する研究, 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1(選抜梗概), pp.767-770, 2015.09.

7) 太田真央, 斎尾直子, 鈴木雅之, 小松尚, 坂井猛, 大学と地域との遠隔連携における自治体の姿勢, 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1(選抜梗概), pp.735-738 , 2015.09.

8) 低炭素都市システムグループ, 著者 坂井猛, 持続可能な低炭素都市の形成に向けて, 九州大学東アジア環境研究機構 RIEAE 叢書Ⅶ（共著）, 花書院, 2015.03.

9) 小川隆, 坂井猛, 吉田健志, 大学キャンパスの浸透性に寄与するオープンスペースの評価指標に関する研究, 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1(選抜梗概), pp.173-176 , 2014.09.

10) 仲摩純吾, 坂井猛, 鶴崎直樹, 趙世晨, 外国人留学生居住施設の整備実態とその国際交流拠点としての可能性に関する研究, 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1(選抜梗概), pp.193-196 , 2014.09.

11) 小林英嗣, 坂井猛 他 31 名, いまからのキャンパスづくり, 日本建築学会, 2011.10.

12) 堤昌文、外井哲志、坂井猛ほか, まちおこし・ひとづくり・地域づくり―九州のとりくみ 20 選―, 櫂歌書房 , 2011.04.

13) 小林英嗣, 坂井猛ほか, 地域と大学の共創まちづくり, 九州大学出版会, 2008.11.

14) 有川節夫, 佐藤優, 出口敦, 坂井猛ほか, これからのキャンパス・デザイン―九州大学伊都キャンパスと学術研究都市をつくる―, 九州大学出版会, 九州大学出版会, 2007.07.

15) 小林英嗣、坂井猛ほか, キャンパス・マネジメント・ハンドブック, 日本建築学会, 2004.08.

4.2 お気に入りの内部空間

(1)EAST ZONE



お気に入りの内部空間

IS1

ビックスカイ／EAST ZONE



理由:

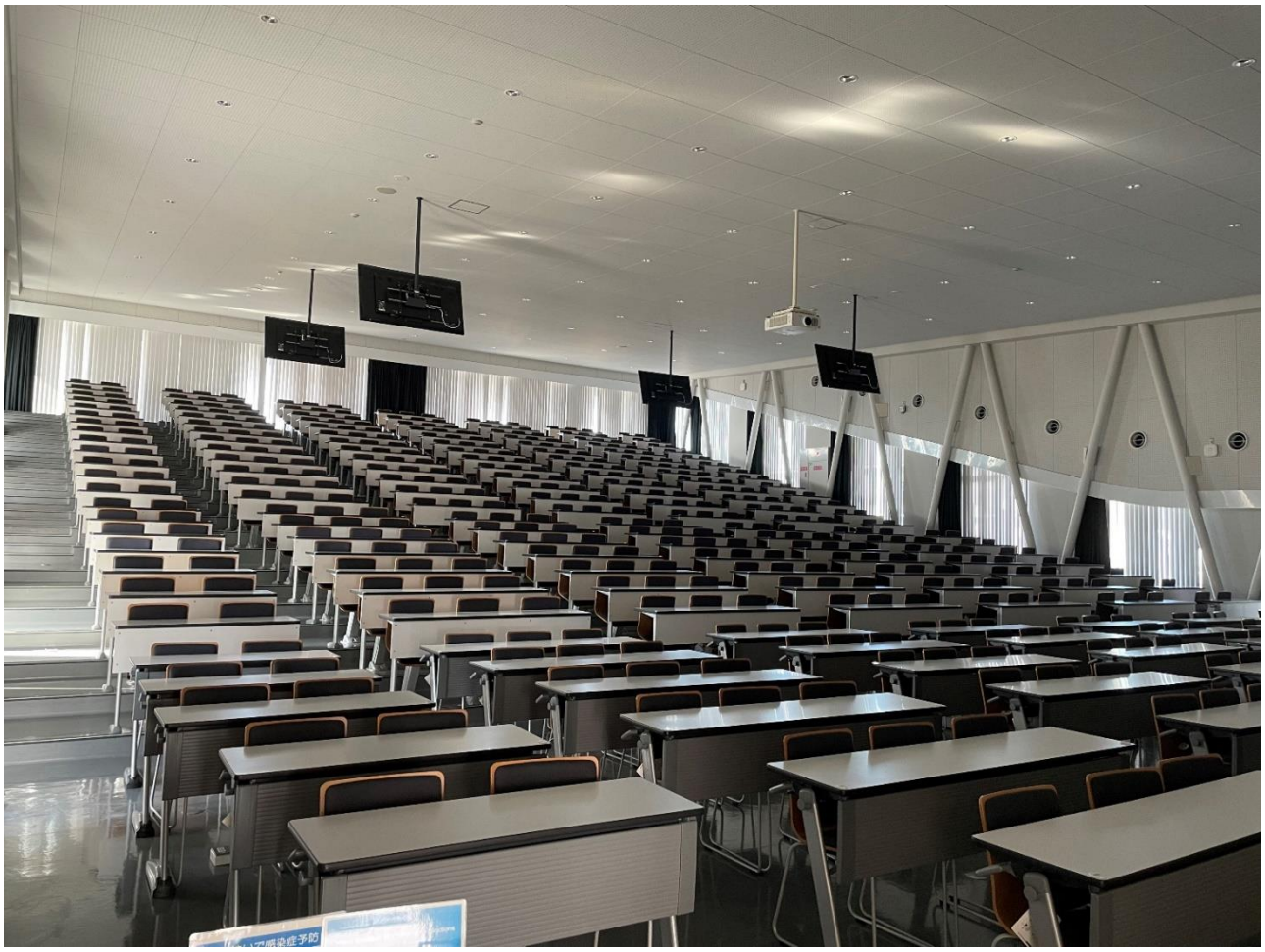
私のお気に入りはビッグスカイである。ビックスカイ食堂は、壁に多くのガラスが用いられており、食堂内は開放感であふれており、心地よく食事を楽しむことができる。また、食後、食堂を出ると、周りよりも標高が高いためかさわやかな風を感じることができる。すなわち、食事をとっている際も、そしてとった後もリラックスすることができる、私に癒しを提供してくれる場所である。また、他の食堂に比べて静かな雰囲気であることもお気に入りである要因の一つだ。

髙木俊輔

お気に入りの内部空間

IS2

大講義室Ⅱ／EAST ZONE



理由:

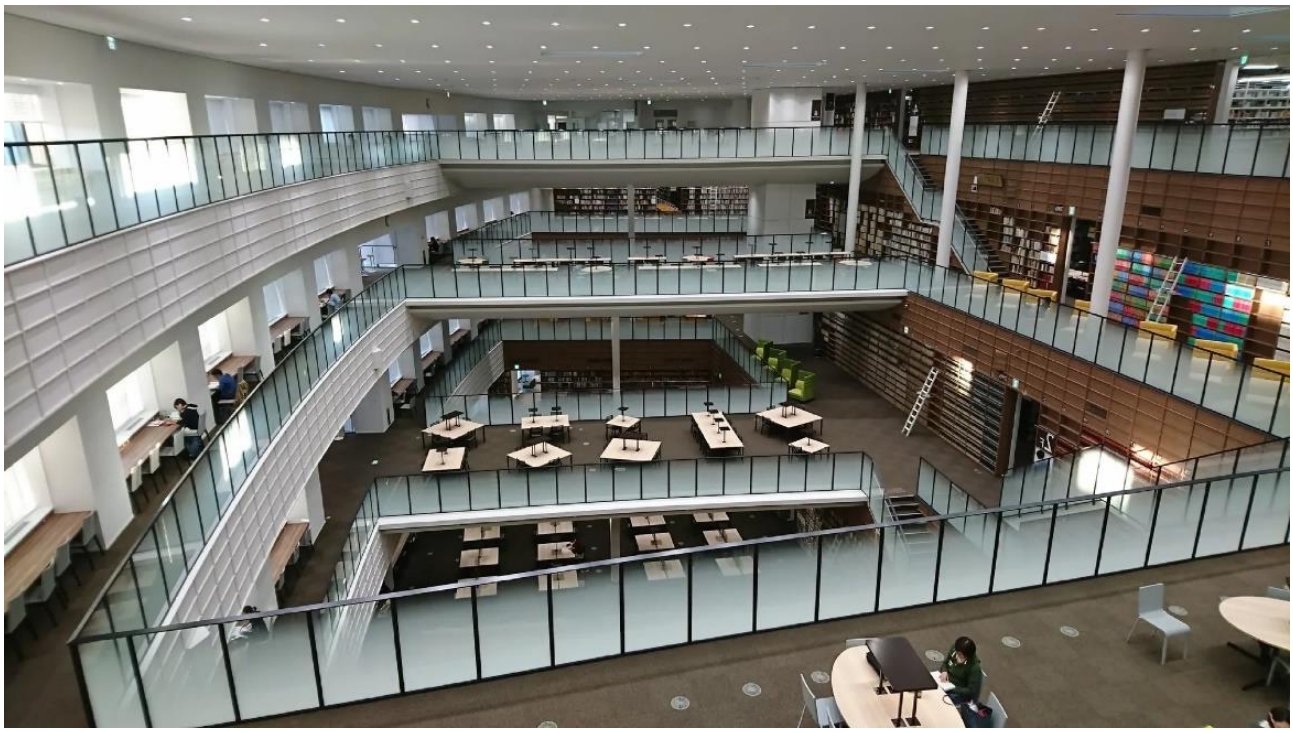
自分が九州大学の法学部を受験したときの会場がイーストゾーンの大講義室Ⅱであり、自分にとって思い出の場所である。最初にこの教室に入ったとき、これぞ大学だよなと思わせるような教室であった。そして、2 年生の前期になって再び大講義室Ⅱに入る機会があり、そこで初めて授業を受けたとき、はじめて自分が大学生になり、昔の自分より成長できたと実感できた気がした。自分にとってここは大学生を感じさせてくれる空間であるためお気に入りの場所である。

八木豊樹

お気に入りの内部空間

IS3

中央図書館／EAST ZONE



理由:

自分は中央図書館の 4 階から見た景色が好きです。好きな理由の一つは 4 回から全てのフロアを見下ろすことができで見通しがいいからです。きれいに敷き詰められた本や机、また机に座る学生はみな同じ方向に向かい、統一性があり美しいです。また、シンプルな色合いの壁、柱、手すりがかっこいいというのも理由の一つです。茶色と白でまとめられた色合いは個人的にとても好きなので、自分はこの景色が好きです。

前田泰佑

お気に入りの内部空間

IS4

石ケ原古墳跡展望展示室／EAST ZONE



理由:

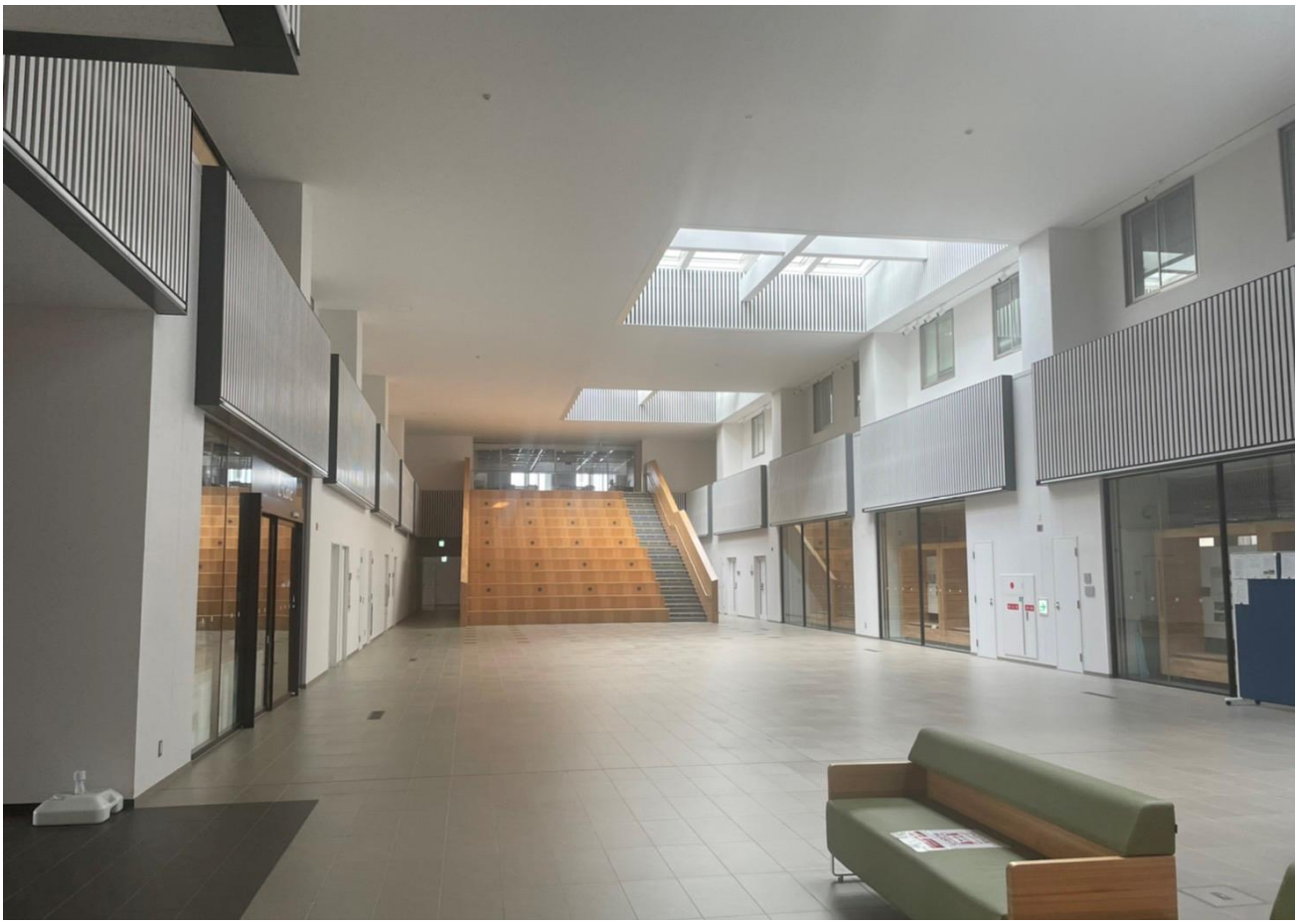
ここは石ケ原古墳跡展望展示室です。ここからの景色は大変見晴らしがよくウエストゾーンやセンターゾーンの建物のデザインを見ることができます。また九州大学伊都キャンパスが作られるうえで古墳や遺跡、などを破壊するのではなくきちんと歴史的環境資源として保存し一般公開しているということが分かり、伊都キャンパスが歴史的環境と共存すること、伊都キャンパスが優れたデザインであることが一目でわかるのでお気に入りの場所としました。

井上陽斗

お気に入りの内部空間

IS5

イースト１号館／EAST ZONE



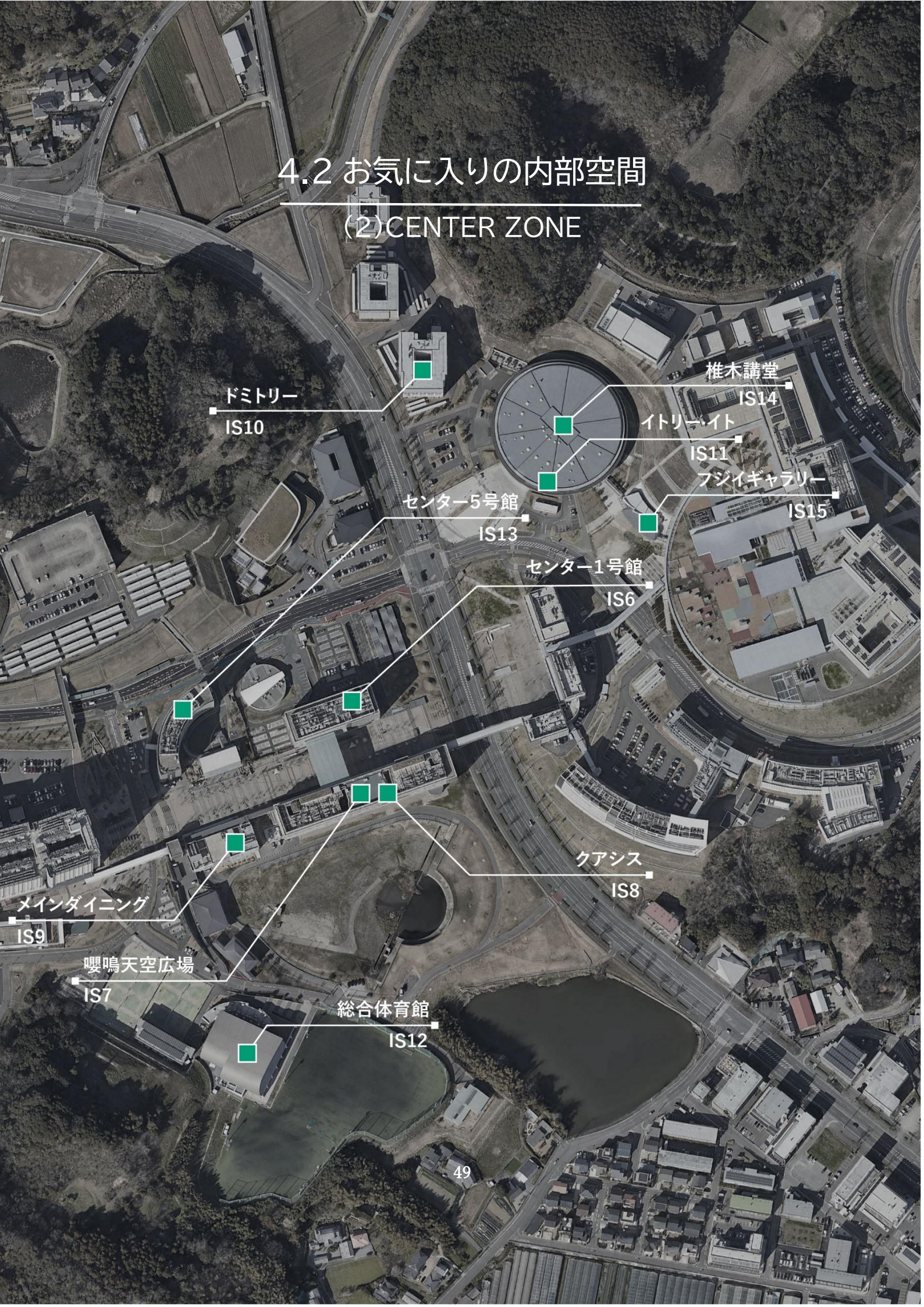
理由:

私がこの空間で好きなのは大きな階段です。入試の際、この階段を初めて見て感銘を受けたのを今でも覚えています。階段は普通、垂直方向への昇り降りのために用いられるものです。しかしこの場所の階段にはその役割と共に、談笑の場としての役割も持っています。センターゾーンの屋外にも似たような階段はありますが、ここはセンターゾーンよりも落ち着いていて開放的な空間の中で多くの人が一息つける場所となっています。自由な議論を尊重する、大学らしい設計がお気に入りポイントです。

横山雄太

4.2 お気に入りの内部空間

(2)CENTER ZONE



お気に入りの内部空間

IS6

センター１号館／CENTER ZONE



理由:

講義が空いた場合、暇つぶしや勉強、飲食ができる場所が必要になってくる。たいていの人は空き教室を使用するだろうが、私はここで過ごすことが多い。というのも、ここは滅多に人が来ず、あたかも自分の部屋であるかのようにリラックスすることができるからである。更に、椅子に机などの学習用機材も充実しており、近くにはゴミ捨て場、トイレさえある。また、巨大な窓から日光が射し込むため、照明にも困らない。ここは、利便性と心地よさを兼ね備えた最高のスペースなのである。

中山良哉

お気に入りの内部空間

IS7

嚶鳴天空広場（センター２号館）／CENTER ZONE



理由:

これは嚶鳴天空広場の写真です。私がこの場所をお気に入りの室内空間として選んだ理由は、友達と話しながら作業ができる点と、学習サポート室がある点です。図書館では複数人で話しながら作業というのは難しいかもしれませんが、ここなら１年生が気楽に勉強しに来られるし、実際に利用している人も多くいます。また、授業で分からなかったところを学習サポート室で質問できるというのも大きな魅力だと思ったのでここを選びました。

三坂蘭

お気に入りの内部空間

IS8

クアシス／CENTER ZONE



理由:

　クアシスはパーテーションがなければ学研都市方面に向けての景色が一望できる点に加えて、外との境界線がすべてガラス張りになっているために、とても開放感があります。また他の生協食堂と比べてあまり食堂感がなく少しおしゃれな気分にさせてくれる点のお気に入りポイントの一つです。また、壁のデザインもレンガのようなタイルが張られていてここからも他の食堂とは異なった雰囲気を感じることができます。

今川大悟

お気に入りの内部空間

IS9

メインダイニング／CENTER ZONE



理由:

ここはセンターゾーンのメインダイニングである。お気に入りの室内空間としてここを選んだ理由はキャンパスの室内で一番落ち着けるからである。九州大学、伊都キャンパスには 10 ほどの食堂があるが、経済学部一年生である私は授業がある教室が近いということもあり、メニューも豊富なこのメインダイニングで昼食をとることが多い。同じ学部の友達と一緒に食べることで次の授業も頑張ろうという気持ちにもなる。また、自分はドミトリーに住んでいるため、営業時間も比較的長いこの食堂に休みの日でも気軽にご飯を食べに来ることができる。

安芸京祐

お気に入りの内部空間

IS10

ドミトリー／CENTER ZONE



理由:

　やっぱり半年以上住んできたドミトリーは他の施設には及ばないくらいお気に入りの場所である。他の民間企業が管理するマンションと比べても構内にあるぶんどこへ行くにも近いという利点はあるが、それよりも寮に関係ない人はほとんど通ることがないちょうど考えられた位置にあるなと感心した。大体キャンパスを利用する人の動線はざっくり上の黄色部分だと思うけれど、そことはちょうどかぶらないとてもいい位置だと感心した。また中心がくりぬかれたデザインもかっこよくてお気に入りである。

木戸信太朗

お気に入りの内部空間

IS11

イトリー･イト／CENTER ZONE



理由:

大学にこのような落ち着いた空間があるのが珍しいと思う。料理も絶品でアットホームな感じであり、カフェとしての利用できる。価格帯も学生が少し贅沢したいときに利用できる値段であり、またミールが使えるのも良い。色味や大きさも適度であり、大学は学術機関であるが、大人な落ち着いた空間があるのは魅力的であると思う。場所もセンターゾーンの喧騒とした場所から少し離れていることが非常に良い。あの場所が最適であったと思う。

藤原涼

お気に入りの内部空間

IS12

総合体育館／CENTER ZONE



理由:

ここは総合体育館で自分は今、身体運動科学実習という講義で使用している。自分が体を動かすことが好きなこともありバスケやバレーなど様々な競技の道具が揃っておりなおかつ天井が高く解放かもありスポーツを楽しめるので非常に気に入っている。さらに下の階の方にはウェイトトレーニングの器具がたくさんあり、筋トレで鍛えられる施設とスポーツができる施設がすぐそばにある場所はなかなかないので非常に便利でいい。

金廣暖斗

お気に入りの内部空間

IS13

センター５号館／CENTER ZONE



理由:

　これは５号館の１階部分にあるスペースで、テーブルがいくつか並べてあり、椅子もそこについている。一見なんともない空間だが、平日はよく共創学部生がくつろいでいたり、課題をしていたりするので、そこで生徒同士のコミュニケーションが発生することがあるので、新しい出会いがあったり、仲を深めるきっかけになる。よってこのスペースがお気に入りである。

藤本航生

お気に入りの内部空間

IS14

椎木講堂／CENTER ZONE



理由:

私がこの伊都キャンパスにおいて気に入っている室内空間は写真の椎木講堂である。他の場所ももちろんそうなのだが、高校とは比較にならない程のスケールの大きさである。こんな建物が学校の中にあるというのは改めて素晴らしいことであり九州大学のスケールの大きさを感じることができる。またここは入学式が執り行われる場でもある。私だけでなく多くの学生にとって思い出の場所である。また、この椎木講堂は椎木正和氏によって九州大学創立 100 周年を記念して寄贈されたものである。それを思うと私も人のために何かを成し遂げようという気持ちになる、私にとって椎木講堂とはそういう場でもある。

阿南昂樹

お気に入りの内部空間

IS15

フジイギャラリー／CENTER ZONE



理由:

まず、藤井ギャラリーは自習するときや休憩するときに使っています。藤井ギャラリーが図書館と比べて良いと思うところは普通に喋っていいということ、それに加えて人が少なく非常に落ち着ける場所であるということです。図書館では静かにしてなければならず、友達と喋りながら勉強したり、課題をしたりするのが好きな自分にとってはここが良い場所になっています。また、休憩するための椅子もたくさんあり、非常に落ち着けます。

厚海大輝

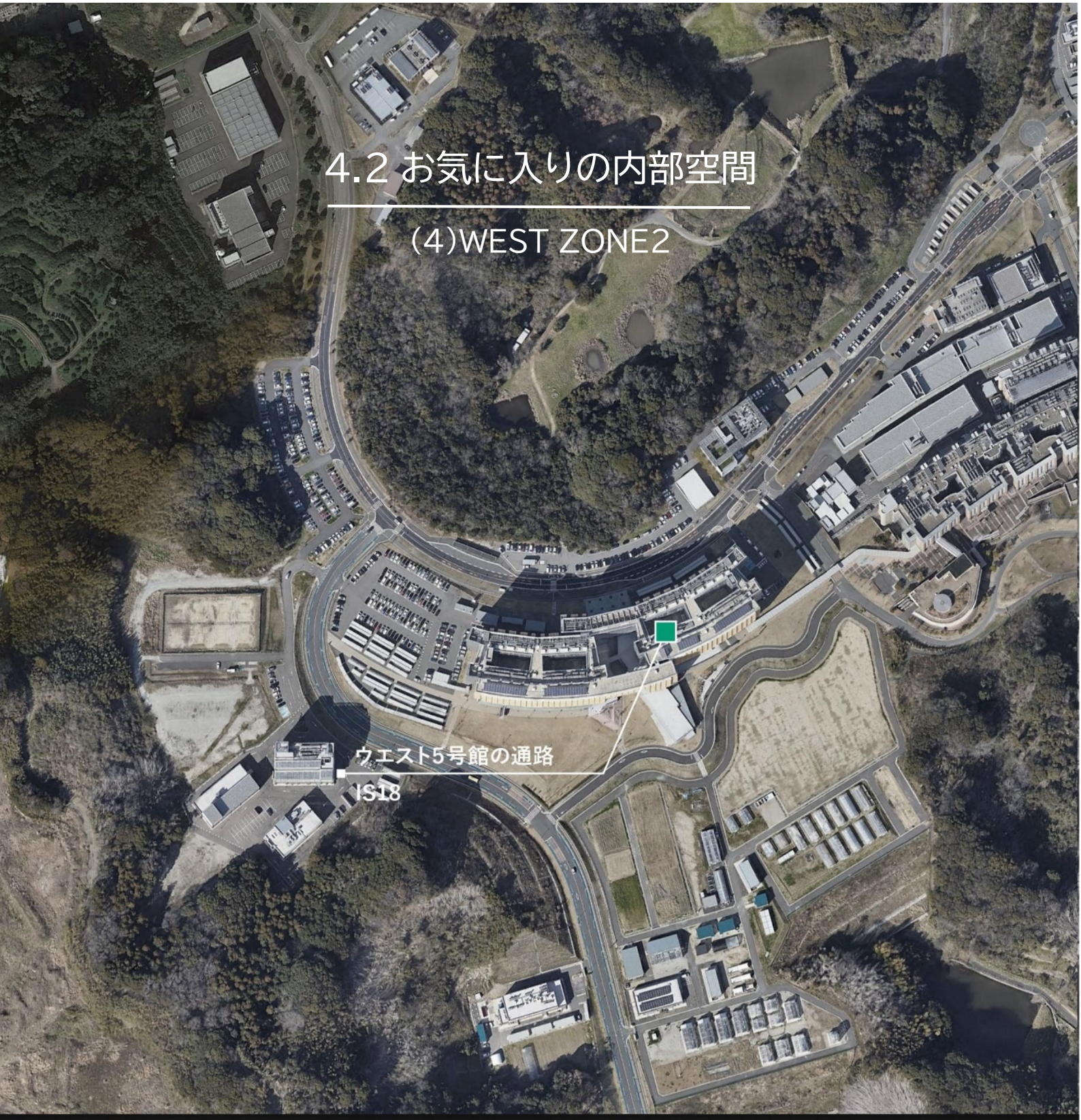
4.2 お気に入りの内部空間

(3)WEST ZONE1



4.2 お気に入りの内部空間

(4)WEST ZONE2





4.2 お気に入りの内部空間

(5)WEST ZONE3



お気に入りの内部空間

IS16

松濤錬成場／WEST ZONE



理由:

僕は大学に入ってアメフト部に入りました。高校まではサッカーをしていて、体作りにあまり励んでいなくて、最初は華奢な体つきでしたが鍛錬を繰り返し行っていく中で、筋肉は目で見てわかる、変化、結果がついてきました。松濤錬成場に行って自分の足りないことを考えて、自分と向き合う時間は自分の成長につながっていると思うし、成長を感じられる場所という理由で松濤錬成場がお気に入りです。お金を払わないとジムにいけない学生と比べて九州大学に通う僕は恵まれているなと感じます。感謝の気持ちを忘れず成長していきたいです。

丈野仁寿

お気に入りの内部空間

IS17

課外活動施設Ⅱ／WEST ZONE



理由:

課外活動施設Ⅱにある和室がお気に入りだ。私は競技かるたのサークルに所属していて、サークルの日に毎回利用している。今まで練習してきたどの施設よりも広くて綺麗な畳が敷いてある点が好きだ。九大以外の和室で練習すると、隣の席との間隔が狭くなって窮屈な思いをすることがよくあるが、この和室ではそのようなことは起きない。競技の特性上、畳が擦り減ってしまうことは避けられないが、これからも大事に使っていきたいと思っている。

黒瀬純

お気に入りの内部空間

IS18

ウエスト５号館の通路／WEST ZONE



理由:

ここは一度足を骨折した時にかなり助けられた思い出がある。理系にとても仲の良い友達が多かったためよくここを通っていたが、事故で車椅子になった時に友達が押してくれていたのだが、通りにくい場所や押しづらい場所もあった。そんな中ここはかなり車椅子が通りやすく、坂が緩やかになっているため変に進みすぎることもない。お気に入りの場所だ。

比良勇斗

お気に入りの内部空間

IS19

E-café／WEST ZONE



理由:

　この E-café は、普段活動しているセンターゾーンからはやや遠いのだが、普段からよく利用させていただいている。飲み物やパンなどの軽食を買って課題をしている。店内はおしゃれな内装で、静か過ぎない環境が自分によくあっていて、課題に集中しやすいなと感じている。また Wi-Fi が強く、パソコンも通信問題なく使えるのも気にいっている。軽食を取ったりしながら友達と語りも交えてリラックスして課題にとり組めるところが最大の長所なのではないかなと感じる。

本坊慶弥

お気に入りの内部空間

IS20

理系図書館３階／WEST ZONE



理由:

　これは、理系図書館の三階にある勉強スペースである。私はテスト期間などにここにきてよく勉強する。普通の机などもあるが、このスペースは１人で籠ることができ、周りが遮られているためとても集中しやすい環境である。なかなか自宅で勉強することができない性格なので、テスト期間はここに大変お世話になっている。そういった理由から理系図書館のこの室内空間が私のお気に入りである。

濵田恭輔

お気に入りの内部空間

IS21

ビッグリーフ／WEST ZONE



理由:

　学食は、キャンパス生活の中で一番お世話になっているし、好きな場所である。特にビックリーフは、伊都キャンパスに数多くある学食の中で一番のお気に入りである。天井が高く、開放感にあふれている点はもちろん、メインダイニングよりもメニューが豊富で、ご飯のサイズも幅広く、その日の調子にあったメニューを選ぶことが出来る点も好きなところの一つだ。

森本郁真

お気に入りの内部空間

IS22

ウエスト１号館の自習室／WEST ZONE



理由:

私はこの場所は九大で一番景色が良い自習室だと思うのでおきにいりです。この自習室は理学部棟の１０階にある自習室で理学部の先輩がすごく景色がいいからおすすめだとおしゃっていたので自分は農学部ですが、行ったことがありました。ここからはセンターゾーンやイーストゾーン、福岡市や海など１８０度いろんな景色を楽しむことができます。またここは景色がいいだけでなく、天井を高くし窓の淵が小さいため、すごく開放感がある空間になっている点もとても好きです。

塩谷章人

4.3 お気に入りの外部空間

(1)EAST ZONE



お気に入りの外部空間

ES1

ビッグスカイと大講義室Ⅱの間／EAST ZONE



理由:

私のお気に入りの外部空間は、イーストゾーンの食堂と大講義室Ⅱの間にある広い空間です。私は今年発足したばかりのダンスサークルに所属しているのですが、室内の練習場所が無いので、普段ここでダンスの振り付けを練習したり、皆で合わせたりしています。食堂の壁がガラスになっているので、それを鏡にすることが出来てとても有難いです。イーストゾーンに初めて来た頃は、「この広い空間なんであるんだろう」とすごく疑問でしたが、広い分、多様な可能性を秘めているんだろうと今は思います。使い続けて、愛着の湧いた空間です。

立花千夏

お気に入りの外部空間

ES2

ビッグスカイ東側の広場／EAST ZONE



理由:

伊都キャンパス内で私のお気に入りの外部空間は、イーストゾーン学食前の広場である。お気に入りの理由は、写真のような景色が好きだからだ。このように天気の良い日には、空がどこまでも広がっているような景色になり、心が落ち着く。確かに、伊都キャンパスには立地上、不満の方が多い。なかなか近くに遊べる場所はないし、においが臭い時もある。風の強い日ばかりだ。しかし、こういった都会にはない景色を見ると心が落ち着く。

千脇拓馬

お気に入りの外部空間

ES3

中央図書館上の広場／EAST ZONE



理由:

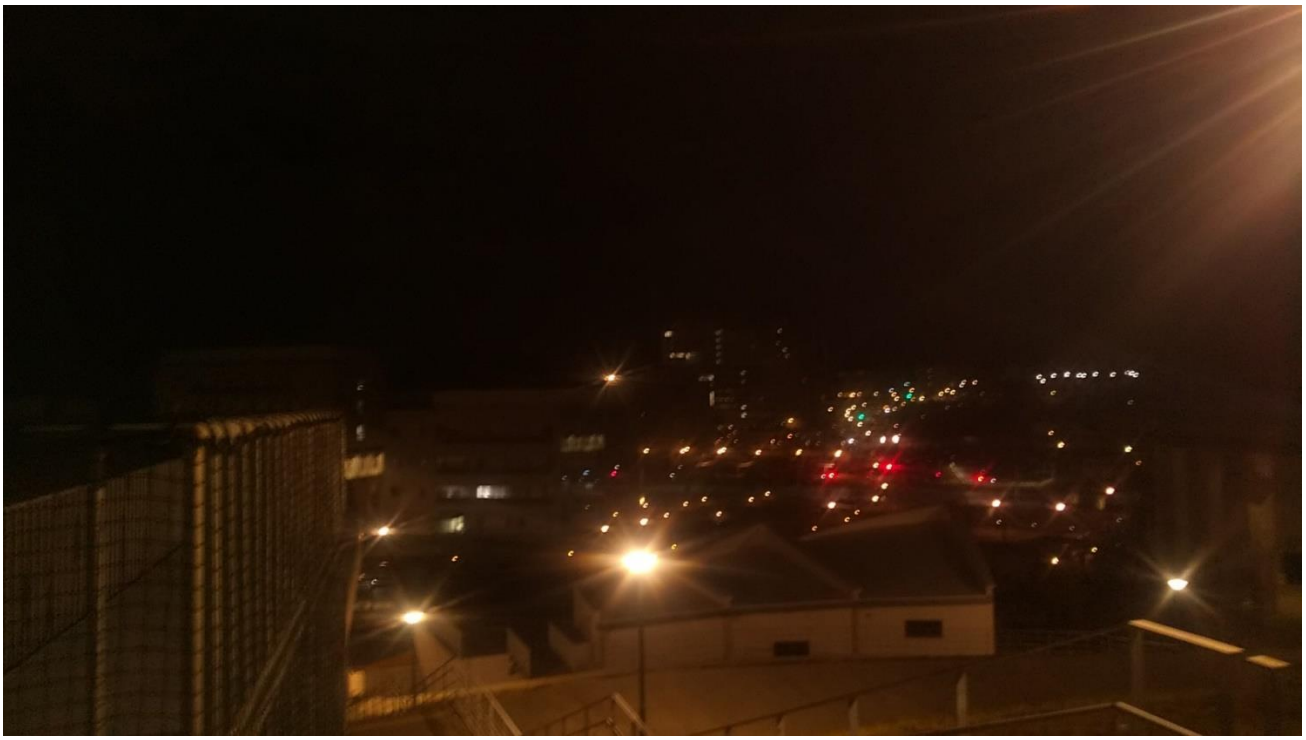
センターゾーンの人がごった返した環境に息苦しくなった時にふと来ると、リラックスできるから。できてまだ間もないだけあってきれいでありつつ、いつもどこかがらんとしているのがいい。また図書館の上の部分で目線も高く、見下ろせばセンターゾーンから風車ぐらいまで一望できるのもお気に入りポイントの一つである。以上のような点から、オンライン授業はイーストで受けたり、昼食にビッグスカイに立ち寄ったりするなどして定期的に訪れている。

木戸信太朗

お気に入りの外部空間

ES4

中央図書館上西側の長い段階／EAST ZONE



理由:

私は、イーストゾーンの中央図書館横の長い階段付近からセンター、ウェストゾーンを眺めた風景がとても好きです。私は伊都キャンパスの近くに住んでいるので、夜中にたまにキャンパス内を散歩することがあるのですが、個々の風景はとてもきれいで、まだ棟の電気がうっすらついているときはとても幻想的できれいです。東西にのびているキャンパスだからこそみられる景色だと思います。

金城歩

お気に入りの外部空間

ES5

イースト 1 号館前の段階広場／EAST ZONE



理由:

空間の使い方がとても良いと思った。特に何かあるわけではないけど広いスペースがある感じがいいと思った。晴れている日は上から日光が差し込み、白を基調としているのもあってとても明るい空間になっていて気持ちが良い外部空間となっていると感じた。

黒田泰祐

4.3 お気に入りの外部空間

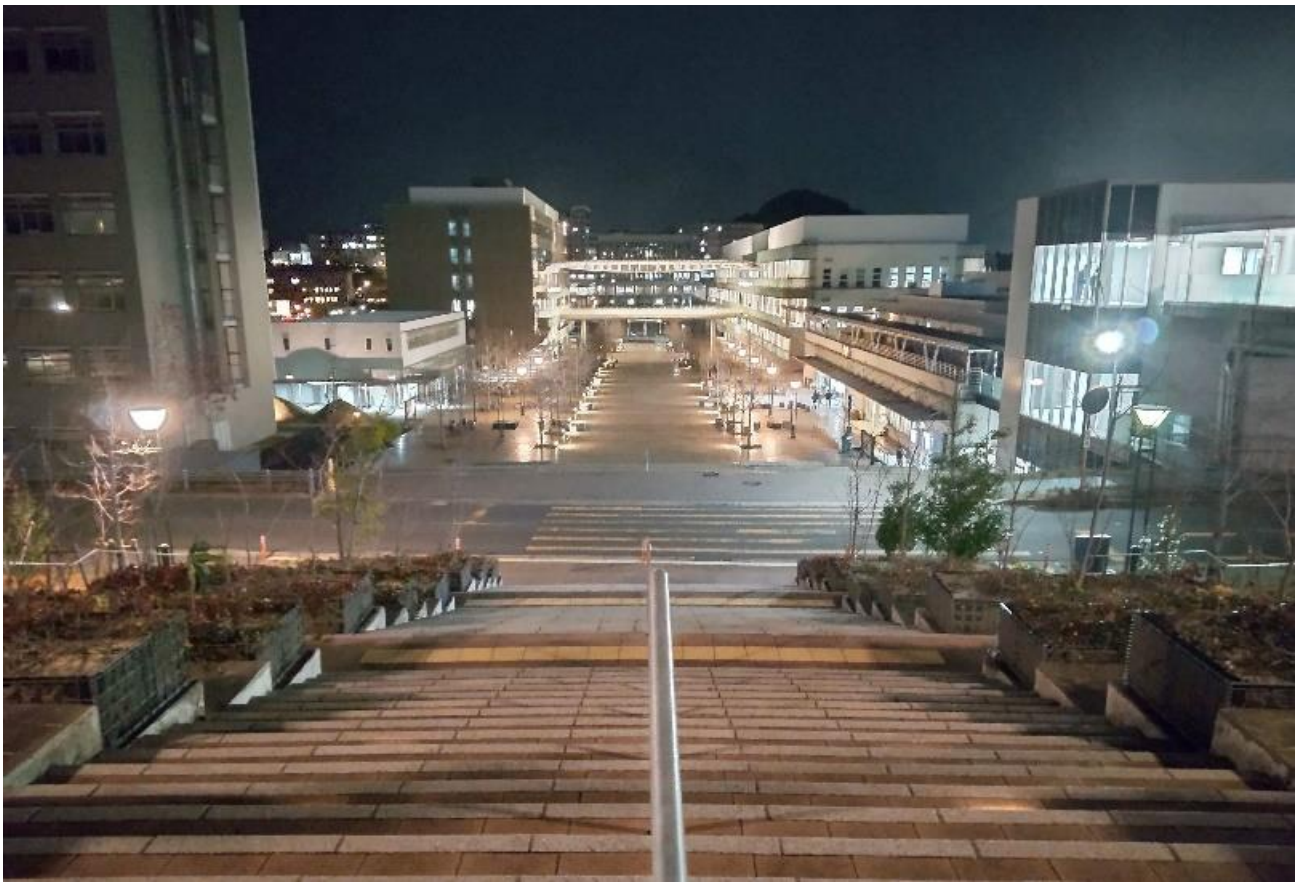
(2)CENTER ZONE



お気に入りの外部空間

ES6

センター1 号館と 2 号館の間／CENTER ZONE



理由:

センターゾーンの 1 号館と 2 号館の間の空間がお気に入りだ。あちこちに置かれているベンチでくつろいだり、植えられている樹木で季節を感じたりと、日々の疲れを癒やしてくれるからだ。春や秋には心地よい日差しと風で、さらにリラックスできる。キャンパス見学の際に、地面の模様が九州大学のバーコードや伊都以外のキャンパスとのつながりを意味していると聞いたときは、ただただ感心した。また、写真にあるように夜にはライトアップされて、幻想的な空間をつくりだしている点も素敵だと感じる。

黒瀬 純

お気に入りの外部空間

ES7

駐輪スペース／CENTER ZONE



理由:

ここを気に入っている理由としては、駐輪スペースがある程度あるにもかかわらず、ここを利用している人が少ないので、混雑せずに利用できるということが挙げられる。そのため、自転車を停める場所を探したり、停めた自転車を探したりする手間を省くことができる。また、食堂やセンターゾーンの講義室にも近いというのも理由の一つである。先日、屋根付きの通路が完成したので、さらに利便性が上がり、より気に入るようになった。

野々下知輝

お気に入りの外部空間

ES8

伊都キャンパス案内図／CENTER ZONE



理由:

広いキャンパスにあるたくさんの施設の場所をわかりやすく示している上に、色覚異常の人でも色の区別が容易について地図を苦労せずに読めるような、２色覚に配慮したカラーバリアフリーが用いられているからです。日本では男性の２０人に１人、女性の５００人に１人が色覚異常の当事者と言われているということが講義中で学んで、それを考えるとこの広大な伊都キャンパスに通う学生や講師の先生、訪問される方々に対する配慮は欠かせないものだと思いました。

長谷川千乃

お気に入りの外部空間

ES9

センター2 号館前オープンスペース／CENTER ZONE



理由:

私は、講義が終わると大抵はここに足を運ぶ。学生で満ちた講義室で行われる、長くて辛い講義が終わった後に見るこのオープンスペースは格別である。建物がパカッと開いているように設計されたこのゾーンは開放性にあふれており、見ているだけで心がリフレッシュされていくようである。また、遠く雄大な筑紫山地、福岡市街の煌めき、のどかな糸島の田園風景を一度に望むことができるその眺望も、私がこの場所を好む理由の 1 つである。

中山良哉

お気に入りの外部空間

ES10

九州大学の石碑周辺／CENTER ZONE



理由:

九州大学といったらここが真っ先に頭に思い浮かぶ。まさしく九州大学の顔である。私はまだ一年生だからだと思うが、この辺りを徘徊していれば誰か友人を見つけることは容易であるし、自分が九大生だという事実を何回でも再確認させてくれる。他にも上空から見たらバーコードが読み取れたり、各キャンパスへの方向を示していたり、知る人ぞ知る遊び心のある空間作りも素晴らしいものだと感じる。

山本雄貴

お気に入りの外部空間

ES11

皎皎舎の屋外スペース／CENTER ZONE



理由:

風通りがよく眺めもよいため、気分転換に外で課題をしたり友人と会話したりするのに最適な場所であり、また皎皎舎で買い物をした後にくつろげる場所であるため、お気に入りの外部空間の 1 つである。夏の涼しい日や冬の日差しが暖かい日に利用すると非常に居心地がよい。コロナ禍で室内よりも屋外の方が会話や食事をしやすいこともあり、テラスのような屋外の机と椅子が設置されているスペースは非常にありがたく感じている。

室岡千尋

お気に入りの外部空間

ES12

総合体育館前のピロティ／CENTER ZONE



理由:

私は、硬式テニス部に所属しており、ほぼ毎日ここのピロティ―に行きます。ここでは、部活の仲間と体幹トレーニングや柔軟体操をしたりするだけでなく、部活終わりにみんなで他愛もない話をしたりと、入学して 1 年もたちませんが、すでにたくさんの思い出があります。また、ここは硬式テニス部だけでなく、ソフトテニス部、スキー部、ホッケー部、コーラスサークルなど、様々な部活やサークルが利用しており、学生が生き生きと活動できる場となっています。特に、コーラスを聞きながらするテニスはいつもより気分が上がります。以上が、ここがお気に入りの外部空間となっている理由です。

和田明里沙

お気に入りの外部空間

ES13

Qasis のテラス席／CENTER ZONE



理由:

ここは、地下食堂の外のテラス席の空間です。なぜここがお気に入りの空間なのかというと、とても開放的でここから見える景色が自然豊かで心が休まるからです。天気のいい日はここでお昼ご飯を食べて、いつも自然を感じています。ここからは貯水池や、その周りにある自然を眺めることができます。ここは開放的なので、食堂の中の人がたくさんいる空間でご飯を食べるよりもこのテラス席で食べるほうが食堂のご飯もおいしく食べられます。最近はとても寒いのでこのテラス席は利用していないのですが、また暖かくなったらここで食べようと思います。

山川紗英

お気に入りの外部空間

ES14

センター2 号館の廊下／CENTER ZONE



理由:

この場所からは今宿、九大学研都市、周船寺などの街並みとそれらの町の後ろにそびえたつ山が見えます。この景色から、今宿、九大学研都市、周船寺が路村形態に近いことがはっきりとわかります。また町から離れた海側は田んぼが広がっていることがわかります。私は昔から町の形態や都市計画などに興味があったので、このように九大付近がどのような町になっているかを一目でわかるこの景色が好きで、休み時時間にこの景色が見えるこの場所がとてもお気に入りです。

塩谷章人

お気に入りの外部空間

ES15

センター1 号館とセンター2 号館の連絡橋／CENTER ZONE



理由:

文系キャンパスとセンターゾーン、センターゾーン同士を繋ぐこの空中渡り廊下も便利だと思います。これのお陰でいちいち下に降りて移動したりする必要が無いので助かっています。また雨が降っているときなども渡り廊下に大きな傘のようなものがついていて濡れないのも素晴らしいです。伊都キャンパス全体が雨に塗れずに一周できるというのを知ってとても感動しました。

石田悠太郎

お気に入りの外部空間

ES16

ビッグサンド前のスペース／CENTER ZONE



理由:

私の「お気に入りの外部空間」はセンターゾーンのコンビニやメインダイニングの近くの石の椅子である。なぜそこがお気に入りかというと、天気が良い日には、昼休みになると、上に書いたようにお気に入りの場所で昼食を食べて、その後に石の椅子に座って友達と談笑しながらのんびりと日向ぼっこをして、落ち着いた昼休みを過ごせるからだ。また、たくさんの人が通るため、友達にも会うことができるというのも気に入っている理由である。

樋口大介

お気に入りの外部空間

ES17

センター2 号館とセンター3 号館の連絡通路／CENTER ZONE



理由:

これはセンター２号館とイーストゾーンの建物を繋ぐ連絡通路です。私がこの場所をお気に入りの外部空間として選んだ理由は便利さです。雨が降っていても風が強くても、この連絡通路を通れば天気に関係なく簡単に行き来できるし、移動時間も短縮できます。私は図書館に行くときにこの通路を使うのですが、これがなかったら外に出て大回りして行かないといけないので、時間がかかるしめんどくさいです。いつも助けられてます。

三坂蘭

お気に入りの外部空間

ES18

椎木講堂／CENTER ZONE



理由:

九大伊都キャンパスで私がお気に入りの外部空間は、椎木講堂である。まず、椎木講堂に向かうとあのぽっかりと空いた空間が最初に目に入る。いきなり建物への入り口があるのではなくてあのとても大きな空間を間に挟むことで外界との境界がまるでないように感じる上に、段々と中に入っていく感覚が味わえるのでよりその大きさを実感できる。そして中に入るとコンサート会場のような客席が広がる。こちらは外部空間ではないのだが、九大にきて入学式の時非常に驚いたのを覚えている。

金本朋純

お気に入りの外部空間

ES19

貯水池周辺／CENTER ZONE



理由:

２号館２階の廊下からの眺望。手前にはセンターゾーン南側のランドマークである貯水池があり、そこから高祖山を挟んで左側には学研都市までまっすぐ続いていく学園通りのライン、右側には脊振山地とその手前の怡土の平野が霞みがかったトーンで見える。ここはキャンパス内でも最も開放的な場所だと思う。そしてその眺望がアクセスが良くて授業でよく使う場所にあるというのも素晴らしい。

吉岡潤哉

お気に入りの外部空間

ES20

駐輪場／CENTER ZONE



理由:

この写真は、センターゾーンの駐輪場の写真である。正確には私のお気に入りは駐輪場の屋根なのだが、それを中心とするこの外部空間一帯もとても好きである。この駐輪場を初めて見た時、なぜこんなに屋根が波打つような形になっているのだろうかと疑問に思ったのだが、建築の授業で聞いた話によると、奥の山々と対比させて「海と山」を表現しているらしく、自分にはとても考えつかないものだったのですごく衝撃を受けた。また、ただのスペースを駐輪場として開放するのではなく一台一台が確実に停めることができるように作られているのでぐちゃぐちゃになることがなく、用途としての空間もとても素晴らしいと思う。

三浦翔琉

お気に入りの外部空間

ES21

テニスコート／CENTER ZONE



理由:

簡単にいうとサークルの練習場所となっているためだ。ここ以外にも練習場所はあるのだが、他の集団や他の学年の人たちに会うことができるのはこの場所のみであり、学部やクラスという垣根を全く超えたコミュニケーションが生まれる数少ない機会を生んでいる場所とも言える。曜日や時間帯によっては非常に人が多く、あわただしささえ感じることもあるが、中学の頃のような騒がしさは悪くないと思う。

佐野開音

お気に入りの外部空間

ES22

センター2 号館 1 階休憩空間／CENTER ZONE



理由:

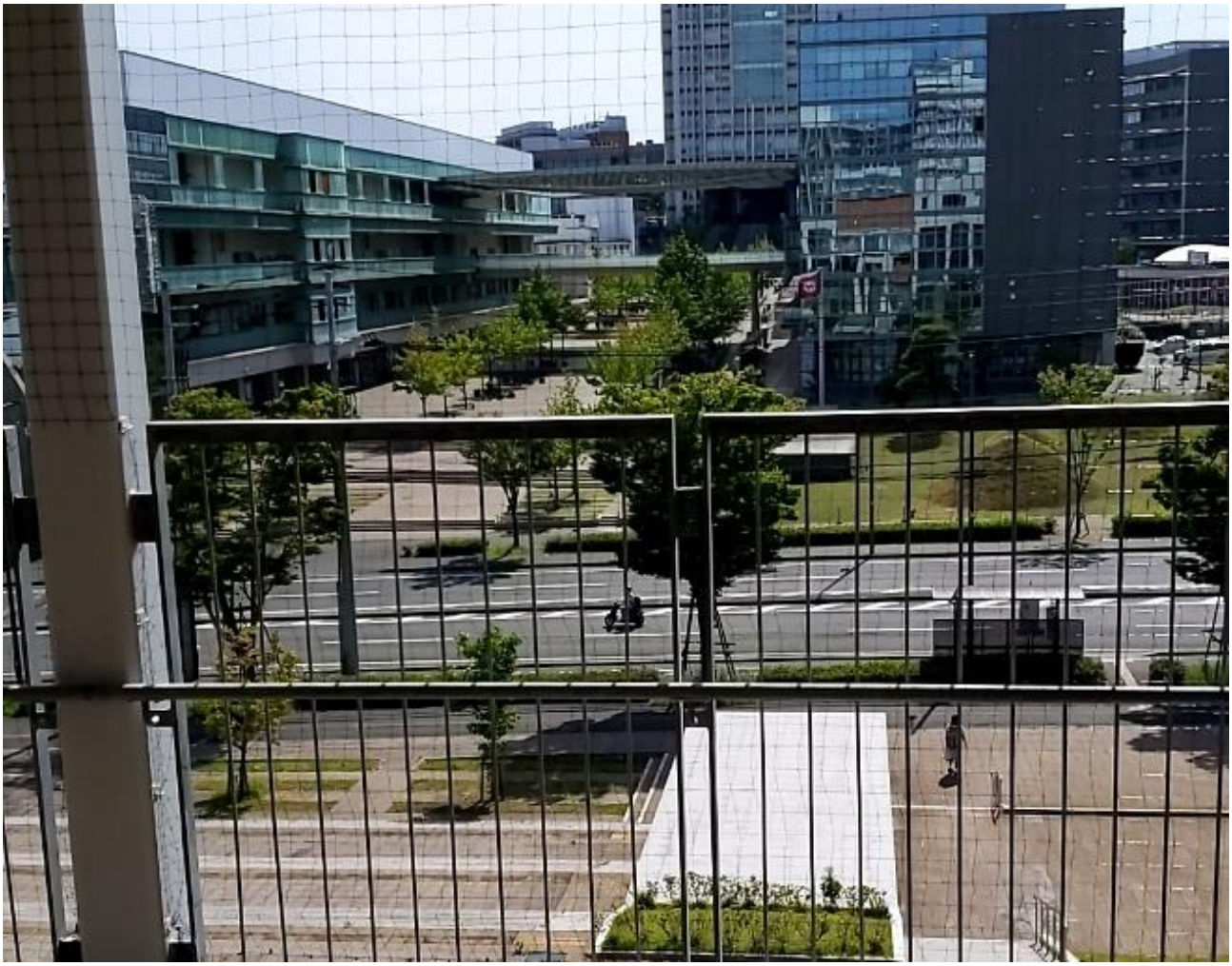
私がこの場所を気に入っている理由は、授業の空き時間を過ごすのに適していると感じるからである。空き時間に友人と談笑したり課題をやったりしながら過ごそうと思ったとき、写真の場所には机があるので課題ができ、友人と話してもよほど大声でない限りは迷惑にならない。それに加えて、ここは部屋として閉じられた空間ではないので新型コロナウイルスの感染リスクは低くなり、かつ机の場所には屋根があるので雨の日でも利用できる。基幹教育の教室から近くすぐ移動できる点も便利である。

井山 駿輔

お気に入りの外部空間

ES23

センターゾーンに向かう道／CENTER ZONE



理由:

中央図書館からセンターゾーンに向かう道で、初めてセンターゾーンの建物がはっきり見える場所であり、ここからセンター1・2 号館や理学部棟などの建物と、バス待ちや自転車に乗っている学生が多くみられる。1 年生の時にほとんどキャンパスに通えなかった自分にとっては、ここからの景色が「大学に通っている」という実感を与えてくれる場所だから。

松田啓佑

お気に入りの外部空間

ES24

総合体育館の自販機周辺／CENTER ZONE



理由:

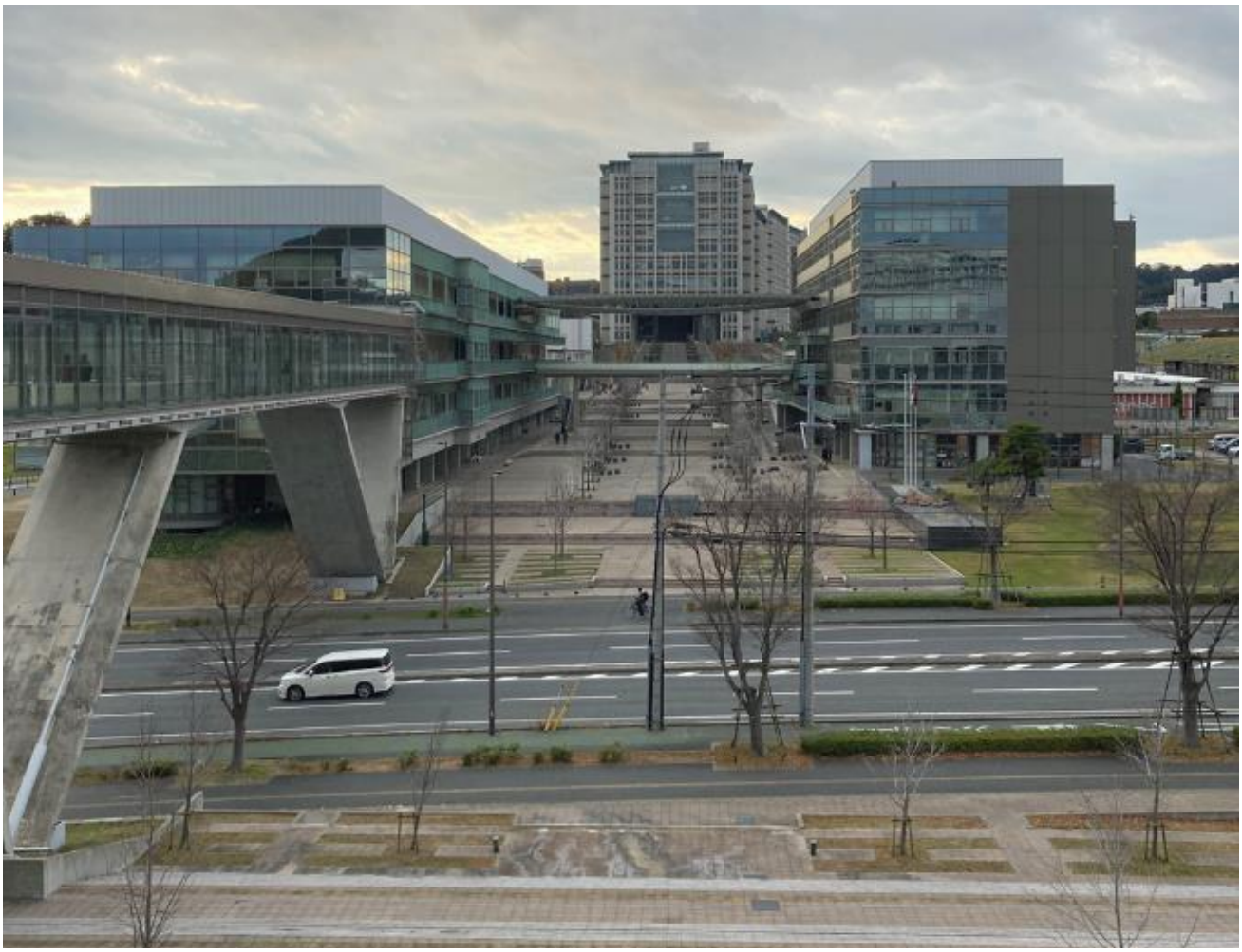
後期の木曜４限に総合体育館で身体運動科学実習の授業を取っており、毎週その授業が終わった後にこの場所に集まってクラスの友達とジュースやお菓子、アイスなどを食べたり飲んだりしており、自分達にとって非常に心地よい場所となっているから。また、それ以外の日でもここを通るとよく誰かと会うことがあり、多くの人と色々な交流をすることが出来るため。

金生頼行

お気に入りの外部空間

ES25

センターゾーンの入り口／CENTER ZONE



理由:

まず何といっても誰が見てもここは九州大学なのだとわかるモニュメントと建物の壮大さだ。初めて訪れた時には高校の校舎と比べ物にはならない立派さに圧倒され、大学という専門の学問を修める場所としての違いを見せつけられたような感情を覚えたのを今でも覚えている。また、僕はキャンパスの近くに住んでいるのでよく散歩をするが、夜の昼間とは違った、ライトアップされたことによる上品さのような雰囲気もとても好きだ。

山下慶浩

お気に入りの外部空間

ES26

九州大学の石碑周辺／CENTER ZONE



理由:

私が選んだお気に入りの室外空間は「九大センターゾーン入り口の石碑」である。私は受験生時代の頃から九大の象徴ともいえるこの石碑を目標に努力してきたと言っても過言ではない。入学式やイベントの度にこの石碑はいい撮影スポットになる。また写真にもあるように、深夜に訪れると美しくライトアップされ、奥に続いていく街灯とも重なり合って大学とは思えないほどの幻想的な世界観を作り出す。また景観だけでなく、友達との待ち合わせなど、位置情報の共有においても重要な役割を果たしてくれるため、私はよく訪れる場所としてお気に入りの室外空間である。

新田篤

お気に入りの外部空間

ES27

ビッグサンド売店前／CENTER ZONE



理由:

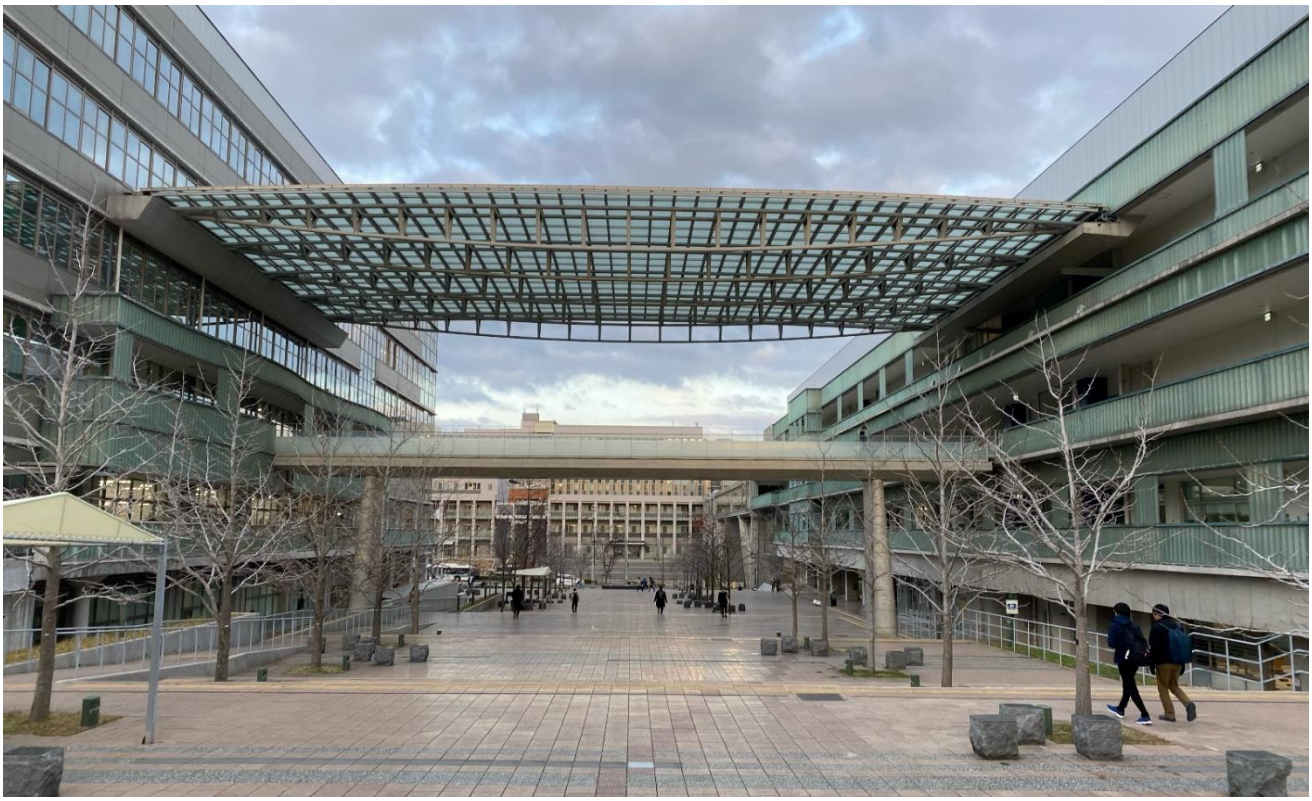
まず、後期になりクラスとしての活動が激減し、それに伴ってクラスの子との関わり、触れ合いが減ってしまった。唯一と言っていいほどの機会が、健スポであり、その後毎回みんなで立ち寄るのがこの売店である。ここは、安い価格で美味しい飲み物やアイスクリームが食べることができて、みんなとこれを食べながらお喋りできる。この時間がとても心地よいし、楽しい。また、売り場にいるおばちゃんも笑顔で商品を渡してくれるので、とても心温まる。これで１週間経ったなと実感できる場所だし、心地よい空間だと思う。

山北翔大

お気に入りの外部空間

ES28

センター1 号館とセンター2 号館の連絡橋下／CENTER ZONE



理由:

この写真では少しわかりにくいかもしれないが、自分はお気に入りの外部空間としてセンター１号館と２号館をつなぐ渡り廊下を選んだ。第一の理由としてまず外観が好みという点が挙げられる。まだ移転して間もない伊都キャンパスは建物のあらゆる部分がきれいで、外部空間としてどこを選ぶかとても悩んだ。また、この渡り廊下からはセンターゾーンを一望でき、側道の道に生えている木から春夏秋冬を感じることもできる。１号館と２号館をつなぎ、移動するのに階をいちいち上り下りしなくてもよいという利便性も気に入っている。

安芸京祐

お気に入りの外部空間

ES29

センター1 号館へのスロープ／CENTER ZONE



理由:

バリアフリーデザインを意識したと思われるこのスロープは学生相談室や健康相談室があるセンター1 号館へとつながっており、九州大学の学生だけではなく職員の皆さんも頻繁にこの道を通る。中には車椅子で移動しなければならない人もいるので、そうした人たちでも移動しやすいデザインになっているのが多様性に対しての意識の高さが形となって表れていると思ったから。また、純粋に自分が部活の練習後、筋肉痛に苦しめられ階段を上るのがしんどかった時に、足への負担が減るこのスロープが大変ありがたく感じたから。

榊大飛

お気に入りの外部空間

ES30

センターゾーン大通り沿いスロープ／CENTER ZONE



理由:

この写真の場所がお気に入りである理由は、写真に写るスロープが伊都キャンパスのバリアフリーデザインを象徴するものであるからだ。ここは伊都キャンパスの大通り沿いに位置しているため、初めて来た人にも目に入りやすい。実際に、センターゾーンからウェストゾーンに行くまでの道は段差が多いため、車いすに乗る人や歩行が困難な人にとってこのスロープは必要不可欠である。歩行障害を持つ私の友達もこのスロープの存在は非常にありがたいと言っていた。

大坪稔彦

お気に入りの外部空間

ES31

亭亭舎外のスペース／CENTER ZONE



理由:

天気の良い日の昼に来ると景色が綺麗で、伊都周辺の自然を一望できるから。風通しも良く、春や秋など気温も快適な時期には昼食をここでとることもある。ただ、センターゾーン入り口から生協も含めこの空間へ向かおうとすると、途中通路が狭くて分かりにくく(コンビニの工事中は道を迂回せねばならいことも不便に感じた)、利便性はさほど高くはないと思われるので、改善してほしいところではある。

田代 彩恵

お気に入りの外部空間

ES32

駐輪場に降りる段階／CENTER ZONE



理由:

この、図書館やセンター２号館に直通している通路の途中に設置されている、直接駐輪場に降りることのできる階段はよく利用している。センターゾーンから直通で図書館やイーストゾーンに向かうことのできる便利さに加え、適度な感覚で下に降りるための階段も取り付けられているので、降りたいときに降りることができ、スムーズなキャンパス移動に効果的につながっていると思う。

本坊慶弥

お気に入りの外部空間

ES33

椎木講堂前の広場／CENTER ZONE



理由:

私が好きな外部空間は、椎木講堂前の広場である。ここは、巨大な椎木講堂を背にして、九州大学のセンターゾーンとその奥のウェストゾーンを一望することができる場所である。ここに立つと、改めて九州大学の伊都キャンパスの広大さを実感できる。また、夜、寮に帰るためにここを通ると、青色の光が路面に埋め込まれており、とても綺麗である。昼も夜も、ここ九州大学で過ごす身であるため、毎日何度か通るこの場所が私のお気に入りである。

佐藤暖流

お気に入りの外部空間

ES34

椎木講堂とフジイギャラリーの間／CENTER ZONE



理由:

ここは、椎木講堂とフジイギャラリーの間にある、イーストゾーンへの階段である。多くの人は通らないが、校内散策した際に、偶然通った際振り返り、とてもきれいであった為撮影した。センターゾーンやウエストゾーンを眺めることができ、また課外活動施設への道もきれいに見え、大学の全体を少し高い位置から見ることができる、穴場スポット。人通りも少なく、暖かい時期だと、日向ぼっこもできる。周りが緑に囲まれており、自然も適度に感じることができる。

藤原涼

お気に入りの外部空間

ES35

総合体育館のデッキテラス／CENTER ZONE



理由:

　総合体育館のデッキテラスがお気に入りだ。私は部活動をしているので夜中にこの場所に訪れる機会があるのだが、かなり夜景がきれいだ。左手に見えるキャンパスの建物もライトアップされてるかのようになる。また、頭上に広がる夜空も美しい。双子座流星群がやってきたときは天体観測部がこの場所を利用しているほどだ。部活の休憩時間にこの景色を見て、心と体をリフレッシュすることができるのでお気に入りだ。

渡邊尊

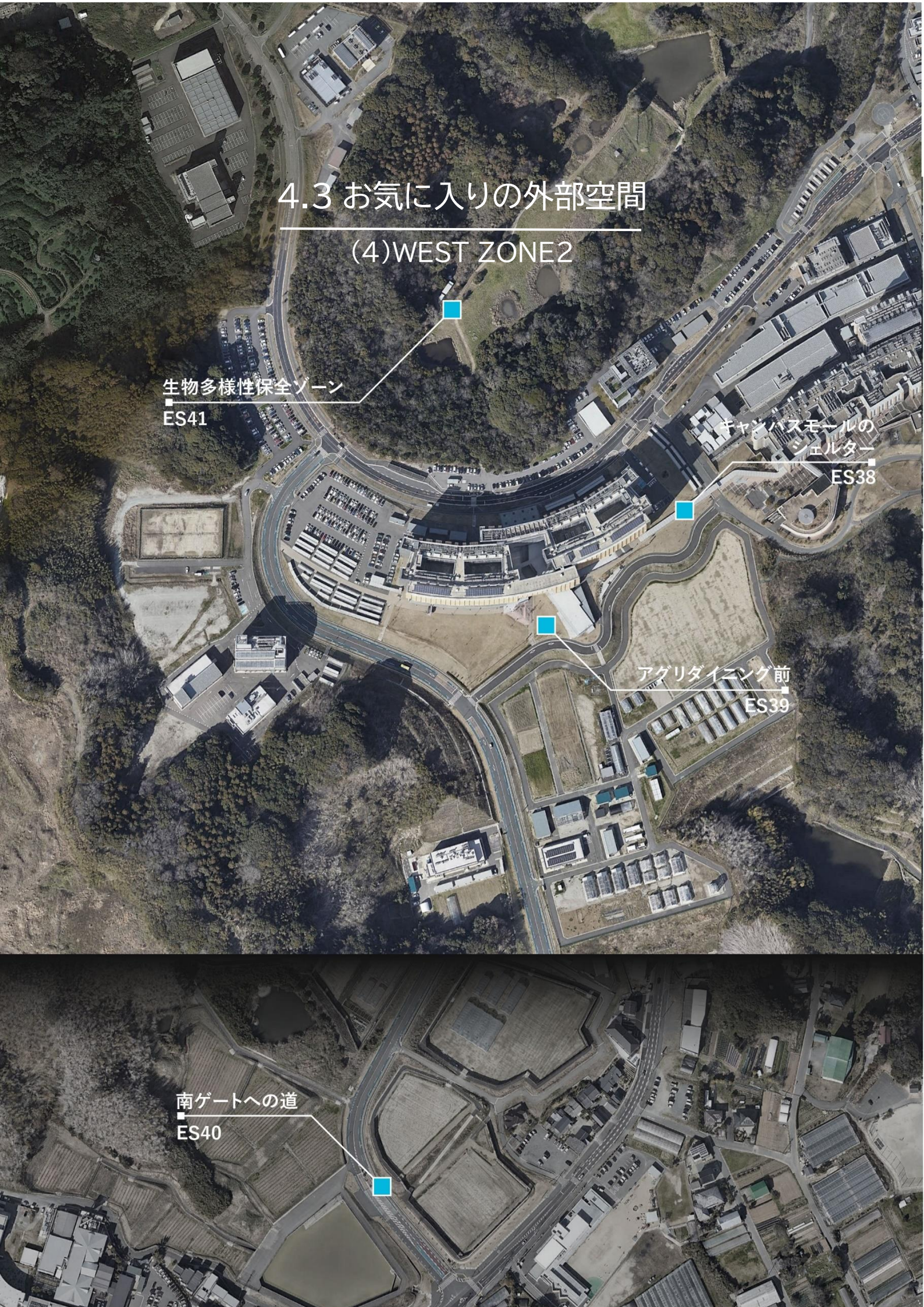
4.3 お気に入りの外部空間

(3)WEST ZONE1



4.3 お気に入りの外部空間

(4)WEST ZONE2



4.3 お気に入りの外部空間

(5)WEST ZONE3



お気に入りの外部空間

ES36

総合グラウンド／WEST ZONE



理由:

総合グラウンドは、普段部活で使用している場所だ。5 月まで工事のため利用することが出来なかったが、それまで土のグラウンドだった総合グラウンドが、青いトラックと人工芝に変わって帰ってきた。人工芝になったことで、雨の日の練習でも汚れることはなくなった。また、ふかふかの人工芝になったことでこけてもすりむくことはなくなった。このような人工芝のグラウンドで毎回練習することが出来て本当に幸せだと思う。

森本郁真

お気に入りの外部空間

ES37

駐車場内のスケートボード練習施設／WEST ZONE



理由:

外部空間でおきに入りの場所は課外活動施設付近の駐車場である。この駐車場はとても広く、利用している自動車の数も少ないので、趣味であるスケートボードの練習に適しているからである。

寺師奏一

お気に入りの外部空間

ES38

キャンパス・モールのシェルター／WEST ZONE



理由:

雨の日でもなんの煩わしさもなく通ることが出来、非常に助かっているから。学生目線に立って学生がキャンパスライフを最大限効率化できるように考えられたものだと思う。また、水はけもよく、雨の日に水が流れ込んできてもすぐに乾くため、足が濡れたことが一度もないから。ちょっとしたところに製作者の親切心が垣間見れる場所なので非常に気に入っている。

比良勇斗

お気に入りの外部空間

ES39

アグリダイニング前／WEST ZONE



理由:

わたしはアグリダイニングがキャンパス内のお気に入りの外部空間です。アグリダイニングは生協食堂の一つなのにもかかわらず、他の食堂と比べてとても個性的なデザインをしています。もちろん内観についても然りですが、私はこの写真に写っている太い柱がパルテノン神殿を想起させてとても好きです。またその前の部分にある階段に関しても徐々に広がっていく形となっていてとても好きです。また、農学部キャンパスのはでな色使いと比べておとなしい色使いである点も景観としてとても調和がとれていると思います。

今川大悟

お気に入りの外部空間

ES40

南ゲートへの道／WEST ZONE



理由:

いつも通るわけではないが、部活でグラウンドを利用した後に帰り道としてこの坂を下っている。この坂はとても長くまた、田園風景や遠くに山が見えとても景色がいいのでわざわざ遠回りしていくほど好きな道である。

そして何よりもありがたいことは道路がしっかりと整備され安全が確保されていることである。自転車レーンが歩道と別に整備され、夜もしっかりと道路が見えるように街灯が多く設置されていて、安心して坂を下っていけるところが、ここがお気に入りの空間になっている理由である。

安藤光汰

お気に入りの外部空間

ES41

生物多様性保全ゾーン／WEST ZONE



理由:

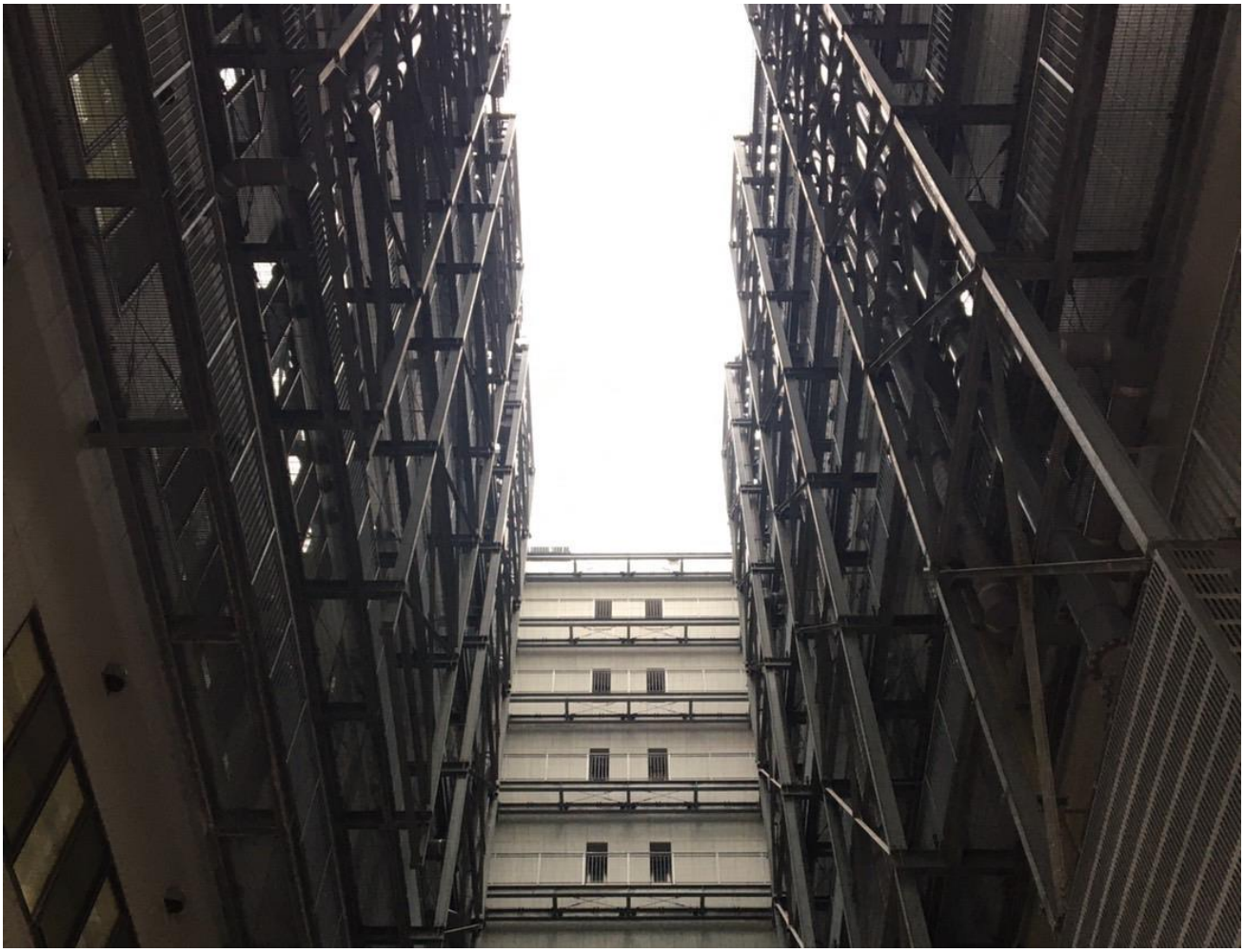
私がおすすめする外部空間は、生物多様性ゾーンである。伊都キャンパスは緑の豊かな自然環境に恵まれている。従って植物だけでなく、動物や昆虫、微生物に至るまで、キャンパスといかに共生できるのかが大きな問題となるのである。そのため、「森林面積を減らさない」「種を消失させない」（注 3）という目標を掲げ、「生物多様性ゾーン」と呼ばれる保全緑地がつくられた。元岡地区はかねてから水資源が潤沢ではなかったため、九州大学を箱崎から伊都へ移転する計画が実行された時に、農家の多い元岡住民と水資源について何度も話し合いを重ねたと講義で学んだ。また、本講義第 7 回目の現地視察では生物多様性ゾーンを中心に見学を行ったが、元岡住民と九州大学が水資源を枯渇させないとの約束を印した石碑が設置されていたように、現在からでも水資源の確保については大きな課題だったことが伺える。しかしながら九州大学は水資源を枯渇させることなく、自然と共存してみせた。地域の貴重な水源の一つである幸の神湧水の沢地を生物多様性ゾーンとし、水資源を保全し、地下水を減少させないために定期的に生えすぎた木々を伐採し調整している。これだけ広大な土地を有していながら、自然ときちんと共存している大学は九州大学の他になかなか存在しないだろう。

槻木 結

お気に入りの外部空間

ES42

ウエスト１号館／WEST ZONE



理由:

外観を綺麗にするためにあえて機器や配管を内側に配置したという説明を受けた記憶があるが、この雑多な機器を凝縮したごちゃごちゃした感じが the・研究施設という感じがして私は好きである。エヴァンゲリオン等に出てきそうなビジュアルが大変良い。ずっと見ていられるというのは言い過ぎだが個人的にはかなり気に入っている。

彌吉啓一郎

お気に入りの外部空間

ES43

ビッグリーフ前の通り／WEST ZONE



理由:

私の「お気に入りの外部空間」は、ウエスト１号館やビッグリーフ前の通りである。福岡市街の方角を見ると、遠くに福岡タワーが見え、その景色は絶景だ。また、ウエストゾーンの方を見ると、建物がレンガ造りのようなデザインになっていて、おしゃれな街並みのように思えて良いと思う。モスバーガーやローソン、カフェもあり、初めて伊都キャンパスを訪れたときから、その場所がお気に入りの外部空間である。

知京健真

お気に入りの外部空間

ES44

モスバーガー前の広場／WEST ZONE



理由:

モスバーガー付近にある少し広めのこの広場は福岡市内を一望でき、昼休みなどに休憩したいときにぴったりの場所であるからだ。最近はコロナウイルスの影響でテイクアウトしてご飯を食べることもたまにあるが、この場所は自然に囲まれたような空気感が漂っているためリラックスでき食事もおいしくなると思う。また、夜には夜景としてもきれいであり、福岡タワーなどの明かりがかなりきれいであると感じたためお気に入りである。

前田憲人

お気に入りの外部空間

ES45

ウエスト１号館／WEST ZONE



理由:

センターゾーンの全体の外観デザインがお気に入りなのでここで紹介していきたいと思う。伊都キャンパスを建設するにあたって、学生に田舎にあるキャンパスをどう都会的に見えるようにしていくのかといった工夫をしたことを学んだが、非常に都会的なキャンパスに仕上がっているとおもうし、それが一番顕著なのがセンターゾーンなのではないかと感じる。ガラスが多く使われている 1 号館、2 号館の間にすっと理学部棟が立っている姿は非常に壮観なものであると思うし、かっこいいと感じる。よって僕のお気に入りポイントはセンターゾーンである。

津越亮佑

お気に入りの外部空間

ES46

ウエスト３号館／WEST ZONE



理由:

僕のお気に入りの外部空間はウエストの建物の配管のところです。一般に汚くなりがちな配管の配置を壁沿いに整えて配置することによりスタイリッシュで景観を損なうことなくうまく配置していてとてもすごいなと感銘を受けました。室外機等の他のものは屋上に配置しており、機能性だけでなくデザイン性、見た目にもものすごく気を遣っていてすごいアイデアだなと感動しました。

井上元陽

お気に入りの外部空間

ES47

ウエスト１号館前の段階／WEST ZONE



理由:

センターゾーンを行き交う人々の喧騒を眺めつつ、段に座って友人と談笑したり一息ついたりできる場所がこのセンターゾーンからウエストゾーンに向かう階段です。座るのに丁度良い高さの段差が設けられているため、よく昼休みの間、ここでたむろすることがあります。ここに座ると食堂前の広場からセンター1・2 号館の間の空間までをまっすぐ臨むことができ、センターゾーンの近代的な美しい空間を味わうには最適な場所の一つだと思っています。この場所を、ただ単調な階段にするのではなく、写真のように一部を座れるくらいの大きい段差にしたのは、非常に素敵な発想だと思いました。

山﨑涼介

お気に入りの外部空間

ES48

理系図書館前広場／WEST ZONE



理由:

この場所は主に昼休みに利用している。私は生協の売店で昼ご飯を買うことが多いのだが、食堂とは違って売店には座席が設けられていないので、このベンチは非常に便利である。売店の目の前という近さを誇り、私の他にも昼休みに利用している人は見られる。しかし多くの人が集まるようなことはまずなく、いつの日でも空いているので昼食を取る場所に困らなくて良い。夏は木陰に、冬はひなたになり得るので、気候的にも快適である。

松尾優太

お気に入りの外部空間

ES49

E-café 東側の運動場／WEST ZONE



理由:

九州大学には多くの緑地があり、自然を楽しめると思うのですが、そのほとんどが一般生徒の立ち入りを禁じています。そのなかでもこの広場は私が知る中で唯一スポーツをたのしめる広場であり、のびのびと遊ぶことができ、運動によりストレスが少なくなるのを感じられるため、気に入っています。また自分以外にもスポーツをしている人もおり、スポーツを通して人とのコミュニケーションをはかれるのもとても良い点だと思っています。

高瀬智之

4.4 キャンパス空間の課題と提案

(1)EAST ZONE



キャンパス空間の課題と提案

PP1

イースト２号館前の通路／EAST ZONE



理由

おそらくこれは通行人が雨に濡れるのを防ぐための屋根付き通路だろう。しかし、その屋根の部分があまり大きくなく、横からの雨に弱い。ひとたび風を伴った雨が降れば意味を成さなくなってしまう。この通路のすぐ近くには図書館があるため、借りた本を持っている人が多く通ることであろう。そこで横殴りの雨が降った場合、借りた本が濡れてしまうというリスクもある。また、中途半端に通路が短いため、わざわざ傘を差すのも手間となる。

提案

屋根の部分をもう少し拡張したり、風に負けないパーティションのような設備を設置した方が良いと思われる。ただ、この近くにはとても開けた広場があり、屋根を拡張などしてしまえばその景観が損なわれることは間違いない。現実的に見れば、パーティションの設置が無難であろう。ただ、この場所は前述の広場の範囲内であるため、広場を行き交う人々の交通を妨げることがないように、パーティションは着脱可能なものにする必要がある。

中山良哉

PP2

イーストゾーン屋根がないところ／EAST ZONE



理由

イーストゾーンの中央図書館前のエスカレーターや階段から大講義室Ⅰに行くためには必ず屋根のないところを通る必要がある。雨の日には屋根がないため大講義室Ⅰに行くときは雨に濡れるか、わざわざ傘をさす必要がある。さらに問題なのはエレベーターを用いると大講義室Ⅰに行くにもイースト 1 号館に行くにも屋根がないところを通る必要がある。やむを得ない事情で車いすなどを使う人に必要以上の負担を強いかねない。

提案

エスカレーターや階段から大講義室Ⅰへの動線、エレベーターから大講義室Ⅰやイースト 1 号館に通じる場所への動線の上に屋根などを設置する。

八木豊樹

キャンパス空間の課題と提案

PP3

テニスコート／EAST ZONE



理由

この写真は、イーストゾーンにある、テニスコートです。先日部活動で京都大学とここで対抗戦をしたときに、問題点をいくつか発見したので今回、課題がある場所としてあげました。まずひとつ目に、風が強いということです。九州大学は山を切り崩して作られたこともあり、全体的にどこも風が強い印象があります。試合の日も風が強く難しい試合になりました。ふたつ目に、とても辺鄙であるということです。辺鄙であるうえに、近くにある自動販売機が使えなくなっており、飲み物すら買えず不便でした。

提案

まずひとつ目の課題の、風が強いというのは、自然現象なので仕方がないことですが、フェンスに防風ネットをつけると軽減されるのではないかと考えました。ふたつ目の、辺鄙であるという課題には、まず自動販売機の稼動を再開すればいいと考えます。(自走販売機が動いてなかったのは２週間前の事なので今は動いているかもしれません。) テニスコートの隣には、ラグビー部やラクロス部が利用するグラウンドもあるため利用者はいると感じました。理想の話ですが、コンビニエンスストアがあれば利便性が大幅に高まると思いました。

和田明里沙

PP4

イースト駐車場への階段／EAST ZONE



理由

私がこの写真の場所を問題視している理由としては、上の駐車場を一通り回ってみたが、駐車場からイーストゾーンへ向かう手段が現状この階段の一択しかないところである。もし車いすや足を骨折しているなどの要因で移動に不自由がある場合、わざわざもと来た坂道を下りて戻る必要があり、余計な負担を強いてしまうのではないかと考える。また階段もなかなか急勾配になっているので、普通に上り下りするだけでもしんどいものになっているのもさらに負担をかける要因になっていると思う。

提案

解決策として最もよいであろう物はやはり駐車場から下までスロープのようなものを用意して、安全にかつスムーズに下りることのできるようなシステム作りができればベストだと思う。しかし今の状況からいきなりスロープを設けるのは難しいと思うので、そういった人たちが上の駐車場を利用しなくても済むような一時的な駐車スペースを下に設けるとよいのではないかと思う。

佐藤源泰

4.4 キャンパス空間の課題と提案

(2)CENTER ZONE



PP5

中央西ゲート／CENTER ZONE



理由

私はバイクに乗って通学をしているのですが、ここでは車とバイクの合流地点となっており、車は一時停止してここを通過していくのに対し、バイクは一時停止する必要がないため、車とバイクが横並びになり、車とバイク共々危険を感じるようになっています。このままではバイクと車の接触事故がいつ起きてもおかしくないため、問題があると考えます。

提案

ここで一番の問題はバイクと車が高確率で横並びになってしまうことなので、車だけではなくバイクも一時停止するようにすればよいと考えます。またバイクと車が横並びになれないくらいの幅の道路にすればよいです。そこでバイクのみすり抜けられる道路部分をなくし、現在車が通っている道路のみ残すとよいと思います。あるいは車側の一時停止をなくしてスムーズに通行できるようにするのもよいと思います。

高瀬智之

キャンパス空間の課題と提案

PP6

ビックオレンジバス停／CENTER ZONE



理由

　これは伊都キャンパスのウェストゾーンへ続く道路の写真です。ここに課題があると思った理由は、この道路が坂になっているからです。伊都キャンパスはただでさえ敷地面積が大きくて移動が大変なのに、移動する道が坂だとしんどすぎると思います。自転車で移動する人も多くいますが、自転車の人が１番しんどさを感じていると思います。私だったら毎日この道を自転車で上がらないといけないと考えただけで学校に行きたくなくなってしまうかもしれません。

提案

　道を平たんするのがいいと思うけど、それはできないので、移動手段を増やすのはどうでしょうか。自転車や徒歩でこの道を上がっている人を対象にした乗り物を作ります。伊都キャンパスの未来設計図にあったようなモノレールもその手段の一つだし、そんなに大規模な乗り物でなくても、エスカレーターや動く歩道のようなものもいいなと思いました。動く歩道は空港などで目にするもので、すごく便利だなと感じたのでその機能を使えればと思いました。

三坂蘭

PP7

バス停横の駐輪場／CENTER ZONE



理由

ここはセンターゾーンの自転車置き場だが、奥側にある別の自転車置き場とは異なり、屋根が設置されていない。これにより、雨が降った際には駐輪しておいた自転車が濡れる可能性があるといった問題点がある。予め天気予報が雨だった場合は、自転車の台数が減ると考えられるため、大きな影響は出ないが、雨が降るかどうか定かでない場合は、自転車の台数があまり減らないため、濡れてしまう自転車が多くなってしまうと考えられる。

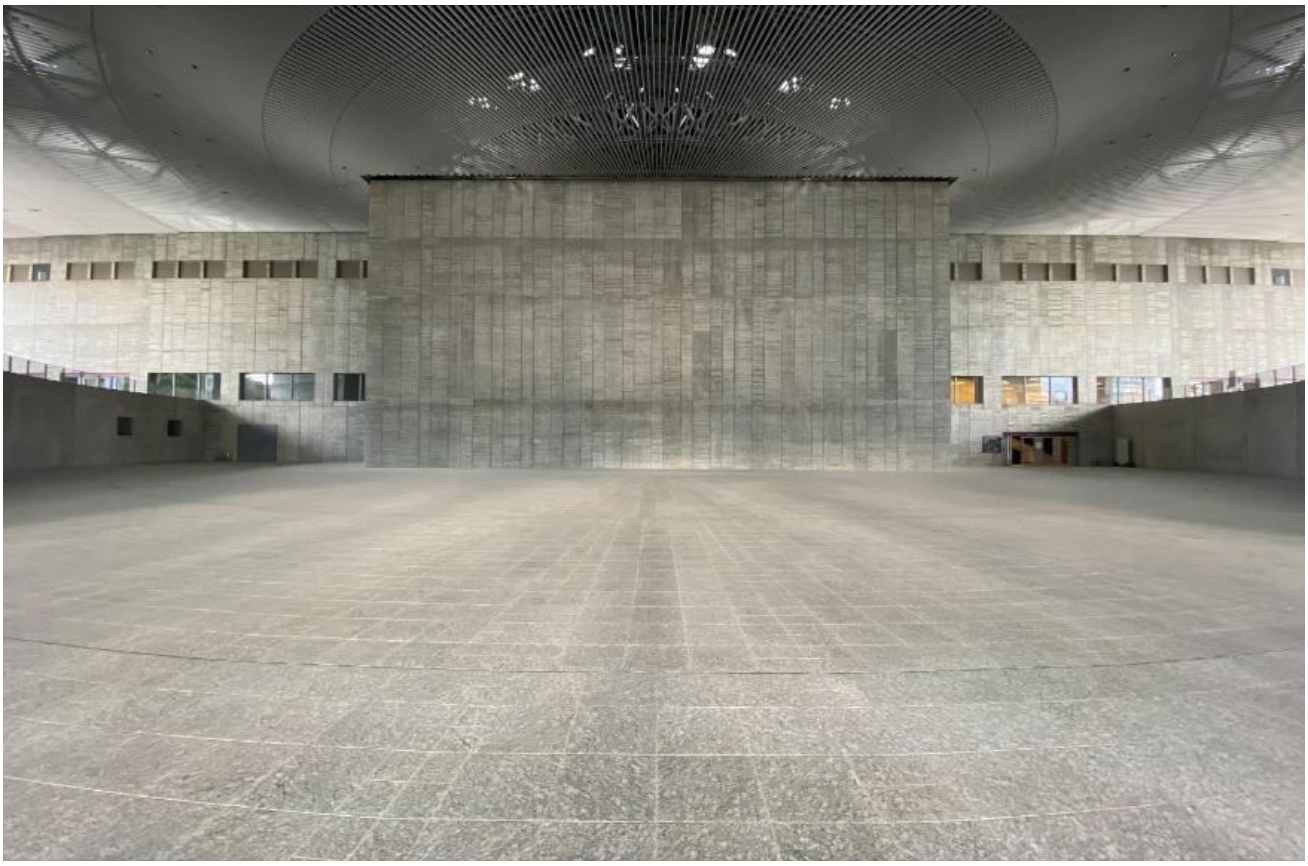
提案

雨に濡れてしまう自転車の台数を減らすために、私は屋根のない駐輪場には屋根を設置するべきだと考えた。屋根付きの駐輪場の数が増えれば増えるほど、突如の雨に濡れた自転車の台数をより減らすことができるからである。実際は、建設費などがかかってしまうため、容易に設置することはできないが、金属は雨に濡れることで、錆が付きやすくなることから、少しずつでもいいので屋根を設置することが必要だと考えた。

丹羽貴大

PP8

椎木講堂／CENTER ZONE



理由

椎木講堂は、入学式をはじめとする様々な重要なイベントの会場となる、九州大学において対外的に非常に重要な建造物です。私もサークルの活動によく利用させていただいていますが、だからこそ上の写真のように、内側の殺風景さが少々気になります。個人的には雰囲気として嫌いではないのですが、これだけのスペースがあれば、何かしらの形で利用してみても良いのかなと考えました。

提案

例えば、正面の平面の壁に巨大な絵のようなものがあれば、印象はかなり変わるかと思われました。全体として石の色である中に、例えば鳥が羽ばたいていくような、未来への歩み、希望などのイメージを抱かせるような絵があると、なかなか良いのではないかと考えました。とはいえ、映像のスクリーンなどとして利用することもできるため、そのままでも良いかとも思われました。

古賀純治

PP9

イトリー・イト／CENTER ZONE



理由

イトリー・イトは落ち着いた雰囲気で料理やフラペチーノなどの飲み物がおいしく非常にいい場所であるが、その場所が椎木講堂の二階であり、センターゾーンやウエストゾーンからはやや遠くて非常に分かりにくい場所である。そのため存在は知っていてもどこにあるのか分からなかったり、そもそもその存在を知らなかったりする人がいると考えられる。

提案

椎木講堂の外にあるイトリー・イトの看板をさらに大きくしたり、数を増やしたりすることでより多くの人の目に触れるようにするとよい。また、センターゾーンやウエストゾーンの食堂や掲示板、地図などにイトリー・イトの紹介とその場所を記した地図などを置くとイトリー・イトの存在や場所をもっと多くの人が知ることが出来るためよいと考える。

金生頼行

PP10

交差点／CENTER ZONE



理由

私は普段原付バイクで通学していて、帰宅する際にはセンターゾーンとイーストゾーンを結ぶ交差点を学研都市駅方向に右折している。特に 4 限終了時は帰路に就く人が多いため、車両の数と歩行者の数はかなり増加している。歩行者と自転車が横断歩道を利用しているが、信号が赤になるタイミングでも横断する人もいて、何度か危険な場面を見かけたことがある。また、4 限終了時にはほぼ毎日交通渋滞が起きていて、スムーズな交通の流れを作ることができていない。

提案

私は、センターゾーンとイーストゾーンを結ぶ交差点のバス停の位置に歩道橋を設置することを提案する。4 限終了時に横断する人の多くは、バス停を利用する人と学研都市駅方向に徒歩や自転車で帰宅する人であると考える。混雑する時間帯においてなるべく多くの歩行者が歩道橋を利用して横断することで、歩行者と車両の交通事故が起きる可能性が低くなると考える。そして、混雑する時間帯での横断歩道の横断者が少なくなることで、車両も右左折しやすくなり、交通の流れがより良くなると思う。

石橋知大

PP11

交差点前の駐輪場／CENTER ZONE



理由

私が問題視しているのは自転車の駐輪場の少なさ、屋根付き部分の小ささである。私は毎日自転車で登校しており、2 限以降に学校に着く際にはいつも満車になっていて外に置いてある自転車が数多くある。また、屋根のある部分が少ないので、夏の暑い日には日光に、天気の悪い日には雨に晒されるので自転車に大きなダメージを与えてしまう。加えて私はタイヤの太い自転車を使っているおり既存の自転車置きにタイヤがはまらないのでマウンテンバイクでもおけるような駐輪場を設置してほしい。

提案

皆が屋根のあるところに置こうとするので、写真にある駐輪場が最も混んでいる。その混雑を分散させるために、その横の駐輪場、ビックオレンジ横の駐輪場に屋根を設置すべきであると思う。これが行われると路上に自転車が置かれることはなくなるだろう。駐輪場に放置されている自転車も多いので、一度一斉に点検し、既存の施設を最大限有効に利用するために撤去すべきだと思う。

大久保信宏

PP12

センターゾーン入口バス停／CENTER ZONE



理由

九大ビッグオレンジ、九大工学部前は雨よけの天井が設置され、その中に10数名以上が入ることができるが、センターゾーン入口の雨よけのスペースはせいぜい 5 人程度が限界で、昨今のコロナ事情をふまえるともっと入れる人数が少ない。また、昭和バスと西鉄バスの区分けがカラーコーンのみでわかりにくいことに加え、並ぶ際も歩道に並ぶ形になってしまい、通行人や自転車の走行の邪魔にもなってしまう。

提案

雨の日は写真のように傘をさした人が大勢並ぶことになり、傘がある分晴れている日よりも人との距離を保つ必要があるため、列が歩道にさらにはみ出す形になる。これを改善するために、雨よけの部分をもう少し長くしたほうがよいと思われる。また、センターゾーンは文系の学部生の多くが利用するゾーンであるため、その人数を考えると、昭和バスと西鉄バスのバス停の場所を分けて分散を図るのも効果があると思われる。

田代 彩恵

キャンパス空間の課題と提案

PP13

ゲートウェイ／CENTER ZONE



理由

私が日常生活の中で課題があると感じるキャンパスの空間は、キャンパスと図書館を繋ぐ、3 階の高さにある渡り廊下だ。この渡り廊下は図書館と教室を楽に移動できるのでとても便利だ。私も日頃から、図書館に行きたい時はここを経由している。今まではなんの問題も感じていなかったのだが、冬になると冷たい風が吹き付けて通ることがとても億劫に感じる。通路の周りはカバーされているのだが、それが逆に入り込んできた風の通り道となっているように感じる。

提案

風が渡り廊下に入ってこないよう廊下の始まりと終わりに扉を設置し密閉した空間にするのが良いのではないだろうか。そうすることで冬でも渡り廊下を利用しやすくなると思う。しかし、専門家ではないのでわからないが、こうすることで圧力が変化し、廊下の耐久性に問題が出るということも考えられるかもしれない。現実的には難しいかもしれないが、九大周辺は冬の寒さが厳しく風も強いので、その他にも防寒面で何か対策がとられると良いなと思う。

甲斐涼子

PP14

横断歩道／CENTER ZONE



理由

問題と言うほどではないが、個人的に不便であると感じているのは、昭和バスの「九大センターゾーン入り口」のバス停にセンターゾーン側から向かう際に、一度椎木講堂の信号の所まで行ってからバス停側の歩道に渡らなければならないことである。授業が終わってから乗れる最も早いバスの時間がギリギリの時に、渡る時間を考慮したがために、乗るバスを 1 本遅らせることがある。昭和バスが頻繁に来るならまだ良いのだが、ほとんど来ない時間帯もあり、大変不便に感じるからだ。

提案

センターゾーン側の石碑前あたりからバス停側の道に横断歩道を設ける。または、歩道橋を設けるのも良いのではないかと考える。歩道橋ならば、信号に引っかかって足止めを食らうこともないうえに、車の進行も妨げないため便利になるのではないだろうか。センター 1 号館と 3 号館をつなぐ連絡橋の途中部分からバス停方面に降りる階段を設けても良いのでは無いだろうか。

濵地美里

PP15

センター１号館前のスロープ／CENTER ZONE



理由

問題点は 2 つあるように感じる。ひとつめはスロープの位置が比較的遠い点である。先に紹介したセンターゾーンではセンター1 号館の端側にスロープが設けられており、そこまで距離はないが、入り口部分はスロープまでの距離が遠いため、ここら辺の配慮はさらに必要なのでないかと感じる。ふたつめは雨の日、2 号館側の貯水池でカバーできずに水が上から下へと流れ出している点である。単純に濡れるだけでなく、危険でもあるため、対策の必要性があるのではないかと考える。

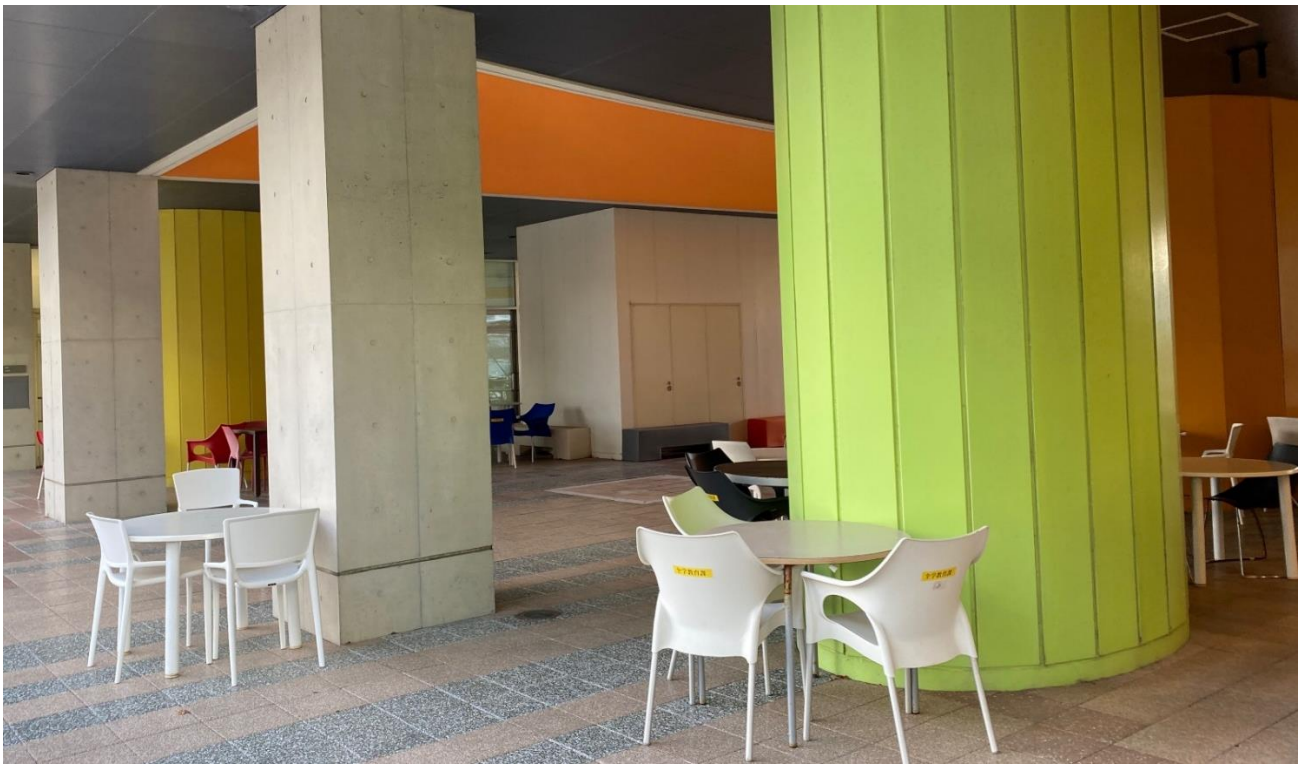
提案

上にもあるようにセンターゾーンの入り口の問題点は車椅子利用者等のスロープがかなり離れた位置にある点、雨の日に水が上から下へと流れ出しており、危険である点の 2 点である。そこから私は次の 2 つの解決策を提案したいと思う。一つ目は単純にスロープの設置である。そして 2 つ目はセンターゾーンの雨水の排水能力を上げ、貯水池に水を流すことで、入り口付近が水浸しになることを防ぐことである。入り口は在校生含めて、外の人間も 1 番初めに通るところであり、そこの環境改善を行うことで多くの人が使いやすいキャンパスになっていくと僕は思う。

津越亮佑

PP16

センター２号館野外休憩場／CENTER ZONE



理由

ここは二号館下の広場であり、テーブルと椅子が設置されており学生の交流スペースとして利用される場所である。しかし室外に設置されているため、夏は暑く冬は寒い。最近では寒くなってきたためかこの場所を利用する学生が激減している。一方で夏は日差しが当たる上に近辺の池から吹き付ける風により湿気も多い。私も実際に七月にこの場所で勉強をしたが、日中は大変暑かった。しかし日が落ちてくると途端に冷え込んだ。この場所の問題点は寒暖差の影響を受けやすいという点にあるだろう。

提案

寒暖差、風の影響を少なくするために机一つ一つを透明のガラスで覆うというアイデアを提案する。喫煙所のようなイメージをしてもらうとわかりやすいだろう。そうすることで気温は一定に保たれ、さらに周りの会話見聞こえないため、周囲を気にすることなく会話を楽しむことができる。壁で覆うのではなくガラス張りにすることで、現在ある見晴らしの良さはそのままに、欠点だけを改善することができるのではないだろうか。

栗田優来

PP17

センターゾーンの屋根／CENTER ZONE



理由

雨の日の移動がしにくいからです。特にメインダイニングに行くときに傘を差さなければならないのが煩わしく感じます。また、センターゾーンは屋根が一つしかないので、傘を差さないのならば一号館と二号館の間の移動経路は制限されてしまいます。晴れている日と同じように移動するのなら傘をさせばいいのですが、傘をさしたり閉じたりするのは面倒くさいし、傘を忘れた場合は遠回りをするしかありません。

せっかく開放的なデザインになっているのに、そのようなデザインになっているからこそ、雨が降ると移動が制限されるのはもったいない気がします。

提案

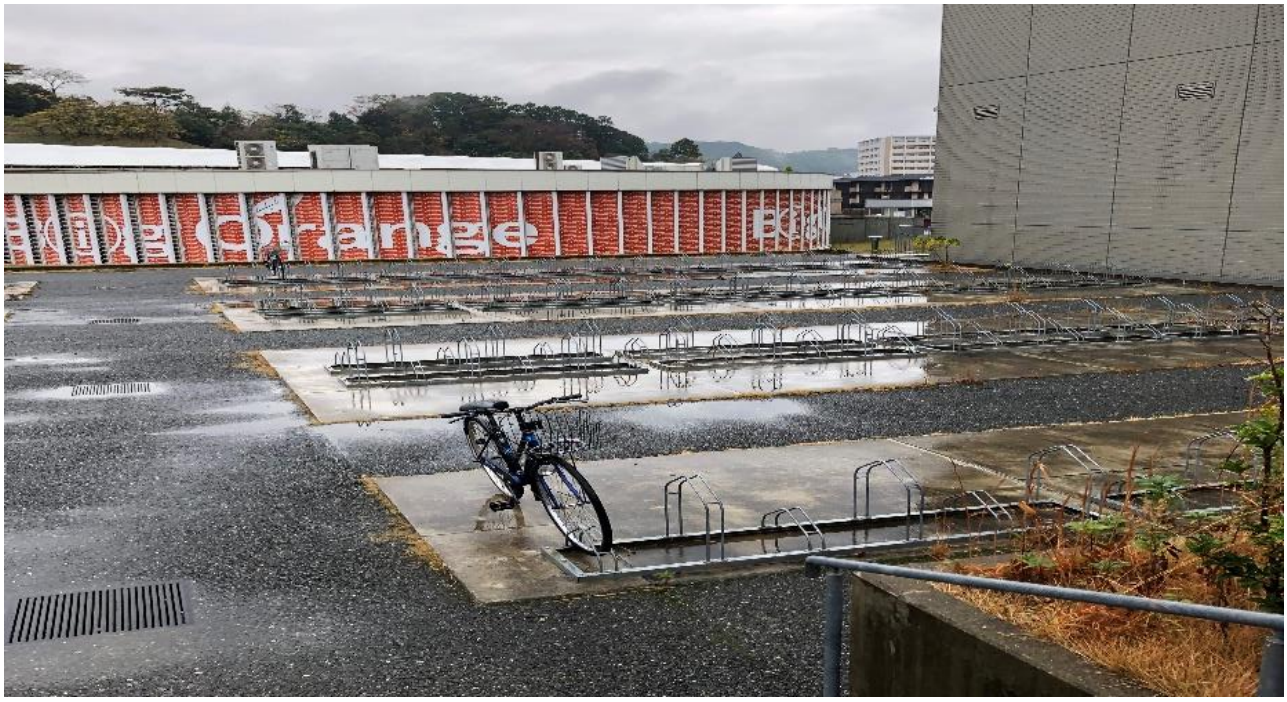
センターゾーン全体に屋根を付ければいいと思うのですが、それでは伊都キャンパスの自然に溶け込んだ、開放的な見た目の良さが失われてしまうので、地下通路を作ってほしいと思います。ただの移動手段として通路を作るのは面白くないので、通路と言わずに地下に新たに一つの棟を作るような感覚で、部屋や売店を作ると良いと思います。そのようなことをしなくても、メインダイニング前とメインダイニングと二号館の間に少し屋根をつけるだけでも便利になると思います。

田中奏衣

キャンパス空間の課題と提案

PP18

ビックオレンジ裏の駐輪場／CENTER ZONE



理由

伊都キャンパスに自転車で通学している九大生は大変多く、車道側の駐輪場が満車になったときは上の写真の駐輪場にとめる人も多い。そんな中、車道側の駐輪場には屋根があるのに対し、写真の方の駐輪場には屋根がない。これだと雨の日にカッパを着て自転車で通学する人々は屋根のある駐輪場にとめようとするので、いつも以上に駐輪場が混んでしまう。また、写真の方の駐輪場にとめようとすれば、帰宅時に水でびしょびしょになった自転車に乗らないといけなくなってしまう。

提案

写真の駐輪場にも屋根をつけたほうがよいと思う。そうすれば、雨が降っていたとしても自転車が水でびしょびしょになることもなくとめられるし、現在屋根がある駐輪場の混雑もある程度和らげることができる。また、雨の日はバスで通学する人も自転車で通学する手段が増えるので、通学費を抑えることもできる。このように屋根をつけることでたくさんのメリットが期待できるので、写真の駐輪場にも屋根をつけるのがよいと私は考える。

榊大飛

PP19

貯水槽／CENTER ZONE



理由

ダム付近がきれいに整備してない点が問題だと思います。九大の１年生はセンターゾーンの１階や地下食堂で食べることが多いんですが、それらの食堂の窓際に座ると目の前にダムがあり、きれいとは言い難い無機質な空間が広がっているように思えます。やはりごはんを食べるときには食欲が上がるようないい景色があるように思えます。またその前にある芝生のような部分も剥げている部分があり、おいしげっている部分もありあまり見栄えがよくないです。

提案

私はこのダムの色が灰色でその前に芝生があって土壌の状態が良くないのか、あまりきれいではないのが問題だと思います。したがってまずダムの色を変えるべきだと思います。九大には芸術工学部があるのでその人達が壁に絵を描いてみたら面白いんじゃないでしょうか？また芝生の部分はでこぼこなので変に水が溜まったりすることで芝生の育ち方が悪かったりすると思うので、ダム付近の芝生はコンクリートで固めてなだらかにしたほうがいいように思えます。このような形で大きくダム付近を変えるようにするのがいいのではないでしょうか？

塩谷章人

PP20

センター２号館隣の通路／CENTER ZONE



理由

センター２号館からメインダイニングに向かう際によく利用する 2 階東側の出口についてですが、とにかく雨が降った日に移動がしにくいです。この部分だけ屋根がなく、濡れずに学食に向かうためには 3 階に上がり学食の上まで行き、もう一度降りなければいけなく大変です。短い距離ではありますがこの場所で雨に濡れてしまっている人が自分も含め、何人もいることを知っているので改善すべきなのではないかと考えています。

提案

屋根をつけるという話ですが、センター２号館の 3 階からビッグサンドに繋がる通路が上にあるのでその下を通ることができるようにすればスッキリ通路を確保することができると思います。つまり、階段が右に降りるようになってしまっている部分を真っ直ぐにし、壁のように下の空間を塞いでしまっている柱を左右２本にして間を通ることができるようにすれば最小限のコストで雨に濡れない通路が実現するのではないでしょうか。

三田康志朗

PP21

メインダイニング／CENTER ZONE



理由

理由は、混雑時に外まで行列ができた時に、その列がどのメニューに対して並んでいる列なのかが識別しにくいからだ。メインダイニングには、お昼時になると多くの人が押し寄せ外にまで行列をつくることもあるが、中に入ってみると外に出ている列は「定食」のメニューに並んでいる列で、実は丼ものや麺類の列は思ったほど長くないことがある。しかし、外から見たときにそれがどのメニューに並んでいる列かがわかるような目印はない。実際、メインダイニングの人が外まで出てきて「こちらは定食に並んでいる方の列なので丼ものや麺類の方は中まで入ってきてください。」と知らせにきた光景も見たことがある。

提案

ひとたびメインダイニングの中に入れば自分がどの列に並んでいるかを示すラインが足元に描いてあるが、それを外にまで伸ばすことを私は提案する。併せて外に伸ばしたラインの上に改めて「麺類」「丼もの」「定食」といった表記をすることによって、行列が外にまで続いた場合でも、それがどのメニューに対して並んでいる列なのかが外からでもわかりやすくなり、麺類や丼ものを食べようとしているにも関わらず気付かぬうちに定食の列に並んでしまっているといったことを防げるのではないかと考えた。

井山 駿輔

PP22

皎皎舎前の芝生／CENTER ZONE



理由

ここは私のお気に入りの外部空間である地下食堂の外のテラス席の近くです。ここの問題点は、芝生のところには座るための石の椅子などが設置しているにもかかわらず、柵があって利用しにくいという点と、草が成長して伸びているにもかかわらず放置されているところです。せっかく石の椅子などを設置しているなら、もっと利用しやすいようにしたらいいのにと思います。ここをもっと利用しやすいようにしたら、ここの空間は自然を感じられて心が休まる素晴らしい空間になると思います。

提案

まず、柵を取り払ってこの中に入ることができるようにしたほうがいいと思います。そして、全面芝生ではなく、石の椅子があるところに行くまでの道をつくって、石の椅子があるところ周辺は草をなくしたらいいと思います。石の椅子だけではなくて、石のテーブルなどをおいてもいいと思います。また、草の手入れはきちんとして草が伸びすぎないようにすることも必要だと思います。ここの空間は素晴らしいのに利用している学生があまりいないので、この空間を公園のようにして、自然を感じながら気軽に友達と話したり、一人になれたりする空間にしたらいいと思います。

山川紗英

PP23

皎皎舎／CENTER ZONE



理由

私が課題があると思うのは皎皎舎である。センターゾーン唯一の購買であるのにもかかわらず存在する場所が悪いと思う。センターゾーンにある教室から歩いていくと少し遠い。コンビニは少し高いので軽食などは皎皎舎でできるだけ買いたいのだが、あそこまでいくのが面倒なことやコンビニが近いということなどの理由から皎皎舎にいくのが憚られる。また皎皎舎前の階段ももっと改善すべきだと思う。下から行くときも上から行くときも、中途半端な構造の階段を使うのは疲れる。

提案

場所としてはコンビニの向かいくらいがちょうどいいと思う。確かに便利になれば混むかもしれないが、その分たくさん売れるのでお金が儲かり良いと思う。また、あの中途半端な階段をどうにかするには、建物までの階段をまっすぐにして、階段の中腹に建物を立てないようにするのがいいと思う。行き来が楽になれば訪れる人も必然的に増えると思う。しかしあのテラス席は非常に気に入っているので場所を変えてもあれは残して欲しい。

金本朋純

PP24

総合体育館前の傾斜／CENTER ZONE



理由

ここは体育館前の理系食堂前やテニスコート前の駐輪場へつながる道です。ここは傾斜が強く、バイクはともかく、自転車が登るには到底きつそうです。実際、自分の体感では半分くらいの人が自転車を押して登っています。駐輪場に停めに行くのに苦労するようでは利便性があまりよくないのかなと思います。

提案

今から坂道の傾斜を緩いものにすることは不可能です。しかし、駐輪場を坂の手前に作ったり、センターゾーンの真ん中に自転車専用レーンなどを作ってできるだけ傾斜の少ない道を通れるようにしたりできると、自転車通学者の負担は減るかなと思います。

川鍋虎太郎

PP25

総合体育館の階段／CENTER ZONE



理由

現在は工事中の為利用できないが、私は以前に利用した際に、ある危険性に気づいた。昼間は問題ないが、強い照明が周囲にないので夜になるとかなり暗くなる。階段に照明が付いているが、この照明は弱めなのであまり頼りにならない。また、写真で確認できるように、階段の照明が一段飛ばしで設置されている。これが段差の間隔を見誤らせる効果があり、危険に感じた。暗さと中途半端な照明の相乗効果で危険地帯となっている。

提案

この場所の危険性の 9 割が暗さから来ているので、強めの光源を設置すれば解決する問題だと思う。もしくは、階段の中央にも手すりを配置して、いざというときに捕まれる場所を設置しておくことも効果的だと考える。

階段に設置されている照明は点灯させなければ良いと思う。それ以外にも、この階段周辺には照明が少なく感じるので、追加するとより安全かも知れない。

渡邊尊

PP26

課外活動施設Ⅰ／CENTER ZONE



理由

この場所の一階にはいろんな人がサークルや部活の活動として使用できる共用スペースが存在する。しかし、この共用スペースはそこまで広いわけではなく、複数のサークルが使用すると、それだけでスペースがある程度制限されることになる。私もサークルの用事で何度かこのスペースを利用したことがあるが、近くにアイスホッケー部の人たちがバックルを使って軽い練習をしていたことがある。そのときの練習でバックルがこちらに飛んでこないかどうかが不安で、なかなか練習に身が入らなかった。

提案

1 つ目は、共用スペースを別の場所にもう一つ作るというものである。テニスコートのそばに一定のスペースがあるため、そこを仮の共用スペースにするという方法である。しかし、これを行うには一定のコストがかかるため現実的ではない。そこで、2 つ目はそのスペースを利用するに当たって、いつどの団体が利用するのかを名簿などを用いて管理するという方法である。どの団体でも利用できる気軽さは失われるかもしれないが、人が多すぎることによる弊害なども考慮すれば、この方法もまた有効なのではないかと考えられる。

宮崎浩幸

PP27

駐車場の入り口／CENTER ZONE



理由

そもそも道路が狭くて危ないうえ、かなりのスピードで入ってくる車もいる。一応申し訳程度についているミラーは小さすぎてあまり意味がないように思う。私が原動機付自転車でここの駐輪場から出る際に、かなりのスピードで進入してきた、センターラインをオーバーした車とぶつかりそうになったことがあるので、この場所は改善が必要だと思う。また、夜間は明かりが少なく暗いのでここはあまり通りたくありません。

提案

センターラインをもう少し意識してもらうために、道路の真ん中に発光するポールを設置したり、発光するブロックを置いたりする。そもそもの問題点としては道路幅が狭いことが問題点であるわけだが、道路幅を広げることは実現性に乏しいため、「スピード落とせ」や「対向車注意」の標示を道路にペイントする、街灯を新しく設置して夜間など暗い時でも、ドライバーが広い視野を保てるようにするなどの対策が適切かな、と思います。

橋本絢人

キャンパス空間の課題と提案

PP28

センター北駐輪場／CENTER ZONE



理由（なぜ問題なのか、200 字程度）

私は、普段原付でキャンパスに通っていますが、普段からセンターゾーン付近のバイク置き場は満車状態で、出入り口に駐輪するような人がいたりとキャパシティーに大きな問題があります。その一方で、雨天時や原付を停められそうにない場合はこちらの駐輪場を利用するのですが、①の写真（平日の正午に撮影）のように、この駐輪場はいつもがら空きで空間がほとんど活かされていない状態であるために問題であると感じました。

提案（こうしたほうがよい、200 字程度。図を加えてもよい）

そもそも、この駐輪場はセンターゾーン付近で唯一の屋根付きのバイク置き場であり、また、理学部棟からもほど近いという良さもあります。そのため、普段使いに加えて、雨天時でバイクやかっぱを雨に曝したくないときに便利なのですが、利用されていない原因には駐輪場から本館へのアクセスにあると思います。では、それに対する、改善策を提示します。それは、②や③の通路に屋根を設けることです。この駐輪場は屋根付きのため雨天時に利用したいのですが、そこから本館へのルートは屋根が無く、結局雨に濡れてしまいます。雨天時に利用したいのに雨天時は使いづらいことを改善するために、ルート上に屋根を設け、雨天時の利用を増やしたいと思います。また、これは駐輪場横の駐車場の利用者にとっても利便性が高まると思います。

この駐輪場からセンターゾーンまでは歩道橋と理学部棟からセンター二号館までの連絡橋を通れば、道路も渡らず段差も無しに移動できるため、利便性は十分に高い駐輪場だと思います。周知活動を行う中で駐輪場の駐輪問題の解消がなされたらなと思います。

江原知哉

キャンパス空間の課題と提案

PP29

横断歩道／CENTER ZONE



理由

路線バスを使って通学する時にこの場所を通行する人が多い場所であるが、歩道が片側(ウエストゾーン側)にしかなく、センターゾーン側からバス停へ移動する場合に横断歩道を 2,3 回渡らなければならず、不便であると同時に交通量が多くなる時間帯は危険を伴う点が問題である。また、雨天の際は屋根がないために、雨が避けづらく、激しい雨が降るとびしょ濡れになってしまう点も問題であると考える。

提案

まずは、センターゾーン側にも歩道を設置して動線を分散させるとともに、より安全に通行できる環境を整備するのが良いと考える。また、センターゾーンとウエストゾーンを行き来する横断歩道に押しボタン式信号を設けて、歩行者・車両共に安心して通行できるように整備することも良いと考える。さらに、優先度は低くても良いが、歩道に屋根を設けるなどして、雨にあまり遭うことなく通行できる環境にするのも良いと考える。

松本康寛

PP30

学内の通路／CENTER ZONE



理由

センターゾーンとイーストゾーンをつなぐために作られているのであろう建物がある関係で、食堂とその建物の間の道が狭い。総合体育館に行く人も、皓々舎に行く人も通る為、衝突する恐れが高い。また、トラックがよく停まる為、歩行者との事故の恐れがあり危ない。また、バイク置き場に行くにも部室棟に行くにも、総合体育館に行くにも少し遠回りする必要があり手間となる。

提案

問題の道の幅を広げより人が通りやすくするのが重要である。その為には連結部分の建物を無くし、柱などで空中廊下を作るのみにすればよい。また、バイク置き場から皓々舎へ直接行く道を作る(傾斜的に難しいであろうが)。他にも、トラックが停まる場所をセンター二号館や地下食堂の高さの空いている場所に作ればよい。そのスペースを確保するには、ため池周辺を上手く開発する必要があると思う。

松田啓佑

PP31

階段の透明なガラス／CENTER ZONE



理由

これは地下の食堂へ行くときに使う階段なのですが、階段の面している壁が全てガラス張りなので外から見えてしまいます。スカートをはいていると歩きにくいと感じます。私はスカートをはく日は地下の食堂を使わないようにするなどして気をつけていますが、自由に好きな格好をして生活したいと感じます。スカートは TPO をわきまえていないとは思いません。よって服装の自由が守られないという点で問題だと思い、取り上げされていただきました。

提案

ガラスの面に目隠しになるようなものを取り付けてはどうでしょうか。センター1 号館と 2 号館をつなぐ道のように下から見えない工夫がされることが必要だと思います。全てのガラスの面に付けなくても一部の面に付ければ十分対応できるのではないかと考えます。ガラスの面も残すことで外の景色が見えるので、開放感はそのまま残しつつ、目隠しに使う費用を削減することができると思います。

小川董

キャンパス空間の課題と提案

PP32

センター南駐輪場／CENTER ZONE



理由

自分は原付で通学しているが、このセンターゾーンのバイク置き場には屋根が無いのでヘルメットやバイクが雨ざらしになってしまう。また、合羽を脱ぐときも濡れてしまい、合羽を乾かすこともできない。真夏の暑い日も同様に、ヘルメットやバイクが危険な温度まで上昇してしまう。他の駐輪場同様に屋根を設置すべきだと思う。

また、整備があまり行き届いていないため雑に停めている人も多くみられ、他の人が出にくくなっていることもしばしば見られるので、改善すべきだと思う。

提案

雨や強い日差しを防げるように屋根を設置する。雨が入る角度も考慮してできるだけ大きな屋根にした方が良い。その時、センターゾーンやウエストゾーンのモスバーガー裏の階段への道にも屋根をつけて、移動の際も濡れないようにする。加えて、駐輪場のスペースをバイクが通れる幅を確保しつつ、停める場所の整備をする。その際、バイクどうしが接触しないように十分な幅をとる。また、前輪のロックをかけるための設備もあるとなおよい。

曽我部　豪

4.4 キャンパス空間の課題と提案

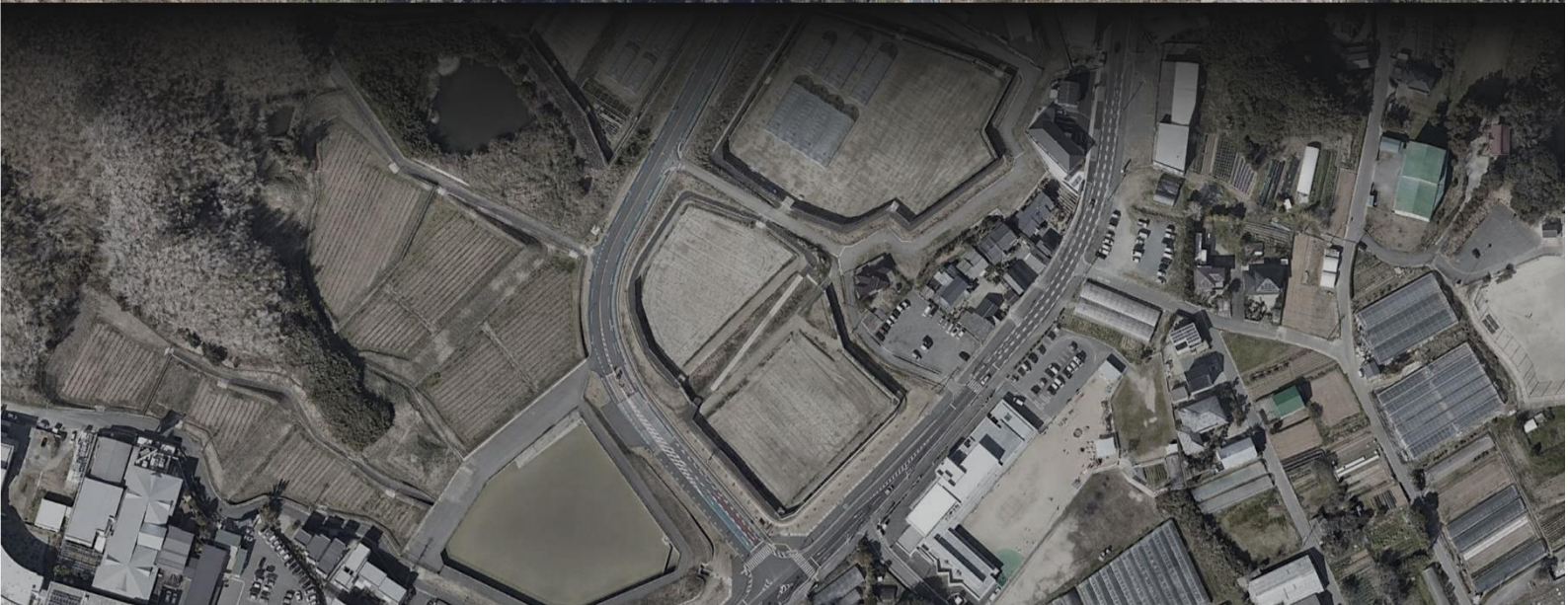
(3)WEST ZONE1



4.4 キャンパス空間の課題と提案

(4) WEST ZONE2





4.4 キャンパス空間の課題と提案

（5）WEST ZONE3



キャンパス空間の課題と提案

PP33

課外活動施設Ⅱ／WEST ZONE



理由

サークルで課外活動施設Ⅱを利用することがよくあり、そのサークルが楽器を使うのでアンプや照明器具など水に濡れてはいけない機械類を使用するのですが、雨が降っていたりすると部室から課外活動施設の中までそういった機械類を運ぶのがとても大変だからです。傘で覆えないほどの大きさのものや運ぶときに両手を使うので傘をさせない時もあって、運搬が毎回非常に大変です。もう一つの体育館の方にも言えるのですが、部室と体育館の間に屋根のある通路を設けることは様々な部活にとって有益だと思います。

提案

２点改善策が考えられて、１点目は体育館内に各部活・サークルのためにある程度のスペースを用意して、体育館や施設の中で荷物の運搬ができるようにすることが有効だと考えられます。２点目は部室と活動施設を繋ぐ通路を作り、その通路に屋根を設けることです。２点目の案については１点目と違い元からある限られたスペースを用いるのではなく新たに付け加える形になるので、スペースと費用の問題はありますが実現が可能なのではないかと思います。

長谷川千乃

キャンパス空間の課題と提案

PP34

野球場／WEST ZONE



理由

私が課題だと考えるキャンパス空間は、伊都野球場の外野である。野球場の外野というものは、大学硬式野球という高いレベルになれば、必ず芝生もしくは人工芝である。しかし、伊都野球場はそうではない。外野が芝生もしくは人工芝でなくてはならない理由は、三つある。一つ目が怪我防止である。また、イレギュラーでボールが顔付近に当たることもある。二つ目が、前の貝塚野球場の外野は芝生だったからだ。元通りまたはそれ以上にするのが筋だと思う。三つ目は、公式戦に近い形で練習するためだ。野球も勉強も本番と同じような環境で行うことが大切なのは誰しもが理解できると思う。

提案

野球がオフシーズンの12月から2月にかけて、センターゾーンやラグビー場のように人工芝にするのがいいと思う。その期間であれば、選手たちの練習への影響は最小限に抑えられる。また、人工芝は維持費が多少なりともかかるが、他のグラウンドと同じように手入れができるので大学側も都合がいいと思う。

千脇拓馬

PP35

陸上グランド／WEST ZONE



理由

自分は部活動で、特に夏以降多目的グランドが利用できない状況になったため、陸上グランドを使っていた。この場所の改善してほしいところは立地の悪さである。ただでさえ、遠い上に、上り坂をけっこうな距離のぼらないといけないので、陸上グランドに行くだけでとても疲れる。また、トレーニングルームをよく使用するが、キャンパスから離れているため、時間がかかり気軽に行けない。

提案

立地の悪さは改善するのは難しいため、アクセスを改善すれば良いと思う。アイモというものがあるが、アイモも 10 分程度かかってしまう。直通を作るべきである。また、学研都市から陸上グランドまでバスを使うと 300 円ほどかかる。往復 600 円は大学生にとって厳しい価格設定だと思う。九大生に対してもう少し手厚い支援をするべきではないかと思う。

山北翔大

PP36

課外活動施設Ⅱ／WEST ZONE



理由

この内部空間は課外活動棟にある和室なのですが私が問題があると思った点は 2 つあります。一つ目は単純に畳の老朽化です。この和室は主に邦楽部、茶道部、書道部の 3 つの部活が使用しているそうなのですが畳の老朽化で畳の一部がささくれみたいに刺さったり部活で使用する和服や道具について困ったりしていると聞きました。2 つ目はアクセシビリティという点です。課外活動棟自体が狭く通りにくいというのもありますが和室に上がる際には必ず段差を上がらなければならず体が不自由な方は行きにくいと感じました。

提案

この問題を改善するには畳そのものを取り換えることが一番だと思いますが、難しい場合は使用している方の意見を聞きつつ痛みがひどい部分を修繕したりなどが改善策だと考えます。アクセシビリティの問題に関しては和室に上がる際の一部の段差をスロープ状にすることで改善できると考えられます。

田中圭

PP37

ウェスト５号館／WEST ZONE



理由

農学部棟の校舎は黄色であるし、形も独特なのでとても目立ちます。波多江駅から向かってる途中や、南ゲートからはパッと九大を見てすぐ農学部棟が目に入ります。しかし、そのすぐ側をおそらく実験に使うだろう畑として使うのは少し勿体無いかなと思いました。ここを学生が集まれるようにもっと有効活用してほしいなと思いました。

提案

提案としては、さきほども述べましたが景色がとてもいいので、ここに糸島を一望できる建物を建てそこを勉強スペースや友達との憩いの場として開くことができれば 1 番だと思います。農学部棟は他の学部棟と比べて 1 番山側にあり、来るまでが大変なのでその大変さを吹き飛ばすような憩いの場にしたらいいと思います。

松谷翔太

PP38

生物多様性保全ゾーン／WEST ZONE



理由

ここは九大側がアピールしている「自然との共生」を代表するような場所であるが、私たち学生はほとんど入ったことはなく、いまだにそこに何があるのかもあまりわかっていない。そのため、大学側だけでなく、我々学生も胸を張ってここが自慢できる場所だといえるような場所であってほしいと考える。

提案

まずどんな動物が出るかわからないので、少なくともそこに行く人がけがをしないような環境整備が必要だと考える。そうしたうえで、まずそもそもこの場所は何なのか、目的、様子などを大学生が新入生の段階で周知するようにする。キャンパス巡りなどを企画すればこの場所だけでなくほかの魅力的な場所も早い段階で知ってもらえる。文系学生は理系ゾーンに、理系学生は文系ゾーンに行くことか将来的に考えてあまりないと思うので、この時の段階で見ておくのは良いことだと考える。

川崎史菜

PP39

ビッグリーフ／WEST ZONE



理由

非常に景色がよく、春や秋はこの場所付近で過ごすのはとても気持ちが良いです。しかし、夏場や冬場は気温の関係もあり、ここで過ごすのは中々厳しいものがあります。この景色が年中楽しめないというのは少しもったいない気がするし、無駄なただの広場になってしまっている感があります。

提案

この場所に少し小さな休憩所を作成し、学生が気軽に立ち寄れるような場所にしたら良いと思います。近くに食堂やコンビニもあり、景色を眺めながら友達と談笑するにはとても素晴らしい場所になると考えます。休憩所という建物を作成しなくても、ベンチやデスク等を設置するだけでも春秋は非常に快適に過ごせる休憩場所として機能すると思います。

杉原誠也

PP40

キャンパス・モールベンチ／WEST ZONE



理由

外側にベンチを並べているのですが、この建物は学習プラザであるため、内側に多くの机と椅子があるため、座るには中の教室を使うことが圧倒的に多いです。また向かい側にもウエスト 2 号館があります。そとで休憩するのに役に立ちそうですが、屋根がないため、天候が悪い時は使えず、また日当たりも両側が建物に囲まれているため良くないです。また、外観も他の棟や場所に比べると暗い色をしている。

提案

ベンチとして利用するのであれば、天候の良し悪しにかかわらず座ることのできる方が良いため、屋根を付けたほうがよく、休憩する場所として景観のよいもの（例えば樹木を植える）にした方がよい。またこのベンチの利用者はあまり多くないため、ベンチ以外の活用法を用いた方が良いと思う。例えば、理学部や農学部では自身の学部の特徴あるものをそれぞれの棟で展示しているが、工学部にはそのようなものがないため、展示物をこの近場に設置するなど。

尾花拓海

PP41

セキュリティポール／WEST ZONE



理由

これはセキュリティポールです。九大のあちこちにあり緊急時にセンターの方と通話することができます。私はこのポールを見たことはありましたが、この授業を受けるまでどういった役割でどういった使い方なのかが分かりませんでした。使い方をしらない、もしくは存在をしらない人も多くいると思います。確かに emergency と書いていて近づけばわかるかもしれません。しかし緊急時にそのように冷静にあたりを見渡し、見つけて使用できる人は少ないと思います。認知度の低さが問題だと思います。

提案

一度でもこういったものがあるということを知っていれば、各地にあるポールを見て、それの役割を緊急時でも思い出すことができ、目につくことで使用される可能性は大きく上がると思います。よって何かのガイダンスの授業などで一度説明をするのがいいと思います。またセキュリティポール配置図などをセキュリティポールがない場所に置くなどしてセキュリティポールの場所が緊急時でもわかるようにしたほうがいいと思いました。災害時などであればセキュリティポールの近くに誰か人はいると思いますが、不審者に襲われたなどの緊急事であれば一人で見つけないといけないので有用ではあると思います。

井上陽斗

おわりに

ギャラリー整備計画プロジェクトチームが 2020（令和 2）年に設置され、副委員長として寄附建物フジイギャラリーの施設計画を監修する機会を得ました。会議の後、委員長であった緒方一夫前館長から「ギャラリーのオープニングは、伊都キャンパスのことをやってはどうか。」と声をかけていただき、総合研究博物館（宮本一夫館長）で検討が重ねられ、伊都キャンパスづくりをフジイギャラリーのプレ・オープンの催事に位置付けていただくことになりました。

三島美佐子教授にあらためて声をかけていただいたのは、ギャラリーの竣工前のことでした。三島教授は、この展示をステイクホルダーである学生、教職員の意見集約の場にしたいとの思いを語っておられ、私を含む関係者、学生は、その熱意に賛同して作業が始まりました。

作業中のエピソードをご紹介します。まず、タイトルに付けられた「ニッチ」をめぐる議論がありました。建築を学んだことのある業界人にとって、ニッチとは彫像の背景のくぼみを指します。一般には、マイナー、オタクな印象であり、ニッチは必ずしもよい印象を与えるものではありません。ところが、三島教授によると、生態系の分野では、ニッチは良好な生育環境を示すポジティブな場を指す用語であり、そうした認識を広めていく機会にしたいとのこと。他のオプションについても検討し議論した末に、誤解を生まないよう、ニッチに解説を加えつつ進めることになりました。

つぎに、会場の中央に据えるキャンパスモデルをギャラリーいっぱいに飾り、そこにみんなの意見を盛り込むため、それに使えるスケールは 1:150。限られた予算でうまくつくりあげるには、高低差の処理や建物のデフォルメなど、さまざまな配慮が必要ですが、模型製作会社の努力もあり、迫力満点のホワイトモデルになりました。モデルの全体配置、地形のデフォルメ、割り付けには、大学院学生（張煜嘉、萩原望、孟柱燦、朱一凡、杜文茹）が協力し、製作会社が苦心した末に、部屋いっぱいのモデルが完成しました。その上に、フォトフレームに入れた学生の撮ったお気に入りの空間の写真とコメントの数々が彩りを添えました。

年表や壁面のアレンジ、土台のアンティーク家具の持ち込みなど、総合研究博物館の三島教授とテクニカルスタッフ吉田明世さんをはじめ、関係者の総力で展示会場が完成していきました。また、途中で博物館主催のイベントが開かれ、その都度、学生や関係者で盛り上がりをみせています。私の関係では、日本都市計画家協会主催による J’s Café をオンライン開催し、学内外の 182名の皆様に参加していただきました。

伊都キャンパスは 2005（平成17）年の誕生以来、学生、教職員をはじめとする多くの皆様の活動の場として使われてきました。今後も持続するキャンパスとするために、多くの知恵と意見を集めて、キャンパスをカスタマイズして使いやすいキャンパスに磨いていくことが必要です。更に快適なキャンパスとなるよう、施設整備のための共有財産として活用していただくことを期待申し上げます。

九州大学キャンパス計画室　坂井　猛

非売品

九州大学伊都キャンパスの軌跡と展望
2022 年 11 月
編集　九州大学キャンパス計画室
〒819-0395　福岡市西区元岡 744
TEL 092-802-2096
https://www.kyushu-u.ac.jp
